
仮面ライダー龍騎 闘いの火種は幻想の都へ

仮面 3

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー 龍騎 闘いの火種は幻想の都へ

【Nコード】

N0731P

【作者名】

仮面3

【あらすじ】

己の欲望の為に闘いの輪廻に飲み込まれた戦士達がいた。闘いは何度も、何度も繰り返され、世界は崩壊してしまった。だが闘いは終わらない。闘いの火種を生んだ神崎士郎は新たな闘いの舞台を見つけたのだ。その世界の名は……幻想郷。

これは『仮面ライダー 龍騎』と『東方Project』の二次創作小説です。

この作品は誰でも感想が書けるようにしていますので、何とぞご教示をお願いします。

『EPISODE・0/?終?から?始?へ』(前書き)

初投稿作品です。初めてだからやり方がよく分かりません(汗)。
至らない点ばかりですが、どうかよろしく願いします。

『EPISODE・0/?終?から?始?へ』

この世界はもう駄目だ。

幾千もの争いが、幾千の欲望がぶつかり合ったこの世界は廃れた。

龍騎、ナイト、シザース、ゾルダ、ライア、ガイ、王蛇、ベルデ、
タイガ、インペラー、ファム、リュウガ、オーデイン

13人が、己の欲望、願いを武器や拳に乗せ、闘った。

ライダーバトルの勝者はいつも違った。そう、闘いは繰り返された。
俺が望む結果がでるかぎり。この《タイムベント》で時を遡らせた。

何度も、何度も

……ああ、そういえば、イレギュラーな存在もいたな。疑似ライダー
だったか？

オルタナティブ、オルタナティブ・ゼロ

……ふん、所詮マガイモノのライダー。邪魔しようとしたが、いつ
も悲惨な最後だった。一番新しいのでは配下に置いていた筈のタイ
ガに、二人共殺られたのではなかったか…？

今思えば、様々な結末があった…。だが、その結末は全て、俺に気

に入られなかったとゆう理由だけで無かったことになった。

そして、遂に、世界が崩壊してしまった。《タイムベント》の影響だ。何度も修繕した時間は歪み、その反動が一気に来た。

世界は消滅した。

ライダーになった者達も、それに巻き込まれた者達も、知らなかった者達も、建物も、植物も、生物が全て！

消えてしまった…

そして、救いたかった筈の妹まで…

しかし、俺はまだ存在している。

何故かはわからない。俺が肉体を失い、意識だけの存在だったからか？仮説を上げるとキリがない。

このチャンスが無駄にするわけには行かない。

今度はもっと強い力を持つ生物が存在する世界を使おう。そして世

界事態が、強力な力を帯びている世界を！

世界すら再生する力が欲しい。

そうでなくては意味が無い。妹は、自分と俺だけが存在する世界は受け入れないだろう。拒絶し、あの時のように自ら命を断つのは目に見えている。

今度こそ、完璧な力を……！！

待ってろ、優衣……もう少しで、昔のように、一緒に……

『EPISODE・0/?終?から?始?へ』(後書き)

今回は予告的な物をやらせていただきました。次回からはもっと文章が多く出来ればいいなあと思っています。

『EPISODE・1／異変の始まりは紅龍の咆哮で』（前書き）

感想を書いてくださった皆様方、書かなくても見てくださった皆様方、ありがとうございます！

『EPISODE・1 / 異変の始まりは紅龍の咆哮で』

幻想郷　　日本の人里離れた山奥の辺境の地に存在するそこは、人間、妖怪、妖精、幽霊悪霊、魑魅魍魎が住まう、名前の通り幻想的な世界だ。

そんな幻想郷も今は夏。ギラギラと輝く太陽が大地を照らしていた。熱せられた地面の熱で、人々に心地よい涼しさを送るはずの風すらもムワツとした温風に変えていた。高い気温は人から体力と水分を削り取る。近辺の森等、木に張りついた夏の名物の一つである蝉がせわしなく鳴いている。この気温に喜んでいるのか、例年よりも騒音が酷い気がする。蝉達は思い切り鳴けて気分がいいだろうが、暑さでイライラしてる人には、火に油だ。

「暑い……………」

ハアハアと、肩で呼吸をしている、中国を想わせる服装と紅い美しい長髪が目立つ女性が呟いた。彼女の名前は紅美鈴^{ほんめいりん}。悪魔が住むといわれる『紅魔館』で門を守護を任されている。いわゆる門番だ。今も絶賛門番中なのだが、やる気のない顔をして門にもたれかっている。美鈴が恨めしそうな眼で自分の後ろにある洋館、紅魔館を見る。

「いいよなあ〜咲夜さん達…室内で」

この暑さでは室内の方が暑く感じると思うが、紅魔館の中には優秀な魔女で紅魔館の主の友、パチュリー・ノーレッジが居る。どうせ、冷気を放つか何かの魔法を発動してもらって室内の気温を下げてもらっているのだろう。美鈴はそんな妄想を考え、チエツと足元にあった小石を蹴った。しかしパチュリーは喘息持ち。本来なら魔法の

継続、乱用は出来ないのだが、熱で頭が沸騰しかけている美鈴は気付かない。

「ああ、帽子のせいで頭が蒸れる。取りたいけど取ったら日射病になる気がする」

気の抜けた声しか出せない。そもそも美鈴自身も妖怪、ここまで暑さに弱いわけではないのだが…。それは美鈴の周りにだけ起こっている？異変？のせいだった。その？異変？が美鈴の周りだけ、気温を上げていた……。

*

ウオオオオオオン！！

幻想卿の上空で何かが飛行していた。見た目は巨大で体が長く、紅い。それは龍だった。紅龍はじっと見つめていた。自分の遙か下で、気の抜けた表情をしている紅い髪の女を。

ウオオオオオオン！！

もう一度、咆哮を上げた。そして、下降する。その様子は自分が仕えるべき主を発見し、自分の明るい未来を垣間見て歓喜の声を上げる騎士の様に…

*

「あゝ、今年の太陽気合い入れすぎ！」

この熱の大半を送っている太陽に向かって美鈴ビシツと人差し指を向け、吠えた。

「……………一人で何やってるんだろ、私」

自分の馬鹿みたいな行動にため息をついた。光から眼を守るため、手で眼を覆い空を仰いだ。雲一つもない青空。太陽の光を遮る雲が有っても良いのに、そう思いながらボーっと空を眺め続ける。

「……………ん？」

何かに気付いた美鈴は、より遠くの距離を見るために眼を細めた。太陽光と青空以外、何もなかったと思えた空にポツンと黒い点のような物が見えた気がした。

「鳥か何かな？」

黒い点は段々大きくなっていく。いや、近づいてきているのだ。もっと詳しく言えば、黒い何かが落ちてきているのだ。だが、暑さでボーとしている美鈴は上手く理解出来ない。黒い物体は更に近づいて、遂に。

ヒユウウウウウ

「ほえ？」

サクッ。

今の音は何だったのか？美鈴はまた理解出来ずにいた。しかし、これは嫌でも分かる。何故なら、徐々に自分の右眼球に痛みが走り始めたのだから。

「うぎゃあああああ！！！？？」

黒い物体が突き刺さった右目を押さえながら地面に倒れこみジタバタする。いきなりだが美鈴は武術の達人だ。妖力等を抜きにした戦闘なら紅魔館最強とゆう噂すらある。が、例え凄まじい達人でも気が抜けている時の攻撃は痛いのだ。それが眼ならなおさらだ。

「目が！？目がああああああ！！Oh my eyes！！！」

苦悶の声を上げ、まるで母親に玩具をねだる子供のように地面を転がり続けた。そして数分後。

「はあ…はあ…ぐす…はあ」

ダメージで赤くなった右目を押さえ、嗚咽を吐きながらふらふらと立ち上がった。美鈴は右目から涙を流していた。まあ、当然と言えば当然か。上空何メートル、はたまた何百メートルの高さから落ちてきたかもしれない物が眼球に突き刺さったのだ。痛くないわけがない。しかしその痛みのおかげでボーっとしていた頭がちゃんと覚醒したのも事実だが。美鈴は右目を押さえながら辺りを確認する。

「……………あつた！」

それはわりと近くに落ちていた。美鈴の眼球に突き刺さったであろうそれは、薄い箱のような物で全体が黒く、中心には龍らしきシン

ボルがある。

「なんなんだろこれ？」

美鈴は箱に近づき、しゃがんでよく観察する。こんな物幻想卿で見たことがない。興味と好奇心に唆された美鈴は空いている左手で箱を拾った。その時

コレデ…ソロッタ……

壊れたスピーカーからでたようなノイズが頭に流れた。耳から拾った音ではないのがすぐに分かった。擦り切れているが、とても内容がクリアに聞こえたからだ。

「な
」

言葉を発しようとした美鈴の意識は途絶え、眼から入ってくる筈の映像は暗転した。
ブラックアウト

*

「……ん……うう……？」

脳を直接揺られたような感覚襲われながら、現在の自分の状態を確認する。脚は地面に向かって伸びており、ちゃんと自分の躰を支えている。次に首をコキコキ鳴らし、手を振る。躰に支障はない。む

しろいつもよりいいぐらいだ。問題が一つあった。美鈴がいる空間だ。周りが薄暗く、一体どこで空間が途切れているのかわからない。とてつもなく広いのか、案外狭いのか、薄暗いせいでよくわからない。美鈴自体には淡い光がスポットライトで照らされているように、少し明るい。

「ここは……いったい…?」

美鈴の呟いた声が暗闇に飲み込まれていた。小さい声だったが、反響しないとゆうことは、ここは広いとゆうことだ。ふと、暗闇の向こうで何かが動いた。

「ッ!」

美鈴は身構えた。美鈴の中にある無数の闘いの記憶が、経験が強い力を持った物に反応したのだ。

「誰!?」

気配を感じた方向に問いただす。

ウオオオオオオン!!

何かが咆哮で返した。そして、姿を現した。

「りゅ…龍…!!」

現れたのは紅き軀をくねらせた巨龍だった。体調は3〜5メートルか。

ウオオオオオオン!

紅龍がもう一度吠えた。でも何故だろう。その鋭い黄眼に、どこか安らぎの色が見えたのは。紅龍が美鈴に接近する。

「やる気？」

美鈴は更に神経を研ぎ澄ませ構えなおした。ここで喰われてたまるか、自分は早く自分のいるべき場所に戻って、仕事が終わったら。

「かき氷を食べるんだあああ！！」

自分のしょうもない欲望を曝け出し、拳を突き出そうとする。紅龍がそれよりも速く行動した。

「なっ」

やられる！？そう考えたその時。

クルルルルル…

紅龍が猫のように喉を鳴らし、頭を美鈴にすり寄せてきた。

「……………なんで？」

困惑する美鈴をよそに、紅龍は頭をすり寄せ続ける。まるで犬か何かの動物のようだ。そして美鈴がした行動は、動物の飼い主のよう

に。
「……………よしよし」

紅龍の頭と喉を撫でた。それに喜んだのか紅龍は躰全体を美鈴にすり寄せてきた。

「あはは。流石にこれはキツイよ。よしよし」

美鈴は情が移ったのか、満面の笑みである。すると。

カツ、カツ、カツ

つと足音が近づいてきた。足音は真つ直ぐに紅龍と美鈴に近づいてきている。出てきたのは、疲れ切った表情の青年だった。

「ドラグレッダーがここまで懐くとはな……」

これでは犬猫と変わらないかと、自嘲気味き笑った。

「貴方は？」

美鈴は再び緊張の糸を張り直した。この男、何か危険だ。美鈴の本能がそう告げていた。男は無気力ながらも強い決意の瞳で、美鈴は強い警戒心が籠もった瞳で見合った。しかし、美鈴は紅龍「ドラグレッダー」を撫でる手は止めていなかったのていまいち決まらない。男は美鈴の質問に答えた。

「俺は神崎士郎^{かんざきしろう}。お前が最後の一人だった……。ドラグレッダーに選ばれし者よ。お前が仮面ライダー龍騎だ」

男は最後に、『闘え』と付け足した。

『EPIISODE・1／異変の始まりは紅龍の咆哮で』（後書き）

東方Projectの小説を書いておりますが、東方作品をプレイした事がないので、色々おかしいと思うところがあると思います。だれか……教えてください（土下座）

『EPISODE・2/ライダーバトル』（前書き）

昨日が祝日だった為、早く出来ました。そして、感想を書いてくださった方、見てくださった方、お気に入り登録してくださった方、ありがとうございます！

『EPISODE・2/ライダーバトル』

「かめん…らいだー…？」

聞いたことがない単語を鸚鵡返し（おうむがえし）で返した。

「そうだ。ミラーモンスター……そのドラグレッダーなどのモンスターの力を使い、己が欲望の為に戦う戦士」

士郎がドラグレッダーをゆつくと指差した。

「ちょ、ちょ、ちょ！ちょっと待ってください！ミラーモンスターってなんなんですか！？それに欲望がどーこーって！？」

「ミラーモンスターとは、その名の通り鏡の中である【ミラーワールド】に住まう存在だ。全てが反転するその世界はミラーモンスターしか生きられない。その他の生物がミラーワールドに入った場合、軀の粒子化が始まり、消滅する」

「そんな所が幻想郷に…？」

「この世界でライダーバトルを行う為に俺が開いた。」

「何故そんなことを？」

「ライダー達が闘う為のフィールドが必要だろう。ライダーは現実世界で闘うことも出来るが、それではここが酷く傷ついてしまう」

一応、士郎は幻想郷のことを安じているらしい。喋り続けようとし

た士郎に向かって美鈴は手を突き出し、『ちよつと待った』をした。

「だから、そもそも、仮面ライダーってなんなんですか！？ライダーバトルってなに！？」

士郎はため息をついた。

「この説明で分からないとは……お前の頭は干物か飾りか？」

「こんなざつくりした説明でわかる分けないでしょう！？」

クワツと目を開き、全力でツツコンだ。確かにこんな説明をされたらよくわからないだろう。それなのに飾りや干物扱いとは。

「しょうがない……ならば詳しく言ってやろう。仮面ライダーに関してだが、簡単に言えばミラーワールドを自由に行動するための強化戦闘服を装着した者のことだ。ずっと居られるわけではないが、生身とは違いタイムリミットまでは体の粒子化は起こらない。お前が拾った龍のシンボルが描かれている箱、龍騎の「カードデッキ」は仮面ライダーになるためのいわば、核^{コア}になるものだ。」

士郎が美鈴のポケットの辺りを指差した。恐る恐るポケットに手を伸ばすと、中に何かが入っているのを感じた。

「いつの間に……？」

美鈴は確かにカードデッキを拾ったが、ポケットに入れた覚えはない。

「次にライダーバトルだが、仮面ライダーは13人存在する。その

13人が己の欲望の為に闘うのだ。そして優勝者には、その欲望を叶える力が手に入る」

「欲望が!？」

『欲望が叶う』。そんな甘い蜜の香りがする言葉に美鈴は反応し、すぐに脳内で妄想する。

「そう、欲望だ。欲望とは、いわば生物が必ず持つ願いだ。欲望を持たない生物はいない」

士郎は続けるが、美鈴はそれを右から左へ受け流していた。

(欲望……例えば暑い時に涼しくしてくれる道具とか食べ物を出してくれるってこと!？……………えへへ、それ最高だろうなあ……………ハッ! まてよなんでも叶えてくれるなら、咲夜さんが……………咲夜さんが……………! 昼寝してても怒られなくなるってことも!?)

へヴン状態になりかけていた美鈴の意識を、士郎の言葉で引き戻された。

「いい忘れたが、カードデッキは壊さない方がいいぞ」

「へ? なんで?」

「カードデッキが壊れた場合、その所有者のほとんどの力が失われ、ただの人間と等しい状態になる」

「……………マジで?」

士郎が頷いた。

「え え え え え え !!? 力が失われる! ? なんで!」

「当たり前だ。大いなる力には、大いなる犠牲が必要だ」

士郎がまるでスパ
ダーマンの祖父のように言った。

「だからってそれはないでしょう!？」

「これはまだ良いほうだ。本来なら命を失うからな。」

「あ、そうなんですか？でも、なんで？」

物分^がかりが悪い生徒を持つ教師のように、士郎はまたため息をついた。

「例を出したら分かるか？もし博麗の巫女がライダーバトルに参加していたらどう？そして命を落としたら？」

博麗の巫女の死。それは博麗大結界の管理者がいなくなるということ。博麗大結界とは『常識の結界』であり、外の世界と幻想郷の『常識』と『非常識』とを分け、外の世界の『常識』を幻想郷の『非常識』に、外の世界の『非常識』を幻想郷の『常識』の側に置くというものであるという。物理的なものではなく論理的な結界だが非常に強力で、妖怪でも簡単に通ることはできない。この重要な結界の管理者が存在しなくなれば幻想郷にいったい、どんな？異変？が起こることか。ただ言えるのは、幻想郷のパワーバランスが崩れれば、良くて異変、悪くて幻想郷の？崩壊？だ。その事を考え

た美鈴は生唾を飲んだ。

「だからだ。例え力を失っても、ここに『いる』とゆうことが重要だ。納得したか？ライダーバトルのペナルティの理由が。ペナルティが無ければ、大いなる力は手に入らない」

そこで美鈴はあることに気付いた。

「…………あれ？だったら最初から重要な人物をライダーに選ばなければいいんじゃないのでは？」

「それは無理だ」

美鈴は顎に人差し指を顎にあてる考えるポーズをして、頭に分かりやすく『？』マークを掲げ、首を傾げる。

「このライダーバトルでは、ライダーの契約モンスターが己の主人を選ぶようにしている。前回のライダーバトルでは、カードデッキがあつちに行ったりこつち行ったりが多くてな」

士郎が美鈴にしたのとは違うため息をつき、頭を抱えた。その件でだいぶ苦労したようだ。

「なるほろ……。ん、前回？」

とゆうことは、前にもあったとゆうこと。

「あの…前回って」

「俺はもう行く。お前の『なんで？』は疲れる」

美鈴の言葉を遮り、くるっと軀の向きを変えて立ち去ろうとした。

「あ、ちよつと待つ」

「ああ、そうだった。自分がライダーだとゆうことは言わない方がいいぞ。他人を巻き込みたくなかったらな」

再度美鈴の言葉を遮り、背中を向けて言った。士郎の姿は薄暗い空間に溶けるように消えていく。美鈴は追い掛けようとしたが、ドラグレッダーが巻き付いてるような状態で上手く動けない。士郎の姿が完全に消えると、美鈴の頭に鈍痛が走り、意識が途切れた。

「」

士郎が何かを言った。だが、この時の美鈴には痛みで理解できなかった

*

「待つて!!」

士郎に投げ掛けるはずの言葉は青空に吸い込まれていった。美鈴は地面に仰向けで横になっていた。2、3度眼をパチクリすると、上半身だけ起こした。

「夢...?」

ふと、思いだし自分のポケットに手を入れる。夢だったら『アレ』

は無いはずだ。しかしその手から伝わってくる感触は夢ではないと
いつていた。ポケットから手を抜く。その手には龍騎のカードデッ
キが握られていた。

「仮面ライダー……龍騎。それに……ライダーバトル……」

龍騎のシンボルが、太陽光に反射されキラリと光った。その眩しそ
さに眼を細めた。美鈴の頭に、意識が途切れる前に残った土郎の声
がこえました。

『闘え。仮面ライダーに変身し闘え。戦わなければ生き残れない』

つと。だが一つ問題があった。美鈴はポツリと呟く。

「変身って……どうやるの……？」

*

紅魔館の内部。無駄に広い廊下に幼女が1人、窓の近くの壁にもた
れかかっていた。幼女の名はレミア・スカーレット。吸血鬼であ
り、紅魔館の主である500歳児である。つまり、美鈴を雇ってい
る人物だ。黒い悪魔のような翼を揺らし、日光に当たらないよう
に外を見た。目線の先は、地面に座っている、職務放棄の門番。そ
こに銀髪のメイドが来た。

「いかがしました？お嬢様」

彼女は十六夜咲夜^{こむぎさくや}。紅魔館のメイド長をしており、仕事をさぼって

いる美鈴にナイフで喝を入れる役目を任っている。

「いや…ちょっとね」

「まさかお体の具合でも…？」

「ううん……ただちょっと、メイリンがさぼってるなあ、と思ってね」

「え、本当ですか！？……あつ！ホントだ！。あんの給料泥棒お
おおー！！」

窓から美鈴を確認すると、自慢の銀色に煌めく刃を持つナイフを手に、廊下を走っていった。レミリアはそれをほくそ笑んで見ていたが、直ぐ真面目な表情になる。

「まさか…あの娘がね………」

レミリアがどこからか、マゼンタ色の箱を取り出した。それは美鈴のカードデッキと見た目は違うが、同じ物だった。マゼンタ色のカードデッキをしまうと、窓から離れ、自室に向かった。紅魔館の外で、美鈴の悲鳴らしき物が聞こえたが、無視して進む。

「やっと開演ね。ライダーバトル……！」

また一人、己の欲望の為に闘いを決意した者がいた。

繰り返される欲望の渦。その中に、少女達が、幻想卿が投げ込まれた。これが新たな幻想卿の道になるか、それとも幻想卿を崩壊する道になるかは、運命が見える筈のレミリアにも、分からなかった。

『EPISODE・2/ライダーバトル』（後書き）

次回で変身出来ればいいと思います。

『EPISODE・3／龍騎士をさしおいて変身』（前書き）

戦闘やライドシューターの描写が変です。次からはなんとか自然な感じに入りたいです。

『EPISODE・3 / 龍騎士をさしおいて変身』

美鈴がカードデッキを手に入れてから数時間がたち、今は夜。門番の勤務時間が終わり、美鈴は自室に向かっていた。美鈴の仕事は門番なので、部屋に戻るのはいつも深夜だった。あまり音を立てずに扉を開け、そおと閉めた。仕事で疲れている者を起こしてしまつては悪いと思つた美鈴の配慮だ。いつもなら直ぐにベッドに直行するが、美鈴は机に向かった。今日は居眠りしていないのでいつも以上に眠い筈だが、睡魔に勝る物があつた。それはカードデッキ。知識欲、好奇心、興味欲。この3つは生物の知られている欲求の中でも上位にあたる。考え、新たな知識を得ようとする。生物にとつては、知識を得ようとする過程は性的快感よりも生物を絶頂にし、その答えを得た快感は麻薬のように頭にこびり付き、新たな快感（知識）を得ようとするのだ。

美鈴は椅子に腰掛け、カードデッキを机の上に置いた。ただひたすらカードデッキを眺めていてもしょうがないので色々触つて確かめる。

「神崎つて人はコレで変身しろつて言つてたけど……いったいどうしたら…?」

カードデッキのひっくり返したり、シンボルをいじつてみたり、とにかくいじる。するとカードデッキの左側の窪み（くぼみ）にあるカードデッキの色と違う模様が少し動いた。ずっと模様の一部かと思つていたが、離脱可能らしい。カードを引き抜いた。

「カード…だよね」

自分達が『弾幕ごっこ』で使っているスペルカードとは違う。見た

ことのない種類だった。カードの絵柄は柄の紅い湾曲した片手剣のような武器だ。

「剣……」

カードデッキの中のカード　【アドベントカード】はまだ残っている。とりあえず全て引き抜く。アドベントカードは全部で6枚。盾や龍の頭、ドラグレッダーが描かれたカードや、龍騎のシンボルのカードがある。そして最後に、絵柄が無く、絵が描かれているはずの部分が真っ黒になっている。

「？」

このカードだけは全くわからない。他のカードは絵柄でどんな物かだいたい分かる。だが、コレだけは用途も、何のためにあるのかもわからない。いくら考えても分からないので、カードを全てしまい重要なことに頭を使うことにした。それは、仮面ライダーに変身する方法。

（自分の欲望の為に闘うにしろ、闘わないにしろ。変身出来なきゃ始まらない……。何もせずに敗けるのは嫌だ。それに……。カードデッキ壊されて人間レベルになっちゃったら私、咲夜さんのナイフで死ぬかも……）

自分がした妄想が頭に流れると、額に嫌な汗が出てきた。こうしてはいられないと、椅子から勢いよく立ち上がる。カードデッキを手に部屋を中心に移動した。

「ん~~~~~……。変っっ身!!」

仁王立ちのポーズで、掛け声だけ言ってみた。が、変化が起こる分
けなく、部屋にシーン…とした空気が流れるだけだった。

「これじゃ駄目かあ。じゃあなんだったらいいんだろ？これか？
こうか？それともこんな感じか？」

そう言いながら美鈴は、カードデッキを頭に付けたり、腕に付けたり、足に付けたり、胸に置いてみたり、理由を知らない他者に見られた場合、精神科の医者かカウンセラーが呼ばれそうだ。美鈴の後方で身だしなみを整える為の、全身が映る大きな鏡が美鈴の姿を映していた。美鈴のこの行動は朝まで続くのだが、変身するための鍵が近くにあることには全く気付かなかったとゆう……。

*

美鈴が変身方法を模索し、既に時間帯は朝。結局朝までやっていたが、変身方法はさっぱり分からずじまいだった。朝になったことに気づき、集中力を解いた瞬間、強烈な睡魔に襲われた。居眠りもせず、夜に睡眠も取れなかった為、いつもの倍眠い。だがいつまでも部屋でウダウダ言ってもしょうがない。そろそろ行かないと冥怒…いやメイドからナイフが飛んで来ると直感した美鈴は洪々部屋を出て、ふらふらとした足取りで仕事場に向かった。門番の定位置に着き、生涯勝てないであろう宿敵、睡魔と激しい闘いを繰り広げることになった。眼をギンギンに開き睡魔に必死に抵抗する。だが、授業中の学生しかり、つまらない武勇伝を延々と聞かされる友人しかり、この手の睡魔には勝てるものではなく。

「……………むゝゝむゝ……………ハッ！ヤバイヤバイ、寝てた」

少しでも睡魔を消す為に、顔をパンパンと叩いた。

「はあ… やっぱ昨日寝とけば良かったかなあ…」

昨夜の自分の行動を悔やんだ。後悔先に立たず、今の美鈴にぴったりの言葉である。

「めーりん……！」

門の中から美鈴を呼ぶ幼い声が聞こえた。顔を叩いたがあいもわからず眠気で押しつぶされそうな瞼で声がした方へ振り向く。声の持ち主は薄い黄色の髪を横でまとめ、レミリアと似ている帽子を被っている。服は袖が白で全体が紅いドレスに近い洋服を着ている。全体的に幼く、その端正な顔立ちには魅了する。だが、異形は背にあった。背には悪魔の翼の骨組みのような翼に、七色で色とりどりの宝石が付いている。彼女はレミリア・スカーレットの妹、フランドール・スカーレット。？悪魔の妹？である。この見た目でも、姉と同じで何百年も生きているのだから驚きだ。

「おんやあ、どうしんだですか？妹様」

眠気に耐え、精一杯の作り笑いをした。耐えることに全神経を使っているため、口調はいつもよりゆっくりだ。幼い吸血鬼は無垢な紅い瞳で美鈴を見つめる。何かを探っているようだ。

「ねえめーりん、体の具合でも悪いの？」

「へ？い、いや私は元気ですよ！元気元気！タハハハハ…」

「ホント？ホントにホント？朝見た時はふらふらしてたから」

フランドールは心配そうな表情で、隈ができた美鈴を見つめる。美鈴はそんなフランドールの優しさに触れ、笑みをこぼした。世間では？きちがい？と恐れるが、本来はとても優しい女の子なのだ。

（火が点いたら怖いけどね…）

等と、余計なことを考えながら美鈴はしゃがみ、フランドールの眼の高さに合わせる。

「私は大丈夫です。ありがとうございます妹様、心配してくれて」

今度は作り笑いではなく、感謝の気持ちを素直に出した表情で、そしてフランドールの頭にポンツと手を置き、優しく撫でた。それに満足したらしく、フランドールは『うん！』と頷き紅魔館に戻って言った。

「さて、と。頑張らなくちゃ」

自分のことを心配してくれた幼子の顔を思い出すと、霧で覆われていた意識は、晴れ渡る空の如く覚醒した。

*

幻想郷で『山』と言えば通常は『妖怪の山』を指す。多くの古参妖怪や神々が住み、人間や他の妖怪たちとは異なった独自の文化や社会を築いている。特に天狗や河童は、外の世界を模した高度な技術

力を持っている。幻想郷にまだ鬼が居た頃、天狗を従えた鬼神が築いた社会が基盤となっており、妖怪には珍しく組織的な社会となっている。仲間意識が強い反面、排他的で、山に入り込む余所者は追い返そうとする。そんな妖怪の山にある川のほとりに2つの人影があった。人影と言っても人間ではない。一人は見ただけでは人間と勘違いするような容姿だが、その正体は河童である。帽子を被り、髪型はツインテール、背中にリュックサックを背負っている。もう一人は完璧に人間ではない。白髪 of 頭に は凜と犬耳があり、細い腰の辺りには尻尾がある。白狼天狗とゆう種族の少女だ。白髪 of 少女 こははしりもみじ 犬走栞は暗い顔をしている。

「……私やつぱり間違ってると思うんです」

栞が言った。

「ん？何が」

河童の少女、河城にとり（かわしろ）は手ごろな石を握り、もてあそんでいた。

「自分の欲望の為に闘うなんて……確かに人にはそれぞれ、何をしたいって叶えたい願いはありますよ。だからってこんな……人を踏み台みたい……」

「うーん、栞は真面目だからねえ。だけど、私はやるよ。ライダーバトル」

この会話をしているとゆうことは、この二人も契約モンスターに好かれ、仮面ライダーになったとゆうこと。二人は石だらけの川沿いに座っていた。栞が不安げな表情をする。ライダーバトルをにとりが

するとゆうことは、自分とも闘うことになる。

「あの…にとりさんの欲望って、何ですか？」

「幻想卿のみんなの暮らしがもっと便利になる道具、かな」

即答だった。

「だったら、こんな闘いに参加しなくてもにとりさん自身で作ればいいじゃないですか」

にとりは河童。河童の技術力は先に記載した通り高く、その中でもにとりはエンジニアとして有名だった。彼女の力ならライダーバトルに参加しなくても十分叶られる。椋の意見は間違いではなかった。

「それは無理だよ。どんなに凄い能力を持ってもいつか限界にぶつかる……。例えば私が、過去や未来に行ける道具を作ったとしても、最初は便利だと思っても更に凄い物が出来ればみんなそっちに行っちゃう…。本当に人から必要とされる道具って、なかなか作れないんだよ」

にとりの表情に、一瞬曇りが出来た。自分の能力に限界を感じた者の表情だった。

「それにカードデッキを手に入れた時だって、感動だったし、虚しさも感じた。ああ、外の世界には凄い化学力があるんだ。自分は到底適わないんだってね」

にとりは立ち上がり、手に握っていた石を川に向かって投げた。石は水切りの要領で何度も跳ねていった。

「にとりさん…」

悪いことを言ってしまったのかもしれない。例え、どんなにくだらなくても、その相手が既に手に入れているかのように見えても、それぞれが持つ欲望を馬鹿にしてはいけない。欲望……いや願いと、夢人が持つ崇高な目標であり絶対の物なのだ。

「あの、私」

キイイイイイン

突然、ガラスを何かで引つ掻いたような金切り音が、椀の声を遮るように鳴った。

「!？」

「これって…あの男が言ってた…！」

音に驚き、座っていた椀が立ち上がる。そして、正面にある川の水面に映っている景色に、異形が混じっていた。現実世界にはない、鏡と同じ役割を果たす物に映り、その世界で生きる生物。

「あれが野良のミラーモンスターか…」

「確か神崎さんの話では、他の生物を襲うって。にとりさん！」

「分かってるよ。ライダーの前にモンスター退治だ！」

二人はカードデッキをどこから取出し、水面に向かって突き出した。川の中、詳しく言えば鏡に見立てた水面から銀色で、中央にカードデッキをセットできる形のベルトが現れ、二人の腰に装着される。

「「変身！」」

掛け声と共にカードデッキをベルト　【Vバックル】にセットした。するとカードデッキのシンボルが輝き、幾重のライダーの残像が現れ二人を包む。椀は白い鎧に、虎のような青い模様が入り、虎をモチーフにしたライダー、仮面ライダータイガに変身した。にとりば緑色の躰に、機械的な銀色の装甲と触覚のマスクを装備した牛のライダー、仮面ライダーゾルダに変身した。

「はっ！」

「いっちょ行きますか！」

虎と牛のライダーはそれぞれの気合いを籠めた言葉を発し、水面からミラーワールドに飛び込んだ。

*

ゲッゲッゲッゲッ！

ミラーワールド内の妖怪の山。椀達がいた河川に数十体のモンスターが群がっていた。背中に巨大な十字手裏剣を背負ったイモリ型モンスター、ゲルニユートだ。ゲルニユートは自分達の栄養にするための獲物を探しているようだ。そこに2つの乗り物が到着した。ラ

イドシューター。現実世界とミラーワールドを結ぶ次元空間・デイメンションホールを移動することができるスクーター型の移送機。ライドシューターの屋根部分が開き、タイガとゾルダが現れた。

「うわぁ、うじゃうじゃいるね」

「あいつらが現実世界に行く前に」

「分かってるよ！」

ゲルニユート達が自分達の世界に入ってきた異物に反応する。

ゲッゲッゲッゲッ！

ゲルニユート達は臨戦態勢に入った。ゾルダは体色と同じ色をした大型の銃、【機召銃マグナバイザー】を、タイガは柄の上部に虎の頭を着けた斧、【白召斧デストバイザー】を手にした。一体のゲルニユートが無謀にも突撃してきた。ゾルダはバイザーを持った右腕をダランとした状態でタイガにアイコンタクトし、タイガはそれに頷きで答えバイザーを両手で持ち、下段で構えた。そしてゲルニユートがタイガの攻撃領域に入った時、バイザーを振り上げ、遠心力と腕力を籠めた一撃をゲルニユートに見舞った。

グシューアアア！

愚かなゲルニユートは生々しい音を出し、白虎斧に押しつぶされ爆死した。

『EPISODE・3／龍騎士をさしおいて変身』（後書き）

椋がタイガに、にとりがゾルダに変身！美鈴は次回で変身できる…
… 筈です。

そしてどなたか！ナイトとガイとファムの装着者がどうしても思い
つきません。助けてください！

『EPISODE・4 / ライアのスーパーイライラ変身教室』 (前書き)

サゾーゴコンボがやっと出ました。ゴリラのドラミングで重力を操れるって、ちよつとしたチートですよ。まあ、ガキリバの次に好きだからこれからの活躍に期待ですよ。

あと、今回も描写が変です。ごめんなさい

『EPISODE・4 / ライアのスーパーイライラ変身教室』

ミラーワールド内、タイガとゾルダの戦闘を、遠からず近いわけではない場所から見ている者がいた。それは三つ眼のミラーモンスター。それだけは普通だったが、ミラーモンスターの躰は巨大で、本来無い見た目をしていた。それは、何かと？融合？したような…

*

タイガの初撃で、ゲルニユートの1体を倒した。それが乱戦の始まりの合図になった。ゾルダが分析する。

「数は10〜15くらい……気をつける必要があるのは背中 of 獲物くらいかな？」

つまりゾルダはこう言いたい。『こんな格下達に掛ける時間は無い』と。

「カードを使わなくても行けますね？」

「もち！」

もともと、ミラーモンスターに高い知能は無い。しかし、これは分かった。自分達は馬鹿にされていると。ゲルニユート達は咆哮を上げ、各々の覇気とライダーに向ける殺気を高めた。ゾルダは水平にバイザーを構え、ゲルニユートに照準を合わせた。タイガはバイザーを肩に担ぎ、前傾姿勢になった。悠然と構えるゾルダと違い、い

つでも突撃できるポーズをとった。

ゲッゲッゲッゲッ！

隊列で言えば、前方の3体が飛び上がった。重力を味方につけた攻撃するつもりか。

「…いい考えだとは思いますが！」

短く息を吐き、地面を強く蹴った。空中で勝負を決めるらしく身をひねった。ゲルニートの1体が反応し、背中の武器に手を伸ばした。

パンツ！

喝いた銃声が響いた瞬間、ゲルニートが武器を掴んだ格好で、頭を仰け反らせた。一瞬だが、ゲルニート頭を中心に弾痕がはつきりと確認できた。

「せえええええい！！」

バイザーごとひねっていた身を逆側に戻し、その反動を武器に伝え一息に3体を、回転斬りで切り捨てた。上半身と下半身が離れたゲルニート達はうめき声すら上げられず、最初の1体のように虚しく爆死した。

「ひゅー、かつくいいー椀？」

「ありがとうございますにとりさん」

ゾルダが黄色い声援を送り、タイガは冷静に受け流した。残りのゲルニユートが空中落下中のタイガを下で待っていた。降りた瞬間の硬直状態を狙っているのだ。しかしゾルダも黙っているわけく。

パパパパパンツ！！

バイザーから次々弾丸を発射していく。数体のゲルニユートは避けられたが、被弾してしまった者もいる。肩やら、腹部に直撃し怯んだ。致命的なダメージは与えられて無いが、そこは白虎が止めをさす。

「でえい！！」

着地の一步手前で、怯んでいたゲルニユートの1体を、兜割りで撃破した。斧は薄い紙を裂くように、いとも簡単にゲルニユートを切り裂き、地面にも傷痕が残った。バイザーが地面に当たった衝撃で小石やらが、焼いた栗のようににはじけ近くにいたゲルニユートに当たった。たいしたダメージにはならなかったが、一握りの隙が出来た。白狼天狗の体力を持つタイガにはその一瞬で十分。まず、右側にいた手頃なゲルニユートを下段の斬り上げで、次に前方の3体を水平横斬りで撃破。瞬きをする間に4体も倒してしまった。

「ハアアア……」

タイガが長く息を吐き出し、少し気を抜く。それを隙だと感じた、後方のゲルニユートがタイガに襲い掛かる。だが、それはタイガがまいた？餌？だった。

「シュッ！」

後ろを振り向かず、ゲルニユートに向かってバイザーを投げつけた。白虎斧は回転しながら飛んで行き、ゲルニユートの顔面を砕いた。ギョッ、と悲鳴を上げ、真つ二つの顔面を曝しながら爆死した。

「椀！？武器なくなっちゃったけどいいの？」

確かに今のタイガは丸腰だ。カードを使いたくてもバイザーが無ければ意味がない。武器を呼び出す事が出来ないタイガに、本当のチャンスを感じた残りのゲルニユートが襲い掛かった。

「椀！」

「問題ありません」

タイガは平然と答え、拳の骨をバキバキと鳴らす。そして、虎の如くゲルニユートと抗戦した。あるゲルニユートは顔面を殴られ、手刀で胸部を抉られ、踵落として頭を砕かれた。

「すっ…！」

改めて感心する。弾幕ごっこでは目立たない椀だが、近接戦闘が彼女の真骨頂。狼のような俊敏さ、虎のような荒々しさでゲルニユート達を蹴散らしていく。最早ゲルニユート達の目にゾルダは移っていない。目の前の猛虎以外眼に入れる余裕はない。ゾルダ自身は、あの動き回るタイガに当てないように射撃する自信は無い。今のゾルダに出来る事、それは。

「椀ー！これ！」

気付かれないように回り込み、タイガのバイザーを回収し、チンピ

ラと達人が喧嘩しているような乱戦に向かって、投げた。バイザーは上手い具合に飛んで行き、タイガがキャッチする。

「これでええええ！とどめええええ！！」

タイガの周りを囲むようにしていたゲルニユート達は、『泣ける』を連呼する居眠り熊ばりのダイナミックな回転斬りで全てのゲルニユートは消滅した。タイガが今度こそ張り詰めていた気を抜き、バイザーをダランとして首を左右に振る。そこにゾルダが歩み寄った。

「先ほどはありがとうございます」

「ううん、私はなんにもしてないよ。全部椋が倒しちゃったしね。余裕だった？」

「あたり前田のクラッカーです」

あははと、タイガの余裕発言を笑い飛ばした。そしてゾルダはタイガの肩に手を回した。友人と戯れるように。

だが、この微笑ましい光景もすぐに緊張に変わってしまう。

ガサガサガサッ！！

近くの茂みが意味深に揺れた。その方向に向こうとした瞬間、アク

シヨンが起こった。茂みが大きく揺れ、2、3メートルの巨体が現れた。

「「！？」」

突然のことに言葉すら発することも出来ずに、頭を掴まれ現実世界に無理矢理連れていかれた。視界がふさがれる前に、二人に入ってきた映像は、ミラーモンスターと妖怪か何かの生物が無理矢理融合したような物だった。

*

時は同じくして紅魔館。結局睡魔に勝てず居眠りしてしまった未だに変身出来ない主人公。しかしこの小説の主人公が美鈴かは未だに怪しい所である。

「マジですか！！？？」

居眠りの寝言でツツコまれた。一応言っておく、美鈴は絶賛居眠り中である。だからこれは寝言だ。もう一度言っておく、美鈴は寝ている。しかし、いい加減起きなければ銀髪あの人の怒号が飛んでくる筈だが……。美鈴起こす使者は片手に水が入った水筒を持つ、異国の鎧を纏った騎士だった。

「……き……おい、………ろ！……お……」

何か、くぐもった声が美鈴に呼び掛けた。だが、底無し沼に沈んだ美鈴の意識はうまく声を拾えない。とゆうか、拾おうとしない。マゼンタ色の騎士の頭にあの怒りマークが浮かんだ。騎士は水筒の蓋を開け、中身を少し、美鈴の顔にぶっかけた。

「うわっぶ!？」

流石にコレには驚き、目を覚ました。水が滴る顔を拭った。

「なにになに!？」

「やっとか」

騎士が呆れるようにいった。美鈴は自分の目の前の騎士に気付いた。

「!。貴方誰ですか? コスプレ好きの変質者!？」

「違う」

初めて騎士、仮面ライダーを見た美鈴のリアクションは酷い物だった。しかしまあ、現代の知識がたまに入ってくる幻想卿。コスプレイヤーにたいしての、中途半端な知識を持つ美鈴がこう思うのは無理もないだろう。現代でも、たまに仮面ライダーのスーツは強化コスプレなんて言われてますから。

「私は仮面ライダーライア。闘え、仮面ライダー龍騎」

「こ、これが……仮面……ライダーだと……!」

そして、ためにためた美鈴は正直な感想をライアに吐いた。

「ええ〜コスプレかよう。嫌だあ、だったら変身したくねえ〜」

「コスプレじゃねえって言うてんだろがよ!!!」

ライアがブチ切れた。とゆうか、幻想郷の住人の衣装もコスプレなのでは?とは思ってはいけない。断じて。

「しかしそのコスプレイヤーさんが私になんの御用で?」

「話し聞けよ!!!だから闘うの!ライダーバトルだよ。ラ・イ・ダ・
ー・バ・ト・ル!!!」

最初の余裕さは微塵もなく、声も素に戻りかけた。コホンと咳払いし、ペースを戻そうとした。

「…………ん!とにかく変身しろ」

変身とゆう単語に、ライアから眼を反らした美鈴。当然だよな。だってわかんないんだもん。

「もしかして……変身の仕方が分からないの?…はあ、だと思ったよ……」

どうやらこの水筒は、美鈴に変身方法を教えるために持ってきたらしい。ライアは、水筒の中身を美鈴の前にぶちまけた。

「?」

「この水溜まりにカードデッキを掲げろ」

「は？」

「いいから早く！」

イライラするライアは今にも殴りかかりそうな剣幕だ。ライダーのマスクは表が作れない。その分、その隠された素顔を想像するのは恐ろしい物だ。美鈴は渋々カードデッキを出そうとした。が。

「……………ない」

「……………あ？」

「部屋に忘れてきちゃった」

不 家の コちゃんの如く舌をペロツと出し、テヘツと可愛く頭を手をやった。普段なら『へー、そーなのかー』で済むだろうが、これは完全に死亡フラグだよねえ。それを読み取った美鈴は敬礼をライアにし。

「すぐにとつて参ります！！」

アクロバットなジャンプで門を飛び越え、自室に全力疾走で向かった。

数分後

「只今戻りました！！」

「よくやった！」

息を切らし、左手にカードデッキを持った美鈴が、水溜まりが蒸発しないように守っていたライアに再び敬礼した。

「さっき言った通り、そのカードデッキをこの水溜まりに掲げる」

「はい、わかりやした！！」

早速やってみた。すると、例の如く美鈴の腰に、ライアと同じ銀色のVバックルが装着された。

「おお！」

「そして、そのベルトにカードデッキをセットしろ。あつ、ちなみに『変身』の掛け声を忘れるなよ」

「え、なんですか？」

「『変身』はライダーのステータスだからだ」

「はあ…なるほろ」

そして、特にポーズなどはとらずにカードデッキをセット。勿論、アレを忘れてはいけない。

「へ…変身？」

カードデッキのシンボルが、『やっと出番か！』と言わんばかりに

輝く。そして、ライダーの変身の手順を踏んだ美鈴は、あっさりメインカラーが紅で、龍を模した騎士鎧のライダー、仮面ライダー龍騎に変身出来た。

「……これが…龍騎……ふふふ…ちょっと格好いいかも…」

「私が出てきて800〜700文字でようやく変身か。長かった…」

龍騎がライアに顔を向けた。

「あの、ありがとう」

ガッツ!!

龍騎がお礼を言おうとした時、龍騎の顔の側面に衝撃が走った。ライアがいきなり龍騎の頬に裏拳を放ったのだ。龍騎は対応出来ずに、紅魔館の前に広がる森に吹き飛ばされた。

「ライダーに変身できたとゆうことは…既にライダーバトルは始まっているのよ」

ライアはゆっくりとした足取りで、龍騎が吹き飛ばされた方へ歩きたした。

『EPISODE・4/ライアのスーパーイライラ変身教室』(後書き)

ライダー案、ありがとうございます！

しかし、ナイトは未だに決めかねています。何とぞ、何とぞお願いしますう！

『EPISODE・5 / 欲望は全てが純粹である』（前書き）

休日と休日明けは更新が早いです。平日は2〜3日くらいで更新。自分がどれだけ暇か思い知らされました。泣けるでえ！（泣）

今回は変な精神論とか言っちゃってます、すみません。

『EPISODE・5 / 欲望は全てが純粹である』

ライアに殴り飛ばされた龍騎がむくりと立ち上がった。周りには土煙が上がっている。

「イテテテ……いきなり……」

スーツが軽く土煙で汚れていたので、手で軽くパンパンと払う。大分飛ばされてしまった。自分の前にあった筈の紅魔館は遠くにある。身構えていなかったといえ、ここまでやられるとは。仮面ライダーの腕力の強さが身に染みて分かった。分かりたくもなかったが。顔面へのダメージで脳が揺れたのか、少し足取りがおぼつかない。

「うう……なんか気持ち悪い……」

頭を押さえ、辺りを確認する。案の定、ライアが来た。

「ライアさん……でしたっけ？いきなり何するんですか!？」

「ライダーとライダーの接触……それは闘いの合図でもある。憶えておけ」

ライアが身を屈めて、龍騎めがけ突進する。自分のリーチが届く範囲に入ると、強く踏み込み【飛召盾エビルバイザー】、左腕にあるエイを模した盾型のバイザーを拳の代わりに突き出した。龍騎は両腕をクロスしガードをなんとかできた。

「うくっ……!このお!」

ガードに回していた右拳を解き、突いた。ライアは盾の役割を持つバイザーでガードし、龍騎の右腕を掴み跳躍し、相手の顔面にドロップキックを放った。

「ぶっ！？」

また、後方に飛ばされてしまった。先程よりは飛ばされなかったが、今度は後頭部を強打。

「いだあ！？ああもう、顔ばかり攻撃しないでください！」

「ふん。脳でも揺れたか？動きが鈍い、突きに威力がない」

後頭部を擦りながら立ち上がる。ライアに痛い所を突かれた。今の龍騎はライダーの力に慣れていない上、脳が揺れ上手く動けない。

「こんなことは止めてください！」

「断る」

「……………欲望ってやつですか？」

「分かってるじゃないか。私は叶たい願いがある。お前だって願いの一つや2つ、あるだろう？」

「……………」

龍騎は答えられない。確かにカードデッキを手に入れた時にはあった。酷く、くだらなかったが。只、ライアを見ていたら、自分はこれでいいのか？と考えた。ライアからは闘気とは共に別の何かが出

ている。何があっても叶えなければいけない願いを持つ戦士。

（仮面：ライダー）

「なんだ？ 願いは無いのか。…まあ、どうでもいい。お前は私の願いの贅となれ」

言葉を切ると、拳を次々と繰り出した。

「ぐう！」

龍騎は反応できず、みぞうち、首、といった人体の弱点に拳を打ち込まれる。闘いとは己の肉体だけとする物ではない。よく、軀を鍛えれば強くなれると馬鹿な妄言を吐く奴がいるが。それは間違いだ。何よりも大事なものは？ 気？ だ。気、つまりは心だ。阿呆らしいと馬鹿にする輩もいるが、心は何よりも大事だ。気負けするれば、蛇も蛙に喰われる。龍騎はライアに気負けしている。脳の揺れはとつくに治っているが、気負けしている今では力が出ない。言わば、覚悟の差だ。

「ふっ！」

最後は回し蹴りで龍騎の首を刈った。

「がはあ！」

「ふざけてるのか？ 何故反撃しない。ま、楽でいいがな」

ライアはマゼンタ色のカードデッキから、アドベントカードを抜き取り、バイザーに挿入する。絵柄は鞭。

《S W I N G V E N T》

電子音が鳴り、ライアの右手にマゼンタ色の鞭、【エビルウィップ】が召喚された。ライアはエビルウィップの調子確かめるように振る。鞭はヒュン、ヒュンと空を切った。

「な……」

絶句。カードがある意味はなんとなしに分かっていたが、いざ目撃すると驚く。

「せい！」

エビルウィップは宙でうねり、獲物めがけ飛来する。

「うわ！？」

かろうじて避ける。自分も何か武器を持たなくては。龍騎もライアに続きカードを手にする。絵柄は湾曲した片手剣。そして、ライアに習って挿入・【ベントイン】しよとする。【龍召機甲ドラグバイザー】。左腕に装備されているガントレットタイプのバイザーに戸惑ったが、すぐに上部のカバーがスライドすることに気付いた。カバーを開け、カードを装填し、カバーを元に戻した。

《S W O R D V E N T》

龍騎の手に、ドラグセイバーが召喚された。

「…よし！」

ドラグセイバーの調子確かめるように八の字に振り回し、八双の構えをとる。ドラグセイバーを両手で持ち、駆け出そうとする。だが。

「甘い！」

ライアはエビルウィップを巧みに操り、ドラグセイバーに絡み付けた。そして、強く引っ張る。

「あ!？」

ドラグセイバーは糸も簡単に龍騎の両手から抜けた。片手剣は放物線を描き、ライアの手におさまった。

「くっ…、還してください!!」

「なら還してやるよ」

ライアは龍騎にぬらりと近づき、胸部の装甲を十字に斬った。

「その身に、な」

「くは……!!」

胸に鈍痛が走る。痛みを引かせる間も与えずライアは龍騎の下腹部に蹴を入れた。龍騎は、本日三度目、吹き飛ばされた。木々を何本かへし折りながら、龍騎は奥へ、奥へ飛ばされた。土煙を派手に上げ、身を地面に打ち付けた。

「あああ…」

龍騎は頭を少し上げ、ライアを見た。ライアは右手にエビルウィップ、左手にドラグセイバーを手に、龍騎に止めをさそうと近づいてくる。

（ヤバイ…殺られる……かも）

カッカッカッカッ

ライアの足音が妙に頭に響く。これが、死へのカウントダウンか。

（死なないらしいけど……いや、妖怪にとって…力を失うことは死と同じ、か……）

紅魔館の門番をしていれば、多数の妖怪に怨まれる。

（ヤッバイなあ…）

ヤバイと言っても、もう指一つ動かす気は起きない。完全に気敗けた。勝てる見込みが何処にも見つからない。

闘え

ふと、頭に神崎の頭に響いた。

（闘え…か。……そうだ闘わなきゃ…私は門番…闘って護らなきゃ……私の家（紅魔館）を…家族を……力を失うわけには…いかない

！……護るためには……闘わなくちゃ！！）

見込みが無くても勝たなくてはいけない理由が、遠目に見えた。

*

ちょっと頭を上げただけで、もう動かない。龍騎はもう終わりか。

（ごめんなさい…美鈴。だけど、私…）

ライアは、レミリアは心の中で謝罪した。自分の大切な家族を傷つけるのは嫌だった。だが、どうしても叶たい願いがある。

（私はこのライダーバトルに勝ち残って…『人間になる』）

レミリアの犠牲を出してでも叶たい願いとは、『力を残して人間になる』ことだった。例えるならそう、博麗 霊夢のような。

「…ごめんね」

最後に美鈴へ謝罪の言葉を投げ掛け、カードデッキめがけドラグセイバーを振り上げた。すると。

「……………っ！」

龍騎が、ゆらりと立ち上がった。そして。

メシヤアアア！

「がはっ！！！？」

龍騎がライアを殴り捨てた。拳がライアの額にめり込み、地面に叩きつけた。ライアが叩きつられた地面はクレーターのようへこみ、ヒビが入っている。

「すみません。敗けられない理由を思い出しました。」

紅い龍騎士は、蛇を飲み込む蛙になっていた。

*

「きゃあ！」

「うっ！」

妖怪の山の川。現実世界に無理矢理連れ戻されたゾルダとタイガは石だらけの川岸に叩きつけられた。

「なんなんだ！いたい」

「こいつは……！」

タイガ達が目撃した、攻撃の犯人は2、3メートルの巨人。ここまでは最初と同じ。そして、よく見れば見るほど異形。体が鱗で覆われ、爬虫類の眼を持ち、口が大きく裂けている。頭には羊のような鋭い角を持つ妖怪の頭に、無理矢理三つ眼のミラーモンスター

【デッドリマー】が上半身だけだしていた。下半身は妖怪の頭に肉体組織をくっつけたような生物だった。

「上のはミラーモンスター…だよな」

「あの妖怪は？しょうけら？か……？」

しょうけらに関しては後書き参照。しょうけらWITHデッドリマー（以下、SWデッドリマー）が咆哮を上げた。

ギアアアアアアアアアアアアア！……！！

そこでゾルダがあることに気付いた。

「あれ……どっちから声出してるんだろう……？」

「今はそっちよりも、アレをどうするかです」

「倒すけど…あれが妖怪とミラーモンスターが融合したのなら…しょうけらは無傷で分離させたいよね」

「勿論です。あれは善良な山の仲間ですから」

しょうけらは疫病神の一種なのだが……。山の仲間は、条件なしに助けたらしい。SWデッドリマーは額にある第三の眼で二人に照準を合わせた。

「くるよー！」

「はい！」

左右の眼から赤いレーザーを発射し、地面を焼いた。それを二人は左右に飛んで避けた。

「にとりさん！私が動きを止めます。止めたらミラーモンスターとしようけらが融合している部分を、強力な砲撃で撃ってください！」

「あいよ！」

地面に着地すると、タイガとゾルダは左右に別れる。タイガはバイザーを取り出すと、バイザーの柄とをスライドすると上部に装填する部分が現れる。カードをベントインした。

《FREEZE VENT》

フリーズベントが発動し、SWデッドリマーの体が氷結した。ただし、全体ではなく薄皮一枚と言ったところか。凍結時間はほんの数秒だろう。ゾルダは時間を無駄にしまいと、バイザーのマガジン部分をスライドさせ、装填口を露出させベントインする。

《SHOOT VENT》

ゾルダの手に、巨大な大砲緑色で装飾され銀色の砲胴を持つ【ギガランチャー】が召喚された。狙いはしようけらとデッドリマーの接続部。

「はつつつしゃやー！！！」

ギガランチャーの引き金を引いた。爆音がし、大砲に見合う大弾が発射される。大弾は真っ直ぐに飛んで行き、見事に直撃した。

ギヤアアア！！

悲鳴と爆発。次に起こったのは分裂だった。肉が裂けたとゆうよりは、デッドリマーの軀だけ剥がれたとゆう感じだ。しょうけらの頭は、肉が少し裂けたくらいでたいした傷はない。空中に舞うデッドリマーはゾルダ達に向かって罵っているらしいが、タイガ達には理解出来ない言葉だった。

《FINAL VENT》

ゴアアアアア！！

どこからか現れ、猛獣の咆哮を上げながら、タイガと同じカラーリングの生物が、手にある鈍色に輝く爪でデッドリマーを捕えた。タイガの契約モンスター、【デストワイルダー】だ。デストワイルダーが爪でデッドリマーを捕えた状態でタイガのいる方向へ引きずって行く。タイガの手には、デストワイルダーの両手を模した手甲、【デストクロウ】を装備して、デストワイルダーに向かって駆ける。

「はあああああー！！」

デストワイルダーが引きずってきたデッドリマーをデストクロウで貫いた。そして、結晶爆発が起きデッドリマーはタイガのファイナルベント【クリスタルブレイク】によって爆死した。デストクロウの構えを解いた。デストワイルダーはデッドリマーから生まれた生命エネルギーを捕食した後、飼い猫のようにタイガにじゃれついてきた。

「一緒に闘ってくれるのは嬉しいけど……これはちょっと…」

ゴロゴロゴロゴ？

「桜のはまだいいよ。猫だし、まだ人間サイズだし」

猫じゃなくて虎だ、虎。

「私のはデッカイし、牛だし、銃火器の塊だし、重いし……」

ゾルダは自分の契約モンスターの愚痴いい始めた。ちなみにゾルダの契約モンスターはマグナギガ。二つ名は「鋼の巨人」。タイガはマグナギガの容姿を思い出すと、同情の苦笑をした。

（私はまだよかった方なのかもしれない……）

デストワイルダーの頭と顎を撫でながらひしひしと実感した。すると、正気に戻ったしようにけらがタイガ達に近づいてきた。

「……なんやしらんけど、もしかして自分、アンタらに助けられたのかな？」

意外としようけらさん、気さくな関西弁でした。

「そつ！頭大丈夫？」

「ああ、それはもう。自分妖怪やさかい治り早いねん。あんさんら、お名前は？ちゃんとしたお礼したいねん」

そして意外と礼儀正しい。人（妖怪）は見かけによりませんね。

「別にかまいませんよ。当然のことをしたまでです」

「だったら！だったらあんさんらお名前だけでも！」

ゾルダはタイガに向けてアイコンタクトを送った。この状況をどうしようか、と。

（どうする？本名言っちゃう？）

（それはまずいでしょう。ここはライダーの名前で、その方がいいです。絶対に）

二人の意見が一致したらしく、うんと頷いた。

「私はゾルダってゆうんだ」

「タイガです」

「緑色の方がゾルダさん、虎さんがタイガさんですか。ほんま、おきに！」

しよっけらが深々とお辞儀した。この見た目と巨体だ、かなりシユールだ。すると三人の頭上から黒い、カラスのような羽が舞落ちてきた。

「これって……！」

「もしかして……！」

二人の顔、そしてマスクにつうと冷や汗をかく。なんでマスクなの

に汗かいてんだよ！とかツツコンではいけない。案の定、二人が予想した変身している時に会いたくない人物No.1が舞い降りた。

「あややや！？なんなんですかこのネタになりそうな人達！コスプレ？それってコスプレですか？うひょー！」

黒い髪に可愛らしい大きい眼、背中に黒い翼がある少女は鴉天狗の射命丸 文。幻想卿の悪名高きパパラッチである。

「あや？もしかして私今、失礼な説明されました？」

「おお、射命丸の姉さん。御無沙汰です。そして姉さん、コスプレとか失礼ですわ。自分の命の恩人なんですから。コスプレやなくてヒーローや。英雄ですわ」

「おお！ヒーローですか。ますますネタになりそうですねえ！」

当の二人は喋らない。喋った場合、速攻でばれる気がする。文と仲の良い二人の場合、ばれる確率がかーなり高い。

「ちなみに私と桜は東方Project本編では仲が悪い設定ですが、この小説での私は桜の破廉恥な写真を撮りたがるほど桜のことが好きなんです！ハアハア…桜？ハアハア…。あれ？なんで急に私は桜の話？」

「姉さん、気にしたら負けです」

と、神の変わりに代弁してくれた文さん、そんな文さんにツツコンでくるたしうけらさんありがとう。そして文の興味の元であるライダーズと完全に空気だったデストワイルダーは、こっそりと川か

らミラーワールドに逃げようとしていた。

「あや？お二方どちらへ？はっ！もしかして逃げるきですか！？名前を名乗らずトンスラとは何事ですか！」

文に正論を吐かれたタイガは咄嗟に機転を利かせた。ある鬼のように、手をスナップを利かせた『シュッ』をやると。

「通りすがりの仮面ライダーです！では」

三人は川の中、詳しく言えばミラーワールドの中に逃げた。川岸にはしょうけらと文だけがぼつんと残された。

「仮面ライダー…ですか……。ふ、ふふふふ……。これで終わったと御思いですか？諦めると御思いですか！？ここで諦めたら射命丸の名が廃るでしょ！と、ゆうわけでしょうけらさん！あの二人、仮面ライダーについてお教えいただけますか？」

「なんか面白そうだな。自分、喜んでお手伝いさせていただきますわ！」

こうして、射命丸 文の仮面ライダーを記事にするとゆう、？欲望？が生まれたのだった。その日、妖怪の山に天狗少女の高笑いが響き渡ったとさ……。

『EPISODE・5／欲望は全てが純粹である』（後書き）

『紅美鈴の蜂蜜教室』

はい、どうも美鈴です！このコーナーは色々な設定やら、ライダー等の情報を解説していく為に作者が自己満足で作りました。そして今回は私が選ばれました！……しかし、キャラクターの救済コーナーとの噂もあるんですが……。まあ気を取り直してやっていきましょう！

今回出てきたSWデッドリマーとゆう融合ミラーモンスターは、作者が『ヤベー、キャラの強い東方キャラに囲まれてたらミラーモンスターの影響いじゃん！ヤベーよ、なんか考えなくちゃ！』とゆう安易な考えで生まれました。ただ単に、妖怪とミラーモンスターを合体させたただなんですけど。能力はその妖怪＋ミラーモンスターの力が合わさっただけです。SWデッドリマーはかませ犬だったから力はデッドリマーの光線だけです。次は妖怪、『しょうけら』です。

しょうけら 作品にあっつたように疫病神の一種です。鳥山石燕の『百鬼夜行』に天窓などから家の中を覗き、隙を見ては人を襲う妖怪として描かれています。しかし何故しょうけらと呼ばれるのは不明……作者が情報不足でごめんなさい。家に災いをもたらす妖怪として昔から恐れられてきた。

この情報はネット＋地獄先生ノベラです。しょうけらは小説ではいい人？でしたが、本来は悪い妖怪です。地方が違ふところでは伝承が少々orかなり違う場合があります。あしからず。

コレからもこうやって紹介していきます。てゆうか、たいして面白いネタがないなら私とか使う必要なくね？とか言わないの。ではでは

『EPISODE・6／現れたのは銀狼』（前書き）

テスト期間中ですが、気にせず更新します。

『EPISODE・6 / 現れたのは銀狼』

龍騎士は奮い立つ。己の中に眠る、？欲望？とゆう酷く醜く、とても美しい想いを見いだして…

*

先程とは違う展開。地面に突っ伏していた龍騎は闘気を纏いて立ち上がり、優勢だったライアが土の味を噛み締めている状態だった。ライアが立ち上がる。大きすぎるダメージによって、フラフラしている。

「かはっ……………」

「貴方…………私に願いは無いと言いましたね？」

龍騎がライアに言い放った。神崎によって思い出されたのは妙な気分だったが、大切なことにかわりない。

「ありましたよ。昔から、私の願いは『紅魔館の門を護り、紅魔館の平和を護ること』。」「

「ふ…………何を言ってる…………お前は門番をさばることでは有名じゃないか…………」

痛みを堪えながらなので、言葉が区切り区切りだ。確かに美鈴は居眠りしてばかりで、白黒服の魔法使いや、高速パラッチ、脇を露

出している巫女を紅魔館に入れてしまっている。そして館の主やら、紫もやしにお仕置きをくらっているのだが。痛いところを突かれた筈の龍騎はさも平然と答えた。

「何を言ってるんです？主人やその友人の、友人達を通すのは当然のことです」

それが、紅魔館にあるべき平和だ、と。ライアは頭をズガンと頭を殴られた気分になった。さっき龍騎に殴られた時よりも強く。

「私は願いは叶える……いや、貫き続ける為に闘う！」

身を低くし、右拳を前に、左拳を引き構えた。龍騎が纏う闘気は真の強者の物だった。

「私も負けるわけにはいかないんだああああ！！！」

ライアは雄叫び、自分自身も貫かなければならない意志を表した。ライアが左手に未だ持つドラグセイバーを横なぶりに振った。

「反撃……しますね」

左手の指でドラグセイバーの刃を摘み、止めた。ライアはドラグセイバーを振り抜こうとも、振り戻そうとしたがびくともしない。

「く……う……ふく……ぐあ」

「せっ……！！」

ドラグセイバーに気をとられていたライアのマスクを、右手で掴み、

地面に叩きつけた。今度は地面にへこみは出来ず、代わりに低くバウンドした。

「やあっ！！」

バウンドしたライアの顔面を強く蹴った。ライアのマスクが軋んだ音がした気がした。

「げはあ！！！！？」

ライアが、龍騎がされたように木々をへし折りながら吹き飛んだ。地面に胸を打ち付け、倒れたライアは遠目に龍騎を見た。

（く……！しまった…、本気になった美鈴は強い…！特に格闘系統は美鈴の十八番。遊びすぎたか！？）

正当方ではもう勝てる見込みは無い。理解したライアは腰を少し浮かしカードを引き抜く。少々気分が悪いが、馬鹿正直に闘ってもカードデッキを破壊されるだけ、コレしか手は無い。

《ADVENT》

電子音が鳴った。だが、ライア自体には変化が無い。龍騎は特に気にしなかった。今の自分は何が起きても敗けない。敗けてはならない。龍騎はうつ伏せで倒れこんでいるライアに向かってひたすら歩みを進ませた。その龍騎の背後を、狙っている者がいた。空中を滑るように滑空するマゼンタ色のエイ、【エビルダイバー】。ライアの契約モンスターだ。さっきのカードは自分の契約モンスターを呼び出す力を持つ。エビルダイバーは主人の命令で、背後から龍騎に奇襲するつもりだ。エビルダイバーは加速をつけ、全力で体当たり

しようとする。龍騎との距離が手が届くくらいになった。

ゴスツー！！

エビルダイバーの頭の辺りを龍騎が裏拳で殴り付けた。『ぎゃああ！』とエビルダイバーは主人と同じように地面に叩きつけられた。

「エビルダイバー！！」

龍騎はエビルダイバーを無視し、ライアに近づいていく。

《QUICK VENT》

突然、龍騎やライアとは違う、エコーが掛かった青年のような電子音が鳴った。

「？………っ！！？」

瞬間、龍騎の背後の空気が変わった。何かが高速で動き、空気を切り裂いた。龍騎は全身の筋肉を収縮させ、背後を振り向き右手の手の平で受け止めた。

「く……！何者！？」

龍騎を攻撃した正体は、自分と同じ仮面ライダーだった。Vバックルは銀色ではなく、金色。体は黒で装甲は鈍い銀色だ。所々にある爪のようなラインは黄色に装飾されており。左手に拳2つ分くらいの爪が生えた、狼の頭を模したガントレットタイプのバイザーが装備され、右手に左の半分の長さの爪。マスクはバイザーと同じで狼で、犬耳のような物が付いている。謎のライダーは龍騎を無視し、

ラインに言葉を投げ掛けた。

「おいライア。お前さん、この場は逃げとけ。このチート野郎は俺が相手しとくからよ」

「な……」

「何もゆうな。お前はもう無理だ」

ライアは顔をうつむかせ、渋っていた。どうやら、主人よりもエビルダイバーが利口らしく龍騎の一撃で軋む躰を動かし、ラインの所まで飛び主人に乗れと言った。

「……………く、礼は言わん！」

エビルダイバーに飛び乗り、ライアは上空に消えた。

「さーてと、悪いな龍騎。お前さんの相手奪ってよ」

狼のライダーは受け止められていた拳を引き、楽な姿勢になる。

「代わりに俺が相手してやる！……………と、言いたいがねえ。俺は闘わん。じゃそゆことで」

右手を上げ『グッバイ』とゆうと、後ろを向きテクテクと歩いていく。龍騎はそれを無言で見送った。テクテクテク……………。

「なんか言つてよ！！！！」

ズドドドと一気に戻ってくる。その素早さは狼の如く。どうやらツコンで欲しかったらしい。龍騎はキョトンとしている。

「闘いたくないのなら私は闘いません」

「いや良いことなんだけど！俺も賛成だけど！スルーは止めて、マジで。お願いだから！」

「は、はあ……」

龍騎がこのライダーの第一印象は、騒がしい。だが、嫌いなタイプではない。普通なら友達になりたいタイプだ。ただライダーは皆、ライアのような強い覚悟を持っていると思っていたので、正直拍子抜けだ。

「じゃあ次はスルーしないでね！絶対だかね！」

「は……はい。わかりました」

「あゝ、あとその敬語止めて。なんかギクシャクしちゃう。そんなん、なんかやだ」

「あの……いい加減名前は……？」

「あ、聞きたい？聞きたくなっちゃう？しょうがないなあこの困ったちゃん！」

「……………？」

「……………ごめん。俺、仮面ライダー『ヴォルフ』です。以後よろしくお願いします」

ヴォルフが75度の角度でお辞儀した。コレが、入社面接なら審査員に好印象を与えることが出来るだろう。

「あんだ、願い次第ではライダーバトルをあんま推奨しないだろう？なら、あんだ俺と同志だ」

「は？」

「じゃあ今度こそ俺、用事あるんで。バイバイめーちゃん。あ、このめーちゃんって美鈴のめーちゃんね。んじゃね」

「あ、ちよつと！」

ヴォルフは龍騎の引き止めを無視し、走り去っていった。速い、いや速い。まさに疾風迅雷だ。

「なんだっ たんだ……あの人……」

*

上空。エビルダイバーの背に揺られ、変身が強制解除されたレミリアがぐったりした様子で寝転んでいた。

「やっぱり強い……！流石紅魔館の門番。あの門番を選んだ私、流石！」

『威張ってゆうことではない。何故すぐ動かなかった？下手したらやられていたぞ』

「私だってプライドがあるし、そもそもフルボッコだったし…簡単に動けないわよ」

『フム……』

この会話。レミリアの対話相手はだれか。賢明な読者の方々は簡単に分かっただろう。そう、契約モンスターのエビルダイバーだ。今回のライダーバトルの鍵は、契約モンスターがライダーに持つ信頼関係で成り立っている。この人物なら肩を並べて闘える、そう想えた人物を契約モンスターがライダーに選ぶのだ。故に、信頼関係の証としてテレパシーに近い物で主人と会話が出来るのだ。因みに愛称は『エビイ』。

「……………闘えるかな、本気で」

『……………闘わなければ、美鈴にしろ、他のライダーにしろ……………殺されるだけだ』

「分かってる。分かってるよエビイ。でも…辛い」

顔を手で遮りながら言った。先程、自分が美鈴にしたことを追憶し、美鈴の言葉にまた頭を痛めた。エビルダイバーも、それを悟り沈黙した。長い、長い沈黙。切り出したのはレミリアだった。

「エビイ……………出来ればいいからさ…」

『どっした？』

レミリアの躰から煙、天には燦々と輝く太陽。レミリアは、渾身の

『EPISODE・6 / 現れたのは銀狼』（後書き）

オリジナルライダーの銀狼、『ヴォルフ』。変身者ともどもオリジナルです。近い将来、変身せずに美鈴と対面予定です。

契約モンスターが喋る……製作中に思いつきました！（*^ ^*）

b

『EPISODE 7 / 文々。ソーセージは色々と危険』(誤字、その他修正版)

今回は文が主人公みたいな感じです。そして雑です。ごめんなさい。

ライアとの戦闘を終え、今は夜。今日の業務を終え、眠りにつく為にベットに入った。暗い部屋の天井を見つめ、今日のことを思い出していた。初めての变身、初めての戦闘。大変だったが、自分の中の『大切な願い』を見いだすことが出来た。仮面ライダーライアには感謝しなくては。……ボコボコにしてしまったが。そういえば、仮面ライダーと言えば。

「……………あの、ヴォルフって仮面ライダー…なんで私の名前を…？」

思わず声が出てしまった。あの時は、頭を冷静に興奮状態にしていたので気付かなかったが何故、龍騎に变身していた美鈴の名を？ヴォルフは美鈴に、ともに喋らせる暇を与えずに喋り続けた。あの銀狼のライダーは一体……。思考の海に身を投げだした筈の美鈴は、どうやら行き先を間違えたらしく睡夢の海に行ってしまったらしく、深い眠りについてしまった……。

*

あやや！…どうも、『文々。新聞』の清く、正しい射命丸 文でございます。先日、もとい昨日ですが。私は幻想郷に現れた謎の騎士と一緒にいた怪物に興味を持ちまして記事にすることにしました。現場に居合わせたしゅうけらさんの話を聞いた所、あの戦士は仮面ライダーと名乗りましたが、どうやら一人一人に別の名前があるらしく、機械的な仮面ライダーはゾルダ、虎のような仮面ライダーはタイガとゆうらしく、仮面ライダーは戦士達の総称のようです。し

かし情報が足りない。私は情報を得る為に紅魔館に向かうことにしました。

*

はい、やってきました紅魔館！門番の美鈴さんをスルーして地下の大図書館にやってまいりました。大図書館とは、紅魔館の地下にある大きな図書館。紫もやしことパチュリー・ノーレッジさんの書斎になっていて、パチュリーさんが本を読んで暮らしている。風通しが悪く日当たりもないので、かーなりかび臭いです。蔵書には大量の魔導書があり、パチュリーさんが書いた魔導書もあるそうです。魔導書以外の本もたまに混じっていて、その多くは外の世界の本。興味深い物もありますが、今の私には仮面ライダー以外興味ありません！

「それでパツチェさん。仮面ライダーって知ってます？」

「知らないわよ。てか、あんたなんでいんのよ？美鈴は何してたの？」

「寝てました」

美鈴さんが職務怠慢。それを聞いたパチュリーさんの頭にあの怒マークが。パチュリーさんが積み重なった本の山から一つ、魔導書を引っ張りだす。そして聞いたことのある詠唱を一言。

「焼き尽くせ！メゾーマ！」

ズドオオオオオン

地下の天井が揺れ、ホコリが舞落ちる。どうやら、美鈴さんに国民に愛されるあの作品の、炎系最強魔法が直撃したようです。それでも足りなかったのか、もう一冊魔導書を取り出した。

「ついでにアルテ！& テオ！+ダークサン ガ！」

今度は最後の幻想と言いながら何作も出てる名作の高級魔法。これでは王でもギル ミッシュでも、デピサロでも、ゼムスでも流石にキツイですよな（汗）

「ふう… ちょっとだけスッキリしたわ」

「今のですか！？美鈴さん死んじやいますよ…」

「とにかく。私は貴方が望む答えは無いわ。さっさと帰ってちょうだい」

むむ…相変わらずガードが固いですね。白黒魔女にメロメロのくせに。ふと、眼の端に赤毛が映る。

「あ、小悪魔さん。小悪魔さんは何か知りませんか？」

赤毛で、背には黒い翼があるパチュリーさんのお世話係の小悪魔に訪ねる。しかし名前が付いてないなんて、悲しいですねえw

「パチュリー様が分からないことは…私にも……。てゆうか、今失礼なこと考えましたね。絶対に。」

「（ど、読心術…だと……！！！！な…名無しのくせに…やるりお

る……!!) あや、何のことでしょうか？しかし残念です。他にあたらせていただきます。ありがとうございます。そうだ、お礼と騒がしくしてしまったお詫びをかねてこの『文々。ソーセージ』を差し上げます」

「何ですかその 撰組ソーセージのパクリみたいな物は？」

訝しげな顔をしながらも、小悪魔さんは文々。ソーセージを受け取る。ちゃんとパチユリーさんの分を忘れていない。

「テレテツテテー。文々。ソーセージい。コレは私の家の冷蔵庫に入っていた魚肉30%、何かの肉70%で出来てるソーセージなんだあ(ダミ声)」

「うわあ、ダブルパクリ……しかも何かの肉って……」

「コレを食べると妙に力が湧くんだあ。でも食べ過ぎると幻聴、幻覚、目眩、吐き気に襲われるから気をつけてね び太君(ダミ声)」

「誰かの 太君だ!!あとそのドラえん声止めてくれませんか？しかもこのソーセージの主成分って麻薬成分!!??」

小悪魔さんの流れるようなツツコミをスルーしながら、次の目的人物を目指す。次は奴のカリスマはもう死んだ……ことレミリア・スカレットだ！

*

紅魔館の医務室。そこに打撲であざができた駄で、ベットに横たわるレミリアと、その従者である咲夜だ。

「まったく…どこでこんな傷を作ってきたんですか？お嬢様」

「あー、あれよ。イオ スーパー ンターの自動ドアに挟まった」

「インはまだ幻想入りしていません」

このレミリアの傷ができた理由は、言わずとも分かるだろう。昨日の龍騎との戦闘でできた物だ。まともに入った数は3発、その攻撃全てがあざを生んだ。さらに全身打ち身、全身筋肉痛と、かなりのダメージだ。医務室の窓に、エビルダイバーが映る。勿論、ライダーではない咲夜には見えない。

『昨日からガミガミと……説教ばかりだな』

（それだけ心配してくれてるのよ。感謝しなくちゃ）

『俺には無理だな。レミリア、お前は人間出来すぎだ。人間よりも…な』

皮肉をゆくと、エビルダイバーは姿を消した。

「人間……か」

レミリアがポツリと呟いた。

「どうしましたお嬢様？」

「なんでもないわ。そろそろ眠らせて、昨日は体が痛くてよく眠れなかったの」

「……………分かりました」

咲夜が立ち上がり、医務室を出ようとした。その時、空気が読めないバカラスが医務室に飛び込んで来た。

*

私は、記者の本能で医務室の扉を蹴った。

「ここかああ！」

ビンゴ！目的であるレミリアさんはここにいました。ついでに咲夜さんも。でも何故でしょう？レミリアさんは心臓が飛び出そうな顔をしているし、咲夜さんはキョトンとしている。

「あや？どうしたんですかお二方」

「どうしたんですかじゃない！なんなのいったい、いきなり入ってきて」

「……………」

「お嬢様？お嬢様！？しっかりしてくださいお嬢様！！」

驚きのあまり気絶してしまった自分の主人を揺する。

「あややー…」

数分後

「このバカラス！もう少し礼儀のある入り方を識らないのか！？」

あの程度で気絶したくせに、偉そうに…。まあ気にせず聞いてみましょう。

「単刀直入で聞きますがレミリアさん。仮面ライダーを知っていますか？」

「仮面ライダー…？」

聞き返したのは咲夜さんだ。レミリアさんは黙っているばかり。そして、重々しく口を開いた。

「知らないわ。聞いた事もない。なんなのそれは？」

…裏がある。だけど今は聞けない。そんな気が私の躰を突き抜けた。ここで無理維持したら、何か起こってしまう気がする。

「………そうですか。ご協力ありがとうございます。これ文々。ソーセージです。よかったらどうぞ」

「…いただく」

「まったく…あの破天荒ぶりには感心すらするわ」

レミリアがため息混じりに言った。床やベットには、窓ガラスの破片が散乱している。その破片に、エビルダイバーの姿が映る。破片の数が多い為、エビルダイバーが分身しているように見えた。

『だが、賢い。あのまま深追いしていれば』

俺が殺っていた。エビルダイバー達ミラーモンスターはカードデッキを持っていなければ、姿を確認することが出来ない。例えば文が凄まじい速度を持つ鴉天狗だとしても、見えず、存在が確認出来なければ、エビルダイバーが文を殺すことはぞうさも無いことだ。

「勝手に食べるなよ」

『鴉は不味そうだから喰わねえよ』

エビルダイバーよ。鴉は意外と美味しいらしいぞ。文はこれから、このように契約モンスターに狙われながら仮面ライダーを追うことになるのだ。

幻想卿の記者、射命丸 文。13人以上の仮面ライダーを追い、そのレンズは何を写す。

*

ある幻想卿のそれなりに大きい一軒家。造りは紅魔館よりも古風とゆつか、旧日本造りの家だ。その家の居間。そこに数人の男女が座っていた。

「さて……紅魔館の門番、仮面ライダー龍騎はどうだった？」

長い金髪の女性が、カードデッキを弄んでいる少年に言った。見た目は二十歳前後のツンツン頭で、鋭い三白眼だ。少年のカードデッキのシンボルは狼。

「ん？まあ、大丈夫なんじゃね？ヴォルフのクイックベントの速度に反応したしさ」

つまり、この少年が龍騎を攻撃し、ライアを逃がした仮面ライダー、ヴォルフだった。

「そんで、めーちゃんは『コッチ』側になれる人材だ。力もある。素質は十分。文句はないよな」

「ええ、貴方が認めたのなら文句はないわよ」

金髪の女性が、今度は部屋の隅っこでボーとしている少年を見た。

「貴方はどう？」

「

え？あ、うん。

何が？」

長い長い溜めの後に出したのは、なんとまあ授業中の教師に怒られ
そうなお返事だった。

「はあ……まったく。話をちゃんと聞いてなさい。『メルカバ』は
どうしたの？彼ならちゃんと話を聞けるでしょう」

視線を上にし、何かを考えるような顔をした。

「……………えーと、ああそうだ。
あんたの従者？と買い出し……だよな？」

「質問を質問で返すなよ。お前いつともほんとにボーとしてんな」
ヴォルフの少年が呆れてる様子で言った。そこに女性がフォローに
入る。

「まあまあいいじゃない。彼は貴重な存在よ。この幻想郷に存在す
るライダーと違う力を持つライダーの一人。ねえ、仮面ライダー『
鎧王』」

^{ガイオウ}
鎧王。時を走る列車、『ガイレイナー』に搭乗する仮面ライ
ダー。何故『龍騎』以外のライダーが存在するのか。そしてこの集
団は何なのか。

幻想郷に生まれた『龍騎』

幻想郷に訪れた『ヴォルフ』

幻想郷に現れた『鎧王』

13人と、イレギュラーな仮面ライダー達の物語が、廻転する。

『EPISODE 7 / 文々。ソーセージは色々と危険』（誤字、その他修正版）

ヴォルフに続く新オリジナルライダー『鎧王』。名前で分かるとおり、電王関係のライダーです。決してやる気が無いわけではありません。ただボーッとしているだけです。そのボーッとしているのも理由があるのですが……。

『EPISODE・8／ミラーモンスターハント：前編』（前書き）

ネタが浮かばず、予想していたものより早くライダー候補を出しました。

『EPISODE・8 / ミラーモンスターハント：前編』

文が紅魔館に来訪してから1週間がたった。この1週間でたいした事件は起きず、ミラーモンスターの事件も無い。あるとすれば、紅魔館の門番に大きい火球やらぶつとい光線、黒い雷が落ちたくらいか。紅魔館からところ変わって妖怪の山、そして『守矢の神社』。神社としては珍しい、二柱の神が存在する。

「暇だなああ……」

「暇ですね…。雨だからやること無いですもんね」

今日の天気は雨。しとしと天から水分が地面落ちる日である。守矢の神社の居間で二人の女性が呟いた。守矢の神社は神社の機能だけではなく、居住区としての機能がある。

「おゝい早苗えゝ。お前の奇跡で雨止ませろよ」

「雨は恵みと言われているんですよ？雨自体が奇跡。奇跡を奇跡で打ち消せなんて無茶ですよ」

「分かってるよ。分かってんだけどさあ」

赤い上着を着て、胸板の所に丸い鏡を付けている女性 やさか 八坂神奈子 なこ が、白い袖無しの巫女服らしい物を着ていて、青いスカート こちやさなえ を身につけている。髪には蛙と蛭の髪飾りを着けた少女 こちやさなえ 東風谷早苗に話し掛けた。先程記載した二柱の一人が神奈子であり、早苗がその巫女である。

「あーあ、なんか面白いことないかなあ」

「ですねえ」

神奈子がボーと天井を見た。本当にやることがない、そしてやる気の無い眼だ。今度はその眼を台所に向けた。どうやらもう一人いるらしい。

「ねえ、あんた何か面白い芸持ってない？」

すると、台所から片手にお茶を入れた湯呑みを乗せたお盆を持ち、さらに片手に文字を書いたボードを持って現れた。

『いやー、自分は下を伸ばすことくらいしか。あ、お茶です』

「ありがとうございますバイオさん」

お茶を持ってきたのは、カメレオンのような緑色の躰を持ち、両足が逆間接になっているモンスター、仮面ライダーベルデの契約モンスターである『バイオグリーザ』だった。

「あんがと。……………ん？そっぴや諏訪子は？」

「確かに見かけませんね。どこに行っただんでしょう？」

守矢諏訪子^{もつやすわこ} 二柱のもう一人。つまり神である。早苗と神奈子はお茶をすすりながら、バイオグリーザに聞いた。

『さあ、自分も詳しくは……………雨ですから、テンションが上がって外に遊びに行ってるんじゃないですか？』

バイオグリーザが急いでボードの字を消し、書き直した。諏訪子はカエルを模した神でもある、だからだろうとバイオグリーザはボードに付け足した。

「あー、良いわねあいつは。雨の日は暇じゃなくて」

「そうですねー」

二人はまたお茶をすすった。すると、バイオグリーザがまた何かを書き始めた。とゆうか、ミラーモンスターは文字が書ける物なのだろうか？とか考えてはいけない。

『自分、そろそろ時間なんでミラーワールドに帰りますわ。また何か用があつたら鏡に呼び掛けてください』

「はい。お疲れ様です」

「お疲れー」

やり取りを終えたら、バイオグリーザは神奈子の胸にある鏡に飛び込んだ。神奈子はバイオグリーザが入った鏡、詳しくゆうと胸を見る。

「……………やっぱ、ここから入ってくのやめてくんないかな…」

「まあ、手頃な所にあつたんですからしょうがないですよ」

早苗が苦笑混じりに言った。

*

「はぁ…やだなあ、雨……」

雨の中、カップパを着て紅魔館の門を護る美鈴。雨だから居眠りすることも出来ず、来客も来ない。余計に、暇だ。暇すぎる。カップパはびしょびしょ。気分も下がってくる。美鈴の足下には水溜まりが出来ていて、蛙が泳いでいる。

「蛙…かぁ…」

美鈴はしゃがみ、水溜まりの蛙を見た。蛙は喉をならし、美鈴を見返した。

「チルノちゃん、遊びに来ないかな…」

蛙を見ていると、あの氷精を思い出す。紅魔館の近くには湖があった、そこから紅魔館に侵入しようとする妖精がいくつかいる。チルノとはその妖精達の1人である。幾度も紅魔館に侵入しようとするチルノと闘っているうちに仲良くなったのだ。そして、蛙を見て何故チルノを思い出すかとゆくと、チルノは蛙を自分の力で凍らせるの遊びが好きだからである。このところ、そのチルノとも会っていない。

「何してるかな…」

水溜まりから顔を上げ、湖があるであろう方向を見た。

『…主よ……』

ふと、何が聞こえた。声ではあるが、その声の主は見あたらない。

「？」

『ここだ。我が主よ』

声は地面の方から聞こえてきている。自分の近くで、地面と言えば先程の水溜まり。しかし水溜まりにいるのは蛙だけ。まさか…！と美鈴の頭にあることが思い浮かぶ。喋る蛙と言えば。

「まさかド根」

『違う』

美鈴の答えを遮り速否定。

「え違うの？じゃ…じゃあ、まさか…ケロ 星の」

『もっと違う。そもそも我はそっちの蛙ではない』

すると、蛙しかいなかった水溜まりに紅い巨体が映った。

「あ！確か…」

『ドラグレッダーだ。我が主よ』

水溜まりが擬似的な鏡を作り出し、ドラグレッダーの顔が映った。

「そついえば、あの時から会ってなかったね？ドラグレッツ？タ？ー」

『ドラグレッツ？ダ？ーだ。主よ』

「ああ、ごめんごめん。ドラ？クレタ？ー」

『……………主よ』

「あれ？また私間違えた？うーん…じゃあドラちゃんは？どう、ドラちゃん？」

妙案だと言いたげに、顔をららんと輝せて言った。ドラグレッダ
ーは怪訝な顔で返した。

『うむ…国民的な猫型ロボットと間違われそうだが……………主がそれで
いいのなら致し方ない』

ドラグレッダーが妥協した。今日から無双龍の呼び方がドラちゃん
になってしまった。ドラグレッダーに似ている黒龍が聞いたらなん
とゆうだろうか。笑い転げるだろうか、嘆くだろうか。

「そんで？ドラちゃんどうしたの。急に出てきて」

『うむ…それはだな』

グウウウキュルルルル…………

盛大に水溜まりから、腹の虫が暴れる音がした。

『……………とゆうわけだ』

元々紅いドラグレッダーの顔を、さらにほんのり赤くしながら言った。

「……………へ？」

『だから！腹が空いたのだ！我はこの幻想卿に来てからまだ一度も食事を取っていないのだ！』

「……………あ、なるほど。そう言うことね。それはお腹空くね。じゃあなんか持ってこようか？」

『いらぬ』

「は？」

美鈴がドラグレッダーの矛盾に首を傾げた。腹が空いたと言っているのに美鈴の提案を断った。

「お腹空いてるんじゃないけ？」

『そうだが……。我はミラーモンスターから生まれる生命エネルギーか、人しか喰わぬ』

「……………人は駄目だよ」

美鈴が真剣な顔で、ドラグレッダーを見据えた。

『無論心得ている。我が主となる者達は皆、我が人^{われ}を喰らうことを許さなんだ。そのせいか、我も人を喰うことを好まなくなった』

ドラグレッダーは自分の記憶を思い出しながらしみじみと言った。
しかし、現代で起こったライダーバトルの記憶は、タイムベントで
繰り返す度に失われてる筈だが。何故ドラグレッダーに記憶が存在
しているのか。

「てことは…」

『その通りだ主よ。主にはミラーモンスターを狩ってほしいのだ。
我の腹を満たすために』

「うーん…だけどそう簡単には…」

ミラーモンスターが見つかるか、と。美鈴の言葉に、ドラグレッダ
ーは黄眼に獣の光を宿した。

『その場合は、主が我が栄養になってもらおうか……？』

「頑張らせていただきます！」

ドラグレッダーの顔が顔の為、本気に聞こえてしまうのだ。その上
は口を少し開き鋭い歯をちらつかせたもんだから……ああ、恐ろし
い。

「でも、ミラーモンスターってどうやって見つければ……？」

『うむ。主達ライダーは、ミラーモンスターが近づけばガラスをひ
つかいたような音がするのだが……。ここは我が一肌脱ごう。』

「ま…まさか…脱皮！」

『言葉の意味をそのままとるでない。我が直接探してくると言っているのだ』

「そんなことして大丈夫？お腹空いてるのに」

『うむ。腹が空いていて動けないと言っている場合ではなからう。主よしばしまたれい』

そう言つと、ドラグレッダーは巨体を翻し、水溜まりから姿を消した。

*

雨の中。上空で、岩に乗り宙を漂う少女がいた。見た目は頭に桃の飾りが付いた帽子をかぶり、青い長髪を翻している。服は白が目立つ。少女は左手に手鏡、右手に傘を持ち、ドラグレッダーと会話をしていた美鈴を見下ろしていた。

「へえ、あいつもライダーなんだ」

『そのようだな。ドラグレッダーとContract（契約）したとゆうことは、彼女は龍騎か』

鏡の中から声がした。鏡にチラリと姿が映る。頭は銀色の兜のような物を装備しているかのようだ。さらにサイの角が生えている。

「龍騎…ね。名前は凄いいけど強いのかな？」

『俺が最後に見た龍騎はヘタレだったが、かなりSTRONG（強い）だったぜ』

「ふーん…」

『ま、とりあえず俺達は龍騎達をじっくりObservation（観察）しようぜ。行動は焦らず、じっくりと標的を観察してからだ』

少女はサイのミラーモンスターに頷くと、美鈴に気配を悟られないように上空から観察し続けた。

『EPISODE・8／ミラーモンスターハント：前編』（後書き）

ガイの変身者は偽王ドロボウさんのアイデアをいただきました。
ありがとうございます！

『EPISODE・8／ミラーモンスターハント：後編』（前書き）

今回、なんかごちゃごちゃです。あと、最後雑です。ごめんなさい。

『EPISODE・8／ミラーモンスターハント：後編』

ピチャンピチャン。

草木の葉から、雨の雫が滴り落ち地面の水溜まりに溶け込んだ。この水溜まり等が蒸発し、また天に返り地に落ちる。これが何故、世の中で言われる悪循環の一つと言われないのか。そんなことを、となりのト　ロのトト　が持つような葉っぱを傘がわりに持ち雨の中を歩く少女が考えていた。まあ、雨は恵み。？悪？ではなく善循環なのだろう。と、自己解決したのだった。

「ケーロケーロケロケケロケロ」

今度は崖の上の　ニヨの主題歌リズムで鼻歌を歌う。わけのわからない提議、数年前流行った歌など、この少女は何かとテンションが高い。この少女の見た目は、なんとゆうか、蛙っぽい。服装は青と白、着色は普通。容姿も10～14歳くらい、顔が端正な少女と普通だが、頭の帽子が蛙感を醸し出していた。帽子の上端に眼が付いている。説明が難しいが、蛙っぽいのだ。自分にはそれしか言えない。少女の名は、守矢諏訪子。神である。諏訪子が軽くピョンと跳び、手軽な水溜まりパシヤンと飛び降りた。足が水を蹴り、水が撥ねた。靴等が少し濡れたが、諏訪子は気にしない。

「アハハ！」

今の諏訪子はこの程度でも楽しいと感じた。気分の高揚が止まらない。まるで梅雨の季節のケロ　星人のようだ。

キイイイイン！

ふと、四方から金切り音がした。擬似的な鏡である水溜まりが沢山出来ているからだろうか、音源がどれか分らない。

「……………クスッ。ちょうどいいや。この天井知らずのテンションを静めるのにさ。」

諏訪子が、ニヤリと口元を歪めると、スカートのポケットから黄緑色のカードデッキを取り出し、手近な水溜まりに突き付けた。諏訪子の腰にVバックルが装着される。

「変身！」

カードデッキをVバックルにセットした。カードデッキの、カメレオンのようなシンボルが光り輝いた。そして、ライダーの残像が諏訪子の身を包んだ。

「さ〜てと、行きますか！」

諏訪子は、黄緑色の装甲と、カメレオンを模したマスク。左太股に装備されたバイザーを持つ仮面ライダー、ベルデに変身しミラーモンスターがいるであろうミラーワールドに飛び込んだ。

*

話は戻って紅魔館。ドラグレッダーことドラちゃんが自分の栄養源のミラーモンスターを探しに行つて数分後。

ウオオオオオオン！

先程、ドラグレッダーの顔が映っていた水溜まりから、紅龍の咆哮が聞こえた。水溜まりからドラグレッダーが頭を出した。

『見つけてきたぞ。早速向かおう』

「う、うん……お疲れ様……」

『どおした主よ？』

美鈴は、少し息を切らしているドラグレッダーの顔を見つめ続けた。それほど急いでいたのだろう。労いの言葉を送りたいのだが。

「なんかその…疲れてる時に言いにくいんだけどさ……それ止めてくれない？」

『？』

ドラグレッダーは美鈴がゆう、その意味がわからない。美鈴が送る視線の行き先は、水溜まりから出るドラグレッダーの頭と首。

「いやだつてさ。今のドラちゃんの見た目……生首が出てるみたいなんだもん……」

とてもシユール、美鈴が最後に付け足した。確かに生首見えなくも無い。

『今はそれどころではない。急いでくれ主よ』

ドラグレッダーが早くしてくれと言わんばかりに首を振る。

「分かった、分かったから」

美鈴が、少々焦りながらカードデッキを出した。察したようにドラグレッダーが首を引っ込め、美鈴が変身しやすいようにした。カードデッキを掲げ、Vバツクルを召喚した。

「変身」

カードデッキをセットし、二回目になる龍騎へと変身を遂げた。龍騎は右手で握りこぶしを作り、ガッツポーズのようなポーズを取る。

「シャッ!!」

短く、気合いの掛け声を放った。

『!?!主よ、何故それを?』

「え?え〜と……?なんとなく、かな?」

どうやら、只思いつきで出たらしい。しかしドラグレッダーの驚きは尋常ではない。あのポーズは、前の龍騎が闘いの前、必ず取っていた物だ。それを何故美鈴が?ドラグレッダーの驚きに、龍騎は首を傾げた。

「そんなに変だった?」

『いや……。何でもない。気にするな』

「う？うん。じゃあ行こうかドラちゃん」

龍騎が、目的地を聞いてすらないのに走りだそうとする。

『主よ何処に行こうとしているのだ！？モンスターどもの居場所は
まだ教えていないぞ！』

「おっとと、ごめんごめん。それでどこにいるの？」

龍騎が頭甲^{ヘルム}を押さえながら平謝りする。ドラグレッダーがため息を
ついた。

『まったく…しかし、走っていくのでは無駄に時間がかかってしま
う。ふむ……ミラーワールドを経由して行こう』

「どうやって？」

「ふむ。主はミラーワールドに入るのは初めてだったな。とりあえ
ず、この水溜まりに飛び込め」

「水遊びをしろと!？」

『……………主よ、ヘタなボケはいらん』

ドラグレッダーの頭にあの怒りマークが浮き出した。これ以上ふざ
けたら、ドラグレッダーのあの鋭い牙でガブリとやられるかもしれ
ない。いい加減、本気になったほうがいいと判断した龍騎が纏う気
を入れ換えた。

「よし……………おりゃ!」

ドラグレッダーが映っていた水溜まりに、龍騎は身を投げた。

*

薄く、透明とも淡い水色とも言えるガラス、いや鏡だろうか？ここでは鏡としておこう。幾つもの合わせ鏡がつらなう現実世界と、ミラーワールドを繋ぐ次元空間・【ディメンションホール】。そこに、龍騎がいた。

「ここが……ミラーワールド？」

『いや違う。ここは結びの空間であるディメンションホール。ここは通過点にしかすぎぬ』

「あれ……？ドラちゃん何処？」

ディメンションホールには、確かにドラグレッダーの声が響き渡っていた。しかし、肝心のドラグレッダーの姿は無い。姿を映すであろう鏡は腐る程あるとゆうのに。

『ふむ…説明が面倒だから略くぞ。主の目の前にあるライドシューターに乗るのだ』

龍騎は前方にある、ライドシューターなる物を見た。来た当初にも目に入っていたのだが、幻想郷には無い物であったがため、あまり感心が持てなかった。

「乗れって言ったって…どうやって…」

すると、龍騎の意思を感じ取ったのかライドシューターの屋根部分が開き、座席が顕になる。

「わーお……なんとも初心者に優しい設計ツスネ（汗）」

いかにも乗れと言っているような物だが、何せ初めて見るもの。美鈴は学んでいた。興味本位で知らない物を弄るのはほどほどにしなければ後が大変だとゆうことを。カードデッキの件とか、カードデッキの件とか……。だが、いつまでも悩んでいても仕方がない。それに姿が見えないドラグレッダーの気配にだんだん怒気が混ざってきているような。

「よいしょ…と」

座席に腰掛ける。それに呼応するように、Vバックルのサイドにある何かと接続する部分が、ライドシューターと接続された。

「は？」

次に屋根部分が降りる。

「へ？」

そして、特に搭乗者の意思に関係なく発進した。

「ちょ！？」

ドラグレッダーが見つけたであろうミラーモンスターの所へ。

＊

「アベシッ!？」

どうやらライドシューターが目的地に着いたらしく、動きを止め龍騎を放り出した。モロに顔面から行ってしまった。マスクで顔を護つてるといえ、結構痛い。顔、とゆうかマスクを擦りながら立ち上がり、辺りを確認する。

ブルウウウウ!!

イノシシの鳴き声に近い物が聞こえてきた。聞こえてきた方向を見ると、イノシシ型のモンスター・ワイルドボーダーが鼻息を荒げていた。腕には盾のような物を装備している。

「アレが野良か…」

ワイルドボーダーを確認したあと、ドラグレッダーの姿を探す。やはりいないようだ。

「まさか…ここではやっぱり、あのライアって人が使ってたていたようなカードを使わなければ出てこれないかな感じなのか!？」

神掛かり的な洞察力。いや、そんな物が無くても分かるか。とにかく、ワイルドボーダーを倒さなくては。幸い、ワイルドボーダーはまだこちらに気付いていない。

（なんか今回都合の良い設定多いな……）

それはね、小説だからだよ。拳の構え、後ろからワイルドボーダーに殴りかかる。不意打ちのようで後味が悪いが、致し方ない。拳をワイルドボーダーの頭上に振り下ろした。

ガイイイイン…

「いゝいゝいゝ！？」

直後、龍騎の拳から腕へ、そして躰へと痛みと痺れが走った。硬い。見た目でも少し予想出来たが、予想を遥かに越えて硬かった。そんなに硬かったら盾の意味ないじゃん！？と、龍騎は心の内で悪態をついた。拳を擦る龍騎の存在にワイルドボーダーが気付いた。

ブルウウウウウ！

ワイルドボーダーが龍騎の方を向き、身を屈めた。ワイルドボーダーの躰から生えている牙がギリリと光る。

「ヤバッ！」

次の瞬間、屈めていた躰をバネのようにして立ち上がり、その力で龍騎にタツクルを放った。龍騎は両腕をクロスし防御態勢になった。強い衝撃が躰を突き抜けた。

「うゝ！！？」

まるで時速何百キロものスピードで大型車に衝突されたかのような衝突。いや、美鈴は車に引かれたことは無いから。幻想郷だからこ

こ、物の例えだから間違えないように。龍騎の躰が、風に舞う木の葉のように簡単に浮き、吹き飛ばされた。数メートル上空に躰が飛び、一気に落下した。全身を地面に強打する。

「ぐはっ!!」

背中から落ち、数秒呼吸がしにくくなった。呼吸を整え、立ち上がる。

「つう~~~~~……背中痛い……。あんまり近づき過ぎると危ないあの力じゃあ防御は意味ないし……。そうだ!こつゆつ時の為の

」

アドベントカードだ、と。カードデッキからカードを一枚引き抜く。

絵柄はドラグレッダーの頭を模した手甲。ガントレット

《STRIKE VENT》

バイザーにベントイン（装填）すると、電子音が鳴り響き、龍騎の右手にドラグクローが召喚された。

「な……な、な、な、な、生首!!??」

ドラグクローの感想をオーバーに叫んだ。だが、これで手を護りながら思いきり殴れる。少々気味が悪いが、そんなことを気にしていたら無駄な隙が生まれ、また手痛い攻撃が来る。ドラグクローを後ろに引いた状態で、ワイルドボーダーとの距離を一気に詰める。今度は手に痛みが走る心配が無いので、先程より強くドラグクローが装備された腕を突き出した。

メキヤアアア！！

ワイルドボーダーの軀から、火花と確かな手応えを感じる音が出た。びくともしなかったワイルドボーダーが数歩後退り、うめき声を上げた。

「シャアッ！コレなら行ける」

畳み掛けるように、再度攻撃に入る。

「おりゃああああ！！」

今度は気合いを籠め、ドラグクローを大きく振りかぶり、ワイルドボーダーの頭を狙った。すると

ボオオオオオ！！

ドラグクローから燃え盛る炎が放出された。標的に定めていたワイルドボーダーの頭が紅蓮に染まる。

ブルウウウ！！??

突然の出来事、そして顔に走り続ける燃える痛みによって、先程の龍騎と同じように背中から崩れ落ちた。顔の炎を消すために手を激しく動かす。ワイルドボーダーも驚いたが、龍騎はもっと仰天していた。マスクの下にある美鈴の目は、正に丸くなっていた。

「ほ…ほほほ、炎吐いたあああああ！！！！??」

詳しくゆくと、出たのだが。炎を吐き出したあとのドラグクローを

見る。見るとドラグクローの口の部分からは黒煙のような物がブスブスと出ている。

「こ、これ……思った以上に便利かもしれない……！」

龍騎が、新しい玩具を手に入れた子供のようなキラキラとした視線をドラグクローを送った。ワイルドボーダーがゆらりと立ち上がる顔で踊っていた炎は既に鎮火していたが、顔は黒焦げになっていた。目がやられたのか足元がおぼつかない。

「チャンス。そろそろ止め、行こうか！」

龍騎が再び、カードデッキからカードを引き抜いた。絵柄は龍騎のシンボルである。

「えへへ。これ使ってみたかったんだよね」

龍騎がカードをバイザーに入れようとした。

《FINAL VENT》

バイザーの電子音が鳴る。

「……………え？」

だが、龍騎の手にはまだ、ファイナルベントのカードが残っている。つまり、今のファイナルベントは龍騎が発動したわけではない。

ウオオオオオオオン！

聞き慣れた紅龍の咆哮が轟く。ドラグレッダーが召喚された。だが、

発動していない。美鈴はカードを発動させていない。それにドラグレッダーは龍騎をスルーした。では何故。答えは、ドラグレッダーが目指す先にあった。

「……………！！！！……………なん…で…？」

ドラグレッダーは龍騎ではなく、？龍騎？に召喚されていた。詳しくゆくと、ワイルドボーダーの後ろにもう一人龍騎がいた。ややこしくなるであろうから、ここでは『アナザーリュウキ』と呼ぼう。戸惑う龍騎を余所に、アナザーリュウキは独特なポーズを取った。そして、ドラグレッダーと共に宙を舞った。空中で軀をひねりながら蹴りの態勢入る。すると、後ろで控えていたドラグレッダーの口から火球を放ち、アナザーリュウキが炎を纏う一撃必殺のファイナルベント・「ドラゴンライダーキック」を発動した。アナザーリュウキが真つすぐにワイルドボーダーに飛んでゆき、ワイルドボーダーを貫いた。ワイルドボーダーの頑丈な軀を持ってしても、ドラゴンライダーキックに耐えきれなかったらしく、爆死した。ワイルドボーダーの爆発の中から光球、生命エネルギーが現れた。ドラグレッダーが数日ぶりの食事に飛び掛かった。そんなドラグレッダーを見ていたアナザーリュウキは龍騎を見た。

『……………』

「……………」

見れば見るほど似ている。寸分変わらず同じ。故に、アナザーリュウキは龍騎であった。どちらも沈黙を続ける。龍騎は単に、なんてきりだしたらいいか分からないだけだが、アナザーリュウキはまったく分からない。

『迷惑をかけたな。主よ』

生命エネルギーの捕食を終えたドラグレッダーが龍騎に話し掛けた。

「え？あ、あうん……そんなことよりドラちゃん！？あの龍騎は？」

『うむ？何のことだ。龍騎は主だろう』

あんな凄まじい必殺技を決めたのに、ドラグレッダーには分からないらしい。アナザーリュウキ（もう一人の龍騎）が。

「だから……あの……！……あれ？」

龍騎が指を指して教えようと人差し指を立てたが、そこにアナザーリュウキの姿はもう、どこにも無かった。

「あれ……？なんで？確かにいたのに！」

『初のライドシューター、初の契約モンスターの力を使い発動する、最大戦闘技を使ったのだ。疲れているのだろう。腹はふくれた。早く帰ろう。でなければ主がまたあのメイドに怒られてしまう』

「……………うん」

本当に分からないのか？ドラグレッダーが嘘をついている。可能性は無いはない。喉にトゲが刺さる想いをしながら、龍騎はライドシューターに乗り、ミラーワールドを後にしたのだった。

そのライドシューターの後ろ姿を、姿を消した筈のアナザールユウキが、？黒い龍騎士？と共に眺めていた。黒い龍騎士がアナザールユウキに問い掛けた。

「良かったの？何も言わなくて」

「……………」

「まだ早い……………か。この貴方の選択が、悪いことにならないければいいけどね」

「……………」

「大丈夫、か。信頼してるのね。もう一人の自分を……………ま、見た目は私も同じようなものだけど」

「……………」

「例え姿形が違えど、名前も境遇も違えど、運命さえも違う……………だけど……………あの娘も龍騎、貴方も龍騎、私はリュウガだけど……………ね。でもオリジナルは貴方達と一緒に……………ここは、幻想郷は龍騎とリュウガが護る……………！だから、貴方も力を貸してね龍騎？」

アナザールユウキは頷くと、煙のようにフツと消えてしまった。

「うわゝ、龍騎の必殺技ド迫力！」

『だな』

ずっと美鈴を観察していた青髪の少女、比那名居 天子が鏡に映る自分の契約モンスター・メタルガラスに聞いた。因みにこんな見た目だが、天子は天界では一応偉い人だ。そして、この一人と一体にも見えていなかった。もう一人の龍騎が。

『どうだ？あいつらを殺るか？』

「……………ん、きついなあ。……………んあれば？」

鏡を使ってミラーワールドの中を確認していた天子が鏡から目を離し、現実世界の森を見た。ここは紅魔館の近くにある湖、そして森ここには妖精等が住まう。だが、そこには妖精以外の者が森を掛けていた。数人の少女を獲物として見て。

「ハア…ハア…ハア…！」

「大ちゃん頑張って！」

黄緑色の髪で横に髪をまとめ、背中に羽が生えている少女を、青いリボンを付けた青い髪の少女が手を引き、逃げていた。青い臍の怪

物から。黄緑色の少女は大妖精、青い少女は氷精のチルノ。二人は妖精だ。二人は青い躰の怪物、トンボ型モンスター・レイドラゲーンに追われていた。理由は、二人を栄養にするために。

「やっぱり飛んで逃げよう！」

二人の息は既に切れ、いつ足が止まるか分からない。

「ダメだよ…ハア…ンハア…あいつも飛べるし…フウ…あいつの方が速い…！」

トンボのモンスターであるレイドラゲーンは勿論飛行可能だ。

「やっぱり…これしかないのかな…！」

「え？チルノちゃん何かあるの？」

「ごめん…大ちゃん」

巻き込んで、チルノが付け足した。服のポケットから例の如くカードデッキを取り出した。そしてカードを一枚、引き抜く。さらに自分の能力で氷の鏡を造りだし、契約モンスターが描かれたカードを掲げた。

「ボーちゃん！お願い！」

『おおよチルツチ！』

威勢のいい声を出しながら、鏡の中からメタリックオレンジの躰を持つ人型の蟹モンスター・ボルキャンサーが現れ、チルノ達を追っ

ていたレイドラグーンに一撃を入れた。

『ここは俺っちに任せて逃げとけ!』

「お願い……大ちゃん速く!」

「う…うん…?」

『どっせい!』

逃げるチルノ達を背に、ボルキャンサーは自慢のハサミを振るった。

「ねえ、メタルゲラス。あの?妖精は何のライダー?」

どうやら天子はチルノを知っているらしい。仲がいかどうか分からないが。

『ボルキャンサー…てことはシザースか…。カードデッキのスペックは最低^{ランク}RANK。防御力が高いくらいだな。あいつと闘るのか?』

天子が口元を歪めた。

「何も闘うことだけがこのゲーム(ライダーバトル)の攻略法じゃない…」

『OK…』

メタルゲラスも、天子が思い付いた案を了解した。

『EPISODE・8/ミラーモンスターハント：後編』（後書き）

謎のアナザリユウキ、何かを知っているリユウガが登場！果してアナザリユウキはいたい何者？

まあ、この二人は大事な伏線です。

そして次回では、アドベントカードの数がチートなああのライダーが登場！

???「祭りの場所はあ、ここかしら？」

『EPISODE・9／喰らう蛇』(前書き)

今回は、このライダーバトル初の敗者が出ます。

『EPISODE・9 / 喰らう蛇』

レイドラグーンをボルキャンサーに任せたチルノ、及び大妖精は呼吸を整える為、短い休憩をしていた。チルノは腰に手をあて、大妖精は地面にペタンと座り込んでいた。

「ハア…ハア…ハア…ボーちゃん大丈夫かな？」

「ねえ、チルノちゃん……」

「ん、どうしたの？」

チルノが額に浮かぶ汗を拭いながら、聞き返した。

「チルノちゃんが持ってたあの箱って…何？あと、あの妖怪達も…」

大妖精が言う妖怪とは、ボルキャンサー達のことである。大妖精はミラーモンスターを見たことが無いので妖怪だと認識したらしい。

「……………」

「なんで…黙ってるの？」

あの男が言っていた。『大切な人を巻き込みたくなければ、自分がライダーだと言わないことだな』と。ここで彼女に自分が仮面ライダーと言ってしまったら完全に巻き込んでしまう可能性がある。故に、喋らない。喋れないのだ。

「ねえ、チルノ……………」

もう一度、チルノに呼び掛けようとした時、近くの水溜まりが揺れ、ボルキャンサーが現れた。

『終わったぜチルツチ』

「ひゃう!？」

ボルキャンサーの登場に驚いた大妖精がチルノの後ろに隠れた。勿論、大妖精にはボルキャンサーが何を言っているか分からない。

「お疲れ。大丈夫だった？」

『余裕のよつちゃんだったぜ』

「チ…チルノちゃん!？」

大妖精はチルノの後ろで震えている。それを見たボルキャンサーが言った。

『…うーん。俺消えた方がいいかな?』

「大丈夫。大ちゃんには、もう話すから…」

『……………そか。つーかよ。おまえらそのままだと風ひくぞ?』

多分皆さんお忘れだろうが、今日の天気は雨。木々が生い茂る森ではあまり雨がかからないが、それでも多少は濡れる。そしてさんざん走った為全身汗だらけになっており、今はびしょびしょに近い状態だ。

「そだね。まずは移動しようか」

「チルノちゃん……？何で話せるの……？」

「大丈夫、ボーちゃんは良い奴だから。今もアタイ達の心配してくれてるし。」

「良い奴とかよりも、その妖怪は何なの？」

「この子はボーちゃん。アタイの友達だよ」

そうゆうことを聞いているのではないのだが。いくらチルノが良い奴と言っても、怖い物は怖い。先程似たような怪物に追われていたので、余計に恐怖を感じた。チルノが何とか、涙目涙声の大妖精連れ、この場を離れようとした。

「ちょっと待ってくれる？」

森の中から、先程まで上空にいた天子が現れ、チルノ達を呼び止めた。因みに、天子は傘を持っている為、たいして濡れていない。

「チルノちゃんあの人が確認か……」

「お、お前は……！！誰だ！」

おいおい、分かってないならそれっぽい雰囲気だすなよ。分かっている、もしくは忘れてるチルノに大妖精がフオローに入る。

「ほら天界の……」

天子はいろいろな意味で有名なのだ。天子もそこまで言ったらわかるだろうと鼻をふんと鳴らし、エツヘンと威張るポーズをとる。前話で記載したが、天子は？一応？偉い人。

「？一応？を強調すんな！！」

すみません。言い直します。じゃあ、贅沢な生活のせいでわがままな性格になってしまい、それに余計なプラスアルファでドMとゆう変態的な性癖がついてしまい、そしてその破天荒なキャラのせいでフィーバーなあの人にいつも気苦労をかけている不良娘である。

「悪い所を強調すんなよ！」

天子さんドMだからいいじゃない。

「ふざんけじゃないわよ！いい？いくら醜いメ　豚でもいきなりきたら興奮できるわけじゃない！シチュエーションが大事なの！」

話が進まないの、天子は無視しましょう。チルノが額に手をあて少し悩むポーズをとり、分かりやすく頭の上に電球が現れ、閃いた。

「天界のヒナニユイテンコ！！」

「？ヒナ？と？テン？しか合ってねえよ！しかもテンコなら分けるけどヒナニユイは無理矢理でしょう！？てゆうかテンコもよくねえから！」

流れるようなテンコ…いや天子のツツコミが炸裂したが、チルノは

無視しまた少し考える。

「?ヒナ?と?テン?が合ってるか……………はっ!ヒナテンって良
いかも!」

「良くないから!……………たくつ、話が進まない」

天子が帽子の上から頭をかき、イライラを発散させようとした。一
通り落ち着くと、冷静を装い自分の目的を話始めた。

「貴方…ライダーでしょう?隠しても無駄よ。その蟹のモンスター
が何よりの証拠」

天子がボルキャンサーを指差した。

「てことはヒナテンも…………」

「ええそうよ。私もライダー。因みに、ヒナテンじゃなくてテンコ
よ。あつ間違えた、天子よ」

ポケットからカードデッキを取り出し、チルノ達に見せ付けるよう
に突き出した。

「あれってチルノちゃんと同じ…………」

大妖精がチルノが持っていたカードデッキを思い出した。細部が違
うが同じ物の筈。チルノのは蟹のようなシンボルだったが、天子の
はサイのようだ。チルノがキツと天子を睨む。天子がわざとらしく
怯えたふりをした。

「怖い怖い。そんなに睨まないでよ。闘いに来たんじゃないんだから。私とこのゲーム（ライダーバトル）をもっと面白くしましょう？」

「嫌だ」

チルノが即答で返した。

「えー、なんでよ」

「よくわかんないけど、なんか嫌だ。アタイにも叶たい願はあるし。それになんか大変なことになりそうだし」

どうやら、この？は自分の考えをねじ曲げないタイプだ。そう判断した天子は両手を上げた。

「まったく、話もちゃんと聞かないで……。無理っぽいから、あんたを殺るわ」

「最初っからそうすればいいじゃない！おバカさんね」

最後のチルノの皮肉を皮切りに、二人は行動に出た。天子は近くの水溜まりに、チルノはまた氷の鏡を造りだしカードデッキを掲げた。銀色のVバックルが現れ、二人の腰に装着される。

「変身！」

カードデッキをセットし、シンボルが光り輝く。チルノはメタリックオレンジの装甲を持ち、蟹を模したマスクを付け、二つの刃がハサミのようになっていたバイザーを付けた、仮面ライダーシザース

に変身した。天子は、重騎士を思わせる銀の装甲、マスクにはサイの角が生え、右肩のアーマーに赤い角が生えており前部にカード装填口があるバイザーのライダー、ガイに変身した。

「大ちゃん、隠れてて」

「う……うん」

シザースが大妖精に近くに避難するように指示をだしたあと、バイザーのハサミをガイに向けた。

「ハッ！ヒーロー気取りかしら？」

そして、二人の拳が激しくぶつかり合った。

*

《ADVENT》

ベルデがアドベントのカードを発動させた。カードの効果で召喚されたバイオグリーザがベルデと対峙していたレイヨウ型のモンスター、ギガゼールをはがいじめにした。

『諏訪子さん！』

「オツケイ！」

身動きが取れないギガゼールに、アドベントを発動する前に装備していたヨーヨー型の武器であるバイオウィンダーを勢いよく手から放った。バイオウィンダーが空気を裂く音を従えて、ギガゼールの頭を一直線に飛んでいった。そして、バイオウィンダーがギガゼールの頭を捉え、破壊した。頭部が無くなったギガゼールの軀を、バイオウィンダーがバネの代わりになる逆間接の足で上空めがけて蹴った。宙を数秒間舞ったギガゼールは、数回痙攣したあと爆散した。ギガゼールの軀があつた場所には光る生命エネルギーが浮いていた。

「ご飯だよ、バイオ」

バイオウィンダーが、最大600メートルも伸びる舌で空中にある生命エネルギーを捕らえ、口に運んだ。数回口を動かすと、喉からゴクンとゆう音がした。

『ごちそうさまです。すいません諏訪子さん。自分の餌を集めるようなことをさせてしまつて』

バイオウィンダーが申し訳なさそうに頭を下げた。

「いいいよいよ。別に苦じゃないしさ。今のだってテンションを分散させる為にやったことだし」

もう一度、バイオウィンダーが深々とお辞儀した。謙虚だ、このモンスターは。諏訪子が正直に思った。人？が見かけによらないとは正にこのこと。自分の契約モンスターが彼でよかった。中には凶暴で契約したライダーを狙う者さえいるとゆう。

「じゃあそろそろ帰ろうか？」

『はい』

ベルデが来た方向へ振り返り、指でちょいちょいとバイオグリーザに『こつちにこい』と指示した。

バイオグリーザが足を動かそうとした。

ズドツ！！

ベルデの耳に、バイオグリーザがいたところから何かを貫く音が聞こえてきた。

「……………え？」

思わず、音の正体を知りたいという好奇心に突き動かされ、振り向いた。振り向いてしまった。

『あ…ぐあ…あ…かつあ……………あぐ……………』

あった物は、痛みに悶えるバイオグリーザのあえぎ声と、バイオグリーザの腹から？生えている？黄金の尖った何かだった。ベルデの思考が止まる。だが、ベルデの思考に入った数秒でアクションがあった。

『す…諏訪』

何かを言おうとしたバイオグリーザの言葉が、頭めがけて動いた黄金の物が、バイオグリーザの肉を裂く音で掻き消した。腹から頭を

垂直に両断した躰は、ぱっくりと2つに割れている。その躰を支えるのは黄金の獲物から逃れた腰の部分だけである。今度は数秒の沈黙、次に起こったのは虚しい爆発だった。

「ば…バイ…オ…？」

口がわななき、声が震えた。先程まで自分と一緒に闘ってくれていた謙虚なカメレオンは、ただの肉の塊になったあと、爆発で消失してしまった。爆発が晴れ、姿を表したのは紫蛇の仮面ライダーだった。手には、戦友を貫き、引き裂いた黄金の突撃剣・ベノサーベルが握られている。紫蛇のライダー・【王蛇】が首をこきこきと首をならした。

「ああ……。ふん…モンスターを最初に殺れたのはラッキーね」

せせら笑うように、王蛇が言った。バイオグリーザとゆう契約モンスター失ったベルデの躰に変化が起こった。黄緑色だった装甲は色を失い、カメレオンを模したマスクは素朴な物に変わる。カードデツキにあったシンボルが消え去っている。契約前の姿であるブランク体に成り下がっていた。だが、ブランクベルデ（以下、Bベルデ）は自分の躰の異変に気付かない。とうとい友、最早守矢の神社の一員であるバイオグリーザの喪失に放心状態出会った。だが、すぐにその喪失は怒りに変わった。

「よくも……よくもおおおおおおおお！！！！」

Bベルデが吠え、バイオグリーザの仇にがむしやらに突撃した。

「あはははははははははは！！！！」

王蛇はその必死さに、どうやらツボが突かれたのか大笑した。Bベルデは王蛇に掴み掛かるうとしたが、あっさり避けられ、から空きになった背中にベノサーベルで一撃入れられた。

「あぐっ!？」

突撃の勢い、そして斬り付けられた衝撃でうつ伏せに倒れた。起き上がるうとした時、背中に王蛇がドンツと乗った。馬乗りのような状態だ。

「うぐ、クソ！降りろ！」

じたばたし、背中に乗る王蛇を手で振りあらおうとするが、今後は両腕を、王蛇の両足で押さえ付けられた。

「クソクソクソクソクソクソ!!!降りろ!!!」

口汚い侮蔑の言葉を地面に吐き出した。今のBベルデは錯乱状態に近い。それを王蛇はさも愉快といった感じで笑った。

「そんなに悔しい？自分のモンスターが、何も出来ずに殺されたことが」

「あんたも！信頼してくれているモンスターが、まるで虫を踏み潰すように殺されたら悔しいでしょう!!」

Bベルデが必死にもがきながら反論した。王蛇が平然と、そして冷淡に返した。

「悔しいも何も…私とその契約モンスターが、そんな間抜けなミス

《ADVENT》

シヤアアアアアア！！

爬虫類独特な咆哮を上げながら、頭部両脇のベノハーシュと呼ばれる刃を武器を持つ紫色のコブラ型モンスター・ベノスネーカーが召喚された。すると、王蛇が両腕の痛みに悶えるBベルデのマスクを掴み、ベノスネーカーの方に顔を向けた。Bベルデは反抗しようとするが、能力が著しく下がっているブランク体では反抗の意味がない。ベノスネーカーが軀を大きく仰け反らせると、軀をもとに戻し口から毒液を吐き出し、Bベルデのマスクに吹き掛けた。マスクから煙とジユツとゆう音がした。

「うああつぐがあああああ！！！！」

マスクを通り越し、毒が浸食する痛みがダイレクトに諏訪子の顔にくる。王蛇の口から笑い声が漏れる。王蛇がBベルデの軀から降りると、Bベルデは痛みから逃れたいが為に地面を転げ回る。次に王蛇がとった行動は、Bベルデの脇腹を蹴った。

「がうつ！？」

その脚力によってBベルデの軀は宙を飛び、近くの木に軀をぶつけた。痛みに短くうめき声を上げたが、ぶつかった木を使いなんとか立ち上がる。ふらふらとして今にも倒れそうだ。そして視界が霞む。毒によって視力が奪われる。

「苦しいでしょう？今楽にしてあげる」

再度カードを取り出し、ベントインした。

《FINAL VENT》

ベノスネーカーが王蛇の後ろに移動する。王蛇が手を交差させ、独特なポーズを取り、両手を広げた状態でBベルデめがけ走った。

「ハッハッハアー!!」

一定の距離を詰めると、王蛇はムーンサルトのようなジャンプをし、脚をベノスネーカーに向けた。ベノスネーカーの口から強力な毒液が吐き出され、毒液の勢いを乗せて放つ必殺の連続蹴り【ベノクラッシュ】を虫の息であるBベルデに発動した。Bベルデは悲鳴を上げる暇すら与えられず、その毒脚に幾度も蹴られた。最後の蹴り上げでBベルデが吹き飛んだ。まるでゴミのように地面を転がった。

「あ…うあ…」

躰を投げたし、Bベルデはぴくりとも動かない。そして、過大なダメージを受けたBベルデのカードデッキに異変が走った。ヒビが入り、ボロボロと崩れ落ちた。Bベルデの躰が、ガラスが割れるように弾けた。屈強な戦士の姿は消え失せ、両腕が折れて少女が横たわっていた。ミラーワールドにも雨は降る。諏訪子の顔が雨に濡れる。顔は、ベノスネーカーの毒液によってただれている。右側が特に酷い。

「これで、一人減ったわね」

すると、仕事を終えたベノスネーカーが叫んだ。

『仮面ライダーベルデの華麗なフィナーレです！ヒッハアー！』

「ふふ、ぞうさもなかったわね」

『ヒッハアー！！やっぱお前は最高だぜ幽香！』

雨が降るミラーワールド内に、ベノスネーカーの笑い声が轟いた。そして、倒れている諏訪子をそのままにして、王蛇はベノスネーカーとミラーワールドを去った。

王蛇が去ったすぐあと、その場に金色の羽が舞落ちる。羽の中には一人のライダーが。

『ライダーバトル……仮面ライダーベルデ敗退確認……』

*

ザーザーと雨が止まずに降り続けるミラーワールド。放置された諏訪子の躰は粒子化が起こっていた。このまま放置され続けたら、粒

子化が進み、消滅してしまうだろう。

ピシャン…

その諏訪子に、2つの足音が近づく。一人は水色のカードデッキをVバックルにセットされていて、鯨のようなライダーであり、もう一人はライオンを模したライダーのようで、マスクには『ラトラータ』のようなたてがみのような物がついている。そのライダーのベルトは、王蛇やベルデの物とは違い、赤い装飾がされ、スロットが一つあり、そこには『R』とかいてあるUSBメモリのような物がセットされていた。

「……………ごめんなさい……………」

ライオンのライダーが、謝罪の言葉を呟いた

「間に合わなくて…」

最後に、哀しみを混じらせて付け足した。

『EPISODE・9／喰らう蛇』（後書き）

はい、出ました王蛇！ちよつと幽香さんをドSにしすぎましたかね？すいません原作をあまり知らないのです。さて次回は

諏訪子「ちよつとおおおおお！？もしかして私の出番これだけ？2話しか出てないんだけど！？」

おやおや、王蛇の強さを見せる為にかませ犬役になつてもらつたライダーバトルの負け犬の諏訪子さんじゃないですか。

諏訪子「もういろいろと酷いし（泣）」

一応、まだ出番はありますよ。ちよつとだけ。まあ当分はありませんけど。

諏訪子「意味無いじゃん！！」

今回はシザース（チルノ）VSガイ（天子）！！さてどっちが勝つか！？次回もよろしく願いします！

諏訪子「oooooooooooo！！」

『EPISODE・10/サイカニ合戦』(前書き)

今のところ、毎話1人以上新ライダー投入。

『EPISODE・10/サイカ二合戦』

前回までの3つの出来事。

一つ、仮面ライダーシザース（チルノ）と仮面ライダーガイ（天子）が接触。ライダーバトルに突入。

二つ、仮面ライダーベルデが、仮面ライダー王蛇の不意打ちによりモンスターを殺害され、カードデッキを破壊、重傷をおった。

そして三つ、謎のライオンのライダーと、鯨のライダーが諏訪子の前に現れる。果たして、謝罪の意味は？

本編、始まります。

仮面ライダーベルデこと諏訪子が、王蛇に敗けライダーバトルの参加資格ともいえるカードデッキを破壊される数分前。

*

シザースが右拳を力の限りガイに突き出した。それをガイは掌打で受け流した。

「力任せじゃ、私には勝てないわよ」

カ一杯拳を出したシザースより、掌打で動きが少ないガイの方が早く次の行動に出た。アーマーに赤い角が生えている右肩をシザースに向け突進する。ガイの見た目、そしてあのアーマーだ。まともに入れば仮面ライダーの強固な装甲でも風穴があくかもしれない。動物的本能が働き、無意識に左手が動きバイザーで防御する。本来盾の機能を持たないバイザーがガイの角とぶつかり、『ガイン!』と火花が散った。

「ヒナテンも力任せじゃない!」

ガイが右肩をシザースのバイザーに当てた状態で、右腕をふりこのように動かしシザースの軀を弾いた。2人の軀が離れた。

「私はほら、この見た目でしょう?だから私はいーの」

何とも身勝手な言い分である。

「あ、なるほど」

シザースも納得してしまった。それでいいのかシザースよ。さっきのお返しと言わんばかりに、ガイめがけバイザーのハサミで横一門に降った。

「おっとと」

ガイはバックステップで回避する。ライダーの中でも、重装甲の筈だがガイの動きはとても軽快である。そのステップは踊り回る龍小僧にも劣らない。シザースの腕は動きを止めずそのまま軀の後ろに回る。ガイは首を傾げた。例えばチルノが頭が悪くても、戦闘力は他

の妖精を圧倒する力を持っている。つまりバトルセンスは高いのだ。そんな人物が自分の力を制御できないような初歩的なミスをするだろうか？そのガイの疑問はすぐに解消された。

「おりゃ！」

バイザーの回転によって生まれた遠心力を味方につけた回し蹴りを、ガイの胸部に直撃させた。

「うおっ！？」

ガイは回し蹴りが当たった胸を押さえ、数歩あとずさる。しかしガイの分厚い装甲だ。たいしたダメージではない。胸部に付いた砂ほこりを払う。

「うわー、びつくりした。意外と頭がいいのね」

「アタイは幻想郷最強だもん。トーゼンよ」

ふふんと鼻を鳴らし、得意気に言った。この2人はどちらも防御力が高い。素手でやりあっても埒があかないだろう。そしてシザースのバイザーによる攻撃は、軽々と避けられる。もっと攻撃範囲が広く、一撃の威力が高い獲物を使わなくてわ。シザースは自分のバイザー・甲召鉄シザースバイザーの接合部を開いた。そしてカードデッキからカードを一枚引き抜く。絵柄は蟹の大鉄。

《STRIKE VENT》

カードを装填し、接合部を閉める。電子音がなると、ボルキャンサーの鉄を模したストライクベント・シザースピンチが召喚される？

筈だった？。シザースがカードを使った直後、ガイもカードを手に取り肩のバイザー・突召機鎧メタルバイザーに投げ入れた。

《CONFINE VENT》

「……………あれ？」

シザースピンチが装備される筈の右手に変化が起きない。変化が起きない自分の右手を見つめながら、虚しく開いたり閉じたりするが、変化は起きない。

「あれあれあれ？」

振れば装備されるのかと思ったのか、右手を上下にブンブンと振った。そんなシザースを見て、ガイは我慢出来ずに大笑した。

「あははははは！何やってんのよあんだ？」

「だってカードが…」

壊れたのかな、と言いながら、カードを装填した筈の己の左腕に装備された鋏を軽くこんこんと叩く。

「コンファインメント……。私が使ったこのカードの能力は、相手が使ったカードの効果を一度だけ無効にする。だから貴方にストライクイベントの効果が現われないの。理解した？」

ガイは説明を、理解力があまり無い子供に教えるように言った。ガイのその小馬鹿にしたような言い方に、シザースはカチンと来た。

「何それ！？そんな酷い効果のカードがあつてたまるかぁ！」

「あるからストライクベントが発動しないんでしょ？」

やれやれ…、と手を振り、ガイがまたカードを手取る。今度のカードは巨大な銀色の手甲に鋭い角が生えている絵柄が描かれている。ガントレットカードをバイザーに投げ入れた。

《STRIKE VENT》

ガイの右手に、シザースが発動し損ねたストライクベントが召喚された。ストライクベント・メタルホーンをシザースに向ける。

「あー！ヒナテンだけずるい！」

シザースがブーブーとガイにブーイングを上げる。

「だからヒナテンじゃないって」

今まで名前をちゃんと呼ばなかった仕返しのように、シザースにメタルホーンを左右に振りながら見せ付ける。シザースがだっ子のようにじたんだを踏んだ。

「はっ！」

そんなシザースを見て満足したのか、攻撃行動にでる。腰を屈める前傾姿勢になり、短く息を吐き出し脚に力を籠める。ガイが地を蹴り、シザースめがけメタルホーンを突き出す。先程までの軽快な動

きではなく、力でこり押しする戦闘方に変えている。メタルホーンの切っ先が空気の層を裂きながらシザースを貫かんと迫る。

「わっ!?!」

メタルホーンの一撃を、シザースは右手で角部分で掴み止めようとする。しかし勢いが止めきれずマスクめがけ角が襲い掛かる。

「ぎぎぎ……!」

今度は左手をメタルホーンの手甲部分にバンツと叩きつける。左手の五本指全てに力を加えた。両手に籠めれるだけ力を籠めると、メタルホーンの角がマスクギリギリで止まった。シザースが安堵の息を吐き出した。

「止まった……!」

「あら、お疲れ様」

ガイがメタルホーンが装備されている右腕に左手を添え、両手を使い力一杯メタルホーンを振り上げた。勿論、メタルホーンを一生懸命握っていたシザースも上空に身を投げだされた。

「うおう!?!」

「やっ!」

振り上げたメタルホーンを、今度は地面に向かって振り下げた。当たり前だが、健気にメタルホーンを掴み続けていたシザースは地面

に叩きつけられたのだった。土煙が少し立つ。地面にうつ伏せに横たわるシザースだったが、両手を使った宙返りをしてガイと距離をとる。

「へえー、ホントに防御力高いんだ。すぐにリカバリした」

「当たり前よ。アタイは最強だもん」

腹部がヒリヒリとする痛みには耐えながら、無い頭で考える。相手のメタルホーンによる攻撃範囲は広い。だが自分にはそれに対応できるストライクベントはもう無い。カードは一回の戦闘で、一回しか使えない。一枚一枚が大切に使わなくてはいけないのだが、ガイのカードによって既に反撃できるカードは失われている。アドベントは……いや、まだ早い。無論ファイナルベントもだ。ならば残ったカードでできる事は……。

「コレだ！」

《GURAD VENT》

防御に徹する為、シザース最大の防御を誇るガードベント・シエルディフェンスを左手に召喚した。コレでヒットアンドウェイを狙えば、確実にダメージを蓄積できる筈だった。ガイのマスクの下で、天子が意地悪笑う。カードデッキから本日三枚目のカードを手に取りバイザーに投げ入れる。

《CONFINE VENT》

ガイのバイザーから電子音が鳴ると、シザースの左手に装備されているシエルディフェンスが音を立て、ガラスを割るように碎け散つ

た。

「によ!?!」

シザースがすつとんきような声を上げた。ガイはコンファインメントとゆう、なんともはた迷惑な効果を持つカードを二枚所有しているのだ。それを知らずにシザースは、また安易にカードを使ってしまった為、残念な結果になった。シザースが純粹に怒りを表す為に、左手を右腕の二の腕に置き、右手の中指を立てた。

「二枚持つてるとか聞いてないよ!」

「だって言ってないもん。自分の手の内を明かすわけないでしょう? おバカさんね」

「アタイのセリフ取んな!」

最早シザースに、ガイがゆう手の内は無い。いや、あるにはあるのだが使っていいのか。考えても埒があかないと、がむしゃらに突っ込む。バイザーを縦一閃に振り下ろした。ガイがメタルホーンで受けとめる。

*

近くの茂みで2人の闘いを見ている者がいた。大妖精だ。シザースに離れていると言われ、この茂みに落ち着いた。

「何のなの……コレ……」

自分達が今までしていた弾幕ごっことは別次元の闘い。それは、大妖精に大きな衝撃だった。衝撃は疑問に変換される。この幻想郷に、そして友人に何が起こっているのか。知りたい。知性を持つ生物が必ず持つ精神的三大欲求、それは、知識欲、探求心、そして好奇心である。読者の皆様方も経験したことが多分あるだろう。知識を没するあまり、知らなくていい傷心痕^{トラウマ}をおったことや、求め過ぎた結果が全てを失うこと、好奇心によってとても残酷な場面に直面したことが。ここにはオーバーに記載したが、近い物は必ず経験する。大妖精は狭間で彷徨っていた。精神的欲求を満たすか、可愛い己を護かで。縊るように蟹の騎士を見る。

「……………あれ？もしかしてチルノちゃん押されてる…………？」

先程から見ていたが、決定的な一撃を入れる為の武器や、強力な盾を召喚することごとく妨害されている。大妖精はライダーの知識は無かったが、それだけは分かった。シザースはがむしゃらに左手の鍔を振り回し、ガイはそれをひらひらとかわし、防御する。明らかにシザースが苦戦している。

『大丈夫だ』

「ひう！？」

ボルキャンサーがぬうつと大妖精の後ろから現れた。どうやら大妖精が隠れる時に一緒に来たらしい。ボルキャンサーが口を動かす。

『俺たち達ミラーモンスターは、アドベントを使用されない限り手

を出せない。だが、あいつは…他のライダーが知らない？裏技？を知っている。それにあんな暇潰し代わりにライダーバトルに参加しているような奴に、チルツチは敗けない……！！」

ボルキャンサーが友を心配する優しい妖精を安心させるように言った。

「あわわわわ……」

だが、ボルキャンサーを見る大妖精は涙目で震えているばかり。ボルキャンサーは重要なことを思い出す。

『あつ、忘れてた。俺っちの言葉チルツチにしか通じないんだっ』

詳しくゆうと話しているのではなく、脳に直接言葉を送っているのだが。ボルキャンサーが鉄の両手を、器用に腕組みの状態にし、『面倒だねえ』とため息をついた。大妖精は本気で泣き出しそうになっていた。

*

「はああっ！」

ガイがメタルホーンで斜めに斬り込んだ。大振りの為見切りやすくなっている攻撃をシザースが回避する。そのままガイの背中に回りこんで唯一の武器であるバイザーで斬り付けようとするが、ガイの軽快な動きで避けられる。やはりシザースに足りないのは決定的攻撃範囲か。しかし、いくら悔やんでも無いものは無いのだ。

（どうしようかな……もう？アレ？を使うか…？）

ガイの猛撃を回避しながら思考を強める。隠し札を使うべきか悩んでいる時に、ボルキャンサーの言葉が浮かぶ。

『？それ？が使えることを知っているのは多分、チルツチだけだ。けどあまり乱用するな。コレが他のライダーが知れば、闘いはより高次元のものになり、激化する筈だ。だからあまり使んな……』
と言いたいが、使わなければならない場面も来るだろう。その時は加減して、目立たないように使った。ま、無理だろうけどな。なんせ変身中は加減が難しいからな』

確かに難しい。シザースが記憶を遡る。初めて変身状態で使った時は大変なことになった。しみじみウンウンと頷いていると、マスクをメタルホーンが掠めた。

「わっ！？」

「ハッ！戦闘中に考え事なんて余裕じゃないの？」

決して余裕では無いのだが。ファイナルベント、アドベントは使えない。コンファインベントがまだあるとゆう圧迫が使えなくしている。ならば、使わざるしかないだろう。シザースだけが隠し持つ切り札を。^{ジョーカー}シザースが後方へ跳躍し、距離を取る。何事といった様子でガイがメタルホーンの構えを解いた。

「どうしたの？今まで好戦的だったのに。逃げ腰になっちゃって」

「違うよ。今からやることは？加減が出来ない？から。だから離れ

たの」

「？」

意味が理解出来ない。シザースが確実に持つカードはファイナルベントとアドベント。アドベントは距離を取る必要は無いし、ファイナルベントはここまで離れる必要はない。もしや自分が知らないカードを隠し持っている？ならば時間をくれてやる必要はない。ガイがメタルホーンを構え直し、切っ先に覇気を灯らせる。そして右腕に左手を添えようと指を動かした時、違和感を感じた。

パキッ……

天子の柔らかい手を包んでいるスーツが少し硬かった。指が少し動きにくい、些細な違和感だ。そのことでガイが左手をひらげ、手の平を見る。白い、破片のような物がちらほらとある。これは硬いとゆうよりも……。

ベギンッ！！

瞬間、違和感は確信に変わった。手に付いていた白い破片は霜に姿を変え、ガイの首から下を氷山にした。

「…なに……コレ……!？」

「ああ、やっぱり加減が難しいわね。脚と肩だけ凍らせるつもりだったのに、ほとんど凍っちゃった」

ガイは氷山からの脱出を試みるが、びくともしない。首から下がほとんど凍っている為、踏ん張りがきかず力が入らない。

「コレは…カードの効果じゃないわね？」

そもそもカードを使う素振りは無かった。シザースが応える。

「そ！今ヒナテンが凍ってるのはアタイの『冷気を操る程度の能力』のせい。このライダーバトルの裏技だよ」

シザースが初めて得意気に説明した。シザースは言葉を続ける。

「コレでヒナテンはカードも使えないし、まともに動けない。アタイの勝ちね」

人差し指を立て、ガイを力強く指差し勝利宣言を高らかに言い放った。天子がマスクの下で奥歯を強く噛みしめ、苦々しい表情を作る。シザースは隠れている大妖精に向かって手を振り、呼び出した。大妖精がおろおろしながらもシザースの背中に隠れ、ガイを怯えながら見る。

「この勝負はアタイの勝ちだけど、カードデッキは壊さないよ。アタイにはそれよりも、大切なことがあるの」

いこ、大ちゃんと付け足し、ガイに背を向けた。だが、ガイも馬鹿ではない。ライダーの力と能力の併用。この手を使わない天子ではなかった。天子の表情が苦々しい物から、悪知恵の働く者の表情に変えていた。

天子がマスクの下で笑った瞬間、地面が大きく揺れた。

「おおっ！？」

「きゃあああああ！」

立ってられない程の強い揺れ。木々が圧し折れる音があちこちからする。すると地面がメキメキとゆう音がした。音が強くなる一方でアクションが起こった。地面が大口を開けるようにぱっくりと割れる。その裂け目がシザースの足元に伸びる。

「うわっ!？」

能力は使えるが、飛行することは出来ない。シザースはただ堕ちることしかできなかった。躰が暗闇に飲み込まれていく感覚に襲われる最中、堕ちるだけだった躰がグンととまる。思わず頭上を見た。地面の裂け目から難を逃れた大妖精が、シザースの右腕を掴み堕ちないように踏張っている。

「んん…！」

幸い揺れは納まっている。大妖精は必死に引き上げようとするが、変身しているチルノは格段にウエイトが上がっている。決して力があるとは言えない大妖精が顔を真っ赤にしながら踏張っている。このまま力を入れ続けても、無駄な努力だろう。

「大ちゃん……！」

「あはは！まだまだ行くわよ！」

天子が再度自分の能力である『大地を操る程度の能力』を使い、大地震を起こそうとする。今度強い揺れが起きたら、裂け目が広がりシザースだけではなく大妖精も堕ちてしまう筈だ。

「最大のマグニチュードを刻めえ!!」

凍り付けのガイが、形勢逆転に叫んだ。大妖精が思わず眼を瞑る。

「それならミラーワールドで、モンスター相手に使えよ」

高ぶるガイの目の前に、黒いライダーが現れた。

「……………あ？」

「ライダーの時に能力を使うと上手くコントロールができないんだ。ライダーの力がプラスになって強くなりすぎる。幻想郷を壊す気が？」

黒い、コオロギのようなライダーが淡々と言った。黒いと言っても、所々の模様が赤であり、複眼の縁取りも赤だ。困惑するガイを余所に、ライダーがガイめがけ蹴りを放つ。

「きゃ!？」

氷が砕け、ガイの躰が解放される。蹴りの威力が強かったのか衝撃で尻餅をつく。強くぶつけた尻を擦りながらガイが言った。

「いたた……………あんた誰よ!いきなり乱入してきて、いきなり蹴りを入れてきて!」

ガイが攻めるように言い放った。

「私は……………仮面ライダー?NEW?オルタナティブ。勝負が決して

いるのにあきらめの悪い奴がいてな。そいつを止めに来た」

「じゃあ何？あんた、私と闘いにきたの？」

「止めに来ただけで、闘いに来たわけじゃないのよ」

「ハッ！止めたければ闘いなさい！」

ガイが右手を突き出し、地震を起こす。NEWオルタナティブの躰が左右に揺れる。

「おつとと」

NEWオルタナティブは余裕だが、シザースを支える大妖精には大変な事態だった。揺れで力が抜け、自分も支えていた力も飛散してしまい、ガクンと大妖精の躰が前のめりになる。

「大ちゃん！」

シザースが叫ぶ。このままでは大妖精が堕ちてしまう。だが、シザースの予測は的中しなかった。堕ち掛けた大妖精の腹に黒い腕が巻かれ支える。

「え…？」

大妖精が驚きの声を短く上げた。今度は大妖精が両手で持つシザースの右手に大妖精を支えている手と同じ色の腕が伸び、シザースの躰を一気に引き上げた。脚が地面に着いたシザースは座り込む。

「あ…あんたは？」

見た目はガイを相手しているNEWオルタナティブとほとんど同じだが、模様と複眼の縁取りが青とゆう違いがあった。

「私はNEWオルタナティブ。彼女と同じだ」

そうゆくと、赤いNEWオルタナティブ（以下RNEWオルタナティブ）を指差した。青いNEWオルタナティブ（BNEWオルタナティブ）は息を切らしている大妖精の方を向くと、頭に手を置き優しく撫でる。

「よく頑張ったな。お前の働きで友の命が救われたんだ」

「は…はい」

「ふ…増えた！？あんたらゴキブリのライダー！？」

「コオロギだよ」

BNEWオルタナティブを見たガイがすつとんきような声を出した。それをしれつと返す。

「まあ……いいわ。貴方が私の相手をしてくれるんでしょう？ならさつさと闘いましょう」

「はあ……。しょうがない。やってもいいけど、一撃だぞ」

「おい！」

BNEWオルタナティブがRNEWオルタナティブに言った。RNEWオルタナティブは振り返らず手を振る。

「大丈夫。加減するよ」

カードデッキから、シンボルが描かれているカードを引き抜き、ガイに見せ付ける。それを挑発と受け取ったガイもカードを手取る。

「上等よ」

RNEWオルタナティブが右腕に装備されているバイザー・スラッシュバイザーにカードをカードリーダーの要領で、カードのコード部分を通す。

《FINAL VENT》

バイザーの音声は女性であり、カードは読み込みを終えると蒼い炎で消えた。ガイもバイザーをカードを投げ入れる。

《FINAL VENT》

ガイの背後の地面の一部が鏡のようになり、契約モンスターである二足歩行で銀装甲を持つサイ型モンスター・メタルガラスが召喚される。RNEWオルタナティブの隣にも、どこから現れたコオロギ型モンスター・サイコログが立っている。サイコログがガイめがけ駆ける。するとサイコログが変形し、バイクのような形態になったサイコロダーに姿を変える。RNEWオルタナティブが跳び、サイコロダーに搭乗すると、ホイール部分から炎が噴き出

す。たちまちタイヤ全体が炎に包まれ、走行する道に火の筋を作る。ガイもメタルホーンが装備されている状態でメタルゲラスの肩に乗り、メタルホーンを突き付けた状態で高速突進する。メタルホーンの切っ先がシザースを狙った時よりも、格段に強く空気を切り裂く。RNEWオルタナティブはサイコロダーに回転を掛けた。RNEWオルタナティブとサイコロダーが炎に包まれたコマのように高速回転をした状態でガイに突撃する。

「でやあああああああああ！！！！！」

「はあああああああああ！！！！！」

双方のファイナルベント、RNEWオルタナティブの『ボルケーノデットエンド』と、ガイの『ヘビープレッシャー』がぶつかり合う。強力な2つの技の衝撃で、爆音と砂嵐が舞狂う。シザースが大妖精を庇うように覆い被さった。砂嵐が止み、視界が晴れる。その場で立っていたのは、RNEWオルタナティブと軀を元に戻したサイコログだけだった。

「ヒナテンは…？」

カードデッキの破片らしき物は見当たらない。

「逃げたよ。逃げ足が速いね」

RNEWオルタナティブが後頭部をかく仕草をする。BNEWオルタナティブがRNEWオルタナティブの隣に立つ。

「やることはやった。そろそろ…」

「分かってるよ」

二人のNEWオルタナティブがその場から立ち去ろうとする。シザースがそれを止めた。

「ねえ、アンタ達は？」

BNEWオルタナティブが代表で、シザースの質問に応えた。

「私達は、この闘いを止める為に動いている者の一部だ」

それだけを言うと、二人のNEWオルタナティブは契約モンスターと共にミラーワールドに姿を消した。シザースがカードデッキを外し、変身を解いた。

「ライダーバトルを止める……？」

チルノが頭を傾げた。そしてNEWオルタナティブ達のことを直ぐに頭から追い出し、大妖精に自分が今何に関わっているかを、どう説明しようかと考えていた。

*

「ハア…ハア…いったあゝ…」

ファイナルベントの競り合いに敗けた天子は、変身が強制解除され

る前にミラーワールドに逃げ込み、手軽な現実世界に出ていた。

「もう！何なのあいつら！」

『あいつらは…確か…』

「何？メタルゲラス知ってんの？」

『……………いや』

「？……………まあいいわ。どんなに強い奴が出てきても、私には『アレがある』……………！」

天子の目が、怪しく煌めいた。

『EPISODE・10/サイカニ合戦』（後書き）

今回出てきたライダー、RNEWオルタナティブとBNEWオルタナティブ。分かりにくくてすいません。なんとか分かりやすい表記方法を思いつきます。この作品では？NEW？なので擬似ライダーから仮面ライダーに昇格しています。なので、サバイブを持っていたりします。この2人は東方キャラ変身しています。1人は技でなんとなく分かりますと思います。

今回は神崎の本当の目的が分かり、何故幻想郷にイレギュラーライダーが分かります。次回もよろしく願います。

『EPISODE・11／黒龍と鳳凰、そしてトキメキ』（前書き）

真の主人公、月見狼夜登場！！

美鈴「マジすか!？」

『EPISODE・11／黒龍と鳳凰、そしてトキメキ』

龍騎のミラーモンスター狩り、ベルデの敗退、ガイとシザースの戦闘、そして2人のNEWオルタナティブの登場によって中断された。その様々なことが起こった1日は既に過ぎ去り、新しい1日を迎えた。昨日の雨から天気は一変し、今日は晴れ。夏の暑さはまだ残っているが、適度なそよ風が吹いているため過ごしやすい。この陽気だ。我らが主人公たる紅美鈴は勿論

「むっ……むっ……」

寝ていた。まあ、この天気。寝なければ美鈴ではない。今の美鈴の寝方は椅子に座り腕を組み、脚を組んで首を右側に傾けだらしなく口を開けている。虫が入りそうな口からは涎が滴れそうで、鼻には分かりやすくアレが出来ており、美鈴の呼吸に合わせ萎んだり膨らんだりしていた。

「むっ……むっ……むっ……」

楽しい夢でも見ているのか、美鈴の口元がにやける。その表情は、美鈴の端麗美な肉体に似合わない無邪気な顔が綻んでいる。そのギョップがなんとも可笑しく、なんとも愛らしい。だが、その表情は悪戯心が顔いっぱいに広がる少年に崩された。少年が二ヒツと口の端を広げ、手に持っていた大きめの箱を地面に置いた後、どこからか紙袋を取り出し空気を入れ膨らませた。膨らんだ紙袋を美鈴の耳元に持っていく、強く紙袋を叩く。紙袋はバンツ！と大きい音を立て破裂した。

「うつひゃい！！！！！？？」

音に驚いた美鈴が飛び起きた。

「へ？へ！？ワッツ！？」

美鈴の眼が、ネズミを見たドラ もんのような眼になりながら何が起こったのか確認する。ちなみに体制はまったく崩していない。いつでも二度寝出来る姿勢だ。

「……くく……ぶつ……ぶくく……」

美鈴の目の前に、後ろを向き笑いを必死に堪えている少年がいた。手には裂けた紙袋。私の至福タイムを邪魔したのは君か……！と、言わんばかりに少年を見る。

「君……誰？」

美鈴がイライラを分かりやすく言葉にいりませた。少年が笑いを堪えながら振り替える。見た目はツンツン頭で鋭い三白眼だが、顔は少しあどけない。年齢は少年を卒業したくらいだろうか。しかし纏っている雰囲気は青年と表すよりも、少年と表した方があっていた。「いやあー、ごめんごめん。でも鼻ちようちんを出しながら気持ち良く寝てる奴いたら、邪魔するのがお約束でしょ？」

自分が聞いた質問に答えない少年にまた苛立ちを感じたが、自分はこの少年よりも何百歳も年上なのだ。大人にならなければ。

「質問に答えてくれないかな？君は誰？」

「やだなあめーちゃん。分かんない？俺一回会ったら忘れないって

よく言われるのに」

めーちゃん。その呼び方が頭の中にこだまし、記憶を掘り起こした。頭に浮かんだのは、ライアと自分の闘いに乱入しておいて『闘わない』と言った銀狼のライダー。少年を指差し、沸き立つ記憶の泉からひよっこり出てきた名前を言い放った。

「確か……ヴォルフ!？」

少年がにっこり笑い、頷いた。

「オーイエス。俺は月見狼夜^{つきみろうや}。またの名を仮面ライダーヴォルフでえす」

「君が……あのライダー」

美鈴が椅子から立ち上がった。思っていたより、見た目は大人だ。言葉使いと落ち着きのない雰囲気からまだ子供かと思っていたが。いや、顔立ちと身長が大きいとゆうだけかもしれない。身長は、背が高い美鈴の上と同じくらいか。

「ねえ狼夜くん。君の歳はいくつ？」

「ん?どつたの急に?今年で19だけど」

彼が人間ならもう大人と言える年齢だろう。つまり躰は大人、中身は子供なのだ。しかしこの少年、今日はいったい何の為に自分を訪ねて来たのか。質問を試みることにした。

「今日はどうしたの?まさか闘いに?」

「んなわけないでしょう。今日はちょっとした挨拶。前はまともに説明できなかったからね俺のこと」

狼夜がそう言うと、足元に置いていた大きめの箱を手に取り美鈴に差し出す。

「これお土産！」

屈託のない笑顔で差し出された箱を受け取る。子供っぽいが、礼儀は知っているらしい。箱の上面には『ゆつくり饅頭』とかかかれている。美鈴の頭に嫌な予感が走った。もしかや狼夜のあの笑顔は……。意を決して箱を開ける。中身は

「ゆつくりしていつてね!!」

少女の生首：ではなく、そういった生物のゆつくりれいむと呼ばれる者だった。ぶつくりとした顔、いや躰か？どちらでもいい。頭には赤いリボン。そしてなんとなくざくかんじる表情。そんなれいむが美鈴を見つめる。

「ゆつくり」

れいむが再度、言おうとした時、美鈴がグワツと手を開きれいむを掴む。

「して」

次に、大きく振りかぶり空めがけ放り投げた。

「いつてねえええええ……」

空に大きな弧を描き、れいむの本分である『ゆつくりしていつてね！』が晴れ渡る青空に躰ごと吸い込まれていった。美鈴はれいむを飛ばした方向を見つめ、飛んだな…と呟いた。

「あああ！！？？れいむ！れいむううううう！！！！」

狼夜が驚愕し、れいむが飛んでいった方向へ救ける為に走りだした。

*

とあるミラーワールドの丘。ここならもう一つの幻想郷を見渡せる。現実世界と違い全てが反転しているが、幻想郷に違いない。その丘に黒い影があった。紅い龍騎士の対となる黒い龍騎士　リュウガであった。

「ここ、いいでしょう？ここならこの世界（幻想郷）を見渡せる…」

リュウガがどことなく言った。リュウガ以外誰もいなかった筈のミラーワールドに、陽炎のように神崎士郎が現れた。リュウガが背後にいる士郎へ振り向いた。

「ふん…、確かにこの世界（幻想郷）は美しい。ゆえにここが最適だ」

無表情を貫く士郎が言った。

「貴方の目的は何？ライダーバトルの勝者にはなんでも願いを叶える……なんて虫のいい話じゃないんでしょ？」

リュウガが単刀直入に一番の疑問を聞いた。どうやらリュウガは士郎と対話するために、ミラーワールドで待ち構えていたらしい。

「……お前も大体分かっているのだろう？だからイレギュラーな存在を幻想郷に放った」

士郎がゆっくりと右腕を上げると、金の羽が舞落ちる。士郎の右側に、メインカラーは金と茶色で、両肩は翼の装甲である鳳凰のライダー・オーデインが腕組みをしながら現れる。

「俺の手足たるこのオーデインからの情報では……、ヴォルフ、鎧王、2人のNEWオルタナティブ、アビス、そして『リオン』。現在確認されているライダー達は、もしくはその力は、お前が幻想郷に連れて（持って）きたのだろう」

「そのオーデインとかゆうのも、幻想郷の住人かしら？」

「とるに足らない浮浪者だ。そんな者が消えても問題ではないだろう」

「とるに足らない……ねえ」

リュウガが言葉を切ると、オーデインがぴくつと反応し、士郎を護るように前に出る。今、リュウガから放たれている氣は最初に纏っ

ていたゆったりとしていた物が、殺伐たる殺気にならっていた。それは凍てつく氷のように冷たく痛みを感じ、炎のようにぐっぐくと燃え盛り肌を焼くようだ。

「……なるほど。ここでぬらりくらりな返答したら、オーデインごと八つ裂きにされるな。……キーワードは『破壊と繋ぎ、そして創造』だ」

「……繋ぎ……？」

破壊と創造ならば、容易に想像できる。だが繋ぎとは？

「俺の目的は創造だ。そのために破壊が必要だ。一度この世界（幻想郷）をリセットし、俺が愛する存在がいるべき世界に作り直す。だがな、世界をひっくり返すリセットは？崩壊？を招く。かつて俺がいた世界がそうだったように……。創造するためには原型たるこの世界（幻想郷）が必須。崩壊とゆう嫌客を招かず、創造とゆう善客を快く招く為には、善客を楽しませる芸（繋ぎ）が必要だろう？」

「なるほど。繋ぎとは」

リユウガが呆れるように、そしてその考えに恐れるように言った。

「その通り……！」

ここにきて、初めて士郎が感情を顕にした。オーデインを押し退け前に出て、吟じるように続けた。

「このライダーバトルは、優秀な繋ぎを探すために開いた。強い肉体、強い精神エネルギー（欲望）を持つ者を見つける為に、な。欲

望とは、怒り、哀しみ、歓喜、様々な感情から生まれる。そして肉体は！……その押さえきれない感情から生まれた欲望を叶えるために、より強い軀に進化する！……このライダーバトルに勝ち残った者は強い肉体と精神エネルギーを兼ね備えた者。その力を原型と創造した世界のジョイント部にすれば……崩壊は起きない」

士郎が、ニヤツと笑った。

*

狼夜がれいむ救出に向かつて数分後。れいむを手に抱き抱え、肩で息をし全身汗だくの狼夜が美鈴の所に帰ってきた。

「ぜええ…ぜええ…何も投げなくてもいいでしょう！？ちょっとしたお茶目なドツキリだったのに！」

「あーびつくりしたなー。びつくりしたから思わず投げちゃった」

美鈴が、死んだ魚のような眼で棒読みで言った。その眼には反省の色は無い。

「酷くない！？そのリアクション酷くない！？れいむ号泣してんのに！」

腕に抱かれているれいむは鼻の辺りを赤くし、両目から涙を流し続けている。狼夜の腕にはれいむの涙が溜まっている。

「ろっやゝ、ぐすっ…こわい人がいるよ…ひぐっ…」

ふと、美鈴が気付いた。このゆっくり、狼夜に懐きすぎではと。本来ゆっくりとは我儘わがままで自分勝手な者が多く、知能も低いとゆう。そんなゆっくりがこの少年とは仲が良い。このゆっくりを飼っているのだろうか？幻想郷には様々な者がおり、物好きはゆっくりを飼っていると聞いたことがある。いや、これは飼い主とペットの主従関係ではない気がする。

「…………そのゆっくりってペット？」

「違うぜ。友達…かな？なんか懐かれちゃって。他にも色々いるけど……。あつ、このドッキリならめーりんの方が良かったかな…？」

めーりんと呼ばれ、一瞬自分かと思ったが狼夜の美鈴の呼び方はめーちゃんである。めーりんは美鈴の顔と似ているゆっくりなのだろう。ゆっくりは何故か幻想郷の住人と似ている顔をしているのだ。

「あつそつだ本題を忘れてた。今日は俺たちのことを話に来たんだつた」

「俺……達？」

「実はさあ、かくかくしかじかうまうまうしうしとらとらでさあ」

「いや通じる分けないでしょう！！」

「ジョイントねえ…まるで道具のように言ってくれるじゃない」

リュウガの言葉に怒気が混じる。

「道具だ。俺の願いを叶える為のな」

士郎が、リュウガを、幻想郷を見下すように言った。リュウガの纏う殺気にが、薄黒い闘気のようになって、龍騎士を取り巻く。弱い生物なら、リュウガの攻撃範囲に入っただけでその身を削られかもしれない。

「貴方は早急に消した方がいいわね。貴方が歩くだけで大地が腐る。貴方が見るだけで景色が濁る。貴方が呼吸をするだけで空気が汚染される。貴方の存在が、幻想郷に巣食う病原体よ」

リュウガが一步、一步と士郎に近づく。そしてカードデッキに手を伸ばそうとした時、弾丸が手を弾いた。

「……………」

リュウガが手を弾かれた状態で、弾丸が発射されただろう方向をギロリと睨んだ。

「その人に死なれたらこまるんだよね。だから手を出さないでくれたまえ」

そこには、いつの間にか現われたのか、50口径もの銃型変身ツールを持つ黒とシアンカラーのライダーがいた。見るからに自分とは違うタイプのライダー。ヴォルフや鎧王等と同じ外のライダーか。

「奴の名はディエンド。世界を巡るライダー…」

「そして彼は僕の契約者ってこと」

「契約者…?」

「僕は世界にあるお宝を集めるのが趣味でね。ある文献によるとこの幻想郷にはすごいお宝、もしくはそれに匹敵する人物が沢山いるらしいじゃないか。だから僕はここ（幻想郷）に来た。その時に彼と出会った」

ディエンドと呼ばれてライダーが親指で士郎を指差した。

「つまり貴方は神崎士郎に宝をやるから手を組めとゆう契約を持ち出され、契約を呑んだ。そうゆうこと?」

「ご名答」

「リュウガよ…外界のライダーを手下に使っていたのはお前だけではないのだ。ディエンド…最初の仕事だ。リュウガを殺れ」

「いいのかい?ライダーバトルの駒が減ることになるよ」

「構わない。害になる雑草は刈るだけだ。」

命令を受けたディエンドが、専用武器であるディエンドライバー向けた。トリガーに指を掛ける。その時、燃え盛る紅蓮の焔がディエンドと士郎を襲った。

「!？」

ディエンドがバックステップで回避し、オーデインが士郎を庇った。

「これは…龍騎の…！」

ドラグクロウ・ファイヤーであった。しかし、龍騎たる美鈴は紅魔館の門にいるはず。

「私達にも、まだ貴方が知らない味方がいるのよ」

ファイヤーによって作られた炎の壁越しに、リュウガが言った。その場でリュウガだけだろう。その両の眼に移る、ドラグクロウを構成するもう一人アナザーリュウキ龍騎士が。

「今日はもう帰るわ。タイムリミットが近いし」

リュウガの躰は粒子化が始まっていた。

「私はまだライダーを、ライダーの力を集めるわ。貴方を敵に回すのは、ミラーワールドとミラーモンスターの全てを敵に回すみたいなものだからね。融合モンスターなんてのもいるし」

大抵のミラーモンスターは、生みの親とも言える士郎の命令に従う。ミラーモンスターの生みの親はもう一人いるのだが……。そしてリ

ユウガは、稀に発見される妖怪等の生物と融合しているミラーモンスターを話題に出した。

「あれは俺が作ったわけではない。ミラーモンスターが幻想郷で対応する為に身に付けた、言わば生きるための生存本能」

「なるほどね……まあいいわ。幻想郷にはまだ、貴方が知らないライダーはいる。さっきの攻撃や、『牙の王』とかね」

リュウガの言葉が止むと、再び炎が放たれ、士郎達の視界を塞いだ。炎が止むと既にリュウガの姿は無かった。

「ふん…、隠し札のライダーならこちらにもまだいる」

すると、士郎の背後に三人のライダーが現れた。一人は黒衣のローブを纏い、臍に走る金色のフォントスリムと赤い複眼を持つ剣士、もう一人はカブト虫を連想させるマスクに黄色の複眼、黒い臍に頭部、胸部、肩部のアーマーには基板のような赤い模様があるライダー。最後の一人は白い帽子に白いボロボロのマフラーをなびかせており、マスクは髑髏のようだ。

「僕のお宝を貸しているんだから、大切にしてくれよ？」

「適合者を探すのも苦労したのだぞ。特に、地を支配する帝王がな。お前のツールを使い、俺が暗示を掛ける。しかもこの暗示は、俺の命令か、ライダーバトルを妨害する者を発見しなければ発動しない。だから、日常でも暗示に掛かっていることには気付かない……」

「一種の条件反射を利用した強いマインドコントロール……まるで北 鮮のあいつみたいなのをするね。それと」

言葉を切ると、ディエンドがディエンドライダーを士郎のこめかみに突き付ける。オーディンと三人のライダーが反応するが、士郎はそれを手で制した。

「何の真似だ？」

「さっき僕のこと手下って言ったの…訂正してくれないかな。僕は誰の下にもつかない。誰も僕に、首輪を付けることはできない。」

「……悪かったな。友好関係を崩さない為にもな」

ディエンドライダーをこめかみから離し、くるくると回す。

「忘れないでくれたまえ。僕は気は短くない方だが、言葉には気を付けなよ？」

士郎とディエンドは危険な友人だ。だから士郎は、ディエンドと手を組むことにしたのだ。

*

「うーん…好きな食べ物…ベタに肉まんかな。もしくは饅頭」

美鈴が獲物を狙う獣のような眼でれいむを見る。話しは完璧に逸れ

てしまっている。自分のことを話すのではなかったのかとゆう疑問は、美鈴の頭からとうに消えている。

「ゆううう！？」

狼夜の腕に優しく抱かれているれいむが、美鈴の視線に怯えた。ゆつくり達は饅頭に見えなくもない。

「へえ、じゃあさめーちゃんって好きな人とかできたことある？」

「そりゃあ、あるに決まってるでしょ。何百年も生きてるんだし。でも恋人はできたこと無いなあ」

美鈴が苦笑する。会話の内容が女子高生の昼休みのようになってきた。

「マジで！？うわー以外。めーちゃんならいると思ったのに」

「まー、しょうがないよ。私ぱつとしないし」

「そうかなあ？めーちゃんならすぐに作れそうだけど。可愛いし」

？可愛い？、ヴォルフの時よりも強く頭にこだました。ぱつとしなのは事実だった。十六夜咲夜と小悪魔は気品あふれる従者キャラで、レミリアは勿論、フランドールは幻想郷のロリ ン達に大人気。病弱なパチュリーは男の護ってやりたいとゆう感情を擦る。そして隠れ巨乳とゆうステータスを持っている。美鈴もアジアンビューティー&美脚巨乳を売りにしていたが、それでもキャラ負けしていた。そんな中で可愛いと言われたのは久しぶりだった。

「そ…そうかな？」

思わず照れてしまう。そこに狼夜が畳み掛けた。

「そつだよ。俺は好きだなあめーちゃんのこと」

「……………ふへ！？」

数秒の沈黙。そして変化は顔に表れた。頬が薄紅に染まる。頬の火照りがばれないように俯いた。コレが甘酸っぱい、？トキメキ？なのだろうか。

「……………おっと。めーちゃん、ちょっと急用ができたから今日は帰るね。バイバイ！」

空を見つめたかと思うと、狼夜はそそくさと別れを挨拶を言つと、れいむを抱えながら走って帰ったのだった。狼夜が見えなくなつたのを確認すると、自分の頬の火照りを確認するように手を当てた。

「はう……………」

さっきのはちょっとした告白なのでは？悩む美鈴の表情は乙女のそれであった。

『EPISODE・11/黒龍と鳳凰、そしてトキメキ』（後書き）

月見狼夜：仮面ライダーヴォルフ

能力『動物（ゆっくり等）に懷かれる程度の能力』（笑）

得意料理：ケーキ全般

ゆっくり達の話ではが狼夜のケーキを食べると、すごくゆっくりできるらしい。

よく懷いているゆっくり：れいむ、うどんげ、まりさ

はい出ました！この作品のもう一人の主人公！もしくは真の主人公。

特に今回は書くことが無いので、これで終わりです。

ちなみに次回は番外編。ヴォルフの誕生と何故幻想郷に来たのか、そしてれいむ達ゆっくりとの出逢いをやるつもりです。次回もよろしく願います！

仮面ライダー整理

どうも仮面3です。11話を更新した後、皆様方の感想を読み返していた時にブルーバードさんの感想見て考えたのですが、龍騎ライダーズ以外出すライダーはもう殆ど出たのでここで出演したライダーと、出演予定のライダーを整理しようと考えました。なので掲載します。

原作ライダー

仮面ライダー 龍騎

変身者：紅美鈴

仮面ライダー ナイト

変身者：????

仮面ライダー シザース

変身者：チルノ

仮面ライダー ゾルダ

変身者：河城にとり

仮面ライダー ライア

変身者：レミリア・スカーレット

仮面ライダー ガイ

変身者：比那名居天子

仮面ライダー 王蛇

変身者：風見幽香

仮面ライダーベルデ

変身者：守矢諏訪子（敗退）

仮面ライダータイガ

変身者：犬走椋

仮面ライダーインペラー

変身者：？？？

仮面ライダーファム

変身者：？？？

仮面ライダーリュウガ

変身者：？？？

仮面ライダーオーデイン

変身者：？？？

オリジナルライダー

仮面ライダーヴォルフ

変身者：月見狼夜

仮面ライダー鎧王

変身者：？？？

仮面ライダーリオン

変身者：？？？

仮面ライダーRNEWオルタナティブ

変身者：？？？

仮面ライダーBNEWオルタナティブ

変身者：？？？

……と、こんな感じです。因みにリオンは『喰らう蛇』で最後辺りに出てきたライオンのライダーです。上記3人はオリジナルキャラなので番外編として、誕生した理由と何故幻想郷に来たのかをやるつもりです。ヴォルフにいたっては、幻想郷で生まれたライダー設定だったので、急きょ外界のライダーにしました。

別世界のライダー

仮面ライダーディエンド

変身者：海東大樹

仮面ライダーオーガ

変身者：？？？

仮面ライダーダークカブト変身者：？？？

仮面ライダースカル

変身者：？？？

仮面ライダー歌舞鬼

変身者：？？？

仮面ライダーギャレン

変身者：？？？

仮面ライダー牙王

変身者：？？？

仮面ライダー幽汽

変身者：？？？

仮面ライダーアビス

変身者：？？？

このライダー達は幻想郷の住人が変身しています。牙王、幽汽、アビスはリユウガ達の味方であり。歌舞鬼、ギャレンはあるライダーを護る為に戦います。

まあ、出演予定はこんな感じです。……もう龍騎関係ねえ（苦笑）。このライダー達は仮面3の好きなライダー達です。ああ、カリス入れたかったなあ、でも自分の文才じゃキツイ。カリスは平成ライダーで一番好きです。まあこんな自分と、幻想郷の人々と、仮面ライダー達で頑張ってやっていきます。コレからも、仮面3の作品を応援してください！

あつ、それと自分来週から冬休みなんすよ。そこで気の迷いから東方作品をもう一つ作ろうかなあと思ってるんです。知っている人は『桜王の牙』 GOD SPEED SOLDIER』の続き作れよと思うでしょうが、アレのバックアップとってなかつす（泣）とにかくそれは置いて。自分が冬休みくるとゆうことでテンションが上がり思いついたのは2つ。

1つは、八雲紫が『外界の人間に能力を与え、闘わせたらどうなるか』とゆうものを考え、実行した。そこで八雲紫に選別した幻想郷の住人達が外界に人間を選びに行くとうゆう感じです。因みに幻想郷の住人はオリジナルキャラ。

2つ目、幻想郷の住人が現代入りしてしまい、なんやかんやするのです。こっちはありますか？しかもまだちゃんと考えてない（苦笑）

やるとしたらどっちが良いですかね？まあ、テンションが続かずにきないかもしれません（笑）できればご教示お願いします。

『番外編EPISODE・1／誕生するヴォルフ』（前書き）

最近、友達が「仮面ライダースカルって帽子を取ったらハゲじゃん」と言ったので自分が「違うよ！ハゲじゃないよ！あれは素敵な帽子を引き立てる為の素敵な頭なんだよ！」と言いました。

皆様、スカルはハゲじゃあ………ないですよ？

『番外編EPIISODE・1/誕生するヴォルフ』

走るのが好きだった。

勉強があまり出来なかった俺はいつも教師や級友に成績のことで馬鹿にされていたが、俺は人よりも脚がかなり速かった。皆も、『彼女』も脚の速さは誉めてくれた。

ケーキを作るのが好きだった。

俺が作ったケーキで、『彼女』が美味しいと笑ってくれるのが、『彼女』の笑顔が好きで好きでたまらなかった。

動物に懐かれる才能が好きだった。こんな俺に擦り寄ってきてくれるのは、『彼女』以外ないからだ。

『彼女』が好きだった。『彼女』だけが俺を理解してくれた。動物達もそうだったが、人の温もりの方が良い。

『彼女』がいたから世界が輝いていた。『彼女』がいたから色があった。『彼女』がいたから世界が世界であった。『彼女』が…『彼女』が…『彼女』が…『彼女』が…『彼女』が…『彼女』が…。

だけど、『この力』で全てが腐った。全てが狂った。全てが汚染された。全てが醜くなった。

そして『彼女』も醜い豚になった。

『番外編EPIISODE・1／誕生するヴォルフ』

少し広めの部屋に柔らかい陽光が射し込む。人間の基本活動時間の始まりである朝が来た。シンプルな部屋にあるベッドから、部屋の主が上半身だけを起こしました。寝癖とゆう、朝の天敵の1つをものもしないツンツン頭をボリボリとかく。そして三白眼をゆつくり開ける。この少年は、月見狼夜。18歳の高校三年生。成績は下の中。脚力が強く、脚の速さは並の陸上部を軽く凌駕する。こんな彼の1日の始まりにする事がある。自分部屋を出て、隣の部屋へ。但しノックはしない。しても意味がない。部屋は狼夜とは真逆でこちゃごちゃしている。とゆうか汚い。足元に散乱している雑誌等を避けながら、目的地であるベッドに着いた。ベッドには、パジャマのボタンを留めずへそや肌を露出している少女が、掛け布団を滝枕たきまくらのようにして寝ていた。一見は狼夜の妹か何かに見えるが、年齢は二十歳。大人なのだが、顔と雰囲気が子供っぽすぎる。妙に落ち着いた雰囲気を持つ狼夜とは対象的だ。彼女は月見美咲、狼夜の姉である。大学二年生。成績は上の上。脚は中学生並。上手い具合に狼夜と対極である。狼夜が子供っぽい姉を揺すった。

「おい…起きろ美咲。遅れるぞ」

「…うひ…うひひひひ。」

起きる気配は無く、奇怪な寝言が返ってくる。狼夜がため息をつき、ベッドに腰掛ける。もうこのやりとりは慣れた。この子供が簡単に起きないことを、そして、

「すつきありー！！！」

寝たふりをして、後ろから抱きついて来ようとするのも。慣れたから、躲した。

「おりよ！？」

狼夜の首に巻く筈だった両腕が空気を虚しく裂き、受け止めてくれる存在が無くなりつつた美咲は雑誌等が散乱する床に顔面からのヘッドスライディングをした。

「ふぎゅむ！？」

顔を擦りながら顔を赤くし、上半身だけを起き上がらせた。

「受け止めてよ！この姉の愛を！」

「お前のは調子にのると愛ではなく、虐待の域になる」

「ふぐうう。誰かああ！救急車呼んでえ、弟に傷つけられましたああああ！主に心が」

最後の重要な部分を小声で言った。朝から騒がしい姉に無表情で近づき、腕を掴み立たせる。背は小さい。狼夜が189センチなのに對して、美咲は161センチである。はたから見れば親子にも見えるだろう。腕を掴んで立たせた為か、服がはだける。下着で包まれた体格に似合わない平均より少し大きい胸が顕になる。美咲がそれを空いている左腕で隠し、狼夜を上目遣いで見た。

「興味無さそうでやっぱ興味あるんだ。やっぱ男だもんねえ」

「馬鹿なこと言っていないでさっさと飯作るぞ。そして見られなくなかったらちゃんと服着ろ」

これも慣れているのか事務的に告げ、美咲を引きずって台所に向かった。

「え、ちょー自分で歩くから引きずらないでええ！」

*

「ごちそーさまー」

「お粗末様」

狼夜と違い、寝癖で跳ねまくっている髪を揺らしながら美咲が言った。因みに月見家の食事は全て狼夜が作っている。美咲の言葉を狼夜はココアを飲みながら応える。普通ここコーヒーじゃね？と思っただ方。狼夜は苦い物が苦手なんです。

「てゆうかなんかデザートちょうだいよ。ケーキとか作ってよ」

美咲がテーブルに両腕をビタンビタンしながら要求した。

「朝からケーキとかふざけんな。手間もかかるし、そもそも朝から甘い物はねえよ」

「狼夜だつてココア飲んでんじゃ〜ん」

「……………ズスッ」

「無視してココア啜るな！！」

そんないつもの会話を済まし、それぞれの学校に行く為に支度する。狼夜は高校の制服を、美咲は大学の為に私服を。着替えが終了した美咲はある物の前に移動し、正座で座った。

「行つてきます。お父さん、お母さん」

それは仏壇だった。仏壇には遺影として仲睦まじい夫婦の写真があった。狼夜と美咲の今は亡き両親。死亡理由は不明。美咲が四歳、狼夜が二歳の時であった。幼かったせいもあるのか、その時の記憶はごっそりと抜け落ちている。両親を失った時から、物静かだった美咲は何かを忘れるように明るくなった。ただひたすら笑顔を絶やさなかった。その姿が幼い狼夜には酷く痛々しく見え、美咲とは？逆？になった。同じでは護れないから、逆じゃないと護れないから。そして幼い人格を早熟させ、大人の人格と菅かえた。仏壇に挨拶を済ませ、立ち上がった。すると狼夜が後ろから呼び掛けた。

「ほら弁当」

「おっ、いつも手際が良いねえ。ん？こりは…」

いつもの弁当箱と、舗装された箱を手渡された。箱を見て首を傾げている美咲に、狼夜が淡々と応える。

「昨日作っておいたケーキだ。持ってて小腹が空いたら食え」

「マジすか狼夜さんんん！！さっすが！主夫歴9年のベテラン！」

「9年はベテランに入るのか？」

はしゃぐ美咲に、ばれないように微笑んだ。眼の端に両親の仏壇が入った。美咲はきちんと挨拶をしたが、狼夜は鼻を鳴らし無視をしただけだった。幼かった為狼夜は、あまり両親との記憶は無い。両親はもう過去の人物。両親との記憶は全てセピア色に染まっていた。狼夜にはもう『彼女』だけが　美咲がいればそれで良かった。

*

美咲と別れ、自分が通う高校の通学路を歩いていた。周りには狼夜と同じ制服を着ている者が多々いたが、誰も狼夜に話掛けなかった。狼夜自信も話し掛ける気も、話を聞く気も無いのか、躰からは世に言う『話し掛けるなオーラ』を出していて、耳にはイヤホンを付けて周りの音をシャットダウンしている。そんな狼夜を、皆が避けて

いた。彼はクラスに友達と呼べる者がいない。クラスでは彼に話し掛けるな者はいない。彼は孤独だった。いや自分から孤独になっていた。周りの人間達は只の五月蠅い人形。幼い時期に護る対象が1人に定められた為、狼夜は周りに感心が持てなかったのだ。幼い、未熟な精神には1人がいっぱいであり、他に興味を持つ余裕が持てるはずが無く、今に至る。だがこんな狼夜にも近寄ってくれる者はいた。ふと、肩に何かが乗った。

「ん……………」

肩にはちょこんと、雀が二匹乗っていた。見たところつがいだろうが。肩の雀にすつ…と指を差し出す。普通の雀ならここで逃げるだろうが、このつがいは逃げるところか片割れが指に跳び移ったのだ。指に乗った雀は狼夜をじつと見つめ、肩の雀は身をすり寄せてきた。狼夜の顔が少しほころぶ。今度は他の雀が狼夜の頭に乗った。合計三匹。クラスメイトが見たら確実に笑うか、からかうだろう。だが、誰も笑わない。誰も狼夜を見ない。それほど彼は存在感が薄いのか。それとも、？恐れられているのか？……………。

*

彼の？動物に懐かれる才能？は凄まじく、学校に着くまでに雀6匹、野良猫4匹、鴉が2匹。鴉や雀はすぐに追い払えたが、猫はしつこかった。玄関に猫達を待機するように言い付けたが、何度も後をついてくる。動物達は、何故か狼夜の言うことを良く聞く。まるで言葉が一語一語正確に聞き取れるように。猫と共に玄関に入ったり出たりを8回くらい繰り返し返した頃だろうか、狼夜がため息を吐き力バンをあさる。取り出した物は『マタタビ』と書かれた子袋と、都合

良く入っていたあんパンだった。あんパンを袋から取り出し、マタビを振り掛ける。マタビの匂いに反応したのか、猫達は狼夜の脚に軽く体当たりをし頂戴頂戴とおねだりをした。足元の猫達を無視し、マタビを振り掛けたあんパンをなるべく遠くに投げた。零れるマタビを軌跡にあんパンが放物線を描く。あんパン（マタタビ）が狼夜の手から離れると同時に、彼を取り巻いていた野良猫達はニャーと鳴き声を上げあんパン（マタタビ）を追いつけていった。それを見届けると、狼夜はやっと玄関の奥に脚を進めた。

*

ある者は睡魔との死闘。ある者は退屈に大口を開け、ある者は隣人と小言の会話に勤しみ。ある者は真面目に勉学に励んだ。狼夜はどれにも該当せず、勉学に励んでいる？フリ？をした。果たして彼の頭は授業の何割を理解しているだろうか。4時限終了を告げるチャイムが鳴った。普通の休み時眼よりも、教室がガヤガヤと騒がしくなる。昼食の時間。この時になれば、このクラスのグループ分けが良く分かる。派手な男子上位グループ。男子の中位に位置するグループ達はちりじりだ。少数で固まっていたり、上位グループにぶらさがっていたり。女子グループに似たような物である。そして男女底辺グループは個々で悲しく1人昼食だ。狼夜も、自分の席である窓側の一番後ろで1人食っている。只、彼は見た目からも底辺にくような男子ではない。それは朝の通学路のように、誰も狼夜に近づこうとしないのだ。まるで動物に好かれる才能と反比例するように、人から避けられるように……。

*

全ての学業が終了し、生徒達は下校する。素直に家へ直行する者や、友と部活に励む者、寄り道しようとする者など、いかにも学生らしい。狼夜は家へ直行する。否、直行しなければいけない。狼夜の高校は、美咲の大学よりも早く終わる。なので、狼夜の仕事が家事になるのが当たり前になっていた。家に帰れば直ぐに着替え、両親が残した財産を使って買い出し、美咲が帰る頃に合わせて夕飯を作る彼の日常の一部だ。朝と同じように、周りの音をシャットダウンしながら歩く。ふと、脚が何かを蹴った。感触からして堅い。自分に擦り寄る動物ではない。

「……………なんだ、これ？」

右耳に付けていたイヤホンを外し、足元を見る。狼夜が蹴ったらしいそれは薄くて四角い、何かのケースの様だ。腰を屈め、ケースを広い2、3度ポーンと手の中で放る。ケースに収納されていたのはカード。絵柄は盾やら剣やらの武器。カードゲームか何かか？もしくはゲームセンターとかのアーケードマシン等のゲームか。今のゲームはカードを使った物が多いから納得してしまう。ガンバイドとかね。

「美咲にやつたら喜ぶかな？」

あの二十歳子供はこういった物が好きなのだ。我が姉は本当に子供かもしれない。

キイイイイイイイイイイイイイイイイ！

狼夜の正面にある、歩道鏡から金切り音が聞こえた。

「ぐっ……！」

脳が直接揺さ振られる様な不快感。音源であろう歩道鏡を睨む。不快感の中、狼夜が見た歩道鏡の反射面がさざ波のようにうねり狂っていた。

なんだよ……これえ……！？

こんな不快な音も、こんな謎の現象も。18年間生きてきた狼夜の脳には刻まれていない。そしてその脳の容量も、^{キャパ}繰り広げられる思考の行き交いにショートしかけた。だが、彼を襲う奇怪な現象はまだ終わらない。歩道鏡の反射面がより一層強くうねる。すると、狼夜の体が歩道鏡に吸い込まれた。

*

わけのわからない無限に続くと思えた合わせ鏡の空間に入ったかと思うと、外に放り出される感覚に襲われる。地面を転がる躰をなんとか止め、寝転んでいる状態で現状確認する。ここはさっき自分がいた通学路……？が、違和感がある。？逆？なのだ。全てが左右逆。まるで鏡に物を映しているかのように。そして自分の躰にある違和感。反転している歩道鏡に映る今の自分の姿は、黒いボディースーツにくすんだ装甲、素朴なマスクに、左腕に装備された何かを装填するらしい手甲。^{ガントレット}腰には、銀色のベルトらしき物を巻いており。バックル部には先程自分が弄んでいたケースがセットされている。ショート寸前の頭で、狼夜が立ち上がる。夢遊病患者のように、狼夜は歩きだした。幾つもの仮説、幾つものたわいもないSF話が浮かん

では消え、浮かんでは消えを繰り返した。やがて、開けた場所に出た。開けた場所といっても近所の公園。何かあるわけではなく。

「……………あ？」

あった。いや、居た。自分と似たようなベルトつけた、異国の騎士のような装甲を着けた人物が。淡い群青色の装甲に、2つの紅い眼光のような模様。肩には龍の大爪の飾りが有り、マスクも荒々しい西洋龍を模している。そして狼夜と同じように左腕には、マスクと似た鋭い牙が2本、拳に向かって生えている西洋龍の手甲が。それが狼夜が初めて見た、自分以外の？仮面ライダー？だった。西洋龍の騎士は公園の中心で、キョロキョロと何かを探している様子だ。とりあえずこの状況下を打破するには、危険を伴ってもあの騎士と対話しなければ。

「……………なあ、あんた」

「……………っ！！」

驚かれた。まさか驚かれるとは。多分だが、マスクの下は目を見開いているだろう。だって首を回す速度が凄く速かったもん。

「……………はあ。なんだ契約無しか。びっくりして損した。」

狼夜の鎧を上から下まで観察したあと、安堵の息を吐いた。

「で、何？闘いに来たの？」

喋り方、声の高さからして女だろうか。この鎧では性別が分かりに

くい。

「そんなつもりは……つか、闘うってなんだよ？そもそもこの鎧は？この全部左右逆の所は？」

「あーもー、うーるーさーい！」

騎士が耳を塞ぐ仕草を取る。

「アンタはアレか？素人か？……それもそうか、契約無しだもんね。てゆーかミラーワールドやライダーのこと知らないなんてどうゆうことよ？何？？ゼウス？の職務怠慢？」

ミラーワールド？ライダー？？ゼウス？？なんだそれは。

「質問を質問で返すな。質問をするなら、俺の質問に答えてから質問しろ」

「あー？何を偉そうに！せっかく先輩が心配してやってんのにあー！」

「心配しているのなら、質問に答えろ」

「むきいいいいい！」

どうやらキレたらしい。こんなに沸点が低いところを見ると、中身は高く見積もっても中学生か？どうやら自分は精神年齢が低い女と縁があるらしい。

「~~~~~っ！……まあいいわ。私は龍醒^{リュウセイ}。貴方名前は？」

とりあえず彼女としておこう。彼女は仮面ライダー龍醒と名乗った。名乗った相手には、此方も名乗るのが礼儀。

「俺は

」

狼夜の言葉を遮るように、公園の遊具を破壊しながら現れたのは巨蜘蛛だった。昔、何かの妖怪漫画で土蜘蛛とゆう蜘蛛の妖怪を見たことがあつた気がする。

キシヤヤヤアアア!!

蜘蛛のモンスター・デイスパイダーが咆哮を上げる。体長は2〜3メートルか。

「あつ、やっと見つけた。いや、出てきたかな？」

どうやら龍醒がキョロキョロしていたのはデイスパイダーを探していたかららしい。

「……おい。あの化け蜘蛛は何なんだ」

この世の物とは思えないような怪物を見たにしては、狼夜の口調は淡々としていた。

「あれ？以外と驚かないね。あれはミラーモンスター。鏡の中の捕食者……そして、私の獲物」

龍醒はケースから、カードデッキからカードを手にし、バイザー・ドラグバイザーの口部分をスライドさせる。スライドに連動し、バイザーの牙が90度回転し上部に向けた。龍の口の中にある装填口にカードをベントインし、口部分を元の位置に戻す。同時に牙も90度逆回転する。バイザーの紅眼が光と電子音が鳴った。

《SWORD VENT》

龍醒の手に、ドラゴンの大爪を模した刃と蒼い柄を持つ双剣・ドラグセイバーが召喚された。龍醒が蒼双剣を手にかかんに、デイスパイダーに突撃する。デイスパイダーはそれを八本の銀脚の内、前脚二本で応戦しようとする。

「おりゃあああ！」

双剣の内一振りを逆手に持ち、軀を独楽のように回転させデイスパイダーの前脚を真つ二つに断った。

シヤアアアアアア！！！！？？

前脚の七割を失ったデイスパイダーが悲鳴を上げた。前脚をばたつかせている巨蜘蛛の下に、スライディングの要領で潜る。前脚を失うばかりか敵すらも見失ったデイスパイダーは混乱を全面的に顕にするように暴れ回る。六本の脚が砂煙を巻き起こす。

「けむいから暴れんな！」

龍醒はデイスパイダーの下に居る為、砂煙が余計に辛い。今度はダンサーのように寝転んだ状態で回転させ、全ての脚を風ぎ払おうとする。右側の脚は両断できたが、左側を逃してしまふ。だがこれが

幸いした。軀を支える脚が無くなったデイスパイダーがガクンと倒れこむ。全ての脚を両断していればあの巨体に押しつぶされていただろうが、左側が残っているためスペースが空いていた。そこに転がり、ある意味デイスパイダーが放ったボディプレス回避出来た。

「あつぶねえ……」

見ているだけの狼夜も、その危なっかしい闘い方に内心肝を冷やしていた。何故だが、あの蒼龍騎士をほとけない感覚に襲われる。龍醒がからもボディプレスを回避し、少しのスペースに身を投じたがそこも危ない。荒れ狂う脚を避け広い空間に出ると、片膝を着いた状態で、右手のセイバーと逆手に持ったセイバーを交差するようにX字に脚を斬り裂いた。

ヒギイイイイ！！

派手に登場した時の威勢のいい咆哮とは違い、情けない悲鳴を上げる。今や軀を支える脚は短くなってしまいワサワサと動く只の飾りになってしまっている。動けないデイスパイダーは最早止めを待つだけの状態になっている。龍醒が立ち上がり、デイスパイダーの正面、つまり頭の前に立つ。右手のセイバーを突き付けた。

「じゃあ……私のモンスターの餌になってね？」

セイバーを振り上げる。

狼夜は腕組みをして、暇そうにあくびをする。圧倒的だった闘いに退屈を感じた。これであの巨蜘蛛は、人生。いや、蜘蛛生のエンドマークが打たれるのは確定。この死合いで得られたのはこの機械の使い方とカードの使い方くらいか……。この少年の冷静さは驚くべ

き物だった。そもそも巨蜘蛛が出てきた時点で、常人なら逃げ出しているだろう。だからこそ、この少年が？選ばれたのかもしれない？

高く掲げられた蒼剣がギリリと光を反射する。だが、デイスパイダーは死を待つだけではなかった。

デイスパイダーの口から、大量の？糸？が吐き出され龍醒の右手を包んだ。

「うわっちゃ〜……。油断した〜」

思っても見ない反撃に、油断した。外そうとしたが、蜘蛛の糸は粘着力と強度がありえないほど高い。普通の蜘蛛の糸も、束ねれば自然界で一番強度がある。だから、龍醒は直ぐに諦めた。

「まっ、こっちが残ってるからいいや」

糸に包まれた右手を下げ、左手のセイバーの柄を回し、持ち方を変える。しかし、その左手を振り上げることはできなかった。目の前にいるデイスパイダーの糸とはまた違う糸が、龍醒の軀を左手ごと包んだのだ。

「おっと……！！！！」

両腕を広げ、糸を引きちぎろうとするが糸は堅い。セイバーを使えば簡単に斬り裂けるだろうが、両腕両剣は封じられている。首は自由に動かせる為、糸が伸びている方向を見る。糸は地面から伸びている。詳しくは地面の中から。地面がモコツと盛り上がると、龍醒が痛め付けていたデイスパイダーと同種の巨蜘蛛が姿を現した。

「あらら？2匹目……ですか？」

言葉事態は軽いが、声が引きつっている。

「おいおいマジかよ…」

狼夜が腕組みを解く。

「そついや蜘蛛の中には、地面に巣を作って獲物を待つ種類がいるんだっけ」

実際豆知識を言っている場合ではないのだが。

「助けた方が…いいよな」

狼夜が前屈みになり、龍醒を助けるため、走る態勢に入る。恐らく倒せないだろうが、脚力には自信がある。この距離の助走なら、ぶっ飛ばすことは無理だろうが怯ませることなら出来るはずだ。駆け出す為に右足を下げ、力を入れる。

『止めておけ。意識が龍醒に行っているとはいえ、契約無しでは自殺するようなものだぞ』

脚に入れていた力が、声に反応し抜ける。声の主は狼夜の後ろに。

こいつ、いつの間に後ろに来た？

狼夜は人や動物の気配に敏感だ。あまりデイスパイダーの登場に驚かなかったのは、ただ何となくそこに居るのが分かったから。だが、狼夜の後ろに居るであろう人物にはまったく気付けなかった。この様々な奇怪現象の中で、恐らくこれが一番恐怖した事だ。

『あのライダーを助けたいか？』

ゆっくりと振り返る。そこにいたのは、自分達と同じ鎧を着けた者、仮面ライダーだった。黒い装甲には、不規則な白いラインが入っており、肩と脚には凸凹している強固なサポーターが装備されている。マスクも黒だが、顎部分に白い髭のような飾りが付いている。ベルトは黒、セツトされているカードデッキも黒で、シンボルは？ 鯨？らしき生物のようだ。

「だから…ライダーってなんだよ」

この謎は、龍醒が答えなかった物だ。

『仮面ライダー……それはこの？ゼウス？が生涯の内最大の謎であろうその、答えを見つけてくれる者達……我を含む、13人の勇者達……。もう一度問う。汝は龍醒を救いたいのか？』

「俺が生涯護りたいと思うのは『彼女』だけだ。………だけど、なんでだろうな。あいつも護りたい……護らなくちゃいけない……！」

狼夜の答えに、ゼウスがどこか満足そうに頷き指を鳴らす。するとどうだろう。ゼウスの背後にボウと巨狼が現れた。ゼウスも身長が高いが、巨狼はもっと高い。ゼウスを2メートルとすると、巨狼は2メートル50センチくらいか。

『この？ヴァンフェンリル？と契約しろ。さすれば汝は力を得る』

ヴァンフェンリルとゆうモンスターは、全身が鈍い銀色をしており、所々に黄色の模様がある。腕には屈強な爪があり、二足歩行だ。狼夜は契約の仕方を知らない。だが腕が無意識に動き、カードデッキからカードを取り出す。絵柄は白いだけであつた。ヴァンフェンリルがカードに吸い寄せられるように脚を進める。ヴァンフェンリルと狼夜の距離が手の届く距離になると、カードが強く輝いた。その強い光の中で、狼夜のカードデッキにシンボルが浮かび上がる。

『……………誕生を祝おう。？仮面ライダーヴォルフ？』

*

「ああ、どうしようこの状況……。嫌だよう蜘蛛に食べられるのは」

新たに現れたデイスパイダーの口から出ている糸は未だに龍醒を捕縛し宙を舞わせている。そのデイスパイダーは口から糸をただもれている状態で四肢、とゆうか八肢を斬られた仲間を心配でもしているのか、身を近付けた。そして、ブツン！と何かを噛み切る音を出した。

「あらあ！？」

音は、デイスパイダーの口にあつた糸を噛み切るものだった。勿論、力を失った糸は重力に従い龍醒もろとも地に落ちる。しかし糸自体

は龍醒に絡み付いているので動けない。

「…うーん。解放するなら系取ってくれないかな」

芋虫のように軀を動かし、荒く落としてくれたデイスパイダーを見る。

デイスパイダーはお食事中だった。脚を斬られた同種に食らい付いている。なるほど、食べるには私が邪魔だったわけか。変に納得してしまう。ミラーモンスターは力を、空腹を満たす為なら同種すら食す。それも動けないのな楽に捕食できる訳だ。等と、解説している間に脚を失った蜘蛛は故デイスパイダーになっていた。デイスパイダーが龍醒をチラリと見る。龍醒がマスクの下で冷や汗をかいた。

「もしかして……私…ですか？」

デイスパイダーの口から返事の代わりに、涎のような物をボタボタと垂らしている。そして、八本の脚を器用に動かし、龍醒に近づく。まさか自分がこんな雑魚にやられるとは。今は自分で自分を殴りたい。こんなミスをしてしまった自分を。更に近づくデイスパイダー。殴りたくとも、今の状態では無理だ。

しかしチャンスは来た。

ドンッ！！！！

デイスパイダーの背中に強い衝撃が走り、地面に叩きつけられた。その背中には、銀狼の影があった。

「あれは……？」

龍醒の目に飛び込んできた映像は、巨蜘蛛の背中に乗る銀狼が手甲ガントレットに生えている左右非対称の爪で滅多刺ししている物だった。刺すばかりか切り裂いたり、より深く刺し込み挟りぬいたり。先程迄、狩る側だったデイスパイダーは狩られる側になっていた。最後に、銀狼・ヴォルフが両爪をデイスパイダーの頭に深く突き刺し、振り抜いた。デイスパイダーの首がごとりと落ち、力なく倒れた。ヴォルフがデイスパイダーの背から降り、龍醒を縛る糸を爪で裂いた。立ち上がり、ヴォルフと視線を合わせる。

「とりあえず…助かったわ。」

「気にするな。只の気分だからな」

「…あれ、その小生意気な喋り方…もしかしてさっきの契約無し！？」

「契約無しじゃない。ヴォルフだ」

狼夜は名乗った。自分に力を与えた者が、ゼウスが呼んだ名を。

ここから狼夜の闘いが始まる。

何体ものミラーモンスターを倒した。

ゼウスに、自分は人間の欲望の深さと強さを知りたいと教えられた。

そしてその願いを叶えてくれたこの闘いの勝者には感謝の印として、その者の願いを叶えると。

様々なライダーと闘った。あるライダーに、ゼウスは自分が望む結果がでなければ闘いは永遠繰り返され、自分達は解放されないと教えられた。

一時期はそのライダー・キメラと手を組んだ時もあった。

だが、キメラはもう居ない。

龍醒と闘い、キメラは負けた。

勝者には祝福を！敗者には死を！……だそうだ。

時間は過ぎ、狼夜がヴォルフがなって半年がたち、残ったライダーは自分を合わせて、龍醒、ゼウスの3人になっていた。

闘いは終焉を迎えられるのか……。

『番外編EPIISODE・1/誕生するヴォルフ』（後書き）

仮面ライダーヴォルフ

契約モンスター：ヴァンフェンリル

仮面ライダー龍醒

契約モンスター：ドラグバハムター

仮面ライダーゼウス

契約モンスター：なんかこう……鯨っぽいの（笑）

なんか急ぎ足で微妙なできになってしまったヴォルフ編の前編。次回
はヴォルフ編最終回の後編。ゼウスが生んだ闘いが終焉し、狼夜
が幻想郷に来ます。

最後に……喋り方が違う狼夜を書くのは結構楽しいです！

それでは次回もよろしく願いします！

『番外編EPISODE・2/旅立つヴォルフ』（前書き）

スランプです。スッゴいスランプです。なので今回の出来はスッゴい微妙です。あと、最後無理矢理です。因みにこの話のミラーモンスターは爆発せず死体が残ります。

『番外編EPIISODE・2/旅立つヴォルフ』

闘いは続き、その大地に残り立つのは狼、西洋龍^{ドラゴン}、鯨の生物を模した3人の騎士。

狼は、『彼女』の幸福を願う。

西洋龍^{ドラゴン}は、只己が欲望を。

鯨は、知識欲の為に。

その願いを叶える為。

狼はがむしゃらに。

西洋龍^{ドラゴン}は激闘士に。

鯨は傍観者になった。

『番外編EPIISODE・2/旅立つヴォルフ』

紅色に沈む太陽をバックに鈍い銀色の装甲が煌めく。狼の獲物は、
もそもそと動く三体の薄い灰色ヤゴ。

《STRIKE VENT》

ヴォルフがバイザーにカードを装填することによって電子音が鳴り、
両腕に三巨爪の武器・ヴァンスラッシャーが召喚される。ヴォルフ
が跳ぶ。薄い灰色の幼虫どもは只、おろおろと動き回るだけ。高く
跳んだヴォルフは三爪甲を装備した腕を広げる。くすんだ銀刃が、
紅ともオレンジともいえる色に染まる。その色は、今まで狩られて
きた敗者達の汚血の様だ。躰が重力に従いヤゴ型のモンスターであ
るシアゴーストに向かって落ちる。標的は散らばらず、一つに固ま
っている。都合がいい。今はその足りない頭に感謝だ。

「ふんっ!!」

着地と同時に、広げていたヴァンスラッシャーを閉じる。まるでシ
アゴースト達をまとめて包容するように。その包容により、赤子の
如く抱き締められたシアゴーストは、4つに切り分けられ永遠の眠
りについた。

*

太陽が沈みかけているミラーワールドに咀嚼する音が響く。戦闘を
終え、肉塊になったシアゴーストを見下す。アレから半年か。ヴァ
ンフェンリルと契約したヴォルフの姿は劇的に変わった。やすい
ヒーローショーから、ちゃんとしたヒーロー番組くらいランクが上

がった。え？分かりにくい？そこは気にしない。

ヴァンフェンリルは視線を感じながらも、無視しながら食い続ける。例外なく動物に好かれる彼だったが、ヴァンフェンリルとは陰悪だった。ゼウスに無理矢理契約させられたからか？動物、生物に好かれるのが当たり前だった狼夜は少しショックだった。

「そろそろ飯の支度しなければ……。帰るぞ、ヴァン」

名前が長い為、愛称としてヴァンと呼んでいる。しかし肝心のヴァンは『帰りたければ勝手に帰ればいい』と言わんばかりに食い続ける。ヴォルフは哀を漂わせ、ため息を吐き手頃な反射物に身を投げた。

*

「狼夜遅いよ」

モンスター狩りから帰った狼夜を迎えたのは、腹を空かせた美咲の文句だった。

「何やってたのさあ。いつもならご飯用意して待っててくれるのに！私お腹すいて泣きそうだったんだよ！？」

「ゲーセン。高校生活もあと少しなんだ遊ばせる。あと腹減ったなら自分で作れ」

今は2月。狼夜の高校生活もあと僅かになっていた。

「小中高で家庭科の調理実習で、必ず『頼むから動かないでくれ』
と言われてきた私に料理をやれと!？」

身長にあまり合わない胸を張りながら自慢に言ったが、眼は少し潤
んでいた。それもそのはず、彼女が良かれと思ってやった行動は全
て裏目に出ていたからだ。電子レンジの爆発、食材の爆発、うどん
の爆発e t c ……。もう爆発が何かの能力があるのではないかと思
う程、全てを爆発させてきた。昔を思い出したのか、美咲の眼から
涙が零れる。

「わりい……………」

「……………」

謝罪の言葉を言い、美咲の頭を撫でると台所に向かった。夕食の準
備をしながら、この半年を思い出す。ゼウス、ヴォルフを抜いた1
1人。最初に出会った龍醒。闘ったのは3〜4回か?どれも引き分
けか、邪魔が入った。邪魔を、とゆうか妨害してきたのはキメラ。
スペックだけで見れば最強なんじゃないか?何故ならキメラには契
約モンスターが?4体?居たからだ。確か…龍、鳥、虎、亀だった
ろうか。普通に闘っていたいれば、今も勝ち残っているか、もしかした
ら闘いは終わっていたかもしれない。

「馬鹿な奴……………」

馬鹿な奴だった。

こんな闘い馬鹿げてる!!ライダーの力は、争いではなくモン
スターから皆を護る為に使うべきだ!!

力を手に入れて、自分はコミックヒーローにでもなったつもりか？馬鹿げてる。馬鹿げてる……が、そんな馬鹿の思想に一時期乗ってしまった自分がいる。ゼウスを倒せば、ミラーワールドを閉じれる。そうすれば、『彼女』に起こる危険も減る。そういきまいていたが、簡単にコミックヒーローは死んだ。危険因子たるキメラをゼウスが龍醒と手を組んで排除した。死に方はカードデッキ如く腹部をズドン。デッキ穴を開けて動かなくなった。死体や遺品になる物は残ってない。4体もの契約モンスターに肉片すら残さず食らい尽くされた。

少し、本当に少しだが哀しかった。

「友達って……あんな感じなのか……？」

「さつきからぶつぶつ言ってるけど……どったの狼夜？」

「気にすんな。ほら、飯できたぞ」

「やったあ！」

*

夕食を終え、自室に戻った狼夜。適当にベッドに腰かけ、カードデッキを取り出す。ヴォルフのシンボルがキラリと光る。

「あと……2人」

そこで、ある疑問が浮かぶ。ゼウスも入るのだろうか。この闘いを開催した張本人を倒してしまったら願いも糞も無い。

『馬鹿な事に気を回すな。闘え』

いつの間にか、部屋の窓にゼウスの姿が映っている。驚きはしない。もう慣れた。狼夜が不法侵入の大神を見る。

「闘えってゆうけどよ。アンタが倒されちまったらどうすんだよ？」

『例え我が肉体が減じようとも、意識が精神体となり現世に残りこの闘いを見守る。無論願いも叶える』

「ハッ……幽霊になってもかよ。ご苦労なこったね。……しかし、どうやって願いを叶えるんだ？例えばアンタがこの世で一番の金持ちだとする。金で叶えられない願いもあるだろ？」

今まで謎だった考えを言った。こいつのこの自信はどこから湧いてくる？

『我は大神の名を持つライダー。願いはなんとしても叶えよう』

「だからどうやって」

『ヴォルフ。貴様では理解し難い事だ』

狼夜が顔を顰めた。馬鹿にしてくれる。しかしこれ以上話をしても無駄のようだ。ならば、疑問をもう一つ。

「俺のベルトの色は何なんだ？他の奴は銀色。だが、俺のは金。そしてアンタのは黒。どうゆう事だ？」

初期のヴォルフ、つまりブランク体の時は他のライダーと同じ銀色だった。がヴァンフェンリルと契約したら色が変わった。しかもゼウスも他のライダーと違い黒。何か意味があるのに違いない

「何か意味があるんだろ？ 答えるよ」

『……………ヴォルフよ。お前が特別だからだ。いや、？ 特別になった？』

「あ？」

ゼウスが自分のVバックルを指差す。

『この色は…？ 強欲？ を示す色。貴様のは？ 希望？ を示す。貴様が望めば、全てのライダーを凌駕する力を得る。そして貴様は、ゼウス（我）と同等の存在になる』

「は？ どうゆう事だ」

『望め、力を。願いを叶える為に。……………だが、貴様が我と同じにならないことを我は願っている』

「だから」

『明日。決着をつけよう。この闘いを終わらせるのだ』

そう告げると、ゼウスの姿が歪み、煙のように消えた。

「……………ちつ。んだよ。なんなんだよ！」

ゼウスののりくらりな返答に苛立つ、ベッドを蹴る。ガンツ！と鈍い音が狼夜の小綺麗な部屋に響いた。狼夜は痛みと、虚しさに襲われ、そのもやもやを忘れるようにベッドに潜り込んだ。

＊

翌日。美咲に朝食を振る舞った後、自室に戻る。今日が運命の日。自分が生きるか死ぬかが決まる日。

「死ぬわけにはいかない……！」

カードデッキを窓に突き付けた。腰にゼウスが意味深な言葉を残した金色のVバックルが出現する。

「変身……！」

シンボルが輝き、ヴォルフへと変身が完了する。その変身に応える様に、窓にヴァンフェンリルが映る。やる気でも湧いてるのかと鼻で笑ったが、どうやら違うらしい。ヴァンフェンリルの、人間でいう眼にあたる部分が濁り色の光を放っている。

「心配でもしてんのか？お前……そんなキャラじゃないだろ？」

また、鼻で笑った。正直に言えば少し嬉しさもあったが、あえて表に出さず平然を保ちミラーワールドに身を投げた。

＊

ライドシューターに導かれる様にたどり着いた場所には、龍醒とゼウスが待っていた。龍醒の手には既にソードベントであるドラグセイバーの二振り握られていた。

「準備万端…てか？なんだ結局3人で乱打戦でもすんのかよ」

『我は手をださん。貴様等が闘うのだ。その闘いの勝者に願叶とゆう祝福を…敗者は生を奪われ、屍の姿になってもらおう』

そのゼウスの言葉にはどこか影があり、そして何故だろう。ゼウスの言葉の影はヴォルフに向けられている様な。

「だったら…ちゃっちゃとやっちゃおうよ。私、あんまり我慢強くないんだ。ウズウズするんだよ。やっと、やっと叶うんだ…！…てね」

ドラグセイバーをジャグリングのように持ちかえる。その度にドラグセイバーがヒュン…ヒュン…と空を斬り、ヴォルフを威嚇する。

「ふん…血の気が多いな。まあ、どうでもいい」

最後に龍醒がドラグセイバーを大きく宙に投げる。それに合わせるように、ヴォルフも両腕に生えている双爪を構える。二振りのドラグセイバーは回転しながら空を舞い、龍醒が跳んだ。跳躍し、空中で双剣を手に取り重力と全体重を乗せた斬撃でヴォルフに斬り掛かる。ヴォルフが双爪で斬撃を受け止めると、火花が金属音と共に弾けた。

双爪を押し退けると、左拳で顎にアッパーを放つ。

「はっ！」

龍醒が取った回避行動は宙返りだった。バックジャンプによって2人の間に距離が空く。その隙にヴォルフがカードをバイザーにベントイン（装填）する。

《STRIKE VENT》

「よし……」

手に装備されたヴァンスラッシャーを構える。今度はヴォルフ自ら仕掛けた。両腕を開いた状態で突撃する。ヴォルフの走力、脚力はライダー中でも最速レベル。龍醒との距離を一息に詰め、右手の三爪甲で空気もろとも斬り裂く。龍醒は攻撃をドラグセイバーでガードするが、圧力に負けガクンと膝が地面につく。ヴォルフは攻撃の手を止めない。左右から何度も、何度も三爪甲を振り下ろす。

「っ……っ！」

ドラグセイバーを左右逆手に持ちひたすら防御に徹する。だが、この連撃に耐え続けるられるわけなく。ドラグセイバーの防御を弾き、肩から下腹部にめがけ、龍醒の軀に三つの痛みが走る。

「ふぐっ！？」

「おらぁ！」

ヴァンスラッシャーの攻撃に、全体の防御が緩んだ所にヴォルフのトウキックが入る。龍醒が蹴りにより、2、3度地面を転がったあ

と体勢を立て直す。

「ちっ」

軽い舌打ちを漏らす。素早さ、手数之多さに差があり過ぎる。一撃火力には自信があるが、それは同じスタイルか防御に徹するスタイルの敵のみに有効。その上、ヴォルフの素早さは別格である。今まで闘いが拮抗していたのは経験差のおかげだったとゆうことか。ならばと、ドラグセイバーを脇に挿み、カードを使う。

《ADVENT》

ガアアアアアアアアアアアア！！

天空から大地を揺るがす咆哮が轟く。蒼炎を纏い現われたのは全長4メートルの巨大な西洋龍^{テイル}。発達した脚の間接からは炎が吹き出す。両腕に一本ずつ大爪が生えた腕とその軀には捻れていたり刃の様に生えている角。長く雄々しい二本角が在る頭部。その爪からは脚と同じように炎が漏れだしている。

「F のバハートかよ……！！」

おどけた感想を述べたが、その存在感は圧巻だった。龍醒の契約モンスター・ドラグバハムターが大きく旋回し、ヴォルフを狙う。低空飛行で飛行するドラグバハムター。その風圧で地面が抉れる。腕の爪を地面に突き刺しながら飛行もしているので、2つの溝の様な物が出来上がっている。距離を詰めると腕を、爪を振り抜いた。

「くっ！！」

爪が当たる寸前、ヴォルフが自慢の脚力を発揮する。地面が凹み、割れる程の力で蹴り込む。これは？走った？とゆうより？跳んだ？とゆうべきか。実際ヴォルフもドラグバハムターのように低空で跳んだ。ヴォルフが居た場所は、ドラグバハムターの爪撃によって谷の様に抉られていた。

「お前の相手してたら木っ端微塵になっちまう……。だからこいつで我慢しろ！」

短い飛行時間を終えたヴォルフもカードを使う。絵柄は月夜に猛る銀狼。

《ADVENT》

ドラグバハムターが再度爪を振りかざした時、空中にもう一つ影が生まれた。

！！！！？

存在を察知したドラグバハムターが敵が居るであろう方向を向いた瞬間、顔面に稲妻のような迅さで痛みが与えられる。攻撃したのは『迅速の銀影』の二つ名を持つヴァンフェンリル。体格差などとるに足らないと言わんばかりにドラグバハムターを地面に叩きつけた。

「主人に似て野蛮なモンスターね！」

「知らねえよ！」

皮肉の買ひ言葉売り言葉をしながら、ドラグセイバーの剣撃をヴァンスラッシャーで防御する。そして龍醒が、好きなのだろうか得意

の回転斬りを放った。ヴォルフはバックステップで回避する。

「さっきからチヨロチヨロと……！」

声に苛立ちが混じっている。ヴォルフの攻撃は2、3入ったが、龍醒のは全て防御されるか躲^{かわ}されている。ストレスが溜まっているのか攻撃が単調になってきている。

「大分出来上がってきたな。ここが攻め時か」

対象的にヴォルフの精神状態は冷静だ。龍醒がドラグセイバーを横一閃に振り抜く。それを前転で回避した。回転している途中にカードデッキからカードを抜き取った。後ろから殺気を感じ取る。振り向く要領で龍醒がドラグセイバーをまた振り抜く。それに対してヴォルフはドラグセイバーが届かないギリギリまで前方に跳び、カードをベントインする。

《TRICK VENT》

ヴォルフが体勢を建て直し敵を見据え、三爪甲を構えなおす。するとヴォルフの姿が振れる。

「ちつ……厄介なカードを！」

振れただけじゃない。躰が五つに分かれた。ヴォルフが使ったカード、トリックベント。カード効果は『ライトイリュージョン』。何体かの実体のある分身を生み出す。囷にも、盾にも、攻撃手段にも使えるカードである。5体のヴォルフが交錯しながら龍醒を取り囲んだ。

「やあっ！」

「ふっ！」

「せい！」

「はああ！」

「だああ！」

各々の気合いを言葉に乗せ、同時に龍醒へ突撃する。5人のヴォルフが持つ、合計10の三爪甲が獲物を斬り裂こうと煌めく。

「うじゃうじゃとうつとおしい…なつと！」

語尾を強く発すると、躲す為に高く跳躍した。空中に避難した事でしばしの余裕が生まれた。その余裕で、愛する契約モンスターの状況を確認する。

「……………ひつどい」

ドラグバハムター。ミラーワールドに存在するモンスターの中でも最強クラスに属する一体。『蒼怨の戦龍』なんて格好つけた二つ名を持つ。二つ名を持つとゆう事はそれだけで凄まじいステータスなのだ。それが有無を言わずボコられている。馬乗り状態で顔面やら胸やらを殴られている。先程みた剛爪はどこにも無く、今は拳になっている所を見るとあの爪は収納がきくらしい。好戦的だなど軽く呟いた。あっちの加勢したい所だが、こっちも5人の人狼相手ていっばいいいっばいだ。龍醒の躰が落下し始めるとカードデッキからカードを手にする。

《STRIKE VENT》

ベントインをすると、両手に持っていたドラグセイバーを投げ捨てた。その代わりに空いた右手にはドラグバハムターの頭を模した手甲・ドラグケバロスが装備された。その荒龍頭甲を後ろに引き、少し溜めた後、思い切り5人のヴォルフに突き出した。するとドラグケバロスから蒼炎球であるドラグケバロス・フレアが吐き出された。フレアは地の人狼に直撃すると爆発し広がった。フレアは荒れ狂う蒼い海となってヴォルフ達を焼く。実体を持つ虚像は過大なダメージ（熱波）によって次々とガラスの如く砕けた。龍醒が地面に降り立つ。

「……………？」

蒼炎が晴れるが、そこにヴォルフの姿は無かった。今の一撃でやれた可能性は無い。やられたとしても、酷くて死体が残っている筈。ならば、クイックベントか？一度使われた事がある。10秒か20秒の間だけ高速で動く事ができる。あの炎に紛れれば、感ずかれずに使える。

「……………！！」

一瞬、眼の端に何かが移動したのが映った。速過ぎて上手く捉えられなかったが、確かにあれは銀色の残光。

「ビーンゴ……来るなら来い。焼き尽くしてやる」

ドラグケバロスを構える。荒龍頭甲の口部にはまた蒼炎球がチャージされてゆく。確かに高速で動き回る相手には、広範囲高威力を誇

るドラゲケバロス・フレアは適確な判断だろう。

これが只の高速移動だったなら。

龍醒の周りに飛び交う空気を裂く音。

「……………おかしい。おかしいよコレ……………！音が？多いよ？！？」

装甲が反射していると思われる明滅。そして周りを飛び交う裂音。だが、音が不規則過ぎた。いくら速いと言っても時間がたてば音は規則性を持つ筈。それが加速にせよ失速にせよかわらぬ事実。しかしヴォルフが発しているであろう音は、時には一方の音の直後に、時には同時に、時にはバラバラに。龍醒がはっと気付きドラグバハムーターの方を見る。ヴァンフェンリルと闘りあっていた筈のドラグバハムーターは、相手を見失ったのかキョロキョロしている。

「でつかい狼が居ない！？」

契約モンスターの消失。この時浮かび上がるのは最悪のシナリオ。その事に気付いた時には、背中と下腹部に激痛が貫いた。

「がふっ！！！！！」

背中にはヴァンフェンリルが下腹部にはヴォルフが、最大速度に達した1人と1匹の脚が入っていた。起こった事実を述べると、音速の速度を持ち空気層を突き破って進む戦闘機とはまた？違う速度？を用いた蹴りを入れるファイルベントを発動した結果だった。名を【ツインクルブリンク（明滅の閃光）】。なぜ違うか、そして技の

説明をしよう。戦闘機は空気層を突き破って進む。つまりは突き破る時の副産物として衝撃波ソニックブームが生まれるのだ。ヴォルフとヴァンフェンリルはそれに近い超高速で移動していたのにも係わらず、衝撃波が生まれなかった。空気層を突き破らず、？すり抜けた？。空気層の薄い場所をすり抜けることによって、行動数が増えるがヴォルフ自体にはあまり負担がかからない。更に唯一の情報取得手段として音と、たまに光を反射する装甲等が煌めくだけとゆう恐怖心を与え敵の行動を制限し、輝の尾を引く二つの蹴りで止めとゆう技である。ヴォルフ達が技（蹴り）を解除すると、龍醒は力無く倒れた。

「終わった……か？」

とうの龍醒はたまにぴくりと痙攣するくらいだ。ヴォルフが腰に手を置き、ふうと息を吐く。龍醒は動かないが、ゼウスも動こうとはしない。なら、まだ闘いは続いている。緊張を解かずに、あまり意味が無いがリラックスする。

「……うう……かつ……」

「おっと…回復が早いな」

龍醒がうめき声を上げ、立ち上がろうとするが痛みで力が入らない様子。

「で？どうする。お前はもう闘えない。大人しくカードデッキを壊されるか。まだ無駄な努力を続けるか？」

「嫌……だ……！私は…負け……」

「はあ…負けるわけにはいかないってか？そんな台詞は聞き飽きた

ぜ。お前もあれか？絶対に叶えたい願か？まあそうだよな。だからライダーでやってきたんだから。願は何だよ？金とかか？超人的な力か？」

他人の願には興味は無い。只ここまでやられた状態なのに、まだ奮い立とうと考えられる龍醒に興味が生まれた。別段キメラを殺られた怨み等は無。これが最後だから。最後にもった興味本位。

「いえよ。お前の望みは何なんだ？」

「……………」

「黙るか。ならしょうがない」

龍醒の腹と地面の隙間に脚を入れ、仰向けになるように転がす。

「じゃあ……もう終わりだ」

左手の爪を高く掲げる。後はもう、カードデッキに振り下ろせば全てが終わる。

『止める』

今まで動きがなかったゼウスが、ヴォルフの左手を掴み固定する。

「何だよ。何故止める。これはお前が望んだことだろう？それとも何か、こいつに情でもできたか？」

『確かにな。情とやらが生まれたのかもしれん。今までの我ならこ

んな事はしなかった筈だ。しかし情が生まれたとしたなら、龍醒に出はなくヴォルフ。貴様だ』

「あゝあ？何気色悪い事言っただよ。まさかお前、実は俺の親でしたとかゆうじゃないだろうな？」

小馬鹿にしたように笑う。ある意味笑えるが、ある意味では笑えない。

『そんな物では無いのは確かだ。只、？貴様が我と同じ？になるのを避けたいだけだ』

「……意味不明」

『だろうな。理解してないのが一番良い。理解は人を惑わす』

「取り敢えず手を離せ。そして説明しろ。何故俺がこいつを殺つたらお前と同じになるんだ？因みにその遠回しな言い方止める。分かってにくいし、小馬鹿にされてるみたいでイラつく」

ヴォルフがゼウスの手を振りほどく。取り敢えず龍醒からは目を離す。

『ヴォルフ……貴様の願いは姉の幸福。そして、龍醒の願いは両親の蘇生』

「それがなんだよ？早く本題を話せ」

『月見狼夜。本当に真実が知りたいのか？』

「だからさつさと」

『真実を知ってしまったら、その腰に光る？希望？がくすんでしまってもか？』

「ああ、クソッ！！何だよ！さつさと言えいいだろ！？」

遂に我慢の限界になり叫んでしまった。ゼウスは暫し沈黙し、真実を語った。

『カードデッキの所有者、及び装着者の名は月見美咲。貴様の姉だ』

「……………成る程。道理で親近感があると思つたら」

先程までいきりたっていたわりには、えらく冷めた反応だった。

「んで？外れたなアンタの考え。俺の希望だっけ？くすんでなんかないぜ。まあ確かに美咲に手を出した罪悪感はある。だけどそんなんで」

『我はそうゆう事を言っている訳ではないのだ。貴様の希望がくすむとしたなら、それは龍醒の願い』

「願い？両親の蘇生だっけか？確かに美咲は親父達が居たらとか口にしてる。むしろ美咲の願いで、美咲が幸せになるならこのカードデッキを自分自身で壊すぜ」

ヴォルフがおどけた様子で自分のカードデッキをコンコンと叩く。彼女がそれを望むなら、潔くカードデッキを壊して、気にくわない

が両親二人と自分と美咲の4人で暮らそう。それが正しいなら、それが彼女が心から望むなら。

「本当に！？わあ、嬉しいな狼夜」

《SWORD VENT》

後方から、嬉しいとゆうわりには酷く感情が籠もっていない声と、その声と似た冷たい電子音がした。声に反応し、振り向いた。

ズドッ！！！！

鈍い衝撃音と共に狼夜の腹をカードデッキごと蒼い突撃剣が貫いた。突撃剣はたいして太くなく、刺突剣^{レイビダ}を少し太くしたくらいか。何よりも衝撃だったのは、先程まで倒れていた龍醒が突撃剣・ドラグサーベルを手に立ち上がった事。

「いやあ驚いたな。ヴォルフの正体が狼夜だなんて。私も今知ったよ」

淡々と感情の無い言葉を並べながら、ドラグサーベルでヴォルフの腹の中をぐちゃぐちゃと掻き乱す。

「うぎ…があ…あぐう…！！！！」

刃が腹の中で筋肉や血管をぶちぶちとちぎり、ミンチにしていく感覚が嫌でも伝わってくる。痛みで頭がショートしそうになる。

「コレ。狼夜が言ったんだよ？私の願いの為ならって。だから怨まないでね？」

痛みで気絶しそうな中、ひたすら考えた。ゼウスが言った事は本当なのか。これがあの美咲？昨日や今朝に、自分に笑顔を向けていた彼女なのか。

『強過ぎる願い、欲望は人を狂わせる。生きる気力が強欲纏う欲望しかない、狂気の修羅になる』

ゼウスの声が聞こえたが、そんな物は直ぐに頭から追い出した。否、今は目の前の美咲らしき者しか考えられなかった。

「なん……で…！？」

痛みの中、無理矢理喉の奥から声を絞り出した。

「うーんとね。お父さんとお母さんの温もりを知ってたからかな。狼夜ちっちゃかったからね。忘れちゃったんだよ。でもね私はしてる。だからお父さん達が死んじゃった時は本当に哀しかった。その時に狼夜がその代わりになろうと頑張り始めたんだよね。お姉ちゃんお姉ちゃんって、私の後ろにひっついてた狼夜が急に大人びて美咲って、少し可笑しかったよ」

ケラケラといったものに笑ったが、手を休ませずに動かし、確実に狼夜の内臓を駄目にしていくな。ギリギリ形を残していたカードデッキも崩れ始める。

「なんで……なんで…お姉……ちゃん」

「アハ、お姉ちゃんって昔を思い出すね。そんな狼夜の頑張る姿が健気で、可愛らしくて、とてもウザかった」

より強くドラグサーベルを突き刺し、五臓六腑をいじくり回す。

「助けて…助けてよ…」

認めたくない現実を突き付けられたせいか、狼夜の言葉が幼くなつた。いわゆる幼児退行とゆう物だ。

「えーなんで？この結果は狼夜が選んだ事でしょ。ゼウスがアレだけ止めたのに、なんでだろうね？あの自分勝手かつ自己中心的なゼウスが、狼夜の心配するなんて。まあどうでもいいや。そうだ。最後だからちゃんと教えようか。こうなつた理由」

狼夜が震える手でドラグサーベルを引き抜こうとするが、力が入らないせいか微動だにしない。

「無理なんだよ狼夜じゃあ、足りないんだよ狼夜じゃあ。いくら私に貴方が愛を捧げてくれても、結局は哀にしかない。私が求めているのは兄弟愛なんかじゃない。両親からの絶対的な愛。この世にはびこる愛なんか足下にも及ばない。私を産み出してくれた二人の無性の愛。そんな事も理解せずに私に尽くしてくれた狼夜が、ウザくて、滑稽で、憎くて、虚しくて、醜くて、殺したくて、

」

様々な侮蔑の言葉を、狗の如く^{いぬ}尽くしてくれた弟に吐き出した。対して狼夜はブツブツと呟き、放心状態に近かった。突然、美咲が片膝をついた。

「……!? とお……やっぱダメージでガタが来てるのかな？ねえ聞いてよ。今の私凄^{こわ}いんだよ。本当なら動けない筈なのに、願

「……やっぱりアンタウザいよ」

そして、全てを締め出した狼夜の頭は真つ白になった。何も聞こえない。何も感じない。何も見えない。だが、頭の奥にボンヤリと浮かんだ？ 聞こえた？ どっちでもいいが、ある言葉がポツンと生まれた。

《SURVIVE》

*

[illegible]

意識がはつきりと覚醒した時、狼夜は絶叫していた。バラバラの肉塊となつた唯一の肉親たる美咲の頭を持つて。何も覚えていない。気付いたら凄まじい力で引きちぎられた美咲だった物と粉々になつたカードデッキらしき物が目に入っていた。狼夜、ヴォルフ自身は腹の傷は勿論、カードデッキも傷一つ無い状態だった。

[illegible]

喉が破裂するんじゃないかと思うほど叫んだ。その手に、変身が解け素顔となった愛する者の頭を抱えながら。

『？サバイブ？……我の場合は、欲望が強く成り過ぎた……つまり？強欲？を示した時に現れた。貴様は、？希望？を踏み躪られ、凌辱された今この時姿を現した。？サバイブ？とは、強い生きる目標を示すか、それ無くすかでその力を与える隠し札。我らのこのベルトは、その候補を表す。しかしこの？サバイブ？を手にしたら人とは言えぬ別の何かに変化してしまうと言える。我が生きる証人だ』

ゼウスが持つ願いを叶える力とは、サバイブを手にした副産物だとゆう。？強欲？を示したゼウスに与えられた力は？全能？。全てを手に入れ、全てを失う力だ。ゼウスが絶叫し続けるヴォルフに近づく。

『貴様にこの領域に達して欲しくなかった。？全能？を手にした我には、虚しさしか手に入らなかった。？全能？を手にした我がなぜこの闘いを止めなかったのか、それは貴様がいたからだヴォルフ。例え闘いを中止しても、選ばれた貴様ならいずれサバイブ　？神の領域？に達してしまうだろう。だから闘いを続行し、貴様を監視した。だが、無駄になったな。純粋な貴様は、我の様になってほしくなかった。コレが我に残った最後の人間らしき感情だ』

ゼウスが接近した事によって、ヴォルフは沈黙した。しかし顔を向けようとはしない。

『さて……哀しき勝者よ。祝福を与えてやろう。貴様の願い　』

「消える。この世から。こんな闘いを生んだ、彼女の内面を引つ張りだしたんだ。代償としてこの世から何も残さず消え去れ！！！！」

彼女の再生は望まなかった。望んでも傷つくだけだから。彼女も、

自分も、これ以上傷つきたくなかった。

『……承知した。その望み、引き受けた。さらばだ、望まない祝福を受けた兄弟よ』

すると、ゼウスの躰が徐々に粒子化が始まり、最後はガラスが崩れ落ちるようにその生涯を終えた。ヴォルフは胸に抱えていた美咲の頭を起き立ち上がり、叫んだ。その叫び声はミラーワールド中に轟き、全ての終焉を伝えた。

*

願叶の闘いが終焉を終えて数日。ミラーワールドは未だ健在である。管理者であったゼウスが消滅すれば、対消滅とたかをくくっていたがどうやら違ったらしい。開いた物（世界）は、閉じなければいけない。主を失った世界にはミラーワールドも居るが、活動はあまりない。統率力を失ったのだからだろうか。もともと知能の低い生命体だ。元の活気ある餌の狩猟はまだ先になるだろう。ライダーの力もまだあるが、最後のライダーは変身するだろうか。

そして狼夜は、180度変わった。とても明るくなり、社交的になった。周りの人間も不審に思ったが、前よりも付き合いやすくなった事や、何よりも狼夜自身の才能で直ぐに馴染んだ。だが、直ぐに高校生活が終わってしまったのだが。涙の卒業式も終わり家路についた狼夜。昔ではあり得なかっただろうが、卒業式の狼夜は誰よりも号泣していた。家につき、ドアを開ける。家の中は？たいして？変わっていない。その？たいして？を上げるとすれば、両親の仏壇が無くなった事。何故無くなったか、どこに行ったかは狼夜は覚え

ていない。余計な物を無意識に排除しただけだから。取り敢えず着替える為に自室に向かう。いつもどおり、部屋のドアを開けた。

「あら。お帰りなさい。どうだった？卒業式は」

小綺麗な部屋の中央に黒い西洋の甲冑を付けたつり目の仮面ライダーがいた。

「えっと……？」

一瞬、考えた後黒い仮面ライダーを上から下まで観察する。すると腰のバックルに眼が止まる。ゼウスと似た黒いVバックル、ベルトのバックル部に装填されている荒々しい龍のシンボルが刻まれた黒いカードデッキ。もうこの世には、自分以外は持つていないと信じていたカードデッキ。そこで狼夜がとった行動は。

「取り敢えず……お茶飲みます？」

この数ヶ月で狼夜は凄まじい順応性を手に入れていた。

*

「たいした物はありませんけど、どうぞ」

「ありがとう」

今に案内し、テーブルに座らせ茶菓子とお茶をもてなす。黒い仮面ライダーはお茶を受け取ったが、あのままでは飲めないだろう。

「あの、お名前は？」

「リュウガ。仮面ライダーリュウガよ」

「それじゃありゅうがさん。貴方は一体……？そしてそれはカードデッキですよ？」

狼夜の頭に過つたのは、またあの闘いが再開されたのかとゆうこと。

「うーん。何て言えはいいかしら？まずはカードデッキ。確かに私のカードデッキは貴方のもと同じ物。だけど違う。私は別の世界に存在する、デッキシステムのライダー」

「あの、ますます意味がわからないんですけど」

「簡単に言えば私も、貴方も、？龍騎の世界？から分岐した世界のライダー」

「……………???」

狼夜の頭上に分かりやすく？マークが浮かぶ。それにたいして、リュウガがため息を吐いた。

「本題に入りましょうか。仮面ライダーヴォルフ、貴方はこの？ヴォルフの世界？での役目を終えたの。今貴方に残っているライダー力はこの世界にとっての残りカス……」

「残りカス！？」

まさかの残りカス呼ばわりにショックを受ける狼夜。

「その残った力で助けて欲しいのよ。私達の世界幻想郷を」

「幻想郷……？」

「詳しい事は返事を聞いたら話すわ。私はもう帰るから、良い返事をしたくなったらこのカードを使って。そうすれば私の家に行けるから」

リュウガがカードデッキから一枚のカードを抜き取り、狼夜に渡した。カードの絵柄は異界の門、カード名は？ G A T E V E N T ？。

「それは私が持つ力と組み合わせて作った特注品よ。使用方法是普通のカードと同じ」

そういつて、リュウガはテレビの液晶画面（反射物）に飛び込んだ。まるで嵐のような人だった。説明もかなりザックリだったし。

*

その夜。狼夜はヴォルフになっていた。即決とゆうか、助ける為とかではなくて、逃げたかったからだ。この家から、この世界から。ここにいたら思い出してしまうから。『彼女』を。今の狼夜の記憶の中で『彼女』はモヤモヤとした形の無い物に成り下がっていた。自分の全てだった『彼女』は、自分の全てを否定した。ようは自己防衛。記憶の『彼女』から自分を護る為に、『彼女』の記憶を壊し、『彼女』と共に歩いた自分を壊した。そして今度の自己防衛は逃避

だった。

逃避の為に少年は異界の扉を叩く。

《G A T E V E N T》

幻想の都に、少年（自分）を捨てた青年（自分）は、逃げたのだった。

『番外編EPISODE・2／旅立つヴォルフ』（後書き）

狼夜「……………ねえ、なんか足りなくない？」

え？何がですか。

狼夜「お前予告ではゆっくりとの出逢いもやるって言ってなかったけ？」

ああ、それはですね。スランプのせいでペース配分も出来なかったし、最後は精根尽き果てしまいこうなりました。

狼夜「じゃあ番外編続けるのかい？」

いいえ。次回から本編です。

狼夜「え、じゃあ俺の話は……………」

今回で終わりです。ゆっくりとの出逢いは別の話でやろっと思えます。

狼夜「自分の言ったこと護れよ」

いやだから、それはスランプで…

狼夜「甘ったれた事いつてんじゃねえよ！！他の作家さんはめげずに頑張ってたんだよ！根性見せる！」

だが、断る。とゆうわけで今回はこれで。次回はインペラー初登場

の回、『蹴撃のインペラー』。次回もよろしく願います！
ではでは。

『EPISODE・12/蹴撃のインペラー』（誤字修正版）（前書き）

明けましておめでとうございます。今年初投稿の仮面3です。

新年とゆう事で前書きで新コーナー『東方とか仮面ライダーもしくは全く関係無い奴の皆が知っているであろう本当なそーなのかーよく分からない豆知識』

です。タイトルは気にするな。とゆうわけで豆知識。

ミスチーの豆知識

『本来ミスティア・ローレライとは固体名ではなく一族（群体）の名称であるため本名は不明である』

では本編をどうぞ。

『EPIISODE・12/蹴撃のインペラー』（誤字修正版）

博麗神社

幻想郷の東の端の端、外の世界との境界に位置する神社であり、外の世界の人里からも幻想郷の人里からも離れた山奥にある。結界の管理やら何やらで幻想郷の中でも重要とされる神社。神社はそれなりに大きい建物だがほとんどが住居用スペースで、神社としてのスペースはあまり広くない。この神社の巫女の名が博麗霊夢。強大な力を持ち、幻想郷の霊長類ヒト科最強生物である。しかし巫女の肩書きを持ちながら、脇を露出していたり、剩え大抵の二次創作動画では臍^{へそ}すら露出する。コレが本当に汚れ無き処女^{おとめ}しかなれない巫女なのだろうかと考えた作者であつた。博麗霊夢とは酷く言えば幻想郷を代表する露出狂の1人である。

*

「おゝい霊夢う。いるか？」

気の抜けた声を出しながら、神社の居住スペースずかずかと入り込む者がいた。ノースリーブの服に腕には鎖を、さらには丸・三角・四角の分銅を付けている。栗色の長髪の前には長い二本のねじれた角？。小さな百鬼夜行と謡われる幻想郷に現れた鬼幼女、伊吹萃香である。因みに鎖は『鬼』を表し、丸・三角・四角の分銅はそれぞれ『密』『疎』『彼女自身』を表している。萃香が居住スペースの居間部の襖を勢いよく開ける。

「うおつと！？」

そこにはとの脇を露出した赤白色の巫女服らしき物を着ている少女がお茶を飲んでいた。萃香の来訪に少し驚く。

「あんたもうちょつと静かに入ってきなさいよ。お茶がちょつと零れちゃったじゃない」

コレが先程表記した霊長類ヒト科最強生物の博麗霊夢である。

「遊びに来てやったぞ。お酒くれえ」

「いやいや、ここ普通お茶を要求するところでしょう。あとあんた最近魔理沙に似てきたわね」

「そうか？」

萃香が霊夢の前にちょこんと座る。そこで霊夢は萃香がいつもと違う事に気付く。

「あれ？萃香あんた瓢箪ひょうたんはどうしたの？」

萃香がいつも持ち歩いている『伊吹瓢』。青色の瓢箪であり、この瓢箪は酒虫という少量の水を多量の酒に変える生物の体液が塗布されていることによって酒が無限に沸き出るようになっていて。ただし、転倒防止のためのストッパーが付いており、一度に出る酒の量は瓢箪の大きさ分のみであるとゆう呑んべえ必須アイテムである。その瓢箪が無いとゆうのは些か不審だ。

「壊れて修理に出してる……。にとりの所に」

しゅんとした様子でうなだれた。萃香の話では、最近新聞等を騒が

せている？鏡の中から現れる怪物？に奇襲されたい。その時に少し瓢箪が損傷したただだが、撃退する時に自分の能力で巨大化して、怪物ごと本格的に壊してしまった。

「それあんたが10割悪いんじゃない……」

「いや！怪物が9割悪い！！」

「あつ、ちゃんと自分が悪いって分かってるんだ」

「うう……」

萃香の話を受け流しながらお茶を啜る。取り敢えず酒は吞ませるだけの余裕が無いからお茶をだす。それを萃香がしぶしぶ飲み、吹き出した。

「なにコレうつす！？」

「はあ？どこがよ。このお茶の葉まだ56回目のよ。まだまだいける」

「56つて…56！？どんだけ使ってるの！？どんだけお茶好きなの！？」

「このお茶の葉は258回はいける……！！」

「一回目がどんだけ濃いんだよ！！そしてお前の味覚はトリのG7なみか！？」

？G7（GOURMET7）？。IGO主要加盟国より選出された

7人の？味覚マスター？。25メートルプールに溶けたわすが1粒の砂糖の味をも見分けるといふ驚異的な味覚の持ち主。

「あんたも説明しなくていいーから！！」

「いやー、萃香のツツコミ冴えてるねえ。最初は私がツツコミ役だったのに」

「メタ発言止めなさい。今そう言うのに風当たり厳しいから」

再度、霊夢がお茶を啜った。流石に萃香はまた飲み気が起きなかったのか、お茶を寄せる。そんな萃香を余所に、霊夢は美味しそうにお茶を呑む。

「しかし霊夢う？この？異変？解決しなくていいのか？」

幻想郷に現れた謎の怪物。主に異変解決と妖怪退治を生業としている霊夢がこの？異変？を放置しているのはおかしいと萃香が言った。鏡の中に潜む怪物とは、長い歴史を持つ幻想郷でも前例が無い。

「霊夢がやらないと、魔理沙とか咲夜、2Pカラー巫女に取られちゃうぞ？この異変」

因みに2Pカラー巫女とは東風谷早苗である。

「新聞を見るかぎりでは、仮面ライダーとかゆうコスプレの二人組が適役らしいじゃない。そいつらにやらせとけばいいじゃない。私だっていつも異変解決する訳じゃないわ。いくら異変解決や妖怪退治しても参拝客が増える訳じゃないし。悟ったのよ」

「それ、職務放棄だぞ。そんなもん悟るなよ……」

因みにだが、よく二次創作作品で霊夢は貧乏とゆう設定が多々見られるが、東方Project本編の霊夢は異変解決などをしているので割と裕福な生活を送っている。そしてこの作品では読者皆様の親近感を考えて、貧乏巫女設定をさせて頂いています。あしからず。

「でも二人だけだろ？心元無くないか？」

文が出会った仮面ライダーは未だタイガ、ゾルダのみ。なので新聞では『仮面ライダーは二人組』と、文ご自慢の妄想で構成された記事で掲載されていた。

「文の記事曰く、『疾風迅雷剛力無双、緑の騎士は幻想郷には無い弾幕発射器を操り、虎の騎士は大斧を手にし、二足歩行の虎の怪物を使徒に持つ』ってさ。どこに心配する必要があるってのよ？」

自分で仮面ライダーの闘いを見ていないのによくしようけらの話だけでここまで書けた物である。想像力の中2で養われると坂田さんがタイトルコールで言っていたから、文はさぞ楽しい中2生活を送っていたのだろう。……鴉天狗に中2時代があったのだろうか……？まあ、そこは幻想郷の鴉天狗。中2時代があったかもしれないし無かったかもしれない。

「じゃあやっぱりやらないのか？」

「……………やってるわよ」

霊夢が、萃香に聞こえないくらいの声で呟いた。

┐
^
?
└

「なんでもないわよ。てゆうか萃香。ちよつと急用が出来たから留守番頼んでいい？直ぐに済ませるから」

「え？あ、うん。良いけど……急用って？」

急用が出来たと言ったがそんなそぶりは無かった。霊夢はそれを立ち上がりながら応える。

「え」と……あれよ。人里の園咲の主人が三色になつた半分こ怪人に両足飛び蹴りを食らつて、衝撃で燃えてる自宅に放り込まれたから救出してくる！」

霊夢が親指をぐっ！と立てウインクする。

「何でそんな状態になったの園咲の主人人々人々人々人々人々人々人々人々人々人々人々」

「！！！！？」

「それだけじゃないわ！飼猫も半分こ怪人に鉄の長い棒で弄ばれて奪われた上に、頭で飼っていたでっかいペットも空飛べるようになった紅いバイクが火だるまの状態で突進して貫かれて殺されたから慰めてくる！」

「さんざんだな園咲の主人！」

「ええ、だから今錯乱して燃えてる自宅の中で踊り狂ってるわ。しかも1人で」

「頭もさんざんだよ園咲の主人！！てゆうか霊夢。何でそんなリア

ルに情報が？」

「園咲の主人、テレパシーもどき使えるから」

「嘘お！？」

「ええ嘘よ。本当はコレで分かったの」

霊夢が何の為に付いてるかよく分からない腕のアレから何かを取り出す。それは緑色と銀色で装飾された『かんじゅーす』とゆう物だ。それを萃香に手渡す。

「お……おお……お？」

使い方がよく分からないのか首を捻る。見兼ねた霊夢がかんじゅーすのプルツク部を開ける。その時、手の中のかんじゅーすが大きく跳ね空中変形する。変形した形は昆虫のバッタに似ている。

『バッタ！バッタ！』

「おお！！霊夢霊夢！なんだコレ！な……なんかちょっと可愛いぞコレ」

「それは通信機よ。紫から貰ったの。園咲の主人の件もそれから情報を得たのよ。それで遊んでて良いから。でも遊び過ぎちゃ駄目よ。冬ごもり失敗したキリギリスみたいに動かなくなるから。じゃよろしく！」

そう言い残し、霊夢は走っていった。今に残された萃香はじーとバツタを見る。

『バツタ！バツタ！』

バツタが鳴き声？を上げながら、その身を萃香の膝にすり寄せた。その行為にキュンと来てしまった萃香。

「バツタ！バツタ！」

『バツタ！バツタ！』

バツタとじゃれ合う萃香。萃香とバツタの楽しそうな声が、博麗神社に響き渡ったのだった。

*

萃香に留守番を任せ、神社を出た筈の霊夢は神社の裏側に居た。そこで手頃な石を見つけると、石の上に手鏡を置いた。

『やってよかったのか？アレ』

アレとはバツタ……つかバツタカンドロイドでいいや。アレは決して幻想郷に多くある訳ではない。鏡の中の生物は霊夢がバツタカンドロイドを萃香にあげたと思っているらしい。

「誰がやるっていったのよ。遊んで良いって言うただけ。萃香がただこねてもし盗られても、藍に油揚げで交換してくれと言えはくれるでしょ」

『そううまくいのか？まあ、私には関係無い。それよりも、ミラーモンスターだ』

霊夢の急用とは人里の園咲の主人ではなく、人里に現れたミラーモンスターの事だった。そして情報の入手方法は、湯呑の中のお茶だ。お茶が反射物の役割を果たし、霊夢に情報を伝えていた。

『私も、？仲間達？も腹を空かしているさっさと終わらせてくれ』

「ハイハイ。分かってますよー。喜んでえー」

気の抜けた生返事を返し、だるそうに懷から仮面ライダーの証である茶色のカードデッキを取り出す。そして石の上の手鏡にカードデッキを掲げる。霊夢の腰にVバツクルが装着される。

「へ〜んし〜ん……」

本当に面倒くさそうに掛け声を上げ、カードデッキをVバツクルに装填する。例の如く霊夢はマスクと両肩にレイヨウの二本角が生え、筋肉を強調した黒と茶色の装甲、右足の脛にセットされているアンクレットタイプのバイザーのライダー、仮面ライダーインペラーに変身した。インペラーは自分の腹を手で触り、ため息を吐いた。

「私もお腹空いたなあ〜。生命エネルギーって美味しいのかなあ」

『どうやって喰うんだよ？』

「巫女に不可能な事はお賽銭を集める事以外あんまりない」

『……………なるほど。出来ない事が多々あると』

契約モンスターの皮肉を身に浴びながら、インペラーは人里目指してミラーワールドに飛び込んだ。

*

幻想郷の人里。一見古風な造りの建物が目立つが、度々現代の道具等が幻想入りしたり、にとりの様な人間に友好的な河童等が発明品を提供したりしているので割と現代に近い所も見られる。あとたまにスキマ妖怪がハマった物をばらまいたりもしている。なので幻想郷の人里は古風と現代が入り混じった日光江村みたいな所だ。人里とゆうくらいだから、何時もは活気があり賑わっているが、今は違う。人里の大通りをゆらりと歩く影が一つあった。バクラーケン。イ力型のモンスターだ。腕と足にある吸盤が特徴であり無数の触手で敵の動きを制限し、嘴のある頭からは煙幕を吐き敵の視界を塞ぐ。腹にある模様は紫。そのミラーモンスターが人里を襲撃し、我が物顔で歩いている。住人達は新聞や風の噂で聞いた化け物が暴れた為避難や自宅に隠れ震え上がっていた。バクラーケンの襲撃に住人達の頭にあつた救いの主は二種類。まずは新聞にあつた仮面ライダー。しかし住人達はそんな得体のしれない者より、もっと親しい者からの救いを求めていた。寺子屋の教師を営むあの女性に。だがその女性は一向に現れる気配は無い。そのことにより住人達の恐怖心が煽られていた。

今までうろつろしていただけのバクラーケンに変化があつた。道の真ん中でピタリと動きを止め、適当な民家に眼を向け口部分から涎のような物を垂れ流す。今バクラーケンの行動を促している感情は、最も原初の階層に刻み込まれた本能。

ハラ…ヘッタナ…。

食欲である。その民家に向けて脚を動かす。只、己の空腹を満たす為に。人間等には理解出来ない鳴き声でうめき声を上げる。民家の中には住人が。当たり前か、喰うために感覚を研ぎ澄まし選定した家なのだから。住人は母親とその息子。父親は仕事か何かだろう。バクラーケンが現れるまでは息子は外で遊び。母親がその光景を微笑ましく眺めていた。ありがちな景色だが、この親子にはそれで十分な幸福だった。その幸福も、あと数十歩で汚い咀嚼音に潰されるかもしれないのだ。一步、一步と進む事によって涎が地面を濡らす。あと少しで喰える。柔らかい子供の肉、少し味が落ちるが満腹を満たしてくれる親。あと少しで。

「ひゅううう………」

目標の獲物に集中しているバクラーケンは気付かない、頭上の蹴撃士に。太陽光を背に、自慢の脚力で跳んだインペラーがバクラーケンの頭を目標狙い、上空から急降下。頭に両膝蹴りを放った。

「ちゅっ ど おん！」

まずは頭にインペラーの膝がめり込み、次にバクラーケンの頭が地面にめり込んだ。口から漏れる程溜め込んでいた涎は、地面に口ごと押しつけられた為に四方八方に飛び散る。

「うわ、きつたな…い……」

バクラーケンの涎の量に引きながら、自分の脚等に付かないように

高く跳び地面に着地する。ピクピクと触手や腕を痙攣させるバクラーケンを、脚を曲げ屈んだ状態確認する。

「えーと、死んだかな？コレで爆発してくれたら楽だけど」

痙攣するだけのバクラーケんに、人差し指を向ける。『再起不能が分からなかったら取り敢えずツンツンしとこう』の法則である。そおくと人差し指を近付ける。この法則をやる者の心理状況はあの端に棒が当たるとビリビリするアレと同じだ。因みにチキンだと飛び上がるほどびびる。作者は一度、棒がぶつかるとホラー画像が現れるフラッシュゲームをやって失敗したら思考が数秒止まった。いやマジで。人差し指がバクラーケンにあと数センチに迫った。

その時、バクラーケンの触手が弾かれた様に動き、その吸盤でインペラーをからめとろうとする。

「よいしょとっ」

バクラーケンの攻撃を、屈んだ状態でバックジャンプで回避した。どうやらインペラーは読んでいたらしく、軽い口調を止めていない。攻撃を回避されて苛立っているのか、バクラーケンは腕を地面に打ち付けてから立ち上がる。

「めんどくさ。お腹空いてるんだからあんまり動かさないでよ」

インペラーが腹をぽんぽんと叩く。そのジェスチャーを意味のまま受け取ったのか、威嚇と受け取ったのか分からないが、取り敢えずインペラーは倒すべき相手と認識したらしい。触手を振り乱しインペラーに突撃する。

「烏賊か…烏賊…うん。ここはベターに茹でるか！」

バクラーケンはインペラーを敵と、インペラーはバクラーケンを食材と認識したらしい。因みに読者の皆様方、ミラーモンスターは食べられません。食べたら腹を下す可能性が高いです。そもそも刀に斬り付けられたら火花が散るほど堅いので噛めません。バクラーケンの突撃を見ると、インペラーはため息を吐き己も駆けだす。バクラーケンが腕を振り上げる。

「やああっ！！」

まず腕を右脚の蹴りで弾き、軀を回転させ軸脚を左から右に変える。そのまま回し蹴りの要領で左脚のソバットを放った。インペラーの脚裏がバクラーケンの顔面に直撃した。バクラーケンの顔面が少し凹んだように見えた。『ぶぎゅる！』と、人間にも理解できる悲鳴を上げ蹴りの威力でぶっ飛んだ。バクラーケンが飛びたくもないのに飛んでしまい、民家の壁を破壊しながら中に突っ込んだ。

「あ…顔凹んでた……じゃない！ヤバッ、民家に飛ばしちゃった！」

自分のミスに、焦った様子で民家を目指して駆けた。

砂ぼこり舞う民家の中。壁の木片やら破壊された家具の破片が山のように積もっている。その山の中でうめき声を上げ微かに動くバクラーケン。軀を蝕む痛みの中なるべく早く、なるべく軀を労りながら起き上がろうとする。反射物があればミラーワールドに回避できるが、生憎そんな物は無い。そして、休む暇も無い。軀に負担を掛けないよう動いていたのに、脚を掴まれた感触のあと視界が反転した。バクラーケンの後を追う民家に入ったインペラーがとても乱暴に脚

を掴み、バクラーケンが、もしくはインペラーが開けた穴めがけぶん投げた。視界が反転したすぐ後に躰が砂利や砂の地面に擦り付けられ、強打した。バクラーケンが嗚咽を漏らし立ち上がる。

「人が居なくて良かった……のか？まあ……烏賊は満身創痍だし、よしとするか」

家を破壊した片棒を担いだとゆうのに、全く反省の素振りを見せない樂園の素敵な巫女。民間から出ると、インペラーが脚をぐぐつと曲げ、跳躍の準備をする。その動作を見ていたバクラーケンは口から煙幕を吐き出そうと躰をならせた。煙幕を吐かれたら取り逃がす可能性が高くなる。しかしそこは脚力（ジャンプ力）が長けているライダー。インペラーの方が溜めが早くに終わり、低空で跳躍する。結構な距離があつたにも関わらず、一息に詰められた。吐き出そうとした寸前に頭を両手でガシツと掴まれ、脛にバイザーが装備されている右足の膝を顔面に叩き込む。しつこく顔を攻撃されたバクラーケンの嘴は砕け、口自体はひしゃげた。インペラーは技を解き、じつとバクラーケンを見た。バクラーケンは既に虫の息。あと少しとお約束のアレになるだろう。そう判断したインペラーは軽くトンと跳んだ後、バクラーケン自体を空高く蹴上げ、打ち上げ花火の如く空を舞わせた。十分な高さまで行くと、バクラーケンはぼこぼこにされた痛々しい顔で爆死した。

「やっと終わった。あー、お腹すいたー烏賊食べたかったなあ」

爆死したバクラーケンが居た場所には、ふわふわと浮く生命エネルギーが。すると何かの影が横切り、生命エネルギーを手に消えていった。

「あつちも済んだみたいだし、帰ろうかしら」

パートナーの依頼を終えたインペラーは、人里に背を向け立ち去ろうとする。反射物に飛び込めば早く帰れるが、生憎インペラーが使った反射物は人里の外。人里の中にも見当たる反射物は無い。だからと言って、ズカズカと民家に入る訳にはいかない。一度人里をでなければ。すると。

「その、待て！」

呼び止められた。もしや破壊した民家の住人が戻って来たのかと内心ビビる。恐る恐る声が出た方を向くと、めんどくさそうにため息を吐いた。これで何回目だろう。

「その民家。間接的とはいえ破壊したのはお前も同じだろう。弁償、もしくは直していくのが筋とゆうもの！」

面倒な奴に絡まれた。良くて言えば銀髪、悪く言えば白髪のボブ。低い身長、細い腰の後ろには幽霊十匹分の殺傷力を持つ長刀『楼観剣』と、人の迷いを断つ短刀『白楼剣』の二振りを納めている。買い物帰りだろうか、買い物籠を片手に登場した魂魄妖夢。幽霊を殺せる刀持ってるならBLEACHにも出演できそうな生真面目娘。このタイミングで、こいつとは間の悪い。さっさと逃げてれば良かったと後悔する。

「聞いているのか？聞いているのら返事をしろ！」

偉そうに…、大食い女にペコペコしたり、みよんみよんと言っているくせに。只今イライラしているために心の声のガラが悪くなっている霊夢。

「聞こえてますよ。なんなんっすかぁ？」

中身がばれないよう、声色と口調を変えている。多分妖夢はガラの悪い青年かと思っっているかもしれない。

「だから言っているだろう！ 民家を直せと！」

「俺が？なんで？俺はここを怪物から守ったんすよ。感謝はされど、皮肉を言われる筋合いはありませんよ」

「貴方、名前は？住人に報告しておく」

こつゆう時は本当にうざったく感じる。普段は好感の持てる良い娘なのだが、正義感の強い真面目っ子は神経を逆撫でする起爆スイッチになる。

「さ、名前は？」

「仮面ライダー……インペラー……コレでいいすか？」

「……お前が今世間を騒がしている仮面ライダー。しかし新聞の記事では仮面ライダーはあの二人だけと……新顔か？」

「仮面ライダーは13人いるんすよ。つかもういいすか？帰って」

「良い分けないだろう！家を直せと言っているんだ」

マスクの後頭部に手を置き、またまたため息を吐いた。その状態で妖夢に近づき目線を合わせる為に屈む。変身前なら同じくらいの身長だが、変身している霊夢の今の身長は2メートル近い。マスクに置いていた手を離し、黒いリボンを付けた妖夢の頭に置いてガシガ

シと撫でた。

「修理やらせたかったらですね。…………グタグタ言ってねえで力づくでやれよ糞餓鬼」

とても低い声で、とてもドスを効かせた声で、とても怒気をいり混ぜた声で妖夢を威嚇した。頭を強く撫でられたせいで俯いた状態だった妖夢が頭を上げる。刃のような磨ぎ澄まされた眼光で、氷刃の煌めきを灯らせた瞳でインペラーを睨み付ける。

「……………分かった。そうしよう」

次の瞬間、妖夢は楼観剣を抜刀し、インペラーは脛に装備されたバイザーを、常人には不可能な速度でぶつけ合った。

*

二人が言い争っていた少し前。人里の外から二人を眺める青年がいた。顔は整っており、長く美しい金髪を首の後ろで束ねている。

「いいね！強い欲望の使徒。それに適うわけの無い戦士にいちやもんをつける可愛そうな奴。そして今の幻想郷を取り巻く欲望がにじみ出た空気！いやゝ、？あいつ？に最初誘われた時は乗り気じゃなかったけど、思った以上に良い！」

一人で叫んだ後、タハハハと大笑する。

「この幻想郷なら？こいつら？も蘇るなおい！」

そう言うとき青年が右手を開く、すると右手に金色の縁のメダル現われていた。縁の中には色と何かの生物が描かれている。メダルは赤が一枚、緑が二枚、黄色が二枚、白が一枚、青が一枚。計七枚。

「？お前達？も早く戻りたいよな？」

右手だけではない。青年の周りにも、ふよふよと浮かぶ数十枚のメダルが。右手のメダル同様、生物が描かれているが色が黒ずんでいる。色付きと違い、識別は難しい。青年の問いかけに応えるようにくるくると空中で回る。

「せっかく？コアメダル？全部集めたのに、力が失われるとか最悪だせ。でも、まだ欲望が招いた運は失われてないな」

また大笑すると、コアメダルと呼ばれたメダル全てが青年の躰の中に消えていった。

「魅空^{みあ}ー。どこだあ。まだ説教終わってないって慧音キレてるぞー」

自分の名前を呼ばれ、ビクリと肩を震わせた。

「やつべ……妹紅だよ慧音に言われて探しに来ちゃったよ。うわあヤベエ！ライドベンダーカモン！！」

両手をメガホンの様にして何かを呼んだ。すると何処からか、黒を強調し、黄色のラインが入ったバイクが魅空の前に走ってきた。バイクから電子音声流れ出た。

『またですかマスター。今度は何をやっただんです?』

「いや美人教師の宝の山を見つけたら頂戴するしかないぜ!」

『また下着泥棒ですか。ここは素直に謝ったほうが…』

「馬鹿野郎!今回は俺の説教のせいで慧音が人里にこられなかったんだぞ!頭突きじゃあすまされねえぞ!ハリケーンミキーもオマケで来るぞ!それだけじゃねえ……実は今回、妹紅のもちよつと拝借しちゃってるんだぜ……」

『ばれたら焼き殺されますね。確実に。………ここは一回やられときましよう。そうすればその好色も少しはまともになるでしょう』

「欲望は大切だろう!特に俺は!てゆうか俺は好色じゃねえ!」

『じゃあスケベですか?』

「お前はそれでも高性能AIか!?俺は好色でも、スケベでもない。………弩スケベDA!」

『………妹紅さんがもうすぐそこに迫ってます。乗るなら早く乗ってください』

「オッシャアアア!」

魅空がライドベンダーにまたがり、ヘルメットを装着する。そしてアクセルをふかす。そのまま凄まじい初速でその場から離脱した。

「おーい魅空あ」

彼を呼ぶ声を無視しながら。

欲望（主に性欲）に忠実な男、魅空。

生物の王の力をその身に宿した、無限を越えた〇〇〇を持つ青年…
…。

『EPIISODE・12/蹴撃のインペラー』（誤字修正版）（後書き）

新オリジナルキャラクターみあ魅空

幻想郷のある人物と深い関わりを持つ。なので苗字は伏せる。霊夢が持っていたバツタカンドロイドも本来魅空の所有物である。それを八雲家に提供した事によって霊夢の手に渡った。

本編登場追加ライダー。

・仮面ライダーオーズ

・仮面ライダーカリス

・仮面ライダーギルス

はい。とゆう事で増えます。オーズは分かっていると思いますが魅空です。カリスとギルスも決定済。あとはうまく定まっていらないアビスだけです。すいません本当。ディケイドも入れようかと思いましたがそれは微妙です。

コレからの基本は、融合モンスターと魅空事件がメインとなつていきます。たまにライダーバトルとかですね。今年最初に消えるライダーはいついたいだれか。
長くなりましたが、次回！

妖夢、インペラーの戦闘。そしてあるライダー二人の乱入がある『救済の双王』。

次回&今年もよろしくお願いします！

『EPISODE・13 / 救済の双王』（前書き）

東方で新作を作っていたらネタかぶりの可能性が出てきて急遽新作を書きなおしている仮面3です。

いきなり愚痴ですみません。ダラダラ続けても意味が無いので今回の豆知識！

毒人形スーさんの豆知識

『実はメディスン・メランコリーは喋ったりしている人形は本体ではなく、隣に浮かんでいるちっこいのが本体である。』

これはアリスの母ちゃんはアホ毛が本体って言われてるのと同じですね。はい。とゆうかスーさんの母ちゃんのもこれが事実らしいです。母ちゃんのは本当じゃねえだろ（笑）

では本編どうぞ。

『EPISODE・13 / 救済の双王』

二振りの劔^{ツルギ}が煌めき、標的を失い空を斬り裂いた。標的であるインペラーは蜻蛉返りで宙を舞った。妖夢に背を向ける形で着地する。そこに妖夢がインペラーの背中を桜観剣と白桜剣でX字に斬り付けた。回避不能と思われた死角からの斬撃を躰を後ろに反らせ、両手を地面に付けブリッジ状態になり回避した。とても危なっかしい回避だ。実際マスクの角の先が擦った。

ブリッジ状態から逆立ちし、爪先蹴りを連続で放った。日本刀の形状である桜観剣と白桜剣ではあまり防御は出来ない。劔や刀の中でも強度が高い日本刀でも、調子に乗って受けすぎると折れる可能性がある。上手く力を受け流してもそうだ。なので、刀を振り切った状態で後方へ跳ぶ。近接戦闘に長けた妖夢。小柄な体格でも、その身体能力は素晴らしい。幻想郷を代表する実力者の1人だ。

只、基本戦闘力にそれを数倍まで引き上げる強化スーツを身に纏った霊夢の方が断然上だが。

妖夢が跳ぶのに合わせてインペラーが腕の力で跳ぶ。

「……」

妖夢が驚いたのはインペラーが跳んだ事ではない。腕の力だけで跳んだインペラーの方が速度が速い事。腕の力より脚の方が強いのは有名すぎる話。60キロのキックボクサーの蹴りは、100キロ級ボクサーのパンチに匹敵するとかしないとか。脚で、しかも先に跳んだ筈の妖夢に、腕で跳んだインペラーが既に追い付き躰をドリルの様に回転させ両脚蹴りを腹部に直撃させた。

「ぐっは……!!」

自分の跳躍、インペラーの蹴りの威力が加算され妖夢の躰は少し跳んだ後、地面に強く叩きつけられゴミの様に地面を転がる。

*

幻想郷の上空。昼時近い、燦々と輝く太陽を背に飛ぶ影があつた。帽子を被り桃色に近い頭髮に、耳がある部分には人間の形の耳ではなく動物のような耳。背には大きな翼。鰻の蒲焼き等を屋台で焼いて商売をする歌う夜雀、前回豆知識で登場したミスティア・ローレライ。通称ミスチーである。

「ちゅーんちゅんちゅんちゅーん　ちゅちゅちゅーん」

普段ミスティアは夜の屋台仕事を生業にしており、昼は寝ているか歌を歌うか大妖精や？等と遊んだりしている。今日は機嫌が良かった為、歌を歌いながら空中散歩である。

だが、古来より人は何時もと違う事をする不幸に見舞われるとゆうとか言わないとか。

「ちゅーんちゅーんちゅーん　」

ガスンウツ！！！！！！

早速見舞われた。自分以外いなかった筈の空。なのに自分の躰に走る凄まじい痛み。そして全身を貫く衝撃。何か巨大かつ強固な何か、凄まじい速度でミスティアと衝突した。

「な……ん……で……？」

目から涙を流しながら、あらぬ方向に吹っ飛んで行くミスティア。彼女の出番はこれで終わりである。

*

「……………？」

「どうした？将斗」

「……………外からピチューンって聞こえたような……」

不可視モードで上空を走る時の列車、ガイライナーの中。ミスティアと正面衝突した正体はガイライナーである。正面衝突といっても、ガイライナーとミスティアとの大きさは段違いであり、強度も桁違いな為、一方的にガイライナーがミスティアを引いたのだ。つい先程、幻想郷初列車ひき逃げ事件が発生した。

「この列車に引かれたらピチューンでは済まないだろう？気のせいだ」

「……………うん……………」

ガイライナーの中には2人。1人は人間、見た目はめんどくさがりな性格な為髪が跳ねまくりの青年、ときもりまさ時森将斗。群青と黒色の躰に、手首や首周り等に生えた孔雀の尾の模様の様な羽、ピーコックイマ

ジンのメルカバ。

「……………つか……………今日は何しに来たんだっけ……………」

「まったく……………私の話をよく聞き、憶えろ。オルタナティブからの連絡によりインペラーが一般人との戦闘を開始したらしい。オルタナティブ2人は私用の為、向かう事ができない為私達が要請された」

「じゃあ……………なんで？あいつ？も来てんの？」

将斗が差したあいつとは、ガイライナーと並走している？半透明の髑髏の形状をした不気味な蒸気機関車？のオーナー代理をしている者だ。

「？彼女？の希望だ」

「……………ふーん……………」

*

「うう…ぐあ…」

地面に叩きつけられた妖夢が立ち上がる。服は砂に汚れ、腕や脚といたった皮膚が露出している部分が擦り剥いていたり、裂けており血が流れている。決して弱いとゆう訳ではない妖夢だが、もともと戦闘力が高い霊夢が変身したインペラーだ。戦闘力が馬鹿の様に高くなっている。

「どうです？俺、強いでしょ？」

両手を開き、軽いステップを刻みながら妖夢に近づくインペラー。
糞餓鬼発言した時とは違ってかわって軽い口調に戻っていた。満身
創痍で弱気な顔を作る妖夢を見て満足したのか、それとも実質一撃
でここまでダメージ与えられた自分の強さに優越感を得たのか。

「どうしますう？まだ続けます？」

とゆうか、さつさと切り上げて帰りたいのはインペラーなのだが。
妖夢は桜観剣と白桜剣を握りなおし、インペラーを睨み付けた。

「私の……」

「何すか、まだやるんですか？」

二振りの名刀を振り凜とした表情を作る。名刀が斬ったのは空気で
はない、一瞬でもこの敵に屈しかけた自分の氣を斬った。たかが数
回打ち合っただけだとゆうのに、情けない自分。だからこそ高らか
に言おう。自分の誇りであるこの剣に乗せて。

「私の剣に斬れぬ物などあまり無い！！」

妖夢の台詞に、インペラーは両手を腰に置きため息を吐いた。

「……………あつ、そう」

自分が聞きたいのは『生意気言つてすいませんでした』等の許しを
斯う応えた。それを、わけのわからない意思表示された。まったく
何なんだ。もう……………いい、終わらせよう。今日初めてカードデッキ

に手を掛け、カードを抜き取る。絵柄はインペラーのシンボル。右足を上げ膝を折る事でバイザーのロットが解放される。カードをベントインし、脚を下ろす事によってカバーが締まり電子音になる。

《FINAL VENT》

ファイナルベントを発動すると、インペラーの後方から無数の紫の体色で発達した脚力によって高速移動し、両腕の高周波電磁カッターが特徴のレイヨウ型のモンスター・ギガゼールが現れる。この中にインペラーの契約モンスターのギガゼールがいるかどうか定かではない。レイヨウ型モンスターの特徴として、四肢から発する電気的信号によって他のレイヨウ型モンスターと意思疎通し、常に複数で行動する習性を持っており、契約モンスター以外にもインペラーの支配下についているモンスターが多い。その為、契約モンスター自体が倒される心配あまりない。

あるギガゼールが武器であるドリル状の刃を持つ杖を手に、あるギガゼールは己の躰で攻撃しようと妖夢に迫る。

「来るなら……来い！！！！」

桜観剣を上段に、白桜剣を下段に構え立ち向かう。この数全てを倒そうとは思っていない。強力なスペルカードを使えば一撃で全体を切り捨てる事も可能だが、技の後の硬直時間が問題だ。怪物共だけで終わるとは思わない。技の硬直時間、もしくはモンスターの攻撃に紛れての一撃があると考えるのが妥当。つまり出せる手札は、この二振りで一匹ずつ殺っていくだけ。

覚悟は決まっている。恐怖は……無いと言ったら嘘になる。恐怖はある、躰に叩き込まれた一撃のダメージがぶり返し、躰の震える。震えて刃が微かに鳴く。だが退いたら慕う彼女に汚名をきせる事に

なる。退けない、退いてはいけない。

覚悟を身に刻み付ける。アドレナリンを身体中に駆け巡らせ興奮状態になる。戦闘中興奮状態になるとゆうことは、自分の首に刃を突き付けるとゆう事。これは賭けだ。冷静状態なら確実に一匹ずつ倒せていける。だが興奮状態だと、一匹に集中しすぎて隙をつかれる。デメリットばかりだがメリットも少なからずある、興奮状態では体が普段ではあり得ない動きをする時がある。そこに賭ける。ギガゼール達が飛んだり跳ねたりとしながら接近してくる。妖夢はギガゼール達を見据え、表情と型を崩さず深呼吸をする。

あと少しで攻撃圏内に入るとゆう時に、列車が現れた。二両編成の列車と、半透明の髑髏蒸気機関車。蒸気機関車は妖夢の直ぐわきに停車した。列車は一両目が馬を模した形をしており、メインカラーを白とサブカラーとして黒。二両目は孔雀であり、メインカラーを群青、サブカラーは黒だ。これがガイライナー。ガイライナーは停車をせず妖夢に迫るギガゼール達を引いた。重量がある列車に引かれたギガゼール達は磨り潰されたり、ぶつかった衝撃で爆死したりと散々だった。

「は！？何よアレ！？」

思わず素の声が出てしまい、呆然とする。訳が分からない物がいきなり現れ、モンスター達を殺した。それは理解できる。だが訳が分からない物が理解出来ない。

なんだアレは。幻想郷にあんな物は無い。

ポカーンとしていると、背に殺気を感じた。それに反応し、回避行動をとるために身を翻した。回避の後も攻撃は続く。刀身が黄色く、刃は鋸型の形状を持つ片手剣が右斜め上段、左斜め下段、水平に横

一閃と連続でインペラーを斬り付ける。現状には焦りを表したが攻撃には冷静に対処する。攻撃が一通り終了すると、インペラーも反撃として回し蹴りを放つが脚は虚しく回るだけ。乱入者はインペラーの攻撃をバックジャンプで回避したらしく、距離が空いている。

乱入者の特徴はマスク、肩、胸に設置された牙の様な物があり、マスクはワニの顔を模した形状だ。メインカラーは銅。何よりもベルトだ。ベルトの形状がまるで違う。黒いベルトにバックル部は金色で作られ中央に円の中に『T』が組み合わせられたマークが描かれている。

「何なのよ…アンタ…！」

ワニのライダー、ガオウは何も答えず鋸の刃・ガオウガツシャーの構えを解き高く跳躍する。

「っ！？」

着地したのは、妖夢の正面。謎の列車の登場に驚いていたのは妖夢も同じだったが、ガオウが正面に立った事によって顔を引き締める。インペラーと似た様な戦士の登場。そして何よりインペラーよりもマスクがいかつい。悪役にぴったりの顔だ。

「な…何…？」

ガオウは無言で、ガオウガツシャーを左手に逆手で持ち直し、空いた右手で妖夢を肩に担ぐ。

「え？ちょ何を！？」

いきなり担がれて、妖夢はジタバタと暴れるがガオウはひたすら無視している。ガオウは髑髏蒸気機関車、幽霊列車に向かう。幽霊列車に搭乗するさい、ちらつとガイライナーに目を向ける。

「待て!!」

インペラーがガオウを追い掛けようとするが、ガイライナーから強音でミュージックホーン（変身待機音と同音）を鳴らす。その大音量に、不覚にも肩を震わせ驚いてしまい動きを止めてしまった。その間にガオウは完全に幽霊列車に搭乗した。すると幽霊列車の前に蒼い鬼火が現れ、先導するように動くと線路が現れる。幽霊列車自体にも鬼火が灯り、動き出し線路を進みはじめ幻想郷の空に消えた。

「クソ…!」

インペラーが悪態をつく。変身を解いて空を飛び追おうとも考えたが、幽霊列車は直ぐに不可視モードに入ったので追いたくとも追えない。

「……………おい……………」

ふと、背中ごしに呼び掛けられた。振り替えるとそこには自分の契約モンスターの仲間を潰したガイライナーの現オーナー、時森将斗が立っていた。

「アンタ…何？」

少し威嚇気味に言った。当の将斗は何を思い出すかの様にキョロキョロと眼だけを動かす。

「……………えーと……………なんだっけ……………」

威嚇されている事に気が付いていないのか、未だいつもの様にためにためて喋る。

「……………うーん……………」

空腹、妖夢のいちゃもん、そして現れた気の抜けた若者、インペラの苛々は最高潮になろうとしていた。

「そう……だ……………お前……………えーと……………名前なんだっけ……………まあいいや……………今回暴れ過ぎ……………なので……………お仕置き……………しまっす……………おっけい……………」

直後、インペラの頭の中で何かの切れてはいけない紐が千切れたとゆづか、袋が破裂した。

「やれるもんなら……………」

「やりまっす……………」

いつもはためるくせに、今回は霊夢の言葉を遮る。そして将斗の右手に装着者のチャクラを利用して実体化させたガイオウベルトを握っている。色は黒。ガイオウベルトを腰に巻き、バックル部であるターミナルバックルのすぐそばにある4色のフォームスイッチの内、一番上の白色のスイッチを押す。すると変身待機音として、先程ガイライナーから流れたミュージックホーンが鳴る。

「変身……………」

将斗がどこから取り出した黒い定期入れを模したライダーパス（以後パス）をターミナルバックルにセタッチ（セツト＆タッチ）する。

《KNIGHT FORM》

電子音でフォーム名を告げると、自身のオーラが変換されたフリーエネルギーで構成された黒と銀の素体、プラットフォームに一度なり、鎧王の周りに追加装甲オーラアーマーが出現した。オーラアーマーが一回転するとプラットフォームに装着され、マスクにも馬型の電仮面がレールを伝い、馬の顔が中央から分かれ広がり完全に装着される。最後に、背中と胸部部分を一つのレールがベルトの様に繋がり、背中のレールに大剣の刀身部分の様な物がセツトされる。鎧王プラットフォームは、鉄面のような電仮面をつけ、両肩には白い馬の飾りがついた白をメインカラーにし黒のサブカラーを着色したライダー、仮面ライダー鎧王ナイトフォーム（以後K鎧王）に変身した。

「お前に一言物申す、……あまり手間かけさせるな」

*

幽霊列車。その内装はとてもレトロでありボロボロな印象を受ける。幽霊列車にはガオウに誘拐された妖夢が座らせられており、その正面にはガオウガッシャーを分解しベルトに戻したガオウが座っている。そして妖夢の隣には救急箱を膝の上に置き妖夢を治療するメルカバが座っていた。目の前にひたすら沈黙するライダー、隣には鳥の怪人。誘拐された当初は何をされるか分からなかったが、治療してくれる所を見ると悪いようにはしないらしい。メルカバが治療を

終えたらしく、救急箱を閉めた。

「さて…これで私の役目は終わった。もういいだろうか？」

ガオウは無言で頷いた。

「早く将斗の所に行かなければな…あいつはやりすぎる所がある」

椅子から立ち上がり、今度は妖夢に語り掛けた。

「あまり無茶をするなよ。獲物を持ち、実力があるといえどお前は
まだ少女だ。未来ある少女、身を大切にしろ」

「は…はい……」

格好良い台詞なのだが、なにせ見た目が怪人。妖夢は微妙な表情で
返した。メルカバは救急箱片手に妖夢達の居る車両を出た。眼で見
送った後、視線をガオウに合わせた。

「あの…ありがとうございます。助けていただいて…」

「……………」

無言。言葉を喋れないのかと妖夢が考えた時、ガオウが右手を自分
のベルトに手を掛けた。ガオウベルトを腰から外すと、フリーエネ
ルギーで構成されたオーラアーマー等が飛散する。ガオウの中から
現れたのは。

「ゆ…幽々子様!？」

ピンクの髪、渦が描かれている三角の飾りが付いた帽子を被ってい
る女性。白玉桜の亡霊姫。生前死に誘える自身の能力を疎んで、西

行妖とゆう妖怪桜が満開のときに自害した過去を持つ、西行寺幽々子。主は庭師に微笑んだ。

*

N鎧王が腰に装備されていた4つのガイガツシャーを組み合わせたガイガツシャー・ハルバードモードを振り回す。形状は電王のロツドモードにオーラアックスを加えた様な物だ。範囲と一撃の高さを兼ね備えたガイガツシャーが次々と突き出されたり振り回したりこの作業を何回繰り返しただろう。これは豪快とゆうより。

「アンタ、適当に振り回してるだけでしょ!？」

「う…ん…」

どうやら戦闘に頭を使うのは面倒らしく、ガイガツシャーを只インペラーが居るところに突き出しているだけらしい。まるで子供のよくな闘いに呆れるインペラー。攻撃回避は楽でいいが、どうも煮え切らない。

「お仕置きしたかったら真面目にやりなさいよ!」

「やだ…よ…ん……」

K鎧王が強く力を入れただけの斬撃で一閃した。これならまだ妖夢の方がまともと判断した。コイツは戦闘素人を演じているのか、それとも素で素人なのか。だとしたら背の柄がない大剣のパーツの様な物は只の飾りか? 一つ確実に分かる事がある。

K鎧王は闘いに興味が無い。

だとしたら、こんなストレスしか溜まらない闘いは直ぐに離脱できる。インペラーがカードをベントインする。

《ADVENT》

電子音が鳴ると、K鎧王を取り囲むように数十匹のギガゼールが出現する。ワラワラとまるで台所によくいるGのようだ。その内の一匹がジャンプしてK鎧王に飛び掛かる。

「……………えい……」

空中でほぼ無防備なギガゼールの腹にガイガツシャーを突き刺し、他のギガゼールに向けた放り投げた。2体くらいは巻き込まれたが、たいしたダメージではなく数は減っていない。何よりギガゼール達が邪魔でインペラーがチラチラとしか見えない。

「邪……魔……」

K鎧王は一度ガイガツシャーを肩に掛けると、左手を腰の後ろ側に持つていくとパスを手に使っていた。鎧王やガオウ等のライダーは、ベルトの後部にパスを収納しているのだ。パスをターミナルバックルにセタツチする。

《FULL CHARGE》

ターミナルバックルが白色に点滅し、フリーエネルギーがガイガツシャーの下部にチャージされ、先端部に設置された2つの刃を白く染める。完全に白く染まると、ガイガツシャーの下部を両手で持つ

て野球のバッターのように構える。

「とうりや〜…」

気がまったく入っていない掛け声を上げ、フルスイングする。そのまま臍も一回転。円状に白い軌跡の斬撃が生まれ殆どのギガゼールを仕留める。仕留めると言っても、臍に巨大な切り傷が付いている状態で白い光で動きを止められて居るだけだが。最後に正面に向かつて水平にX字、上空から見ればT字に斬り付けた。いわば電王と同じ鎧王のマークを白い斬撃で描いた。コレがK鎧王の決め技の一つ『エンブレムスラッシュ』である。マークを描き終わると、ギガゼール達を包んでいた白光が強まり、全身を包むと爆発した。

「な〜むさん（南無三）」

爆発がおさまると、インペラーの姿が見当たらない。どうやらギガゼール達は囷役で、本人は逃げたらしい。両手で持っていたガイガツシャーを右手に持ちかえ、杖の様に立てる。インペラーを探すが無いK鎧王はガイライナーに戻ろうとした。そこに幽霊列車から戻って来たメルカバが飛来する。メルカバは孔雀をイメージしたイマジンの為、一応飛行能力を持つ。

「インペラーは？」

「……誰…？」

「お前が闘っていた筈のライダーだ」

「逃…げた」

「わざと逃がしたんじゃないだろうな」

K鎧王が首を横にブンブンと降る。

「そうか。まあいいだろう。ご苦労様。もうオルタナティブの依頼も終了した事だし帰るか？地霊殿に」

「今日あいつ来るって……言ってたから……降りた……くない」

K鎧王の頭の中に、額に赤角が生えた鬼が思い浮かぶ。幻想郷に来てから一番絡まれる、出会い方が悪かったのか。

「美人な女ひとに好かれてよかったじゃないか」

からかうように笑うメルカバ。

「良くない……疲れる……」

「だからってまたガイライナーではねるなよ？あの人は丈夫だから良いけども、そのうち普通の妖怪みたいにグロテスクな状態になるから」

「じゃあ……どうすれば……いい？」

「正面から相手しろ」

「……………役たたず……………また鴉に羽むしられる」

K鎧王の皮肉にメルカバがまた笑う。しかし今回の笑い方はどこか

ぎこちない。

「ハツハツハツ、安心しろ！……………今朝もむしられたから」

孔雀の羽は同じ鳥からみればとても美しい物。メルカバの羽を気に入った同居人の鴉に再生するそばからむしられる生活を送っている。同居人は『宝物ー』と喜びながらむしるが、かなり痛い。二人はそれぞれ憂鬱を抱えながらガイライナーに乗り込んだのだった。

*

人里から離れた場所。そこにインペラーが居た。自分の契約モンスター仲間を囷に使い離脱した事に後ろめたさは無い。反射物はあるが、精神的に疲れた為変身を解き一休みする。

『だいぶ殺してくれたな』

反射物から契約モンスターのギガゼールの声がした。言葉に怒気は無いが、どこか刺々しい。霊夢が腰を叩きながら応える。

「別に私が殺したわけじゃないわよ。あの変なのが大量虐殺したの。見てたでしょ？」

『分かっているさ霊夢。だが私達も無限に居るわけではない。できれば大切にしてくれ。いつ私が最後の一体になるか分からない。私は一緒に居られるだけ、お前と共に居たい』

「……………分かった」

自分に尽くしてくれる異変の元。大切にしたい友、だがギガゼールは今幻想郷を取り巻く異変の一部だ。だけど自分は異変を解決し、幻想郷のバランスを護る巫女。この共同生活は霊夢の苦悩の一つになっていた。

そして、新たな苦悩を抱える者を生んでしまった。

「れ…霊夢？」

ただ、心配だった。帰りが遅かったから心配になって探しに来た。霊夢の気配を頑張って察知して、ここにたどり着いた。頭の中では迎えに来てくれた事を褒めてくれる霊夢を想像して。しかし、そこには霊夢ではなく仮面ライダーが居て、仮面ライダーが霊夢になった。

知ってしまった事実（現実）は、もう元に戻れず、知ってしまった者を引きずり込む。

萃香もこっち側に引きずり込まれる事になってしまった。

*

時間は少し戻って幽霊列車。自分を助け、誘拐したガオウは自分の主である幽々子だった。

「幽々子様…なんで…」

色々な感情が浮かび上がるが、何よりも何故直ぐに正体を明かさずに沈黙していたのか、と。その事にたいして幽々子の返答は。

「怯えるよーむの顔が可愛かったから てへっ」

ようは、怯える妖夢の表情を持続させる為に正体を隠していたらしい。様々な想像の範囲を越えた事に襲われた妖夢の表情は自然に怯えた物になっていたらしい。

「……………そうですか。しかし何なんですかさっきのは？」

「あれ？あれはガオウといって仮面ライダーの一種」

「そうゆう事ではありません！！」

大声を上げ、椅子から立ち上がる。

「私が聞きたいのは何故幽々子様ガオウとゆう者になっているのかです！！」

今までおどけた様子だった幽々子が、妖夢を真剣に見つめ返す。その眼から発せられる氣に、妖夢は氣負ける。ここまで真剣になる幽々子を見るのは指で数えるしかない。

「それはね、妖夢。私が？死んでいるからよ？」

「え…………？」

幽々子を取り敢えず妖夢を座る様に促す。幽々子の言葉を理解出来ない妖夢は困惑しながらも指示通りに座った。すると幽々子がガオウベルトと金色のマスターパスを取り出した。

「この型のライダーはね、本来特異点と言われる者しか変身出来ないのよ。一部の特殊な例を除いてね。特異点とは、おおざっぱに教えると時間の影響を受けない存在」

「しかし幽々子様は特異点などでは……」

「ええ、そうよ。私は特異点ではない。特異点の存在も最近知ったしね。だけど私は悠久の時を刻みながらも、老いない身……だからこそ私はガオウになった。ここまで言ったら分かるかしら？私の小さな庭師さん」

「……………！！」

「そう、？死人は時から外れた存在？。私はもう時を刻む世界から見れば存在しない存在。つまり、時の影響なんて受けるわけがないのよ」

「幽々子様……」

自嘲気味に笑う幽々子の表情を、妖夢は少し哀しそうに見えた。

「その法則に気付いた人物から、私はパスとこの幽霊列車を預かったの。分かってくれた？」

「は……はい」

お利口ねと言い、腕を伸ばし妖夢の頭を撫でた。インペラーの時と違い不快感は無かったが、少しこそばゆかった。

「……………ねえ妖夢、一つお願いして良いかしら？」

「何でしょうか？」

一通り頭を撫で終わると、今度は真剣な表情の中に悩んでいるような感情を入り混じりながら妖夢に聞いた。

「私の…いえ、私と一緒にやってくれない？」

妖夢の頭から手を離し、懷からライダーパスを取り出し差し出した。

「これは……………！」

「私のマスターパスとほぼ同じ力を持つライダーパス。これを使えば貴方は私と同じ仮面ライダーになれるわ。半人半霊の貴方なら。今幻想郷では13人の仮面ライダーがライダーバトルとゆう物をやっているの。己の願い……………いいえ欲望といっていいものをかけて闘っている。この闘いは、いずれ幻想郷を飲み込む。そして破滅に導くわ。だからお願い。私と一緒に、私達と一緒にこのライダーバトルを止めて。私は貴方も……………？彼女？も失いたくないのよ……………！」

幽々子の眼には涙がたまっている。妖夢と、？彼女？を想って流れる暖かな涙。無意識に妖夢を手を両手で掴んでいた。手に持っていたガオウベルトと2つのパスは床に投げ出されていて、既にガオウベルトは消滅していた。

「矛盾しているのは分かってる…。失いたくないのに一緒に闘ってくれだなんて。でも、今は戦力が少しでも欲しいの。お願い……。そして、ごめんなさい…」

顔をうつむかせ、謝罪した。妖夢は無言を貫き、返答は無い。それどころか、幽々子の手から自分の手を抜き引いた。

幽々子はうつむいた状態で、笑った。こうなる事は予測していた。ここまで身勝手に振る舞ったのだ。見限られるのは当然。

「顔を上げてください幽々子様」

妖夢の穏やかな声に、顔を上げる。妖夢は優しく微笑みを送り、マスターパスを幽々子に渡した。ただしライダーパスは自分の手の中に。

「私は貴方に仕える身。貴方が大義を果たそうとして、その道が険しいなら。私が貴方の杖になります。貴方の道を邪魔する者が現われたのなら、私が貴方の剣になり盾となって貴方を護ります。私は貴方の為に存在しているのですから」

言い終えると、幽々子を優しく抱き締めた。1人だったのだろう。人等は護る為に闘うと1人になる。それは苦しい孤独戦。すがりたくとも、そのすぎる事すら許されない生き地獄。感情があるかぎり、凍てつく強者にはなれない。だからこそ人や妖怪は脆く、強くあれらるのだ。

妖夢にすぎる事が、闘いが始まってからやっと安心のできる相手と出会える事ができた事を認識すると、幽々子はせきを切った様に泣いた。

「ありがとう…ありがとう…！」

心から感謝を述べる。

自分は馬鹿だ。何故頼らなかったのだろう。何故打ち明けなかったのだろう。護りたかったから？巻き込みたくなかったから？いや違う。信じきれていなかった。この最高の従者を。自分の愚かさを呪い、妖夢の暖かさに感謝しながら、妖夢の胸でひたすら泣いた。

数分後

「泣き疲れちゃったから帰ったらおうどん作ってね」

「えっ！？」

麵の在庫や食材が足りるだろうか、今日買った食材も直ぐに無くなってしまうかもしれない。

『EPISODE・13 / 救済の双王』（後書き）

時森将斗 特徴：寝癖、喋り方、本編ではまだ語られていない強烈な二面性。

メルカバ ヒーコックアンデット 見た目はジークと、バーニングサヨコキックでやられたあの人をたしてわった感じ。

今回は詰め込みすぎた……。スランプがまだ抜けていない自分に反省、そしてごめんなさい。しかし今回で妖夢と萃香にライダーフラグが立ちました。

鎧王は一応設定では4つ以上のフォームになれますがイマジンがね、メルカバ以外幻想郷にいない……。

萃香もなるライダーが他のライダーより変身しにくいライダーですからね。

萃香と鎧王をどうするか……。

いつかコラボとかしてなんとかしてみたいですが、自分なんかでしゃばっていいわけではないので、自力で何とかします（苦笑）

では次回、久々にライアが出る『予見者の憤怒』！次回もよろしく願います！

将斗「皆様方に一言物申す。感想で悪い所等を指摘して欲しいと仮面3が言っていた……のか？……そう……だっけ……？？」

『EPISODE・14／予見者の憤怒』（前書き）

どうも、リリカルなのはとクロスしている小説は殆ど人気が高いとゆう事実を知った仮面3です。因みに仮面3が初めてリリカルなのは（二期から）を見たのは2010年の6月ごろです。え？遅いつて？

しゃあねえだろ。こちらら仮面ライダー、一筋だっただぜ！

……………そしてリリカルなのはは二期しか見てないとゆう、ね…。

さて、グダグダ続けても意味無いので豆知識。

レミリアのスペルカードの神槍スピア・ザ・グングニルの元ネタについて。

『グングニルは北欧神話に登場する伝説の槍。日本語ではグングニール、グーングニルなどと表記されることもある。この名前は『スノッリのエッダ』などに見られ、オーディンの所有物とされている。この槍を投じると何者もかわすことができず、敵を貫いた後は持ち手のもとに戻るといふ。また、この槍に向けた軍勢には必ず勝利をもたらすともいわれている』

とゆうね、グングニルはチート槍です。何故この豆知識と書いて説明と読む様な事をしたのかとゆうと、本編にチラッと出ます。

とゆう訳でどうぞ。

『EPISODE・14 / 予見者の憤怒』

幻想郷は美しく、雄大な自然に囲まれている。愛好家が知ってしまったら取りつかれた様に必死になって探すかもしれない。そんな自然の一部、とある森の中で追跡を免れようと駆ける少女が居た。緑色の髪が生える頭に触角が二本、マントを羽織っている。凹凸の少ない躰に、大量の汗のせいで衣服が張り付く。それほど長時間、全力で駆け回っているのだ。

「アツハハハ！逃げてても無駄無駄」

「ハア……ハア……ゲホッ…助…助けて…」

蟲達を操る蛭の妖蟲、リグル・ナイトバグ。何故こうなったか分からない。朝いつも通りに起きて、顔を洗って、歯磨きをして、朝ご飯を食べて、服を着替えて、髪や身なりを整えて、散歩に出かけた。朝から昼に変わろうとしている空気は暖かく、気分が高ぶった。鼻歌を歌って、チルノや大妖精の所に行こうかと考えている時、追跡者が現れた。最初は金髪の普通の人間だった。だが、腰に訳の分からない物を付け、赤、黄、緑の三枚のメダルをセットした。そして腰の右側に装備されていた黒い丸い何かで、メダルをセットした部分にスライドさせた。すると、『タカ！トラ！バツタ！』と聞いた事のある生物の名前が流れ、訳のわからない歌が流れた後、人間ではない何かに化けた。自分はそれから必死になって逃げた。関わってはいけないと本能が告げ、脚が無意識に動いた。

「無駄だつて言ってるでしょ〜ん？」

声はまだ離れない。リグルはトップスピードを維持したまま駆けて

いた。それが何分、何十分か分からない。

「ん、もう飽きたな」

「助け」

助けを求めようと叫ぼうとしたが、声が消えた。途中まで確かに出ている振動の塊は？止められた？。声だけではない、躰も、風に揺らいでいた髪も、流れていた鬱陶しい汗も、バクバクと針金のように動いていた心臓も全てが止まった。リグルの中で唯一動いていたのは思考のみ。

「走るのが面倒になったから、？魔審器ましんぎ？使わせてもらったよ」

ましん…き…？

森の中から姿を現す。頭は真紅に光り緑色の複眼の鷹、腕は猛虎が振るう黄爪、脚は超跳力を持つ緑のバツタ脚。胴体には円盤が装備されており、頭、胴、脚を現す生物が描かれている。名を仮面ライダーオーズ。オーズの右手には砂時計が描かれた懐中時計が握られていた。

「魔審器No.29『機械仕掛けの生物時計』。魔審器とはアホ毛の魔界神がいたのさらに昔、魔界と地獄がごっちゃになっていた時代のロストアイテム。魔審器は罪人を裁く為に使われていた。まあ裁くとは名ばかりで殆どが拷問器具だ。この時計が持つ効果は対象の？時間？と？肉体？を支配する。意識だけは逃れるが、逆にそれが拷問に向いている。肉体を支配すれば、動けないのは勿論死ぬことも許されない。心臓に穴を開けても、止まるなと念じれば穴が開き血液が抜かれながらも動き続ける。時間を支配すれば、その場で老

いらせミイラにすることも、若返らせ胎児にまで退化させ踏み潰す事も可能。意識はそのままだな。実にいいアイテムだろ？フルコンプリートするのに苦労したぜ。？魔法が使えない落ちこぼれ？の俺にはコレしかないからな。必死になったよ」

時計を見せ付ける様に振りながら、リグルの正面に立つ。説明を受けたリグル目には時計がとても恐ろしい物に見えた。

「結局使っちゃった。これ使つと面倒な事になるんだよ。だから変身して追い掛けたのに……あーあ、やっぱ『チーター』が使えないと不便だな」

オーズはリグルの目線に合わせ腰をおろす。緑色の複眼がリグルの顔を覗き込んだ。

「安心しろ、殺しやしねえよ。お前には器になってもらう」

するとオーズは、オーズドライバーの左腰部に装着されているメダル収納箱オーメダルネストから七枚の黒ずんだコアメダルを取り出した。かろうじて絵柄は判別できる。絵柄はクワガタムシ、カマキリ、バッタの3種。

「蟲を操る能力を持つリグル・ナイトバグ……。支配力は王が持たなければならぬ重要な力の一つだ。更に昆虫の妖怪でもあるお前なら、昆虫系のコアメダルはよく順応するだろう」

メダルの一枚をリグルの額に近付けると、額にコイン投入口のような物が現れる。リグルは未だ肉体と時間を支配されているが、その眼は確かに恐怖の色で染まっていた。オーズは一枚一枚、メダルをリグルの中に投入していく。

「順応しても、こいつはたいして欲望も力も強くない。数日熟成させなくてはな。だとしても、よくてグリードもどき、悪くてヤミーもどきかな」

最後の一枚を投入し、時計をパチンと閉じる。同時にリグルも崩れ落ちた。時計の支配から解放されたリグルは白目をむいて地面に突っ伏している。

「どうせなら龍騎達でやりたいんだが、あんま目立てないからな。目立って？あいつ？にばれたら強制送還されちまう。やるなら静かに…同時進行で…、だが難しい。なんか良い言い訳考えなくちゃな」

面倒くさそうにため息を吐くと、リグルをその場に放置してオーズはさった。次の？器？を探しに。

*

最近、紅魔館内では妙な噂が立っていた。『紅魔館の主、レミリア・スカーレットに？男？が出来たのではないか？』と。突如姿を暗ませる事が頻繁になってきていた。夜ならまだ分かる、昼間あまり出歩けないレミリアだ。夜に抜け出し散歩等は昔から度々あった。しかし、昼間に、それも誰にも知られずにだ。だがそれは不可能。

紅魔館はメイド長の咲夜の実力の応用によって、見た目以上に中は広い。つまり紅魔館内の空間は咲夜に支配されており、侵入者等は直ぐに察知できる。まあ協巫女や妹分の白黒魔法使いは慣れたのでスルー、代わりに門番ヘナイフを投げている。

その支配圏の中であるのかかわらず、レミリアが突如姿を暗ませ

るのに対応できないでいた。それが問題になり、男疑惑が浮かんできたのだ。そういった能力を持つ男が絡んでいるなら納得がいく。紅魔館のとある一角。紅魔館では妖精をメイドとして雇っている。妖精でも女は女、こういったスキヤンダルな噂に飛び付くものだ。その一角で二人のメイドが噂話をしていた。

「でもレミリア様の男ってさー、ロリコンと熟女好きどっちに入るんだろうね？」

「あー確かに。あの人もう500歳だもんね。見た目は幼女、中身は熟女、その名はレミリア・スカーレット！とか？」

「プハッ、何それ？ウハハウケる！でも500歳児にはびったりじゃない？」

所詮雇われの身、咲夜のような忠誠心はあまり無いか。いや、咲夜の方が珍しいのか。本来メイド、執事等は主人に仕える事に大きな誇りを持ち、その身を捧げる事に絶大な喜びを感じるらしい。執事、メイドを詳しく知りたければ、Wikipediaかハヤのごとくを見えることをお勧めする。

「あ！でもさ、意外と男じゃないかもよ？」

「どゆこと？」

「ほら、今鏡の中の怪物が騒がれてるじゃん？実はレミリア様が退治しに行ったりしてて。博麗の巫女に気に入られる為に、さ」

「あー、それもあるかもね。でもさ、それって逆に巫女の仕事とっ

てる事になるくない？」

喋りながら仕事をしているものだから、作業がもたくさとしている。ようやく仕事を終え、次の仕事に向かおうとする。メイドの内一人が先に歩きだすが、直ぐに立ち止まる。

「えっと…メイド長に言われてた次の仕事って何だっけ？」

答えが返ってくる間にも、自分でも少し考える。掃除等は既に終えた。では何だったか……。

答えは返ってこない。自分の後ろにいる筈の仲間は沈黙している。

「ねえ、何か」

グシャア……ガツ……グチュ……クチャ……ガチン……メキッ……。

返って来たのは答えではなく、？何か生物が崩れる様な音？と、続く様に聞こえた？咀嚼音？だった。音に反応し、振り替える。

「な……………ひ！？」

？輪切りにされた同僚？。先程まで会話し、仕事をしていた同僚のメイドは一定の感覚で輪切りにされていた。目の前に広がる赤黒い血液、輪切りの為胴部分は五臓六腑が丸見えになっている。込み上げる嘔吐感に、反射的に口を押さえるが勢いは止まらず出てしまう。

「げええう！！……ごぼっ、がは！！」

床に広がる血液に、メイドの嘔吐物が混ざる。見たくないと思えば思う程に、眼は映像を求め見入ってしまう。死体には切り口と違い、

ぐずぐずに噛みちぎられた後も見られるが、メイドの中にそれよりも強い疑問が浮かぶ。

『なんで死んでいるの?』

妖精は死なない。もとい、死ぬとゆう事象は無いのだ。あるとすれば骨すら残さず消滅するくらい。蓬莱人も死ぬ事はないが、それとは訳が違う。妖精とは、森や木といった自然物や自然現象に宿る生命や意識の塊。言わば意識の集合体だ。妖精達には悪いが、所詮はかりそめの命。消滅するのが道理だ。なのに死体が残っている。その疑問が不安に変わる。直ぐに自分もこうなってしまうのではないかとゆう、初めての死への恐怖。

「い……いや……嫌あ……!」

恐怖で脚が無意識に下がる。脚の筋肉が上手く動かない。ノロノロと遅く後退する。

ガツ…ガツ…クチャ……グチ……。

そういえば…この咀嚼音は何なのだろう。興味心が眼を動かす。眼が音源だろうと感じたのはあり得ない死を迎えた同僚。嘔吐物を出しきったのだろうか、もう吐き気は起きなかった。だがまじまじと見たいと思える物でないのは変わらない。嘔吐感はあまり起きないが、背筋がゾツとする。

だがそのおかげ、簡単すぎる答えが分かった。

本当に簡単だ。死体の肉が喰われている、ただそれだけだった。輪切りの死肉に次々と歯形付いていき、肉が消えていく。

では、喰らっている者は？

そんな者どこにもいない。だが死体は確実に捕食されていつている。いる、だが、いない。

訳がわからない、分かりたくもない。分かってしまったら、理解してしまつたら、？死？の事実が自分にもふりかかってしまいそうで恐いのだ。様々な考えがメイドに恐怖を植え付ける。

恐怖心の中から我に帰った。何故正気に返れたか分からない。何故思考のトリップから元に戻れたのか順を追って考える。

一、咀嚼が止まっている。

二、死肉が減っていない。

三、一番重要だ。？肩に手を置かれている様な感触がある？

「ひっ…ひっ…ひっ…ひっ…ひっ…！」

また恐怖が直ぐにぶり返した。呼吸がままならない。ガチガチと口も、体も震える。口の中で歯が内部の肉を噛みちぎっても震えが止まらない。首筋に生暖かい息が吹き掛けられた。酷い臭いだ。いままで喰らってきた肉が口内に残っていたのか肉が腐ってきているのか腐敗臭と、先程口に入れたであろう生臭い肉の臭い。

臭い、そして恐怖による強いストレスでまた吐いてしまった。胃の中の物を出し切っていたのか、濁った胃液しか出ない。吐いた…とゆうよりも、口から漏れ出てしまったと表記した方が正しい。胃液は口の端を伝いメイド服に付いてしまうが、気にしている余裕はない。

肩の感触の次に、頭にも何かを置かれた様な感触がした。それに肩をビクリと震わせた。ストレスが限界にきたのが、眼から涙が流れ、口からは泡が出る。頭に力を加えられ、後方に、つまりいるがいない存在が居るであろう方向に向けられた。

「やああ……嫌」

？頭が異様に出たシマウマの様な怪物？。

コレが最高に見たメイドの映像だった。その顔が笑う様に大きく歪んだ。そして、メイドの視界に一筋の線が入った。その線から赤い液体の様な物が溢れると、視界が赤から、黒に変わった。

*

時間を少し戻す。紅魔館の内のある廊下を、暗い顔をして歩く女性が入った。銀髪に2つのお下げ、青系統の瞳を持つナイフ使い、紅魔館のメイド長十六夜咲夜。暗い顔の理由は扱く簡単。敬愛する主レミリア・スカーレットの事だ。別にあんな噂を信じている訳ではない。その事に咲夜からコメントが来ています。

『は？男？……認めないよ私は。……男が交際を認めさせてくれと懇願したら？……うーん、取り敢えず刺しとくね（ナイフを）。百本くらい』

おお、恐い恐い。まず咲夜には男はなんていないと確信はある。男と会った来たなら何故ボロボロになって帰ってくる。レミリアが居なくなり帰ってきたらボロボロになっている事が稀にある。その事

を小悪魔に相談したら。

『そうゆうプレイなんじゃないんですか？』

……小悪魔にはナイフをプレゼント（投げて）しておいた。話を戻そう。咲夜の心配事は何より、レミリアが自分にも秘密をひた隠していることだ。何も全ての秘密を話して欲しい訳ではない。だが、これは何か重大な事が絡んでいるとしか思えない。それを抱え込んでいるレミリアが辛そうに見えてしょうがないのだ。それが分かっているのに何もしてあげられない自分が情けない。レミリアにも何度かしつこく問いただした事がある。だがつい先程……。

『貴方は私の従者であって私の監視役ではない。少し…身の程をわきまえなさい』

正直、ショックだった。自分では駄目なのか、自分では足りないのか、自分では何も出来ないのか、自分は……必要とされなくなったのか。そんな考えが、浮かんでは消え、浮かんでは消え己を蝕んだ。

疎外感

人間、もとい知性を持つ生物は magari なりにも？1？ではなく？2？以上で生活する。人間1人では生きられないから？違う。周りの助けが必要？それも違う。生物が？2？以上で生きるのは、己の？虚？を埋める為である。それは食事を取り満腹感に浸るのと同じ。生物とゆうのは、誰しも真相心理内で？完璧？を求める。つまり？虚？は？完璧？の不純物となる。その為に？2？以上を求めるのだ。？2？以上は？完璧？を作る為にはるメツキだ。1人ではないとゆう事に優越感を得る、二人以上ならばミスをして人に擦り付ける事ができる。

咲夜自身もそうだったのかもしれない。幻想郷に？ある目的？来て、自分と並ぶ、もしくはそれ以上の存在であるレミリアと出会った。それが咲夜の求めた？完璧？だった。従者の身となり優秀な主を支える。それが彼女の真相心理が求めた？完璧？……。レミリアに仕える事になり？2？は3に、4になり今では両手の指を軽く越える数になった。美貌、力、器量の良さ、優秀な主に仕えるステータス、人脈etc…。はたから見れば確かに？完璧？だ。だが？完璧？の元になった？2？の存在が消えたら？その？2？から疎外されたら。咲夜は？1？どこるか？0？になる。その事を本能的に悟る恐怖、理性的に自分が必要となくなったと悟る恐怖。

人間とはなんと情けなく、みずばらしく、哀らしいのか。

咲夜自身も、自分の精神的弱さに絶望した。そんなわけがない、彼女は私を見捨てる訳が無い。そう思いたいが、嫌な考えも同時に沸くジレンマが止まらない。

咲夜はため息を吐き、重い脚を無理矢理前に出した。

*

『 今回はまた冷たくあたったな 』

「しょうがないでしょう？今紅魔館内で一番危ないのは咲夜…。秘密を知る意味でも、この闘いに巻き込まれる可能性も…ね」

紅魔館の、レミリアの自室。先程まで咲夜も居たが、しつこい詮索をした為追い出した。今はレミリアと、部屋にある身なりを直す大

きい鏡に映るエビルダイバーだけである。レミリアはベッドに腰掛け、エビルダイバーはたまに鏡から顔を出したりしている。

「本人が望んで飛び込むんだ。別にいいだろう？ 事実とは、たとえ望まぬ結果でも受け入れなければならぬ物だ。運命が見えるお前ならなおさら分かる事だろ？」

「だからこそよ。分かるから辛い。見ようとは思わないから見ないけど、咲夜は人間……土人形の様に脆い。私が生きるであろう遙か未来には居ない存在。彼女の能力で自分の時を止める事もできるでしょうけど……いつかは朽ちる。私やフランは半永久的に生きれる、パチエは魔女ではなく魔法使い……それでも躰が刻む時間は妖怪並みに遅い。美鈴も妖怪だし、館の妖精達に死はない。彼女だけ簡単に死んでしまうのよ？」

「ようはビビって遠い未来を見ようとしないうてか？……ぶっちゃけ、俺等モンスターのほうが簡単に死ぬ。野良モンスターなら契約モンスターに喰われ、契約モンスターでもライダー達に殺されるか喰われる。俺はたいして強くないから……。力があるお前等より、中途半端な俺達の方が脆いんだよ」

「……………」

レミリアは返事をしない。自分の口から出た愚痴が、エビルダイバーを傷つけた。今思えば、エビルダイバーとの付き合いの方が一時的なのだ。エビルダイバーも、咲夜同様自分を、変に思われるかもしれないが

愛してくれているのだ。

こんな私を。

そんな彼を心無い愚痴で傷つけ、そんな彼女を突き放してしまった。急に罪悪感が押し寄せてくる。

「……ごめんなさい」

『何謝ってんだよ。別に責めてる訳じゃねえよ。』

ただな…短いだろうと、長かろうと、居れるだけ一緒に居てやれ。嫌な想い出も楽しい想い出も…微妙な想い出も、その小さい臍に詰め込め。後悔しないように、いつ別れてしまっても後悔だらけで止まってしまう様に…な』

エビルダイバーが鏡から頭をニユツと出して言った。表情は変わらない筈だが、どこか気分がホツとする様な、そんな表情に見えた。浮かない顔をしていたレミリアの表情が少し明るくなる。

「……ふふ、貴方たまに良い事っぽいこと言うけど似合わないわね」

『辛気臭い顔をしてたお前の為に言っただけだ。感謝言わずに一言多いコメントってどうよ？』
ああ、それとよ』

エビルダイバーが何かを思い出した様だ。

「どうしたの？」

レミリアがベッドから立ち上がり、エビルダイバーが顔を出す鏡の前に移動する。そしてエビルダイバーがさらっと事実を告げた。

『妖精、死ぬから』

レミリアの頭の上に・・・と点が浮かぶ。

「は？」

『いや、だから妖精死ぬから』

「いやいやいや、え？ちよえ？え、待ってちよえ？いやいやいやいや、いや違うから、妖精死なないから。虫で例えたらクマムシかうズムシだから妖精って」

妖精は絶対零度や高温で熱したらピチユーンするし、細切れにされたり頭に切れ込みを入れてもピチユーンする。決して仮死状態にはならないし、分裂再生や頭が2つなったりしない。

『？ルール？が変わっちまったんだよ。幻想郷のルールが俺等ミラーモンスターの介入によってな』

「…………マジで？」

『マジで。俺等はモンスターの生命エネルギーや人間を主食にしているだろ？そして喰えば喰うほど力を蓄える。つまりそれは生命エネルギーの様に人間の肉ごと生命力を吸収しているんだ。つまりだ。妖精は言わば生命力の塊。幻想郷では普通の人間や妖怪喰うより妖精喰った方がよっぽど力を蓄えられるって事さ。確かに普通のやり方では妖精は死なない。だが、生命エネルギーを吸収している俺等は妖精を殺せるって事だ』

「はー、分かった様な分からない様な…………ん？さてよ、てことは…」

『お、気付いたか。妖精が集まる所はこの幻想郷に約2つある。まず基本は住みかである森。だが森で妖精を探すのは難しい。妖精は人を惑わし、迷わせる者。殺そうと思ってるなら尚更無理だ。そしてもう一つそれは……ここ（紅魔館）だ』

レミリアの顔から血の気が引いていく。

『紅魔館なら、妖精が固まって働いているし逃げるスペースも森に比べて少ない。そして紅魔館では反射物が多い。絶好の狩場だ。……おっと、俺を責めるなよ？この事実を知ったのは最近だ。他の奴らもそうたるな。そもそもミラーモンスターは知能が低い。普通に妖精が相手したら妖精の方が上手だ』

エビルダイバーの付け足しに、少しばかり胸を撫で下ろす。

『実行するなら契約モンスターか、融合モンスターくらいか』

融合モンスター。妖怪やその他の生物と名の通りミラーモンスターが融合した存在。決して遊 王とかじゃない。人は弱い為融合の事例があまりない。

『あと、言い忘れてたが融合モンスター、今紅魔館にいるぜ？』

「

は？」

『ついさっき気配感じてな。融合モンスターでも基本ミラーモンスターと一緒にだから気配は分かる』

またレミリアの頭の上に・・・と点が浮かぶ。今回は点が多く沈黙時間が長い。そして喉が張り裂けんばかりにシャウトした。

「早く言えよ!!!!!!!!!!!!!!」

そしてシャウトの後にエビルダイバーの頭部に一発。

『つてえ!!!!!!!!!!』

「なんでそんな重要な事を忘れてんのよ!馬鹿なの?死ぬの?」

『ごめん』

「ああもつ!今そいつどこよ?早く探して!」

『あいよ』

トプンと、エビルダイバーは頭をミラーワールド内に戻した。そしてミラーワールド内のレミリア自室から姿を消した。

「たくつ……………」

苛立ちを乗せたため息を吐き、エビルダイバーが殴った為赤く腫れた右手を擦る。

「大したことにならなければ良いけど……………」

＊

レミリアの願いが届く訳がなく、紅魔館の一角。斬殺され粗食された妖精の死体が散乱している。もともと数が多いのか、それとも輪切りにされた為なのか肉塊の量が凄まじい。死体による嫌悪感、そして廊下や壁にへばりつく肉片血痕。これが妖精の物だといえば、幻想郷に住む神ですら眼を丸くするだろう。

そして血累々の中に栄える銀髪と銀刃のナイフ。十六夜咲夜が両手に、身体中に仕込んでいるナイフの一部を持ち立ち回っている。メイド服や肌、顔や髪には血液が点々と付いている。彼女のではない動き回っている間に跳ねたり等していた為付いてしまった。

咲夜がこの現場で、この惨劇に出会ったのは数分前。只の偶然だった。重い気分で、脚がふらつとここに咲夜を導いた。これが空間支配をしている咲夜が無意識で異変に感じたのかは定かではない。

咲夜が床を蹴りつけ跳躍する。踏み込んだ時に床に撒き散らされていた妖精の血が跳ね、脚に掛かったが気にはしない。そして上空から両手の、指で挟んで握っていた計8本のナイフを？敵が居るであろう場所に投げつける。だが、投げた場所は咲夜が予測しただけの場所。ナイフは床に突き刺さり、妖精の死体に刺さった。床に突き刺さるナイフなど、その突殺力、切れ味を見せ付けられたら並みの生物ならすくみ上がるだろう。しかし、聞こえてきたのは咲夜をせせら笑う様な声だった。

「クソッ…また……！」

悪態をつき、着地と同時に突き刺さっているナイフを回収する。この機械的作業を、何回繰り返し返しただろう。咲夜の攻撃は、全て感で

行われていた。姿が見えない訳ではない。現に2、3回見えている。後頭が異様に突き出ており、身体はシマウマの怪物のようだ。両腕には、角の様な刃物が装着されている。姿は確認できる。だが？認識ができない？。訳がわからない事とゆうことは十分過ぎる程分かっている。只、居るとゆう事実が確認できているのに、そこにいる場所が認識できない。

（超高速か瞬間移動……もしくは認識をずらす類の能力か気配を消しさる力？……恐らく後者。移動系なら私の能力で捕える事ができる筈。だけどいくら発動しても手応えがない……厄介きまわりない！）

内心で愚痴を漏らした。見えるのに見えない。そんな不可解な現状に苛立ち、判断が鈍る。空間に動き回る気配を感じ取り、ナイフを投げる。ナイフが空気層を裂く音は、名が通る名剣のそれと変わらない。澄んだ美しい音。一つ一つ手入れが行き届いた素晴らしい刃。そのナイフも、また虚しく壁に突き刺さった。

「ちいい！」

瞬間、咲夜のナイフに劣る刃こぼれしていそうな鈍刃が咲夜の腹を斬った。

「つう……！」

振り抜く間際に、両手に持つナイフを使い角刃を受けとめた。咲夜が予備のナイフを持ちかえる速度はいつ見ても凄まじい。能力発動には集中力と範囲固定を行わなければエネルギーが無駄に消費してしまう為、咲夜的能力には瞬発力が欠ける。その為不意を突かれた攻撃に弱い。どちらかとゆうと不意打ちに向いている能力だ。ナイ

フと腕に装着されている角刃の鐔競り合いだ、顔が近い。汚らしく、憎たらしい顔だ。直視したくない顔とゆう物をはじめて見た。距離をとる為に、右手にスナップを加えてナイフを投げる。すると、シマウマの姿はボウ…と消えてしまう。

「何回も何回も…！」

斬り付けられた腹を押さえ、舌打ちをした。腹の傷は浅いが、鈍い刃で斬られた為か血がドクドクと無駄に出血する。メイド服が初めて咲夜の血で汚れた。ジンジンと熱を帯びる傷に顔を歪める。

「余計な傷を……」

傷に手を当てた状態で、左手にナイフを持ち構える。シマウマの怪物がまた姿を現した。いや、元々そこにいて姿が見える様にしただけだろう。角刃に付着した咲夜の血を見せつけ、それを舐めた。咲夜の背中に悪寒が走る。怪物自体の戦闘力はさほど高くないが、厄介なあの能力で上手く戦闘ができない。

怪物がゆらりと動いた。馬鹿にしているのか今度は姿を消さない。目視可能状態で突撃してくる。咲夜は考える、攻撃の寸前に消えるか、もしくはまた直ぐに消えるかの二つに一つ。神経と空間認識力を研ぎ澄ませ立ち向かう。見えている間に倒すか、時間を止めてしまえばいいが、能力発動の瞬発力は彼方の方が断然上だ。

その心配も直ぐにしなくてもよくなかったが。

《神槍『スピア・ザ・グングニル』》

咲夜の後方から北欧神話に登場する伝説の槍を模した真紅の光槍が

獲物を獲ようと床を挟りながら開いた。咲夜は空間認識力を高めていたので後方からの攻撃を難なく躲し、攻撃主を悟るとホッと息を吐く。光槍は突き進み、シマウマの怪物の直撃したのか槍が爆散した。咲夜が槍の持ち主に駆け寄る。

「お嬢様！」

槍の持ち主であるレミリアは咲夜を無視し、窓ガラスに眼を向ける。

『分かつてると思うが、奴さん健在だぜ』

勿論エビルダイバーの声、姿は咲夜の眼と耳には届いていない。レミリアは光槍の爆散により生まれた爆煙を睨み付ける。煙が晴れるとそこには嘲笑うかのように立つシマウマの怪物が。

「躲したか……そうでなくちゃお仕置きにならないわ」

口元を微かに歪ませ、床の端に転がる妖精の死体に眼をやる。ちなみに死体はレミリアの光槍の威力と爆風で端に追いやられた。次に横に立つ咲夜の腹部に。

「派手にやってくれたわね。屋敷の中もこんなに紅色に染めてくれて。紅色は好きよ。好きだけでも……」

懷からマゼンタカラーのカードデッキを取出し、脇にありエビルダイバーが映る窓ガラスに掲げた。

「この紅は虫酸が走るわ……！！」

レミリアの腰にVバックルが装着され、セリフを吐き捨てると同時

にカードデッキをセットした。紅い悪魔が住む館の主はマゼンタ色の甲冑に身を包み、怪物を指差す。

「今度は私が貴方を染めてあげる…紅い月より紅く、咲夜達より数段劣る貴方の醜い血でね…！」

レミリアは、ライアは、静かに揺らがせた。胸の内から沸き上がりうねり立つ、紅蓮の怒炎を。

そして咲夜は今起こった、レミリアが隠していた秘密に、青系統から深紅に変わった瞳を見開いていた。

『EPISODE・14/予見者の憤怒』（後書き）

………続くよ？

本当はもつと入れるつもりだったけど、オーズのくだりで無駄に使ってしまった。

今回出てきた魅空アイテム、『魔審器』。作者の中2臭がプンプンしてきますが大丈夫。作者は中学卒業して今高校だから。

…何が大丈夫か分かりませんが、元となったネタは『魔人探偵脳噛ネウロ』の魔界777ツ能力です。777もありますがそれなりにあります。これは魅空の？魔法が使えないおちこぼれ？設定を目立たせる為に作りました。これで魅空がどうゆう人間でどんな生き方をしてきたのか絞れると思います。

次回はいつもより遅い更新になるかもしれませんが。この紅魔館戦にもフランドールを入れるか悩んでいます。ちなみに融合モンスター妖怪が何なのかピーンときた方。ネタバレになってしまっていますので分かったら『ジャンプにいるフィッシュ竹中もどき』と言ってください。あれ、竹中？武中？どっちだっけ…
まあいいや、次回もよろしく願います！

感想や魔審器のアイディア等もよろしく願います！

『EPISODE・15／予見者と龍騎士』（前書き）

ども、最近ハマっているのはゆっくり実況動画です。仮面3です。

特に書くことが思いつかないので早速豆知識。

四季映姫の豆知識

『四季映姫は咲夜より身長が高く描かれた事があるらしい』
もうらしいって書いてちゃってるから確信のレベルがめっちゃ低いです。公式であるらしいのですがこれはどうだろうか……。分かる人がいたら教えて下さい。

では本編、皆さん

ゆっくりしていいね!!!!!!

『EPISODE・15 / 予見者と龍騎士』

ザワザワ……。

騒がしい、完全に覚醒していない頭で唯一考えられたのはそれだった。睡眠中を音で邪魔れた不快感に苛立ちを感じながら、ゆっくり眼を開ける。

眼から入ってきた映像に、頭が一気に覚醒した。

人々、凄まじい量の人間が早足で交差点を歩いていた。自分の世界ではここまで人が一ヶ所に集まっているのは見たことが無い。それに見たことの無い服装。第一印象は堅苦しい。服装や人にも驚いたが、建物にも眼を奪われた。こんな高い建物がこんなあるなんて！　しかしここはどこなのだろう。幻想郷にこんな場所は無かった筈だ。その前に自分はいつもの定位置に……何なんだいったい。混乱の最中、自分に集中して送られている視線に気付く。

数人の男性と1人の、二十歳前後くらいの女性だった。

他の人間は自分に眼もくれないのに、あの人間達は少し哀しそうな眼で自分を見ている。女性が自分に近づこうとした。だがそれは、近くにいた茶髪の男性に阻止された。女性が茶髪の男性に眼で訴えかけるが、茶髪の男性は只首を横に振った。女性が残念そうに俯いた。

一応自分なりに気をつかって己から話し掛けようとした。

「あ…あの」

その時女性と男性に、自分が変身するときのような現象が起こり強い光が発せられた。反射的に眼を瞑る。光がおさまった様で、恐る恐る瞼を開けるとそこには。

「りゅ…龍騎…？」

男性と女性の姿は無く自分のもう一つの姿、龍騎が立っていた。愕然とした。神崎の話では確か龍騎になれるのは自分だけの筈。……いや、カードデッキがあちらこちらに行かない様にしているだけで変身できないとは言っていない。

龍騎のカードデッキがもう一つ？

自分のポケットからカードデッキを取り出す。カードデッキを見た瞬間、頭に稲妻が走った。

「そうだ…思い出した…確かドラちゃんの為にモンスターを倒しに行った時だ……」

紅美鈴の記憶の端に追いやられていた存在。アナザーリュウキ（もう一人の龍騎）。あれ以来姿を見せなかった為すっかり忘れていた。

「あ…貴方は？」

美鈴の質問に、アナザーリュウキは答えない。ただの沈黙。美鈴が続けて聞こうとすると。

「貴方と……いえ、龍騎と深い関わりを持つ者達の集合体。もう一

人の龍騎…アナザーリュウキってどこかしら？」

突如、龍騎に似たライダーが現れ美鈴は反射的に構える。黒い軀に、つりあがった赤い複眼。仮面ライダーリュウガだ。リュウガは美鈴の傍に近寄る。

「紅美鈴、龍騎に選ばれし者。彼らは龍騎になってしまった者。1人例外が居るけどね。そして私は龍騎の影、リュウガ」

リュウガは1人で吟じる様に続けた。

「例え姿形が違えど、名前も境遇も違えど、運命さえも違う……だけれど貴方は龍騎、彼らも龍騎、私はリュウガとゆう影だけど、元型は同じ。そして私は貴方と最も近くて、最も遠い存在……」

前にアナザーリュウキに語り掛けた物近い言葉を美鈴に贈った。

「近くて遠い？」

「そう。私はこの幻想郷で一番奇妙な誕生の仕方生まれたライダー。だから最も近い存在だった筈の貴方から離れちゃったのよ」

「……？　そもそも私と近いって？」

美鈴が首を傾げた。

「自ずと分かる時が来るわ。私と貴方は彼らから祝福され、期待されている。この闘いを止める事をね」

リュウガが沈黙を続けるアナザーリュウキを指差した。そして付け

足す、『私達は特別だ』と。

「特別？私が？」

「そう。？私達が？選ばれた。だから……簡単に敗けないでね？」

言葉を切ると、美鈴の視界を光が遮る。手で光を防ごうとするが、先程アナザリユウキが放った光よりも強い。光を受けていると、だんだん意識が薄れてくる。光の中でリユウガの声が聞こえた。

「忘れないでね……。貴方と私はとても近い。近すぎて分からないの。そしてとても遠い……。一瞬でも気を抜いたら見えなくなるくらい遠いから」

これが最後になり、美鈴の意識が完全に途絶えた。

*

『…よ……………主…！……』

覚醒しきれない頭に聞き覚えがある声が聞こえてくる。どんな生物でも起きるのは辛いものである。自分を起こそうとする雑音を無視し、また眠りにつこうとする。すると舌打ちの様な音の後に、『ガブッ』とゆう、アニメではありがちな音が右手の方から聞こえてきた。

10秒経過……。

美鈴の顔が歪む。だが目はまだ閉じている。

20秒経過…。

美鈴の顔に滝の様に嫌な汗が流れる。そして瞼の接着面に液体が溜まり光が反射する。

30経過…。

美鈴の顔が青ざめる。汗のみならず涙らしき物が流れる始める。

40秒経過…。（圧力追加）

美鈴の顔が描写できない物に。

「いだああああああああああアアアアア！！！！！！！」

耐えきれなくなったのか絶叫した。紅美鈴、記録は43秒46。まずの結果である。一度美鈴でめやイケのクワガタムシに鼻を挟まれるアレをやってもらいたいものだ。美鈴の右手にかかっていた圧力が無くなるのを感じ取ると、そのチャンスを逃さぬ様すぐさま引き抜いた。

「痛い何これ痛い！！どんぐらい痛いかとゆうとかなーり痛い
いああああい！！」

いささかオーバーリアクションな気がするが、美鈴の手には鋭い牙が肌を貫くか貫かないかのギリギリな力加減を表す跡がある。こんな牙傷が付けられる美鈴の知り合いは彼しかない。

「いたあゝ、何すんのドラちゃん……」

目から涙を流しながら噛んだ犯人であろうドラグレッダーを探す。

『我はここだ』

声が出た方を向き、文句を言っただろうと口を開けた瞬間、見なければ良かった的な顔をした。

「ドラちゃん…それは……なんかキモい…」

美鈴は主に、スリットが入ったスカートやズボン等を着用している。今日はズボンで、ポケットに手鏡を入れていた。龍騎に変身できる様になってからは手鏡を常に持っている。だがその手鏡からは今、ドラグレッダーの首が出ていた。手鏡から頭を出した後、無理矢理頭をポケットから出たのだらう、ポケットが少し破れていた。

「え、ドラちゃんって生首ネタ好きなの？ そうなの？ ドラちゃん出た場合大抵生首だよな。水溜まりしかり、武器しかり、今しかり」

『そのような事どうでもいい。とにかく火急に対処しなくては』

「火急につて…、何かあったの？ 何かあるから急いでるんだろうけど」

『紅魔館内に融合モンスターが現れた！』

美鈴の顔が一気に凍り付く。融合モンスター自体とは会ったことは無いが、非常に厄介だと聞いている。それが紅魔館内に居ると知らされた美鈴の頭からは、リュウガとアナザーリュウキ存在は余所に

やられていた。

*

妖怪、【ぬらりひょん】。

比較的よく知られた妖怪だが文献などはあまり残っていない。鳥山石燕はこの妖怪を頭が風船の様に大きく旅装束をした老人の姿に描いたが、以後の絵画や漫画に登場する【ぬらりひょん】は大体このイメージを踏襲している。この妖怪の特徴は、ぬらりくらりとしてとらどころがなく、ひよんな所に突然現れる事にある。そしてこの特徴の一番凄いところが、町を歩いてもすれ違う誰一人として妖怪だとは気付かない事にある。

？気付かない、いや気付けないのだ？

ぬらりひょんの力を簡単に言えば、己が持つ気配を完全に消すのである。気配が無ければ、視覚にすら現われないのだ……。

*

ヒュン、ヒュン…

マゼンタカラーの鞭が空を裂く。なんにも好きで空ばかりを斬っている訳ではない、目標をとりそこなっただけだ。

「チツ……」

それでもライアはエビルウィップ振るう。その場をあまり動かず広範囲で攻撃するのはコレしかない。

動かない理由は、後ろに控えさせている咲夜である。ライダーの装甲を装備している自分は、2、3回攻撃を受けてもたいした傷はでないが、生身の咲夜は違う。あのモンスターの攻撃を受ければ妖精の様に簡単に輪切りにされる。故に護りながらの戦闘を余儀なくされた。エビルダイバーを召喚し、咲夜を護らせる作戦も考えたが直ぐに却下した。姿を隠す相手に、エビルダイバーを召喚しただけなら結果は変わらない。エビルダイバーも咲夜ごと輪切りだ。

大降りにエビルウィップを振るい、空を斬るとエビルウィップの軌道線にモンスターが現れた。あの口は……笑っているのか？

ぬらりひょんWITHゼブラスカル・アイアン（以後：NWZ）。コレが紅魔館内の妖精獵奇殺精の犯人だ。NWZと数回打ち合っただけだが、ぬらりひょんとゆう妖怪の力の厄介さが身に染みた。高頻度で姿を現すが、すぐに姿を消し攻撃を意味の無い物にする。マスクの下でレミリアは齒軋りしをした。

「どうする……」

チラッと咲夜を見る。腹からは未だ血が溢れている。あまり頼る訳にはいかない。咲夜の力と協力すれば、戦況は些か此方に傾くだろうが怪我人に頼るのは……。

「私のプライドが許さないわ」

ボソリと呟き、姿を現したNWZにエビルウィップをしならせる。結果は変わらなく標的にダメージを与えられなかったが。ストレスが溜まる闘いだ。こんなにストレスが溜まるのはスイッチが入った妹を押さえる時とどっこいどっこいだ。まあ最近、昔より幾分大人しくなった方だが。

なんて事を考えていると眼前にNWZが現れる。

「っ!!」

不覚にも肩をびくりと震わせ驚いてしまった。だが、驚いたのも無駄にならなかったが。無意識に驚いた時に生まれた筋肉の収縮を利用し、左手がバネの様に弾かれた。弾かれた左手に装備されていたバイザーがNWZの顔をとらえた。ライアのバイザーは盾としての機能を持つが、斬り付ける事も可能である。

手応えを感じ取ると、NWZがまた消える。

これはレミリアのバトルセンスとゆうより、生物の自己防衛本能がなせた技であろう。ライア自身も少し驚いていた。

ライア達から数メートル離れた場所にNWZがいた。顔には調子に乗って接近しすぎた代償の様に斜めに傷が出来ている。NWZの顔が初めてニヤケた顔ではなく痛みに歪んだ。

「あら？ いい顔になったじゃない。あのいやらしい顔よりよっぽど素敵よ。その痛みと屈辱に染まった表情……次は絶望と生にすぎる豚みたいな顔にしてあげる」

いつもならこんな汚い言葉を言えば咲夜が注意するだろうが、今の咲夜にその余裕は無い。ライアの後ろで啞然としているばかりだ。

左手でエビルウィップの端を持ち、鞭をぴんとはり構えなおす。

「姿を消すと言っても実体はある。いくら攻撃してもかすりもしないから少し心配だったのよ。能力がパワーアップしたのかとね。だけど不意を突けばどうって事の無い、他愛ない力だわ」

挑発をたたみ掛ける。戦闘で基本的に重要だと知られているのは冷静さと余裕である。冷静は頭をクールダウンさせより洗練された動きを生み出す。余裕は油断と過信を呼ぶ可能性もあるが、余裕は自分が上だと考えていれるのだ。その場合、頭が興奮状態になる確率がぐっと下がる。だからライアは挑発する。NWZから冷静さと余裕とゆう頭の鎧を剥ぎ取る為に。頭に血が上れば、先程の様なチャンスがくるかもしれない。

NWZは傷を手で覆い、口を歪めている。これだけで挑発に乗ったかは判断しにくい。傷から乱暴に手を離れた。呼吸が荒くなっている。傷をつけられた事にか、それとも挑発に乗ったのかは分からないが興奮状態にあるのは分かる状態だ。荒く息を吐き出しライアに近づこうと一歩を進める。

その時、NWZの顔が凹んだ。

顔がべっこりと凹んだ瞬間に、吹き飛ばされたのかの様に真横に飛び壁に激突した。壁は崩壊し、NWZの身に破片等が積もった。

NWZを攻撃したのは美鈴が変身した龍騎だった。ミラーワールドを経由して窓から現れた龍騎がNWZの顔面を不意打ち同然に殴り

付けたのだ。

「やっぱりちよつと汚いかな？ でも……」

龍騎が不意打ちをした自分に顔をしかめた後床に転がっている妖精の死体を見た。何が起こったか分からない顔、恐怖に目を見開いている顔、何も知らされず切り刻まれた顔が転がっている。

「ここまっでやってるんだから……倒しても恨まないでくださいね？」

右手を握り締め堅い拳を作り、NWZが飛んでいった方へ突き付けた。意志表明をするかの様に。

「ん？」

やっと気づいたのか、ライアとその後ろの咲夜の方に顔を向けた。まずリアクションをとった相手はライア。

「あー！ 貴方確か……えーと……その……ピンクの人！」

「ピンクの人じゃなくてライアだ。そしてなんだピンクって、なんか私の衣装がいかかわしいイメージを持たれるじゃないか。そしてこれはピンクではない。紅色^{べに}、もしくはマゼンタカラーとゆう」

ライアがばれない程度に声色と口調を変えながら言い返した。龍騎にもし正体がばれたら今よりも厄介な事になる。ただでさえ咲夜の目の前で変身してしまったとゆうのに。ライアは構えを解き、龍騎の乱入に複雑な心境のため息をついた。

*

ライアがため息をついた時、後ろに控えていた咲夜の混乱は絶頂に達していた。そもそもNWZと出くわしていた時点から混乱していたとゆうのにその上レミアが、あの鴉の言っていた仮面ライダーになった。主の変身を目の当たりして咲夜の混乱は加速した。そして余計なプラスアルファで紅い仮面ライダーも乱入。紅い仮面ライダーが自分の腹の傷を見て騒いでいるが気にしない。気にする余裕が無い。今自分にできる事は何もしない事だ。あるとしても今のタイミングではない。あの怪物と対等にやりあえる力が無い自分が恨めしい。あの程度の奴に一撃入れられ、剩え今は護るべき主の背に隠れている。

私もあの力が欲しい。

彼女と対等とまでは言わない。ただあの騎士の様な堅装を、敵の攻撃を跳ね返し後ろにいる人を護れる鎧チカラを……！

*

「てゆうかライアさんなんているんですか？ ああそうかモンスターを倒しに来たのか。あれ、でも何で咲夜さんを護って……？ 前に会った時は有無を言わずに殴ってきたからてつきり血も涙もない冷徹なエイ野郎かと思ってましたけどお優しい一面もあるんですね！」

龍騎が貶しているのか、誉めているのかよく分からない言葉を贈った。まあ八割がた貶しているのだろう。前の戦闘を根に持っているのだろうか。ライアがまたため息を吐き出しながら咲夜から離れ、龍騎に近づいた。

「皮肉は後でいい。今は共闘すべきだ。手を貸してくれないか龍騎」

「別にいいですよエイ介さん。私もここまでやられて黙ってる訳にはいけません。一緒にちゃっちゃとやっちゃいましょう」

「誰だよエイ介って、私はライアだから。すまない、助かる」

「でもあいつそんなに強いんですか？ エイ蔵信之介さん」

「なにその昔の日本にいなそんな名前。ライアだから。戦闘力はたいした事はないが能力がな……」

「どんな能力なんです？ エイ夜紗さん」

「いや近いけども、ギリギリ合ってるけども合ってないよ。その能力ってのは……」

「なるべく簡潔に、プラス簡単をお願いしますエイ琳さん」

「ライアだっ！ って言ってるんだろがよ！！！！」

ついにはライアの怒りの臨界点が天元突破してしまった。咲夜の手前なのでなるべく落ち着いた雰囲気を保っていたが遂には耐えられなくなってしまった。取り敢えず龍騎の頭をどついた。

「アタツ」

たいしてダメージの無い悲鳴。

「オメーはよおおおお！　どんだけ前の事根に持ってたんだよ！
その腹いせが名前をちゃんと呼ばないってちっちゃいんだだけでも結構辛いんだよコレええええ！　今の数回のやり取りで私ちよつとした疎外感味わったよ！　なんか転校した学校のクラスにいるふざけて人を虐めるタイプの子供に転校早々虐められてるみたいだよコレ。そいつは軽い気持ちだろうけどよお！　こっちは転校早々トラウマ物だよ！　前の友人と別れてしまっただけ悲しい気持ちなの無理矢理切り替えて、新しい友人との出逢いを期待してたのにトラウマって！？　悲しみのジャブの直ぐに虐めの1・2スマッシュで重すぎるわああああ！！」

後半の殆どが呼び方と関係の無いツツコミが炸裂した。

「分かりましたよ……ちゃんと呼びますよL I A Rさん」

「発音んんん！！合ってるけど合ってねええええ！！発音求め過ぎで別の意味になってるううう！！」

ライアと龍騎の絡みツツコミとボケの図式が出来上がりつつあるこの作品。それはさておき今まで空気があったNWZが立ち上がった。その表情は憎しみに歪んでいる。NWZの姿が揺らぎ、消えた。

「あつ」

「

NWZの能力を初見した龍騎が驚きの声を上げた数秒後、龍騎とライアはマスクを掴まれ双方の頭を叩きつけられた。

「がつ!!」

「痛!？」

お互いの頭をぶつけ合いをさせられた2人から悲鳴が上がった。龍騎が衝突部を押さえ辺りを見渡す。

「痛………いない？」

「これが奴の能力だ! 己の気配の抹消……下手な高速移動より質が悪い!」

ライアはエビルウィップを構え直し、龍騎は両拳を握った。

「しかしよく気配の抹消ってわかりましたね」

「奴の見た目で気付いた。アレは融合モンスター、とゆう事は何かしらの生物と融合している。あの頭は分かりやすいだろ? アレはぬらりひょんと融合している筈だ。そしてぬらりひょんの力が融合により増幅され、気配の抹消が可能になったんだろう」

「なるほど!」

龍騎もぬらりひょんを知っていたので直ぐに理解出来た。もともとぬらりひょんは完全に気配を消すわけでは無いので臍氣に気配は感じ取れ、ぼやつとは視界に入る。『気を使う程度の能力』を持つ美鈴なら、気量を操りハッキリと見ることも可能だ。しかしこれは気配の抹消。気を使いたくともなければ意味が無い。

「さて……どうする…?」

龍騎が感覚を研ぎ澄ませ、気配を現せた時に対応しようとする。感覚を、極限迄に。

「ッー!」

ふと、ライアの真後ろに形の無い煙の様な物を感じた。その煙は躰を簡略した様な物であり、手足と頭部がひよこつとでいる。何だろぅと考えていると、煙が腕をライアの頭部めがけ振り上げた。それに何か嫌な感じがした龍騎は取り敢えず頭部分を殴ってみた。

「ひゃ!？」

ブルア!?

拳には確かな感触、そしてライアと重なった悲鳴、更に姿を現しまたぶっ飛んだNWZ。

「何するんだ!？」

「ライアさんアレ、アレ」

文句を言いながらも、龍騎がちよいちよいと指差す方を見る。

「ん? なに………ッ!! あんたあれどうやった!？」

「うーん……なんかもややしてる所を殴ってみたら…」

何故龍騎に気配が無いNWZを察知できたか。それは美鈴が龍騎に

変身した事による。モンスターが融合した事により能力の質が上がるなら、ライダーまたしかり。美鈴の能力の質が上がり、『気を使う程度の能力』が、抹消した筈のNWZの気を作り直した。龍騎が感觸を研ぎ澄ませた結果、標的の気を強制的に作り直し察知したのだ。力技この上無いが、頼もしい能力だ。だが龍騎自身はこの事に気付いていない。龍騎とライアがあーだこーだやっている内にNWZが姿を消す。

「あ…また」

「原理はしらんが兎に角察知できるなら恐れる必要は無い。もう一度やってみてくれ」

龍騎は頷き、もう一度感觸を研ぎ澄ました。しかし、結果は良いものではなかった。最初は同じ様に現れたが、それが辺り一面に次々と現れた。

「!!!」

ライダー状態では能力のコントロールが難しい。美鈴の能力は標的だけではなくライアや咲夜、妖精の死体や無生物にも鑑賞し、美鈴の視界に出現させたのだった。つまりは先程のはマグレだったのだ。逆に自分の能力で視界を遮られた龍騎が分かりやすくうるたえる。

「何をやっている!」

「だって」

ライアの一喝に龍騎が答えようとしたが、今度は2人同時に頭を床

に叩きつけられ言葉が遮られた。

「ぐう……」

「くっそ、もう怒った」

龍騎が片膝の状態で立ち上がりカードをバイザーにベントインする。

《STRIKE VENT》

完全に立ち上がる龍騎の右手にはドラグクローが装備されている。

「こうなったらここら一帯を火の海に……ヒヒ……ウヒヒヒ……」

「何危ないこと言ってたんだよ！ 頭ぶつけられ過ぎておかしくなったか？ なりかけてよね、最後なんか怖い笑い方したし」

ライアがした忠告をスルーしながらウヒヒヒと、街中で出会ったら包丁とかで刺しそうな人の雰囲気垂れ流しにしている。

「いや、まてよ……その火力なら……いけるか。賭けだがやるしかない」

「どうしたんですか？ 独り言は精神が病みかけてる寸前ですよ」

「お前に言われたかねえよ！！ ……まあいい、それよりも少し耳を貸せ」

「私の耳はアタッチメント式じゃありませんよ？」

「普通に取り外し型って言えよ。そしてそんなコテコテなギャグじゃないかな、うん」

適当に龍騎をあしらって、自分が思いついた？賭け？を耳打ちした。

＊

ライアと龍騎がゴニョゴニョと耳打ちしている頃、姿を消して様子を伺っているNWZ。

気にする必要は無い。例えば奴らが矮小な脳から絞りだした知恵等、この力を手に入れた自分には通じない。この顔に傷を付けられた時や、あの仮面ライダーから攻撃された時は少々驚いたが、なあにまぐれだ。何かの間違い。そもそもこの能力を手に入れた自分は上位の存在になったのだ。最初は冴えないジジイと融合してしまい悔やんだが、思わぬ掘り出し物だ。この能力を手にした自分は特別なのだ。だからあいつらにも、他のモンスターにも負ける訳が無いのだ。仮面ライダーもモンスターも、自分にとっては家畜と変わらない。むしろ家畜なのだから自分に喰われる事は偉大な事なのだ。そうだこの転がっている妖精共の様に喰ってやろう。生物の底辺に位置するこいつらに栄光をくれてやろう。

《COPY VENT》

どうやら家畜の無駄な作戦が決まった様だ……。

＊

「な、生首が増えた!？」

ライアが発動したコピーベントの効果によって、右手にドラグクローが装備された。そして龍騎のボケは最早スルー。

「内容は覚えたな？ 合図するまで目一杯炎を溜める」

「てゆうか使い方分かるんですか？」

自分だってなんとなしに使って覚えたのだ。初触のライアに使いこなせるとは思えなかった。

「安心しろ。コピーした時に大体分かった」

右手を上げ、最初の合図を送る。ライアと龍騎が大きく跳躍し廊下の端に移動する。ライアは途中で咲夜を拾って、また護るように前に立つ。龍騎とライアが同時に構え、ドラグクローを後ろに引いた。ドラグクローの口部からごうごうと紅蓮の炎が蓄積される。発射可能レベルまで蓄積されたが双方放つ気配は無い。溜める、溜めるまだまだ溜める。炎がドラグクローの口部から漏れだし始めた。それでもまだ撃たない。ライアと龍騎は右腕の熱でマスクの下では汗をかきはじめた。ドラグクローの炎が爆発しかける。

「今だ!!!!!!」

「シャアアアッ!!!!!!」

ライアが合図を送り、龍騎が雄叫びを上げた。そしてドラグクロー

を突き出し互いを狙ってドラグクロー・ファイヤーを放った。限界突破しかけたファイヤーは見たことが無い大きさだった。巨大な火球が廊下を突き進んだ。ライアが龍騎を、龍騎がライアを狙った訳なので2つの火球は直線道にある別の火球と衝突することになる。

ズトオオオオオオオオン！！！！！！

火球がぶつかり合い大爆発が起こった。爆発により廊下の少ない窓が砕け、爆炎と爆風が廊下を包んだ。勿論龍騎やライアにも爆風は襲い掛かる。

「うわぁっ!?!」

「咲夜!!!!!!」

龍騎は爆風に吹き飛び壁に衝突し、ライアは咲夜を爆発から護るように覆いかぶさった。龍騎の様に吹き飛ばされかけたが、そんな事になったら生身の咲夜はひとたまりも無い。必死に耐えた。爆発がおさまり、龍騎もふらふらと立ち上がる。ライアも咲夜から離れ廊下を見据えた。中央には。

「見つけた……!!」

黒焦げになり満身創痍になったNWZが放心状態で立っていた。過大なダメージに思考が停止した様だ。すかさずライアと龍騎は躰に鞭を打って止めをさそうとカードをベントインする。

《FINAL VENT》

《FINAL VENT》

ファイルベントを発動し、それぞれのモンスターが召喚された。ドラグレッダーが龍騎の後部に控え、龍騎が独特なポーズはとらずNWZめがけ駆け出す。ライアはエビルダイバーの背に波乗りの様に乗った。駆け出した龍騎は低空の飛び蹴りを放つと、ドラグレッダーから炎を吐き出される。

「でえいやあああああ！！！！」

ドラゴンライダーキック室内バージョンだ。ちなみに美鈴はこの技を使ったのは初めてである。低空の飛び蹴り以外はアナザーリュウキの見よう見まねだ。炎に包まれた龍騎のドラゴンライダーキックがNWZに直撃し、炎をNWZに移し蹴り飛ばした。勢いを失った龍騎はその場に落ちる。

「ぶぺっ！？」

炎に包まれたNWZを待っていたのはエビルダイバーに乗ったライアだった。加速し、飛来するNWZに正面衝突する。ドラゴンライダーキックとライアの【ハイドベノン】を連続で受けたNWZは家畜と見下し相手に敗北、爆死した。これが中途半端な知恵を得たモンスターの末路だ。

ライアがエビルダイバーから飛び降りる。モンスターから出た生命エネルギーを食らおうとエビルダイバーは生命エネルギーを狙ったが、ドラグレッダーも喰おうとしていたのでちよっとした喧嘩の様になっている。

ライアが床で倒れている龍騎に駆け寄り手を差し出した。

「今回はすまなかったな。助かった」

龍騎は手を掴み立ち上がる。

「いえいえ、たいした事してませんし。このダメージも殆ど自滅みたいな物ですし」

「それでも助かった。お前のストライクイベントがなければもっと時間がかかっていたかもしれないしな」

「時間短縮の代わりに……紅魔館が壊れましたけどね」

「しょうがないさ。あれが最善な賭けだった」

「そう……ですか。じゃあ結果オーライって事で。ドラちゃんも食べおわったみたいですしこれで」

龍騎がペコリと頭を下げると、熱で変化しなんとか形を保っていた反射物に飛び込んだ。あとにドラグレッダーが続く。龍騎を見送ったライアに、不満そうな顔をしたエビルダイバーが近づく。

『あの野郎殆ど食っていきやがった。後から来たくせによお』

「それでも彼女達のおかげよ。文句言わない」

文句をぶつぶつ言うエビルダイバーを宥めると、咲夜を見つめる。

「後で……私の部屋に来なさい。話があるわ」

咲夜が何も分かっていない子供の様にほうけた顔で、ゆっくり頷く

のを確認すると龍騎が使った反射物に飛び込んだ。

残された咲夜がまず思った事は、この廊下をどうするかとゆう事だった。

*

紅魔館NWZ事件の日の夜。幻想郷のある家。前に狼夜や将斗、その他の人物が集まっていた家だ。中は前の様にぎやかではなく、三人だけだ。

金髪で九本の狐尾が生えており、頭に二股の帽子を被った女性が、長い金髪で六十四卦の『萃』が描かれた服を着て帽子を被った女性に二つの銀色のバツクルと、二枚のランプが描かれたカードを手渡した。カードの絵柄はカブトムシとクワガタムシ、そしてダイヤとスピードのA。女性が満足そうに頷き受け取った。

「ありがとう藍。盗みだすのは大変だったでしょう？」

「いえ、？カリスラウザー？と？コレ？を手に入れるよりは簡単でした。しかし本当によろしかったんですか？？レングルバツクル？を持ってこなくても。確かにアレは危険ですが、紫様ならスパイダーアンデッドを服従させるのも簡単かと」

彼女の名前は八雲紫。幻想郷に存在する妖怪で最上位に位置する存在。戦闘能力、知識、全てがずば抜けている妖怪の賢者。九狐の妖獣は八雲藍。紫の式神である。

「カリスラウザーの複製もそうですが、何故レンゲルよりコレを選んだんですか？ 戦闘力はレンゲルも十分ありますし、何よりいま使っているライオトルーパーよりましだと思いますが……」

藍が服の袖からまた何かを取り出す。取り出した物は何枚もの札で封印された三本角の昆虫型メカだった。メカはたまにビクンと動くが、動き回る様子はない。

「捕まえるのに苦労したようね」

「はい……」

よく見ると藍の顔にはあざや、帽子が少し膨らんでいるのを見ると頭にはたんこぶができているらしい。

「確かに私なら適合の境界を弄って使うことも、アンデッドを服従させるのも簡単だわ」

紫がメカを藍から受け取ると、順を追って説明した。

「まずカリスラウザーの複製。そもそもオリジナルのカリスラウザーはジョーカーが持つジョーカーラウザーが変化しただけの物であるから採取は不可能。とある？ 剣の世界？^{ブレイド}では作り出していたけど、ディケイドに人工ジョーカーごと破壊された。まあその世界で制作方法のデータを発見したからいいけど」

藍は紫の話を聞きながら新たにブレスレットの様な物を取り出し、渡した。

「ありがとう。レンゲルを選ばなかったのは貴女が言った通り危険だからよ。私がアンデッドに洗脳されなくても周りが狙われる可能性が生まれる。これ以上敵を作りたくないのよ。最後に？コーカサス？を選んだ理由は……」

紫が家にいる三人の内の1人にブレイバツクルとギャレンバツクルを渡した。

「あのトレジャーハンターを気取っているスケベと泥棒がやりすぎない為に、私が止めなくちゃいけない。だからより強い力を持つコーカサスが必要なのよ」

「レンゲルより大変だよ…そいつは」

もう一人……リュウガが言った。

「覚悟の上よ。それよりブレイドとギャレン、歌舞鬼とあいつが勝手に持ってきた？ギルスの種子？の適合者は分かっているの？」

「大樹からの情報で大体ね。ブレイド達は私が然るべき方法で、ギルスの種子は大樹がどうにかして渡すってさ」

大樹とは、仮面ライダーディエンドに変身する青年である。神崎側であるディエンド、幻想郷側である海東大樹。一体どちらが彼の本当の顔なのか。そして様々なライダーを巻き込んだ闘いはどうなるのか。幻想郷に破滅をもたらすか、救済をもたらすか。

この闘いの指揮棒^{タクト}を握る神崎士郎とリュウガ。

幻想郷はどちらに従うのか……。

『EPISODE・15 / 予見者と龍騎士』（後書き）

ゆっくりした結果がこれだよ!!!

ゆっくり構成をねっていたら微妙なできになりました。ごめんなさい。

もうここであつちやいますがリュウガは美鈴に深い係わりを持つオリジナルキャラです。中には紫がリュウガかと思った人もいます。紫はコーカサスであり、今はライオトルーパーです。

ちなみにコーカサスとブレイドの追加……とゆうか元々出演予定だったんですが表記するのをすっかりこつてり忘れていました。ごめんなさい。

今回はブレイド候補であり、今だ登場していないリュウガとリオンを除いて本作品最後のオリジナルキャラ登場予定です。

それでは次回もよろしくお願いします&ゆっくりして行ってね!!!

『EPISODE・16 / 眼力優れる白狼』（前書き）

ども、今週のサンデーに載っていた読み切りが只の痴漢orセクハラにしか見えなかった仮面3です。画力が高いから余計にアレだったよ!!!

では今回の豆知識。今回はみんな大好きアイスについてです。

『アイスクリームは、長時間体温を下げることができる。アイスキヤンデーは、短時間だが素早く体温を下げる事ができる』

どっちかとゆうと仮面3はアイスクリーム派です。雪見だいふくが好きです。

それでは本編！

ゆっくりしていつてね!!!!!!

『EPIISODE・16 / 眼力優れる白狼』

夏も終わりに近づいたとある日の妖怪の山。夏の暑さも残り、秋の湿気が少し感じる様な日。そんな日も、滝の裏に控えている監視者にはあまり関係なかったが。もう慣れた騒がしい滝の音を犬耳に入れながら、暇潰しの大将棋に打ち込む。

パチン…、とゆう将棋の駒の心地よい音。2つの音が椀に日常だと告げていている。今自分が血生臭い闘いに身を置いているとは思えない。だが、滝から生まれた水溜まりに映る自分の契約モンスターが仮面ライダーの事を思い出させる。

「はぁ……」

憂鬱を息に乗せて吐き出した。そして今椀を憂鬱にさせている元は仮面ライダーだけではない。もう1つ、人間関係ならぬ天狗関係だ。

「先々輩！」

噂をすればなんとやら。人の感情を読み取れるのかと思える程のタイミングの良さ。しかも噂と言っても内心で考えただけに、読み取ったかのように現れる。因みに今椀の考えている人物は能力持ちだが、感情が読み取れる訳ではない。『物がよく見える程度の能力』だっただろうか、若干自分の能力が被っているように思えたが、本人曰く、『近くの物なら蟻の体毛一本一本も見えるが、遠くになると殆ど見えない』だそうだ。妖怪の山に侵入した者に対応するのが仕事の白狼天狗には意味が無い能力だった。彼女はいわゆる？落ちこぼれ？だった。

別に椛は落ちこぼれを軽蔑する訳では無いが、なんとゆつかその、性格に問題があった。問題の彼女が滝の裏に入ってきた。

「先輩！ 椛先輩！ 見てくださいよ、ゆっくりもみじっス！」

「わふ、わふう！」

子犬の様に元気いっぱいな少女と、その腕に抱かれたゆっくりが現れた。

少女は椛と似た脇を露出した服を着ているが下は袴の様な物をはいており、腰には鉈の様な刀を装備している。男勝りな印象を受けるが、白狼天狗の象徴の1つである白髪が腰まである美しい長髪であり、胸等は確実に椛より大きい。印象は腕白小僧が中身をそのままに、色美人になったかのような。その腕に抱かれるのは白髪犬耳、そして尻尾が生えたゆっくり。顔は椛に似たものである。

「仕事をさぼって何やっているんですか、犬崎さん」

この白狼天狗の名は犬崎若葉^{けんざきわかば}。最近椛の担当箇所に配属された者である。仕事の先輩後輩なので、若葉は椛の事を『先輩』と呼んでいる。

彼女は他の白狼天狗から落ちこぼれと呼ばれている。椛の所に来たとゆう事は、彼女は厄介払いされたのだ。白狼天狗としては役に立たない為にだ。

だが彼女はそんな事を全く気にしていないのか、顔は無邪気そのものである。

「やだなあ先輩。私の方が後輩なんスから敬語は止めてくださいよ。後、犬崎さん、なんてそんな……堅い！ 堅いっスよ！ 普通に若葉って呼んでください」

「それはいいとして……、貴女は今まで仕事をさぼってゆっくり探しですか？」

冷めた瞳で、自分と同じ顔をしたゆっくりを見る。ゆっくりは何故か幻想郷の住人の一部と同じ顔をしているナマモノだ。実は大抵のゆっくりとは中身を、餡子やカスタードクリーム、チョコ等の糖分を含む菓子で構成されている。そして皮は饅頭、大福、シュークリーム等だ。菓子以外にも肉まんや稲荷寿司で構成されているゆっくりもいる。

話を戻そう。しかし数いる白狼天狗の中で何故自分なのか、解せなかった。

若葉に頭（殆どが頭しか無いが）を撫でられているせいか、喜びを体現しているかの様に左右に激しく振る尻尾。ハッハッハッと犬の様な呼吸方法。コレでは狼ではなく、まさしく犬ではないか。白狼天狗である事に人一倍誇りを感じている桜にとっては、犬と言われるのは侮辱と同じだった。

だから自分のゆっくりは嫌いだ。アレでは犬にしか見えない。

「暇潰しっスよ。先輩がやっている大将棋と同じ事っス。てゆうか先輩！ もみじ、可愛いくないですか！？」

「可愛いくないです」

「ゆがーん!!」

これは珍しい。希少種であるもみじ種が『わふう』以外喋るとは。基本もみじ種はめーりん種の『じゃおん』、ゆゆこ種の『こぼねー』、すわこ種の『あーうー』等の様にとある単語しか喋れないが、こういったシヨックを受けた時は他のゆつくりと同じようだ。

「えー、可愛いですよお!ねーもみじ?」

「わ…わふうん」

若葉に褒められたからだろうか、頬を赤らめ恥ずかしそうに身(とゆつか頭だが)を振らせた。その姿を見て、桜の嫌悪感はより強くなる。桜は顔をうつむかせながら、自分の刀と盾を手にしち上げる。

「およ?先輩どうしたんですか?」

「少し辺りを巡回してきます」

「なら私も」

「結構。1人で十分です。犬崎さんはそのゆつくりと遊んでいてください」

天真爛漫な表情をそのままに桜に言ったが、彼女は冷たく突き放した。続けて何かを言おうとした若葉を無視し、滝の裏から出ていった。

残された若葉は、哀混じる表情を作り、耳と尻尾が情けなく垂れ下がった。

「また……嫌われちゃったかな……」

そう呟いた若葉を、腕に抱かれたもみじが心配そうに見ていた。

＊

『冷たいなあ……。あんな風に言わなくてもいいじゃない。若葉ちゃん泣いてるかもよ？』

「子供じゃあるまいし、そんな訳無いでしょう」

最早カードデッキシステムを持つライダーの殆どが持ち歩いている手鏡からデストワイルダーの声がした。

「彼女はこの仕事に向かう姿勢がみられません。少し厳しく言っても……」

『椀真面目過ぎ。若葉ちゃんの事キラいな？』

今の椀は山にある巨木の内の一本の、枝に腰掛けている。この巨木は本当に巨大で、枝にあと3人は座れる程だ。

「キライとゆう訳では……」

『天真爛漫、活気絢爛、元気を振りまく明るいムードメーカー。自由奔放がたまに傷。若葉ちゃんには人に好かれるタイプの代表見たいな娘だね。そして、人に最も嫌われるタイプさ』

「……………」

『陰と陽、光と闇、表と裏、ありふれた有名過ぎた話だね。明るすぎる光は、濃すぎる暗黒が生まれるのさ。プラス、彼女は落ちこぼれとゆうステータスがある。かつこの的さ。羨ましいと思ってる者はそこにつけこみ、その人を落とす』

「別に私は」

羨ましいとは思っていない、と。

『そうだね。椀は若葉ちゃんを嫌っている訳ではないし、疎んでいる訳でも無い。煙たがっているだよ。無意識にこう思っているんだ？彼女がいれば自分もやられてしまつかもしれない？ってね』

「そんな……………」

『椀を責めてる訳じゃないさ。当然な自己防衛だね。どんな生物も自分が一番可愛いからね。僕だってそうさ。僕一番、椀二番。どんな綺麗事言ってもさ、これが揺るがない事実だよ』

「そんな事ありません！ 知的生物はみな、己より大切な人を求め、愛する本能を持っています！」

『それは君が愛される事が許されているからだよ』

「愛される事が……許される……………」

『確かに今椀が言った通り、君は何時の日か恋愛的な感情を覚えた異性と出逢い、その身を寄せ合い子をなすかも知れない。殆どの動

物が必ず持つ繁殖への渴望が変質した亜種感情……それが愛。でもね、世の中には愛を覚える事を許されない生き地獄を味わう者もいるんだよ』

デストワイルダーが鏡から身を出し、椀へ贈る議論を続けた。

『さっき言った事を総合するとね、若葉ちゃんは嫌われ、疎まれ、煙たがれる。好かれるステータスが無い物と同じになるんだよ。現代では人間みな平等とかあるけど、そんな物虚説さ。平等？ あり得ない。上があれば下があるように。真ん中に上下があるように、ね。』

若葉ちゃんは反発力だけの磁石だ。人を離すばかりで引き寄せない。それは彼女の力が強いから。強すぎる力は人を恐れさせる』

「強すぎる？」

『そう、彼女自分の能力の説明に嘘ついてるよ。いや、説明が足りないかな？』

椀が首を傾げた。

『物がよく見えるチカラ……つまり望んだ物全てが細部に渡って見えるとゆう所だと思うよ。例えば、人間の躰に流れる白血球や赤血球が見えたり、思考が読めたり、記憶すら、ね』

「……………どうして、そう思っただんですか？」

『だって彼女眼が見えてないもの』

「!？」

『先天性の物だろうね。上手く隠してるけどたまに動きがぎこちない』

驚愕の表情が隠せない。眼が見えてない？ 自分が見る限りそんな素振りは無かった。本当なら、デストワイルダーの観察眼は凄まじい物だ。

「で、でもそれが何故!？」

『こんな話を知ってる？ 生命体は軀の一部の機能を失うと他の機能が全力で補おうとする。彼女の場合それが逆に作用したんだね。機能の力が強く働こうとし過ぎて第三の眼とも言えるチカラを手に入れた』

デストワイルダーが、『話を戻そう』と言った。

『彼女が嫌われる理由がそれ。皆無意識に恐がってるんだね。自分が言ったのにアレだけど、性格があーだこーだとは言いつつ。力に屈服する自分を認めたくないんだよ』

「やはり……よく分かりません。何故彼女が愛される事が許されていないのか。それに愛される事が許されていなくとも、自分から愛する事はできる筈です。」

『誰も近くにいないのにどうやって愛してもらうんだい？ どうやって愛するんだい？』

「あ……」

『生物ってね、自分に無い物程強く渴望するんだよ。常識だよ。彼女も、若葉ちゃんも欲しいんだよ。椛が言った様な恋愛感情や、友達と一緒にいたいと思う感情がね。だけど、努力しても帰ってくる言葉は『頑張ったね』の甘い物ではない。『調子にのるな』、罵倒だけだったとゆうのが日常茶飯事。どんな社会にも虐めってあるんだよね』

「虐めって…そんな」

『だってそうでしょ？ 子供みたいに只甘えたいだけなのに、君達は突き放した』

「私はそんな」

『じゃあなんで、さっき若葉ちゃんと会話している時不機嫌そうな顔だったの？ なんで一緒に来たいって言った時冷たく断ったの？』

「ふ、不機嫌だったのはゆっくりが」

『若葉ちゃんは幼い。純粹無垢って言った方が聞こえがいいね。ゆっくりをつれてきたのは椛が笑ってくれるかも知れないから。そう考えていたのかもね、椛は考えてみた？ 若葉ちゃんの考えてることに』

「……………」

俯いて、デストワイルダーに言われた事を考えてみる。

『考えてみれば……彼女は力を使えば誰からも愛される存在になれたらうね』

「？」

『だってそうだろ？ 近くにあればある程彼女はなんだって見れるんだから。ヒトの思考、記憶、心の中なんかもね。そうすれば、ヒトがやりたい事、言っただけの事、手に取る様に分かる』

桜は、今日初めて次にデストワイルダーが言う言葉が予想出来た。そしてその答えも。桜が先行して言った。

「この世で一番醜いのは……？ 中身？」

『そう。ヒトの思考の海は、まるでこえだめの様に濁っており、鼻が曲がる腐敗臭で構成されている。そんな物が？ 形？ として見えるんだ、心を読む事より若葉ちゃんへの負担が大きいだらうね。醜い物で眼がやられ、汚い音で耳をやられる。精神力が馬鹿みたいに高くなりゃ死んでしまうよ』

ならば眼が見えない彼女は？ 能力が完全にコントロールできていない場合はどうなるのか。自分にはそんな力があるわけでは無いから、理解する事は無理だが想像する事はできる。

『遠くの方が見えない……多分、能力を限りなく制限しているからだらうね』

デストワイルダーが考える様なポーズをとる。すると、今まで枝に座っていた枝から腰をあげた。そして自分達の待機場所である滝の方へ目を向けた。

『あれ、帰るの？　もしかして若葉ちゃんに謝りに行くとか？』

茶化すように言った後、椀の手鏡に戻る。

「謝りに行くつもりはありません。ただ……」

『ただ？』

「誉めてあげるだけです。文様に聞きましたが、私のゆづくりは希少種と言われる部類に入るそうで見えにくいらしい。それを見つけたので、乗り気ではありませんが誉めてあげましょう」

たんつ、と枝から飛び滝へ向かう。デストワイルダーが内心でほくそ笑んだ。

『（わっかかりやすいなあ）。ま、とにかく結果オーライかな？　？
本人？から話を聞いて説明も簡単にできたし）』

『物がよく見える程度の能力』。それは見える筈の無い異形すら見える能力。何故彼女がデストワイルダーの存在に気付いたのかは、また別のお話で……

*

「わふん！わふううん！」

滝の裏で、もみじの鳴き声が響いた。鳴き声を送っているのは、壁

に凭れかかっており体育座りしている若葉にだった。湿り気と冷たさを背中に感じ、もみじに無理矢理作った笑顔で返した。

「元気をだしてね……、ありがとうもみじ」

「わふんわふん！」

若葉の腕から離れているもみじが跳ねる。若葉には思考や言いたい事が？形？として見える。ヒトには滅多に使わないが、ゆつくりであり、もみじは喋れない為にしかたがない。ゆつくりの中には言葉が喋れないから等の理由で、グズ呼ばわりし虐めるゲスゆ（ゲスゆつくりの略）がいる。基本臆病な性格のめーりん種等はよく虐められている。しかし希少種等の賢いゆつくりは何を言っているのか大体分かるらしいが。

言葉が伝わらないもどかしさをもみじも感じた事があるのだろう。言葉が分かってくれる若葉との出逢いがよほど嬉しかったのかよく懐いていた。因みにもみじは若葉が能力を使わなければ目が見えないのは知らない。

「わふう、わうん！」

「うん、うん……本当にありがとうね……」

もみじの頭を撫でる。撫でられたもみじは嬉しそうにしっぱを振った。

「嫌われるのは慣れてるけど……やっぱり辛いな。……私にとって努力ってさ、無駄な事なんだよね。努力して訓練しても、努力して勉強しても、努力してヒトに好かれようとしても……全部空回りしち

やった」

地面にいたもみじを抱き抱える。

「でも…認めてほしくて…まだ努力をつづけてる」

幼い頃、この世界を見たかった。生まれた時から眼が見えなかった若葉が行った初めての努力は、？見ることであった？。外の世界の常識が非常識になり、非常識が常識になる。並ば、はじめから無い視力も眼に宿る事も可能と信じて疑わなかった。

そしてコレが人生初であり、最後かもしれない努力の結果が生まれた時であった。

能力無しだった若葉が、能力持ちになった。能力は幸運にも、眼に宿ったが、これが不幸であった。能力を持った当初は力のコントロールができず、相手の全てが見えてしまった。強い不快感、嫌悪感、他人への絶望。

それでも、他人の顔を見てふれあいたかったから無理をして接した。それが失敗だった。

知り過ぎた彼女の言動から、周りは気味悪がり離れていった。上手く隠せ無かった自分が恨めしい。

思考にトリップしていると、表から物音がした。

「なんだろ…？」

眼の焦点を虚空から滝の表へ続く道へ向ける。

「行ってみる？」

「わふう」

もみじの返事を聞き、滝の裏の外に出た。

外には誰も居らず、それにそれらしい気配も無い。小動物か何が居たのだろうか、そんな事を考えていると。

「わふうわふう！」

もみじが何かを発見した様だ。もみじが示した場所を見ると、何か文字が書かれ包装された大きめの箱が置いてあった。興味本位で拾う。小包には『犬崎若葉様へ』と書かれている。

「私に？」

不振に思ったが、自分宛てなら開けても構わないだろうと包装紙破り捨てた。箱を開けると、中には箱の半分の面積を占める1ホルのチョコレートケーキと、銀色の何かの機械、そして青いカブトムシが描かれたランプのスピードAらしきカードが添えられていた。

「わふう！」

もみじが眼をキラキラと輝かせ、声を上げた。恐らくもみじはケーキの方に反応したのだろう。ゆっくりは甘い物、つまりはあまあまに目が無い。あまあまはゆっくりの至上の喜びである。対となす辛

い物、酸っぱい物等は食べれば死んでしまう程だ。だが若葉の目が見ている物は、機械とカードであった。

「なんだろ……コレ…見たことない…」

もみじを地面に置き、待ての状態で待機させた。止めておかなければ、恐らく顔から突っ込んでしまっただろう。

機械とカードを手取る。能力を使って透視してみた事をする。機械は、正直若葉には分からなかったがありふれた機械構造をしていた。だがこのカードはなんだ。大抵こういった物は、紙の構成成分、作り主の感情が見える筈だが、そういった物が全く見えない。もっと奥まで見ようとした。

「っ！！？？」

カードの最深部まで覗くと、？何かが居た？。青い躰に、カブトムシの様な見た目の、人間や妖怪ではない何かが。アレは一体…？

「わふうん？」

もみじが口に何かを咥え、若葉に身をすり寄せた。ハツと我に返りもみじを見た。口に咥えていたのは二つ折りの紙だった。もみじの話では、若葉が持っている機械の下にあったらしい。お礼を言い、それを受け取る。

中には英語で何かが書いてあった。若葉は英語が読めた訳ではないが、これも筆記者の思考すら見える能力のおかげで難なく解読出来た。

「ハッピーバースデー……この世界に？ブレイド？が誕生した日を

祝って……？ ……ブレイド？」

首を傾げる。ブレイドとは？ 紙にはこれ以上詳しい事は書いておらず、後は日時、時間、場所の指定が記してあった。これはここに来いとゆう事なのだろうか。この紙から読み取れる思考は、言葉の意味だけであって、それ以上は分からない。ただこの事は一時的に、戻って来た椀が照れながら言った一言で頭から吹き飛んだ。

＊

「うーす。仕事してきたぞ」

狼夜が八雲家の玄関の戸を開け、中に居るであろう妖怪達に呼び掛けた。家の奥からパタパタと、軽い足音が聞えてきた。

「お疲れ様です狼夜さん！」

「おー、^{ちえん}橙来てたのか」

頭に猫の耳が生え、緑色の帽子を被り、二股に別れた尻尾を生やした幼い風貌の少女が狼夜を出迎えた。橙は化け猫に鬼神を憑き物とした式であり、藍の式である。

「ところで、藍か紫は？」

「藍様と紫様はお座敷で……」

橙の言葉を聞きながら家に上がり込む。その橙の顔はどこか心配そうだった。

座敷へ着き、襖を開ける。

「おい紫く、ブレイバツクル渡して来た……って、どつたのその傷？」

「あら、お疲れ様。自分が住んでる地域だから少しはスムーズに行けたでしょう？ だけど住むと言っても勝手に住み着いてるから大変なのはかわり無いでしょうけど」

「うん、まあもう慣れたけどさあ…その傷何？」

狼夜は今、妖怪の山でホームレス当然の生活をしていた。因みに橙も妖怪の山で暮らしているがちゃんと合法で住んでいる。

「……………言わなきゃダメ？」

「ダメ。ちゃんと30文字以内、20文字以上で説明しなさい」

「それは私がします」

座敷に藍が、手に治療道具を持って現れた。今の紫の状態は、数十ヶ所の青痣、打撲、少々の裂傷だった。今唯一応急措置されているのは鼻血を止める為の？ つつぺ？ くらいか。藍がてきぱきと治療の準備をしていると橙も加わった。作業中に、庭を見るよう狼夜に指示した。座敷の襖を開け、庭を見ると。

「……………なんだ、こりゃ…？」

そこには山の様に積まれたベルトと、庭の地面に散乱した青い薔薇の花弁だった。ベルトに関しては全てが損失しており、もう使い物にならない物ばかりだった。

「まったく、紫様も無茶をなさる。ライオトルーパーごときであのライダーに勝てる訳無いでしょう」

藍が説教しながら紫の腕等に湿布や包帯を巻く。藍の話では、あるライダーの変身ツールに自分を認めさせる為に闘いを申し込んだらしい。相手のライダーに関しては傀儡人形を使ってなんと変身させた。その結果がこれである。

「全敗…ねえ」

「まったく、幻想郷最強とも言われた事もあるお方が情けない」

くどくどと説教を続けながら、紫の上着を脱がせる。因みに狼夜は庭を見て室内を見ないようにしている。紫の背中に冷たいタイプの湿布をはる。

「はぁあゝん……」

「変な声出さないでください！」

あらかた治療が終わり、説教も終盤に入ると、藍が後片付けを橙にまかせ狼夜の隣に立つ。

「今日、夕食をウチで頂きませんか？ 主人の仕事を手伝っていた

だいているお礼もしたいので」

「別にそんないいよ。俺は自分でここに来て、自分でこの闘いに首突っ込んでんだから。あと早く？群れ？に帰らんくちや。うどんげやけーねとか待ってるし。それに俺よりだったら？あいつ？の方が仕事してるだろうしさ」

「そうですか……残念です……」

「ごめんな」

そう言うと、太陽が傾き始めた頃に狼夜は八雲家を出た。

「……しかし、バックルを渡してもこの闘いに参加してくれるかどうか……他の者もそうです」

「そこは信じるしか無いでしょう。ま、見たところ彼女達ならやってくれる筈よ。それに……」

「それに？」

ある方向を見ながら、紫がシャウトした。

「やってくれなかったら？仮面雷墮亞初心者桺会？を作った意味が無いじゃない！！！！！」

「やつ、作ったのは私ですから。その変な名前を考えたのは紫様ですけど」

仮面雷墮亞初心者桺会……それは、紫の迷惑な突然の思いつきと、

藍の気苦労と肉体的労働で作られ、とある講師二人で結成された組合である。この会は仮面ライダーの初心者による、初心者の為だけに設立された金の無駄遣いの結晶なのだ！！

『EPISODE・16 / 眼力優れる白狼』（後書き）

……どうしてこうなった……。デストワイルダーの性格はもっとこう、リュウタロスみたいな感じにしようと思ったのに……。

なんか全然ちがった事に反省。

〈紫の初期ライダー案〉

仮面ライダーガタック

理由：紫は幻想郷にいる妖怪で最強のイメージがあるので

仮面ライダーエターナル

理由：なんとなし

仮面ライダースカル

理由：陰で幻想郷を守っているので、おやつさんに近いかと

仮面ライダーダークキバ

理由：ダークキバは圧倒的な強さのイメージがあるので

仮面ライダーディケイド

理由：二時創作で迷惑な思いつきを発動させ幻想郷の平和的日常を破壊するので

仮面ライダークウガ・アルティメットフォーム

理由：『ぼくのかんがえたさいきょうのチートライダー（妖怪）』
繋がりです。

コーカサスを適用したのはしつくりくるから。皆さんもそうだと思います。

海東のストッパーならディケイドでも良いかな〜と思ったんですが、やはり親しみの方がいいかと思ひまして。

あとディケイドを選ばなかったのは、？まだ使用者が生きているからです？。気付いている方もいるかと思いますが、この作品のライダー殆どが原作で死亡しているか、バツクルを手放しています。オーズ等は、やはり物語に入れたかったのでねじ込みました。

ではそろそろ……

次回もよろしく願ひします！！

『EPISODE・17／我儘娘と無自覚とグリードと』（前書き）

ども、最近毎朝腹の調子が悪い仮面3です。正露丸が手放せません。

今回は、寅丸星に関しての自己解釈がてんこ盛りです。

取り敢えず豆知識、今回は苺。

『苺は果実の部分を食べているのではなく、花托が肥大した部分を食べている。ツブツブが果実

』

苺はあんまり好きじゃありません……。昔食べた苺がかなり酸っぱくて嫌いになりました。それ以来、基本酸っぱい物は食べません。

では本編、

ゆっくりしていつてね!!!!!!

『EPISODE・17／我儘娘と無自覚とグリードと』

皆様お久しぶりです。皆のアイドルの天子、天子でございまゝす。今は私は面白い暇潰しのゲームに参加しています。そこで私は銀色のサイのコスプレを着て闘っています。

だけどこの前、シザースと闘っていましたら、Gみたいなライダー（コオロギとか言ってたけど私は認めない。あれはGだ！）二人の乱入により、闘いの中断を余儀なくされました。

べ、別に負けた訳じゃないんだからね！ 勘違いしないでよ！

……コホン。皆様はGツイーンズ戦後に私が言った事を覚えていますでしょうか？

『どんなに強い奴が出てきても、私には『アレがある』……！』

はい、上の通りです。記憶の隅にあった人、思い出しましたかー？
忘れていた人はもう一度読み返して見てください。『サイカ二合戦』です（宣伝）。

そして今日、実行する日がやってきました。結構日が立つちゃってますけど、？アレ？とのスケジュールが合わなくてなかなか会えなかったんです。

では、私、天子のナレーションはこれで終わりです。本編をどうぞ。

その眼を開き、とくと見よ！ コレが私の切り札だ！！

*

成仏した幽霊や修行して欲を捨てた人間が行くとされる、天人や天女が住む世界。食べ物には桃と丹くらいしかないが、天界の桃には体を鍛える効果がある。大地が宙に浮かんでいて、かつては地上に挿されていた巨大な要石だった。冥界よりも広く、いくつもの世界に分かれている。『幻想郷縁起』には、冥界の中に存在して、冥界の遥か上空にあると書かれている。そんな天界のある一角に存在する家に天子が居た。

家の主の腰にしがみ付き懇願する天子。

腰にしがみ付く天子を引き離そうとする家主。これまた端正な顔立ちの女性だ。天子の帽子から桃の飾りを取ったような同型の帽子を被り、薄桃色の服と黒のロングスカートを身につけている。そして身に纏う羽衣。まるで天女のようなだが、彼女は永江衣玖。天女では無く、龍の世界と人間界の狭間に住む、龍宮の使いと呼ばれる妖怪である。普段は雲の中を泳いで暮らし、龍神の様子を見守っている。

天子の我儘である。

以上。オルタナティブズに競り負けた事を根にもっていたが、1人であの2人を相手にする自信はあまり無かった。負けず嫌いな性格が、この答えに行き着いたのである。

『そうだ、1人が駄目なら2人で行こう。これで五分五分！ 卑怯じゃない！』

流石、天子くずれの不良。すごい性格である。因みに、こんな会話をしている訳だから勿論衣玖もライダーである。

「てゆうか総領嬢様、貴女プライドはどこにやったんですか！？負けず嫌いで素直に慣れないのが貴女でしょう！？」

「そんな物ドブに捨てましたああ！ お父様が言ってたもん、プライドを捨てる事が本当のプライド」だって！」

「旦那様ああ！ 娘になんて事吹き込んでんですかああ！」

スカート在必死に押さえ、貝のブラジャーとそびえ立つチン ガー ドを付けた、変態コンテスト大人の部優勝の男の言葉を教えたこの場にはいない天子の父親に向かってツツコンだ。

何故スカートを押さえているのかとゆうと、天子がしがみ付きながら体重を掛けているからである。これは手で押さえないとスカートが落ちてしまう。事実スカートが事情に下がっている。

「ちょ、総領嬢様！ いい加減手を離してください！ スカートが

落ちてしまいます！ 自宅とはいえ、下着を露出するのは恥ずかしいです！」

「やーだー！ はーなーさーなーい！ 衣玖が首を縦に振ってくれるまで離さない！ そして衣玖の下着露出はある意味おいしい場面だから余計に離さない」

そう言うと、手に力を入れはじめる。しかも腰に回していた手も本格的にスカートを掴む。

「いや本当に止めてくださいお願いですから！」

「だったら私のお願いきいてよ！」

「そんな仇討ちみたいな事手伝う訳じゃないでしょう、自分でけりをつけてください！」

「この薄情者！」 だったらやってやるわよ！ だけどその前に衣玖のスカートを」

「ああもう！！！」

遂に衣玖の怒りの零地点突破してしまい、いつも物静かな顔が一瞬怒りに染まる。そして躰から荒々しい電撃が天子に流す。

「あびびびびばびびばびばれべぐぐぎぎがぎぎざべぶぶぐぐくぬつ*# \$ ¥ ! ?」

天子が白目を向き、くたあと倒れた。口から黒煙が出ており、躰はブスブスと焦げている。髪もチリチリになり、ほのかに香ばしい薫

りがする。にも関わらず、天子の顔はどことなく満足そうなのはな
ぜだろう。

「まったく……このお方は……」

ため息を吐き、スカートのシワ等を直した。

*

気絶した天子を家に送り届け、家に帰り一服する。窓際に近い所に
椅子を持っていき、手に飲み物を入れたマグカップを持ち腰掛ける。
両手でマグカップを持ち、飲み物に口をつけた。

「ふう……」

嵐が過ぎ去った事に安堵の息を吐いた。リラックスしていると、窓
にコウモリのような影が映る。

『お勤め、御苦労様です』

「アレは日常であつて、勤めでもなんでもありませんよ」

『いえ、某^{それがし}の両の眼^{まなこ}には我が君が苦労しているよう映りました
ので。勤めとは苦労するから勤めだと、某は認識しております』

「総領娘様の世話は、勤めなんて気苦しい物で考えていたら、胃に
穴が開いてしまいます。じゃれ合いと考えるのが丁度いいんです」

『左様で』

この武士、とゆうより従順な戦士の様な喋り方をするのは衣玖の契約モンスターであるダークウィング。主に、衣玖の為の隠密情報収集を仕事としている。

「ところで、ライダーバトルの敗退者はどうです？」

衣玖が再度マグカップに口をつけながら言った。

『ライダーの数は減っておらず、未だ確認されているのはベルデであつた洩矢諏訪子のみです』

「そうですか。いつも悪いですね」

『いえ、某は我が君の手足となるのが仕事。我が君の命は絶対。それをこなすのが某の喜びなのです』

受け答えが事務的だが、最後の言葉には少しだけ力を入れていた。衣玖は空気を読んで、ツツコまなかったが。

「それで、洩矢諏訪子様の容体はどうです？」

『精神的にも肉体的にも強くダメージがいったのか未だ目覚めておりません。両腕の粉碎骨折は徐々に治ってきていますが、顔の爛れが未だ酷い。ベノスネーカーの毒液はそこらの激薬より強力故、眼に障害が残るかもしれません』

「……………神までも犯す毒牙を持つライダー、王蛇。装着者を知りたい所ですね。そこまでの力を持っている者は危険です」

『装着者の戦闘力から考えて、数はかなり絞られます。容疑者は少ないですが、なかなか確固たる証拠がありません』

「……嫌な予感がします。その予感が的中させない為にも早く王蛇に関して手を打たなくては」

『だとしたら、やはり？彼等？と手を組んだ方が……、戦力で考えれば、彼等と友好関係になれば我が君も動きやすくなるかと』

彼女も、リュウガ達と同様この闘いを終わらせ様とする1人だったが、リュウガ達とは違う所がある。

「いえ、1人でやるのを変えるつもりはありません。私達は私達だけで行きましょう」

『御意。口答えなどと、身の程をわきまえない発言をお許しください』

仮面ライダーナイト。これが永江衣玖が纏う戦着の名である。衣玖がカードデッキを入手した時に士郎が言った言葉。

『カードデッキが壊れた場合、その所有者のほとんどの力が失われ、ただの人間と等しい状態になる』

この言葉だ。力が失われるなど、妖怪ならば死んだも同然。力がある妖怪、もしくはその他の種族ならば死刑宣告を受けたと同じだ。力がある者は狙われるのが道理。

食物連鎖。

弱肉強食。

獵奇的虐殺。

怨恨からの衝動。

大いに結構。それが世の在り方とゆうならば衣玖は何も言わず、何も行動しなかっただろう。だがこれは違う。人為的に作られた、新たな幻想郷の在り方^{リアル}。そんな物で力を失った者は、か弱い者に成り下がり、ぐちゃぐちゃに踏み潰される。

そんな事、許さない。

そんな事、許される訳がない。

何も自分が英雄になったと勘違いしたわけではない。ただ、やれる事がしたい。それだけだ。自分がやれる事、それはこの不条理な闘いの幕を閉じる事。同じ立場にいる自分なら可能の筈だ。そんな思想を持ち、衣玖は始まりの日からずっと？影？になった。

表に出れば、それだけ危機が増える。夢半ばの思想が、夢想に変わるなど合ってはならない。

思えば、この？正義感あふれる英雄欲？が衣玖を孤高の戦に引きずり込んだのかもしれない。

群れとは、安全性を得られる反面、崩壊とゆう時限爆弾を抱える事

になる。衣玖がリュウガに加担しないのはそれだ。組織に加われば、それだけ崩壊の一辺に脚を突っ込む事になる。組織は脆い。どんなに権力や社会的力を持っても、一度崩れればもう止まらない。

今は失敗できないのだ。むやみに組織を組んではいけない。そう衣玖は考え、ダークウィングとの二対一組だけでやる事を決めたのだ。
った。

これが衣玖の欲望。

正義感から漏れだした哀れな英雄欲。

自身は気付いていないが、これが自然なのだ。欲望とは気付かずに
脳あたまの中に生まれ、無意識に軀を動かす。

己の欲望に気付かずに、欲望に操られる。他の者と違い、自分の欲望を自覚していない。椀の様に迷わず、1人で抱え込み突き進むだけ。もしかしたら、彼女が一番哀れな者かもしれない。

哀れなり……本当に哀れ極まりない……。

*

『起きろ、天子。おい天子………ったく。Awake！（目覚めろ）
天子！』

天子の自室。全身を映す鏡からメタルグラスが天子に呼び掛ける。

「うゝん……………はっ！」

ベッドに寝かされていた天子が目覚める。髪や服には未だ焦げていた。

「アレ、衣玖は？」

『お前を置いて帰った』

「そうだ……………私、衣玖のご褒美……………じゃなくて電撃くらって気絶したんだ」

自分の身なりと、記憶を巡らせ推理する。

「私を見捨てるなんてえゝ、衣玖のバカア！！」

ベッドから飛び起き、じたんだを踏む。

『過ぎた事をきにするな。それより、お前のそのBad mood
(不機嫌) を消す良い情報を手に入れてきた』

「え、本当？」

『Yes、マジもんだ』

メタルグラスは、ダークウィング程ではないがライダーの情報を集めていた。天子からの指示である。情報とは武器だ。武器は多い方

がいい。

『仮面ライダー王蛇。このライダーバトルの勝者候補No.2。装着者、？風見幽香？』

「No.2？ 一番は誰よ」

『仮面ライダーインペラー。装着者不明。戦闘力は王蛇と同等だが、数多い駒が問題だな』

「ふーん…」

天子から荒々しい雰囲気は抜け、何か、子供が気に入った玩具を手にした様に笑った。

「その王蛇ってライダー……殺っちゃおうかしら？」

『What？ 俺の話聞いてたか。No.2だぞNo.2』

「だからよ。そんな強い奴なら倒したらさぞ気持ちいいでしょうね」

天子が自室の中心でくるくる回る。メタルゲラスは理解した。これは天子のストレス発散だ。ゲームを中断された怒りと、その仇討ちを断られた事に苛立ちを感じた彼女による、ただのストレス発散。この我儘娘は一度言ったら止まらない。止めるのを諦めたメタルゲラスは大きく息を吐いた。

『……It has understood（分かった）』

メタルガラスの心情を顧みず、天子は愉快そうに笑った。

命蓮寺。

命蓮寺とは、人里近くにあるとある魔法使いが妖怪を受け入れるために開いたお寺。その近くに、1人の妖怪が地面に両膝をつき、何かを探す様に手を忙しく動かし、草を掻き分けていた。

「やつぱり…無い…」

声に少し焦りが混じる。濃い金髪の中に幾つか黒色が混じる髪、服装も赤等色があり少し派手めだ。寅丸星、毘沙門天の弟子で代理人でもある、虎の姿をした妖怪である。命蓮寺の魔法使いに使役する妖怪の1人だ。

彼女は今、探し物をしていた。本来、彼女は頭に蓮の華の様な飾りを付けているのだが、現在無くしてしまい探していた。

彼女はよく物を無くす。昔にあった事だが、ある日星は大切な役割を担う宝塔を無くしてしまった過去を持つ。

その時からだろうか、彼女が物を無くしやすくなったのは。

人間にのみならず、生物とは思いついて生きている。腕が無いと深く思い込めば腕は機能しなくなり、腐り果て堕ちる。致命傷だと信じ込めば、薄皮の傷口が広がり血液が溢れる。

それを裏付ける実験も実在する。とある国のとある大学で行われた実験だ。

学者が被験者に目隠しをする。学者は被験者にこう言った。

『今から幾つか問題を出す。間違えば腕に十二分に温めたアイロンを押しつける』

そして質問が始まり、被験者は解答を間違えてしまった。被験者の頭には自分に当てられるであろうアイロンが浮かぶ。だが、学者の手にはどこにでもあるボールペンが。ボールペンが被験者の腕に触れる。

普通ならば、被験者の腕にはボールペンの無機質な感触と冷たさが伝わる筈だが、反応はボールペンのそれを越えていた。

被験者が首や頭に血管を浮かべ、絶叫した。全身から嫌な汗が噴き出し、目隠しの眼部分には涙を流したのか湿っていた。これに学者も驚き、ボールペンを被験者の腕から離れた。腕には、ボールペンの跡が火傷の様に残っていた。

と、このように思い込みは凄まじい物であり、星も同じであった。仲間内から物をすぐ無くす、と言われていると自分でもそうでないかと思い込み、今に至る。

今や星の物無くしは日常茶飯事である。

「私の髪飾り……どこお……」

四つんばいになり、草花が生える地面を探る。
そうしていると、星は人の気配を感じた。

「あの、どうしたんですか？」

声を掛けられ、顔を上げる。長い金髪の青年が首を傾げ自分を見下ろしていた。あわてて立ち上がる、恥ずかしい姿を見られてしまったと思い、顔を赤らめる。

「い、いえ！ なんでもありません」

顔を背け、その場を去ろうとした。

「待ってください。何かお困りなら、御手伝いましょうか？」

「へ？」

その後、青年に事情を説明した。青年は一つ返事で直ぐに作業に取り掛かり、ものの2、3分で星の髪飾りを発見してきた。

「これで合っていますか？」

「あつ、はい！ そうです、ありがとうございます！」

青年から飾りを受け取り、急いで着けた。やはり、あるものがなければ落ち着かない。青年に向かってペコリと感謝の気持ちを表して頭を下げた。

「本当にありがとうございます。でも、よくあんな直ぐに見つける

事ができましたね？」

「俺、能力持ち何です。『標的を発見する程度の能力』です」

彼は標的と定めた物や人物の居場所を把握できるらしい。近づけば近づく程場所を細かく把握できる。自分の部下である少女と似た能力だと思ったが、近づかなければはっきり場所が把握できないらしいので、少女より面倒な能力だ。

「お世話になりました。何かお礼を……」

こんな好青年に、仕事だけさせお礼の一つもしないのは忍びない。最初青年は首を横に振ったが、『これは気持ちの問題なので』と星が言つと青年が渋々口を開いた。

しかしお礼と言っても、今はどうする事もできないので要望だけ聞いておく。

星が笑顔で青年の言葉を待っていると、声が発せられた。

「じゃあ……貴女の躰をください」

青年の表情が人が良さそうな物から、猟奇的に口を歪ませる物に変わる。

カシャン……

何か渴いた音が自分の額から聞こえると、星の意識は闇に途絶えた。

*

「あーちよろいちよろい。簡単過ぎて笑っちゃうね、こりゃ」

地面に倒れこんでいる星の顔を、覗きこむ様に屈み手に持つメダルを投入する。気を失っている星の額から投入時渴いた音が連続で流れる。

メダルはライオン、トラ、チーターの7枚。最後の一枚を入れ終わると、立ち上がり星を見下した。

「さてさて、こいつはどうか？」

好青年を演じていた魅空が手をすり合わせ、今か今かと何かを待っている。

すると、星の躰に変化が起きた。生気が見られない瞳でゆらりと立ち上がる。次に躰の中から、コアメダルとは違う銀色のセルメダルが現れ星を包む。

「おお！」

魅空が喜びの声を上げた。セルメダルの動きが収まり、メダルが体内に戻す。そこにいたのは少女ではなく、凶暴そうな顔を持つ怪人だった。

「うーん……」

首をこきこきと鳴らし、猫の様に伸びをした。猫係のグリード、カザリ。ただし下半身が不完全の？セルメン？と呼ばれる状態だが。ライオンの様な顔が魅空を見る。

「この姿では久しぶりだね。魅空」

「ひっさしぶり〜」

適当に挨拶を交わすと、自分の躰を確認する。

「……………どうせならもっとセルメダル、もしくはコアメダルを入れてよ」

「文句いわさんな。復活できただけありがたいとおもいんしゃい。あとコアメダル全部やったら俺が困るし、俺じゃセルメダル作れないし」

「復活と言えば……………ウヴァは？ 僕よりも早く君から出たよね」

「経過観察中」

「へえ……」

特に興味無さそうに返した。

「で？ 君は僕達を解放するきになったの？」

腕から鋼鉄の様に硬い爪を迫り出し、魅空の首元に突き付ける。首に爪を突き付けられても、魅空は顔色を変えない。

「まさか、そんな訳ないじゃん」

「ほんとと忌々しいね……、君の持つ、魔審器とかゆうへんな道具さえなければ」

「まあ、グリードの中で俺に懷いてくれてんのガメルだけだからね」

「ガメルがおかしいんだよ。君はオース、僕達はグリードだよ？決して相容れない筈なのに……」

憎々しげに言った。

「コレのせいってか？」

魅空がどこからか、くすんだ心臓のオブジェのような物を取り出す。心臓にはファスナーが付いている。

「魔審器No.6『無限倉庫の臓器』。コレがあるかぎり、お前等は俺から逃げられない」

「忌々しいの極みだね。てゆうか、君もイカレてるよ。確かそれは本来、軀の中に異物を入れる為の拷問道具でしょ。対象を決めて、その心臓の中に物を突っ込むと、その対象の体内に物を移動させる」

「ご名答。本来なら異物をいれるか、軀の中をかき回す為の道具。でもま、入れる物を考えればどうって事無い。お前達のメダルはどの軀にも順応し、欲望を顕にする」

つまり、魅空はこの魔審器を使いメダルを体内の中に留めていたとゆう事だ。

「出る事ができないコアメダルは俺の一部になる事を選んだ。違うか？」

「違うね。進んで君と一つになるのを決めたのはガメルだけだ。僕は仕方なくだよ」

「じゃあ何か？ 復活した今、俺を殺してコアメダルを全部奪うか？」

冗談混じりに言った。カザリはグリードで1、2を争う程悪知恵が効く。そして、自分が唯一になるとゆう欲望も。そんなカザリならば、今この場で首に当ている爪を振り抜き魅空も殺害してしまう可能性がある。馬鹿にしたような笑みを絶やさない魅空を見つめ、爪を首から離し背を向けた。

「およ？ 殺んないの？」

魅空が首を傾げると、カザリの軀をセルメダルが包む。セルメダルの動きがおさまると、体内にセルメダルが消えグリード態から星の姿になった。

「確かに今君を殺して、腹を裂いてコアメダルを出すのは簡単だけど……」

星、改めカザリが魅空を見る。金髪に黒だった星の髪が、橙色や黄色、薄黄色が混じった様になっている。

「今君がやっている事は面白そうだ。だから殺さずに付き合っ
てあげるよ」

子供っぽさを含む、あどけない笑みを魅空に贈る。その笑みのどこかに何かを企んでいるかの様な妖しさもあった。

「ま、僕のコアメダルが全部復活したらどうなるか分からないけどね」

「……………」

「どうしたの？」

いつもならここで嫌味か、皮肉をいつたくるので身構えていた力ザリだが、魅空が何も言わず沈黙している。今度は力ザリが首を傾げた。

「も……………」

魅空がやつと口を開いた。

「も？」

「も、萌えっpegこうゆう事をゆうのか…………？」

「……………はあ？」

「やべえ…………やべえよ！ 今一瞬可愛いとおもちゃったよ！？ あ
の力ザリに？ 認めたくなえ、認めたくなえけど！ 今の顔でツン

デレとか反則だろおおおおお！！！！」

「誰がツンデレだって？」

カザリが呆れた様な仕草をとる。

「いや今のは完全なツンデレさ！ てゆうかその顔ならお前の皮肉とかめっちゃポジティブに受け取れる気がする！ そして俺は面食いだっただのか！？」

カザリが手で顔を隠し、頭が痛くなつた様な表情をする。

「魅空。君がかっこつけて僕達に言つた事、覚えてる？」

「何さ、カザリたん」

「それ、また言ったらソッコロ殺すよ。君が言つた事、『まず女は顔を見る。次に胸を見る。そして最後にケツを見る』ってね。自分で面食いつて認めてたじゃないか」

そんな昔の事覚えていないとアホみたいな顔で言つた魅空をぶん殴り、落ち着かせる。あんな興奮状態では話などできない。

「ぐふう……カザリ、お前ちょっと強く殴り過ぎ……。歯が2、3本いったぞ……」

「コアメダルを取り込んでる半グリードの君なら直ぐ生え変わるでしょ。そんな事よりこれからどうするの？」

「そんな事って……俺の歯ってそんな事レベルなの……？ ……」

取り敢えず、メダルが無ければ意味がないから器を探す。ウヴァ、カザリ、ときたから次はガメルだ」

「りょーかい」

軽く手を上げ、分かったの意を表す。魅空は地面に向かって唾を吐く。唾には圧し折られた歯と血液が混じっていた。だが、魅空はたいてい悔いてはいなかった。何故なら、カザリが星になったからだ。これで自分にも恋愛フラグが立ったと内心で喜んでいると。

「あ、そうだ。夜寝るときかに僕の半径10メートルには入らないでね」

「どぼちでそんなことゆうのおおおー!!」

内心では恋愛フラグどころか、この小説の年齢制限では表記できないような事をしようとしていた魅空にはキツい一言だった。

『EPISODE・17 / 我儘娘と無自覚とグリードと』(後書き)

今回は出来れば永遠亭も入れたかった……。
そこに反省。

次回は王蛇VSガイ+ヴォルフも出ると思う。

それでは次回も、よろしく願いします！

『EPISODE・18 / ガイが魅ていた夢』（前書き）

ども、好きなデジモンが最近ブラストモンになった仮面3です。キ
ヤラが好き、本当にあの性格や喋り方が面白い。

では豆知識、今回は胃酸について。え、東方や仮面ライダーはどう
したって？ …… ネタが尽きた。仮面ライダーに関してはまだやっ
てないのに尽きた。

『胃酸は塩酸であり、作用は強い。木綿のハンカチなど、たちまち
溶かし、自動車の車体の鉄さえ溶かす。しかし、胃壁は粘膜で保護
されていて、安全である』

……マジか？ やべえ。そんな恐ろしい物が腹の中にあるって恐ろ
しいわマジで！

因みに今回はできて直ぐに投稿したので、誤字脱字などがあると思
います。ごめんなさい。

では本編、

ゆっくりしていつてね！……！

『EPISODE・18 / ガイが魅ていた夢』

太陽の畑。

それは妖怪の山とは反対方面の奥地にある南向き傾斜のすり鉢状の草原。夏になると一面に向日葵が咲き誇る。しかし夏も過ぎる季節だ。向日葵達は情けなく頭を下げていた。太陽の畑の中に1人の女性の日傘をさし、向日葵を見て悲しそうに立っていた。

今年も美しかった向日葵。その太陽を向く立ち姿は生命感を溢れだしていた。だがこれが花の運命。花は季節で生きる物。季節が過ぎ去ればその生命を終え、新しい世代を紡ぐ種を残し。悲しいが、また来年出会おう。向日葵達に語り掛けた。向日葵達が枯れれば、次は秋の花、コスモス等が幻想郷に咲くだろう。秋の花達には気品がある。春にはほがらしさが、夏には力強さが、冬には静けさがある。一通り向日葵を見ると、女性が太陽の畑を後にしようと回れ右をした。緑色の髪が優雅に跳ねる、気品がある美しい顔にある朱い瞳が名残惜しそうに太陽の畑をチラチラと見た。夢幻館の主である妖怪、風見幽香。その力は他の妖怪を逸脱している。

足を出そうとした時、ふと幽香の頭にリグルが思い浮かぶ。

「そつえばあの娘……どうしてるのかしら……」

ポツリと呟く。リグルはよく幽香の所に顔を出していた。しかしある時期からぱったりと会っていない。リグルの友人の話では気分が悪いらしく、ずっと寝込んでいるらしい。

心配、とゆう訳ではないが些か気にはなる。日傘をくるくると回し、模索していると太陽の畑に自分以外の生物の気配を感じた。

「貴女が王蛇かしら？」

背中ごしに声を掛けられた。ゆつたりと振り返ると、先程自分が見ていた場所に青長髪で、桃の飾りが付いた帽子を被った少女が立っていた。たしかあれは天界の天子くずれ。

「比那名居 天子…だったわね？」

「へえ、知ってるんだ。光栄な事ね」

「逆に知らない者の方が少ないわよ。貴女、悪い意味で有名だから」

幽香が不敵に笑い、皮肉を言った。それに対して、天子も怪しい笑みを絶やさない。

「そつ、もう皮肉の言いあいには省きましょう。私の用はコレ。分かるわよね？」

そう言うと、懷からガイのカードデッキを取り出し幽香に見せ付けた。幽香は天子が来た時になんとなく理解していた。今の次期、喧嘩^ぐごして自分にくって掛かってくるのは余程の馬鹿か、ライダーくらいだろう。ライダーが勝負を挑む、危機は感じない。彼女にとってライダーバトルは、余興の一つでしかなかった。幽香も懷から紫色のカードデッキを出した。

「そうそう、それで良いのよ。Simplicity is beststってね」

天子が自分の契約モンスターの口調を真似ていった。幽香は何も反応しなかった。無反応に少し苛立ちを感じたが、それを表情には出さなかった。

「闘るなら闘りましょう？ 私はさっさと帰りたいのよ」

「ふん、余裕ね。だけどそんなんじゃ痛い目見る事になるわよ！」

言葉を切ると、懷から更に手鏡を取り出し、カードデッキを掲げる。幽香も日傘の骨組み部を反射物変わりに使う。双方の腰にVバックルが装備される。天子は手鏡を懷へ戻し、幽香は日傘を畳み地面にそっと置いた。

「変身！」

「変身……」

カードデッキをVバックルをセットすると同時に駆け出した。そして、銀色のサイと紫の毒蛇が組み合った。

*

幻想郷に存在する森の一つを、鈍色の銀狼が疾駆していた。その脚が地面を蹴るたびに、圧力で引きちぎられた草が舞う。ヴォルフは太陽の畑に向かってひたすら駆けていた。

数分前、妖怪の山にある群れに、いつも通りにしていたら紫から支給されたバツカンドロイドに連絡が入った。ガイである天子が不穏な動きをしているので向かって欲しいと。狼夜は少々文句を言い

ながら、一緒に遊んでいたゆっくりうどんげに謝罪し、現場な向かった。あの時、うどんげが泣きそうになり行かないでと言って狼夜に張り付いた時は大変だった。なんとか引き離し、ヴォルフへと変身して今にあたる。

別にうどんげを責める訳では無いが、大分遅れてしまった。ペースを上げなくては。この闘いでもしどちらかが負ける事になったら、カードデッキを破壊される事があつたら。間に合わなかった自分を生涯悔いるだろう。

カードデッキの破壊は力の喪失。それすなわち、死を意味する。憎しみを持たれない生物なんていない。怨まれない生物なんていない。殺したいと思われた事がない生物は存在しない。

現に、洩矢諏訪子が神の力を失ったとゆう噂が流れてから、一部の妖怪達が活発になった。これは不味いと、諏訪子の居る周辺にカンドロイド達を放ったが、今のところ特に心配は無いだろう。今、諏訪子の近くには？あの3人？が居る。そこは安心していいだろう。

脚を止め、暫し休憩する。張った筋肉を少しほぐし、カードデッキに手を掛ける。この距離なら太陽の畑までクイックイベントを使えば一気に行ける筈だ。クイックイベントの発動時間は32・91秒だ。発動時間、移動距離、速度、大まかに計算すればいけると思う。

「よし……」

計画を決め、カードデッキからカードを引き抜こうと指に力を入れた。

その時、ヴォルフの首辺りを衝撃が貫いた。予測していない事に、ヴォルフは何もできずに只吹き飛ばされた。

「だっ!？」

カードデッキに手を置いた様な状態で、背中を地面に打ち付けた。背中から肺へ、ぶつけた衝撃が走りほんの数秒呼吸が上手く出来なくなつた。口から、かひゅっ、と声が出た。それから素早く切り返し、カードデッキから手を離し地面につけ、片膝をついた中腰状態になる。

「かはっ……何なんだ」

攻撃されたらしい首を擦り、キョロキョロと居るであろう敵を探す。居た。自分から少し離れた所に、ラリアットの構えをしながら立っていた。どうやら自分はラリアットで首を刈られた様だ。反応できなかったとゆう事は……アレはマスクドライダーか？ 自分とは違う型のベルト。ベルトには黒いカブトムシ型のメカをセットしている。

ヴォルフは紫に聞いた事があつた。昆虫型メカをコアに、変身するライダーがいると。そのライダー達は、クロックアップとゆう物を操ると。クロックアップとは、タキオン粒子と呼ばれる物が体中を巡る事で超高速での行動が可能になるらしい。

恐らくヴォルフはそれで攻撃の一手を許してしまったのだ。敵のライダーを頭から爪先を見る。全身の殆どが黒く、銀色も少しある。マスクにはカブトムシを連想させる角があり、複眼は明るい黄色だ。胸部、肩部のアーマーには基板のような赤い模様がある。

敵のライダー、ダークカブトが顔を上げた。マスク越しに目線が合った。ダークカブトは構えを解き、楽な姿勢になった。

「なんだ…？ あんた、新入りか？」

おどけた口調だが、本心では余裕がない。過去、狂愛した姉を自ら殺した狼夜ですら余裕が持てない状況。

鬼気たる殺意。

マスクの下で一筋の汗が流れた。一步、いや筋肉の一部でも動かしたら八つ裂きにされる様な殺意。それに、ダークカブトには実際にできる力がある。それがより強くヴォルフを圧迫した。

ヴォルフは中腰状態から動かない。

「……もしかして、あっち側のライダーか？」

あっち側、つまり士郎側だ。幻想郷のライダーは大まかに、リユウガ側、士郎側、中立に別れている。中立とはナイトの衣玖等が属している。

「それしか無いよな。俺はお前を知らないし、中立ならここまでやってこない」

ダークカブトは応えない。初撃と構えを解く以外には動いていない。只ひたすらヴォルフを凝視している。その複眼に吸い込まれる様だ。目を離せない。

ヒュンッ！

突如、鋭利な刃物が空気を裂く音が背中側から聞こえ、背に熱を帯びた痛みを覚えた。

「あぎっ…！？」

痛みに悶絶している暇を与えられず、更に数回の斬撃が放たれた。流石にヴォルフも初太刀により次が来ると予測できたので、痛みに絶え両腕に在る爪で防御、反撃する。金色の煌めく西洋剣を弾き返し、乱入者に蹴を放った。だが、返ってきたのは虚しい、空を蹴った感覚。

「クッソ…！」

バツと、ダークカブトの方を見る。そこにはダークカブトの他にもう一人、ライダーが立っていた。黒いローブを連想させる鎧にベルトから躰へ走る金色のフォトンストリーム、マスクはギリシャ文字の『』を模していた。手には、冥界の剣の異名を持つマルチウエポン、オーガストランザーを握っている。

仮面ライダーオーガ。

そして仮面ライダーダークカブトの二対の仮面ライダーがヴォルフに立ち塞がった。

「はぁ……時間が無いってのによ…！」

ヴォルフがため息を吐き、二人のライダーに飛び掛かった。

*

「セリヤ！」

「……………」

静かな太陽の畑に金属がこすれあう音が響く。太陽の畑と言うものの、実際は少し離れた場所で闘っているのだが。

ガイはメタルホーンを、王蛇はベノサーベル、双方の戦闘の主となる装備を手にしていた。ガイは力づくで攻め、王蛇はそれを上手く受け流していた。

王蛇自らは攻めていない。ひたすら防御に徹し、ガイを太陽の畑からできるだけ遠くに誘導していた。

ガイがメタルホーンで下から斬り上げた。ベノサーベルを横に低く構え先端部に手を添え、斬り上げを防御する。武器からキイインと耳障りな音がした。武器の位置から組み合った様な状態になる。

「ハッ！ 思ったより歯応えが無いじゃない！ 勝者N.O.2が聞いて呆れるわね！」

「あら、私はそんな風に言われてるの？ 初めて知ったわ」

「さあね。N.O.2は私達が言っているだけ。他は知らないけど、王蛇を知っている奴は皆思ってるわよ。貴女は危険だって、ね」

「華は刺がある方が美しいもの、私はそう在りたい。……理解できる？」

ベノサーベルに添えていた手を離し、人差し指でマスクの頭部をコンコンと叩く。そう、理解力が低い子供に教えるが如く。馬鹿にしているのは明白だ。ガイもそれを理解した。

「カッチイーン……」

腕に一気に力を加え、ベノサーベルを地面向かって弾き、がら空きになった王蛇の腹部に蹴を入れた。

「つとお……」

大したダメージは無い様だ。衝撃に身を任せ、後方へ軽く跳ぶ。そこにガイはメタルホーンを突き出す様に構え、着地した王蛇めがけ突進する。

「ダアアアッ！」

王蛇もガイの動きに合わせる様に駆け出した。メタルホーンを身を振らせ、ギリギリの範囲で躲した。腹部の装甲から擦れる音がした。そんな事を気にせず、メタルホーンを掴み、ガイのマスクへ向かってベノサーベルの柄で殴り付けた。これが王蛇が放った初めての攻撃だった。

「げう！？」

ガイはマスクを押さえ、数歩あらず去る。その後直ぐに、今度は肩アーマーに貫かれる痛みを感じた。実際には貫かれていない。左肩

にベノサーベルを突き立てられただけだ。ガイが短く悲鳴を上げ、数秒怯む。その隙を見逃さず、王蛇はベノサーベルを両手で持ちゴルフの要領で降った。回転斬り上げがガイの顎に直撃した。

「あうっ！？」

ガイが地面に倒れこんだ。先程とは違い、王蛇の怒涛の猛攻にガイは驚いていた。

その疑問は王蛇自身が話してくれた。その視線は大分離れた太陽の畑に。

「もう距離は十分、手を抜く必要は無いわ。それに……」

ベノサーベルをぐるんと大きく回し、肩に刃部を置いた。

「貴女の遊びはあんまり楽しくないわね」

そう言ってベノサーベルを倒れているガイへ突き付けた。黄金の突撃剣が、太陽光にチラリと光る。その光が、暗闇に浮かび獲物を狙う狩蛇の眼光にも見えた。

不覚にも、天子は恐怖を感じてしまった。

躰は熱湯をかけられたかの様に火照り、心臓は氷水に落とされたのかの様に縮んだ。そう、まるで蛇の猛毒を注入された様だった。

「さあ、そろそろ終演よ」

言葉を言い終えると同時に、肩に掛けていたベノサーベルの柄に両手を添えガイの頭へ大降りで振り下ろす。斬撃が金色の軌跡を描くさまを視界にたたき込まれたガイの軀に電流が流れた。

直撃のすんでんに頭をずらす。ベノサーベルは標的ではなく、地面にその切っ先をめり込ませた。

ガイはベノサーベルを掴み立ち上がり、それを大きく弾いた。王蛇が体勢を少し崩した。見逃さずガイは王蛇の腹部を肩アーマーの赤角で狙った。

「こんな所で……終わってたまるかああああ!!」

ほぼ零距离のショルダーチャージ。距離が短い為、王蛇は躲す事ができず直撃した。だが距離が短い分、助走ができず威力は弱い。軽く下がらせた程度だ。

「最後のあがき……だけどその意味も無しに貴女は散る」

攻撃を受けていないかのように、平然としていた。ベノサーベルを投げ捨て、ベノバイザーを取出しカードをベントインする。

《ADVENT》

「させるかあ!!」

電子音が鳴ったと同時にガイもカードをメタルバイザーに投げ入れる。

《CONFINE VENT》

カードを打ち消すコンファインベントの効果で、王蛇のアドベントを無にした。このカードを知らないのか、契約モンスターが現れない事に首を傾げる王蛇。その間にガイが更にカードをベントインする。

《FINAL VENT》

ガイの後方にメタルゲラスが出現した。ガイがメタルゲラスの肩に足を起き、高速で突進する。ヘビープレッシャーが王蛇の喉元へ接近する。

*

黒腕から鋭い一撃が、金色の剣から轟剣一閃が放たれる。双方から挟み込まれる様に攻撃されたヴォルフは上空に跳躍し、躲した。

「2対1とか……！ 結構きつつい！」

上空で愚痴を言った。あの2人はライダーの中でも上位に入る。片方に集中したくとも、もう片方が直ぐにサポートに回る。

着地と同時にオーガが横一閃にオーガストランザーを振る。斬撃はなんなくバイザーの爪でガードできたが、ダークカブトがヴォルフの背中に回った。上段回し蹴りをヴォルフの頭めがけ放った。

「ちっ！」

舌打ちをし、オーガストランザーの刀身を刃に触れない様に掴む。
オーガストランザーをぐいと引っ張りオーガと自分の位置を交換した。ダークカブトの攻撃がオーガの頭に当たりそうになるが、オーガは腕を上げ蹴を受け止める。

「おっしいぞクソ！」

いい加減この状況に苛立ちを感じ始めた。自分の仕事は天子を止める事。ここで立ち止まる訳にはいかないのだ。

ダークカブトを拳で突く。それをいとも簡単に避けられた。

ひらりひらり。

そうゆう擬音が聞こえてきそうだ。

おかしい。

ヴォルフは考えた。相手は明確な殺気は放ってきているが、明らかに一線を越えた攻撃をしてこない。殺撃らしい物をしてきていない。
「こいつらやっぱし……時間稼ぎか？」

それしか思いつかなかった。士郎側のライダー、ぬるい攻撃、殺意があるのに殺撃がこない。時間稼ぎ以外に何があるとゆうのか。

「うゝあゝ……かつたる！」

悪態をつく、オーガが踏み込んできた。上段突きを放ってくるが、躲し剣を持つ腕を掴む。そのままオーガを地面に叩きつけた。地面

に押し付け、動けないように固定する。

そこにダークカブトがオーガを助けたそうと突撃してきた。それにヴォルフは、オーガの腕を爪で斬り付け剣を奪い、接近してきたダークカブトの胸部を斜めに斬撃を入れる。

「ちょっとお前は黙ってる！」

オーガストランザーをダークカブトに投げつける。くるくると回転しながら飛んでいき、ダークカブトにぶつかった。ダークカブトは剣と一緒に地に伏せる。

それを確認すると、拘束から逃れようと暴れるオーガに視線を映す。どうしようかと悩むと、ベルトに目が行った。よく見るとこのベルト、他者からも外せる様な物だった。迷わず手を伸ばし、ベルトを剥ぎ取った。

オーガの軀に走るフォトンストリームが光り、アーマーが消滅した。

「こいつぁ……確か……」

フォトンストリームが止むと、現われたのは闇を統べる妖怪、？ルーミア？だった。

地面に押し付けられているルーミアが頭を上げ、生気の無い赤い瞳でヴォルフを睨む。

「……いかにも、だな」

洗脳。――目見ただけで、精神学、心理学に詳しくない狼夜でも分か

った。大方、士郎に何かされライダーシステムを装着されたのだろ
う。とゆう事は、ダークカブトもか。

《Clock Up》

「ぶっ!？」

龍騎系統のライダーではないタイプの電子音が鳴ると、ヴォルフの
顔に硬い何かに殴り付けられた様な衝撃が襲う。

不意打ちによりまともな受け身が取れなかったヴォルフは、地面を
転がり背中を木に激突させた。

軽い呻き声を上げる。ズキズキと痛む背中を擦ろうとして、気付い
た。先程手にしていたオーガドライバーが無い事に。

《Clock Over》

また電子音が鳴ると、正面にダークカブトが現れた。右手を拳にし、
左手にはオーガドライバーが握られていた。ヴォルフはダークカブ
トに殴られ、オーガドライバーを強奪されたらしい。

ダークカブトがヴォルフがいた地点、つまりはルーミアが押し倒さ
れていた場所に早足で歩み寄り、ルーミアを肩に担いだ。そしてヴ
ォルフに背を向ける。

「引き上げんのか……?……まさか!？」

ヴォルフの行動を阻止するのが目的である筈なのに撤退しようとする。
。。

闘いが終わったとゆう事。

ヴォルフは直ぐに立ち上がり太陽の焔めがけ全速力で駆け出す。それをダークカブトは興味を失ったかの様に見ていた。

*

時間は少し遡る。

ヘビープレッシャーを放ったガイ。王蛇に見事直撃、そしてカードデッキ破壊は、夢砕け散るはかない妄想に終わった。

現実、大地に大の字になって横たわる馬鹿がいた。その馬鹿、ガイの胸部には王蛇の脚があった。

ヘビープレッシャーは、王蛇に簡単に躲かれ、背中に踵落としを食らった。あとはもう重力に従い地に落ちただけだった。そして不運にも真下に落ちてしまった為、メタルグラスに踏み付けられたのだ。背中にズンツと圧力が加えられた為、肺が圧迫された痛みとその場から離脱するとゆう考えが頭から締め出された。そこからは王蛇の

独壇場に変わった。

躰と地面の間に脚を入れ、うつ伏せから仰向けの状態にし、ひたすら蹴り付けた。頭、胸部、腹部、下腹部、右腕、右上腕二等筋、右手の甲、右手の指、左腕、左上腕二等筋、左手の甲、左手の指、右足、左手、脛、膝、腿、肉眼で捕える事ができる部位全てを蹴った。

骨が折れない力で、肉が裂けない力で、気絶しない力で、確実に躰に痛みが染み渡る力で。

痛かった。苦痛だった。屈辱だった。泣きたくなった。いつそ気を失いたかった。気を失い目覚めれば、これが夢だと思えた。

精神の凌辱。

天子は精神を犯された。

精神の核にある芯を、土足で踏み入れられ、スタスタにされ、美味しい所だけ啜られる辱めを受けた。

芯とは、一般に知られているプライドよりも高位にあたる。それだけでは折られてはいけない大切な心の支え。

天子にとっての芯とは、強者で在ることだった。しかし今の自分はなんだ。虐められている気の弱い子供の様に、ただやられているだけ。口からでるのは余裕の悪態ではなく、弱者の嗚咽。

泣いていた。

敗北の恐怖。真の弱者にへと成り下がる自分の未来を考えた哀情。

怖い。

一度、はりぼての自信を手にした者は、崩れ落ちる崩壊の音色に絶大な恐怖を感じる。

一度剥がされたメッキ。そしてそのメッキ（プライド）をまた張った塗装（仮面ライダー）。天子は以前より高いプライドを手に入れ有頂天だった。

シザースやNEWオルタナティブの時は自分にこれは2対1だと言い聞かせていたが、これは1対1。言い訳は聞かない。

だからメッキ（プライド）がボロボロと剥がれた。

強く、王蛇がガイの胸部に脚を振り下ろした。ガイの躰がビクンと震えた。これで、肉体と精神は？死んだ？。事実上の死ではない。意識が恥ずべき生を認めなくなった現実逃避だ。

「貴女の欲望……叶えたい夢って何？」

王蛇が誘うような、甘い声で言った。

「……………」

ガイは答えられない。答えになる答えが無い。天子にとってのこの闘い（ライダーバトン）は只の暇潰し。しいて言うなら、暇潰しが欲望だった。

「応えない……とゆう事は、何も、欲望も掲げずに闘っているの？」

両手を上げ呆れたポーズをした。

「虚しい戦士^{ヒト}ね。まるで醒めない夢に彷徨う放浪者……。夢は二種類あるわ。人が目指す道となる目標（夢）、眠りにつき俗世から離れる自世界（夢）。貴女はその両方に板挟みにされている」

ガイは、ひたすら耳を傾けるしかなかった。それしかできなかった。

「夢には共通点があるの。目標にしろ、自世界にしろ、思い通りになる物は一つもない。貴女は直ぐに目標を完成できる？ 貴女は望んだ夢の中に、望んだ動きができる？ いいえ、できない」

少し間を開けた。

「ならば夢は何の為に在るのか、それは、苦しめる為よ。人々を苦しめる、蜜の味がする毒水……。では何故、人は夢を見たがるのか……、それは欲望があるから」

分らない。何故夢が欲望に直結するのか、ガイには分らない。

「目標はあなりたいたとゆう夢を叶えさせる欲望が努力を呼び、実現させる。更に欲望は現実ではなれない空想人物や、ランク高い人物を夢で近い物を魅させる。完璧は無理だけでも、近い物は呼べる」

それでも、ガイに分らない。

「欲望を見ない貴女は目標にもなれないし、夢も見れない……生きる人形。だから、欲望を持つ私に負けたの」

つまり欲望が無いお前は、二つの夢を見ている様で見ていない夢に挟まれる、戦士になりきれていない者。だから弱い、と。ヒトが強くなる理由は愛でも、大切な人でも無い、欲望だ、と王蛇は言った。そして脚を胸部から、ベルトの中心へずらし、機械の様に感情を出さず力を入れた。

*

『……………!!』

「あら、貴方……………」

ガイのカードデッキを破壊し、その場を立ち去ろうとした王蛇の前に契約破棄となったメタルガラスが立ちふさがった。

『……………別に敵討ちをする訳じゃねえ』

王蛇に自分の声が届かないのは分かっている。これは独り言であり、決意だ。

『ただ……………ただあ！ テメエが言っている事が気に入くわねえ！』

照れ隠しか、それとも素か。メタルガラスが頭部の角を構え王蛇へ突進する。王蛇は特に慌てもせず、正面から叩き伏せようと考えたが、直ぐに何かを思い出す。

ゆつくりと、悠然とカードデッキからある白いカードを取り出し、

突進してくるメタルガラスへ掲げた。

「ベノスネーカーが言ってたわ。サイみたいなライダーと闘って勝ってサイのモンスターが現れたら、これを使えって」

カードにはCONTRACT（契約）と表記されていた。カードから光りが放たれる。

『Unconsciousness……！くそがあ！』

光りがおさまると、メタルガラスの姿は消えていた。変わりに白いカードの絵柄に変化があった。カードにはメタルガラスが描かれていた。

「なるほど…ね」

呟くと、日傘を取りに太陽の畑へ向かった。王蛇は気付かない。ガイのカードデッキが破壊され、元の姿に戻った天子が姿を消している事に……。

*

近くの戦場が静まり返っている向日葵の畑。そこにヴォルフがいた。ダークカブトは追わなかった。

「…………どこだ…」

荒い息で呟いた。トップスピードで走り続けた為だった。途中でク

イックベントを使い加速した。そして今に至るのだが。

「いない……ちいい！」

頭の中で考えた闘いの結果に、苛立ちを覚え自分の腿を殴る。間に合わなかった。それしか思いつかない。自分を責め立てた。

頭のどこかに相討ちになり双方引き上げた、そんな都合のいい妄想が浮かんだが、直ぐに打ち砕かれた。

太陽の焔に金色の羽が舞う。

「あれは……！」

一瞬の黄金の光りが、舞台の演出 エフェクト の様に強く光り、おさまるとそこには神の名を持つライダーが。

『…ライダーバトル……仮面ライダーガイ敗退確認……』

ヴォルフの躰から力が抜けた。やはりか…、後悔と無力の罪の波が狼夜の精神を襲う。

事実、いや報告を告げたオーディンに再度羽が舞はじめる。

「待て！ お前……何故現れた」

何故今のタイミングで現れたのか、と。

『力……を知らない……無知たる…狼に知らしめる為…だ』

「力？」

『力とは……使う為にある……何かを破壊し、何かを換える為に……存在する。それを……使わない……力に恐怖する……なんと愚かな』

「力に恐怖せず、ただ怠慢に使う。それじゃあただの暴力だ！」

『違う……貴様が恐れているのは力自体ではない……貴様は……？
力を使う己？を恐れている』

それだけを告げると、オーディンは姿を消した。愚か、自分が？
そもそもオーディンが示す力とは？ 分かっていた。本心で理解していた。

指をカードデッキに滑らせ、あのカードを思い浮べる。あれは、もう使いたくない。もう二度と。

嫌な気分が錘の様に躰へ付き纏う。躰を引きずり、自分が帰る場所へ向かう。

あそこなら許してもらえる。自分を求めてもらえる。帰ろう、俺の？ゆつくりプレイス？へ。

*

『タカ〜』

『クジャク〜』

太陽の畑からそう遠くない森の中。数体の赤い鷹を模したタカカンドロイドと橙色の孔雀、クジャクカンドロイドが依頼の物を協力して主の元へ運んできた。

「おー、お疲れさん」

「こいつ？ ガメルの器って」

星、ではなくカザリが魅空に問う。カンドロイド達が乱暴に依頼の品、天子を地面に落とす。気を失っている天子は躰を軽く呻いた。落ちた衝撃で桃飾りの帽子が落ちる。

「そつ、こ・い・つ」

カンドロイド達がメカモードからカンモードに戻り、自ら自販機形態・マシンベンダーモードのライドベンダーに収納していく。今のライドベンダーは喋れない。喧しくなるのを予想して、魅空が設定を一時的に変えた。

「大地を操る力……ガメルの重力を操る力と似た力だ」

「そうかな？ 似て非になる物だと思うけど……」

「まあ気にすんな。それよりも、こいつは今、欲望に餓えている」

そう言って、魅空は8枚のコアメダルを躰から取り出す。絵柄はサイ、ゴリラ、ゾウ。

変化は直ぐに現れた。天子がムクリと上半身だけ起き上がらせると、セルメダルが軀を包む。

「よお、ガメル」

セルメダルが消えると、サイの牙やゾウの鼻を持つ顔、屈強なゾウの脚を模した下半身のグリード、ガメルが座っていた。尚、胴体が不完全なセルメン状態だ。ガメルが寝起きの様に眼を擦り、辺りを何か探すように見る。

「あれえ…みあ…メズールは？」

「わりいな、まだここだ」

そう言つて自分の軀を指す。

「そつかあ……メズール……」

ガメルが淋しそうに呟く。

「そんな落ち込むなって、直ぐに復活させてやつから、な？」

「う…ん」

「ところでさ」

会話にカザリが入ってきた。

「復活と言えばアंकは？ 復活させるの？」

「する気はないぜ。あいつが復活したら、コアメダル全部奪われるしな。それに怨んでるだろうし」

過去、オーズに成り立ての頃は一緒に行動していた。そして最後、全てのコアメダルを集めた時、魅空はアंकを裏切った。アंकの軀に腕を突き立て、9枚のコアメダルを奪った。

「まああいつも裏切るつもりだったろうし、おあいこだぜ」

「ふーん……そして魅空さ、こっちに来てから彼女にあつた？」

魅空がピクンと反応する。こっちは、カザリ達にとって過去の幻想郷をさす。つまりは魅空達は未来の幻想郷から来たのだ。

「逢うわけないだろ……あいつ何かによ」

魅空の雰囲気軽い物から思い物へ変わる。

「冷たい事言うね。親子何でしょ？」

「あいつは親なんかじゃねえ」

口調に段々怒気を混ぜる。表情も強い感情が入った物に変わる。流石にこれ以上つついたら爆発するなど、カザリも口をつぐんだ。

魅空の本名。

未来で大魔法使いと慕われる母親を持つ彼の名。

霧雨魅空。

魔法が使えない落ちこぼれの親は大魔法使いの、

霧雨魔理沙。

『EPISODE・18 / ガイが魅ていた夢』（後書き）

今年初の負け犬、天子さん。でもグリードのガメルとして活躍します。……嬉しかねえかw。

次回は何を思ったのか、狼夜が暮らすゆっくりの群れに視点を置いて書こうと思っています。ゆっくり9割、仮面ライダー1割です。苦手な方は……頑張ってください！w

因みに近日、1話完結の読み切り型の連載をやろうと思っています。題材はゆっくりです。興味がある方は見てみてください。お願いします。

次回もよろしくお願いします！

『EPISODE・19 / 天子の容姿+ガメルの純粋さ』どストライクな男子が

ども、別の作者さんの作品を見ると自分の文才とセンスの無さを思い知らされる仮面3です。

そもそも学校の10点満点の作文で3点以上とった事のない私には無理な話しか……。

あと前回予告した内容と違います。思った以上にできが悪くて、急遽方向転換しました。ごめんなさい。

今回の豆知識。

『妹紅は忍者』

……コレは豆知識じゃなくて公式設定です。ごめんなさい。

では本編へ。

ゆっくりしていったね……!!

魔法の森

魔法の森は、幻想郷の『魔』が集まった森である。その森にある内一つの家、

七色の人形使いの家で2人の魔法使いが、一人は退屈そうに、一人は迷惑そうに話していた。

「　　なあ、この記事どう思う?。」

白と黒を強調した服を着て、ブロンドの金髪の頭にはリボンが付いた魔女帽子を被った　　霧雨魔理沙がテーブルを挟んで向かいに座る相手に聞いた。

手には新聞を持っている。記事は『韋駄天の弟子であり代理である、寅丸　星の消息不明』と書いてある。

「さあ?　そもそも何であんた、家にいるのよ」

金髪でカチューシャを付けている魔法使い　アリス・マーガトロイドが少し強めの口調でいった。その顔は本当に迷惑そうだ。まあ、いつも本を借りるだけと言って返さない相手が人物が我が物顔で家に居るのだ、当然だろう。

「何でってそりゃ、暇だから」

「暇だからって言ったってねえ……」

「退屈を凌げる、安らぎを感じれる場所が存在する……なんと素晴らしい事か」

魔理沙が演じる様に言った。

「安らぎが欲しければ家で紅茶でも飲んでなさい」

アリスの表情が、今度は呆れた物になった。

「いやそれがさあ、最近家の中で雪崩が起こってさあ、いわゆる足の踏み場無いつて状態なんだぜ」

「掃除しないで集める一方だからそうなるの。これを機会に、掃除ぐらいしたら？」

「確かにアリスの言っている事には一理ある、一理あるが、だが断る」

そう言つて、魔理沙は新聞に再度目を通し始めた。

アリスは諦めた様に軽くため息を吐く。いつもそうだ。普段は良い奴だが、変な所で人をムツとさせる。

憎みきれない良い奴。

それが魔理沙の印象だ。

しかし自分はどうしよう。やりたい事はあると言えばあるが、魔理沙は？一応？客人。客人をそっちのけで作業するのはどうかと思う。そうなれば出掛ける事もできない。理由は最初と同じ、そして魔理

沙の性格だ。少し目を離したらまた家の本が無くなってしまふ。

退屈だ。退屈から逃れる為、刺激を求め様と窓の外に視線を向けた。

「あら？ …………… あれって…………」

アリスが窓の外に何かを見つけたらしい。もっとよく見ようと椅子から立ち上がる。それに魔理沙が反応し、新聞を畳んだ。

「どつたのあっちゃん？」

「あっちゃんゆーな」

すると魔理沙は何かを思いついたのか、どこからか伊達眼鏡を取り出し装着した。

「あっちゃんいつものやつたげて!!」

「やらないわよ。てか懐かしいな、今はもっぱら司会とかだけど」

魔理沙の謎のポケを軽くあしらうと、窓の外に居る知り合いらしき人物をサムズアップした。

*

耐性が無い者には危険な茸の胞子で充満する森の中を、一人の少女が純粹無垢な子供の様な表情で歩いていた。

左手には駄菓子詰まった紙袋を抱え、右手には棒付きキャンディを持ち口に運んでいる。

少女の服装は天子のそれと一致していた。だが、髪の色が青色ではなかった。青長髪の髪は、白とグレー、そして黒に染まっている。ガメルが天子に取り憑いている姿だ。

天子、いやガメルは寂しかったが幸せだった。

優しく、甘えさせてくれたメズールがいない。記憶で新しいのではコレで二回目だ。

ある時魅空が、『俺の中に入ればメズールに会える』と言った。ガメルは喜んで自分の全てのコアメダルを差し出した。

コアメダルだけになったガメルは、コアメダルになっていたメズールと再開できた。会話はできず、意識でそこに居ると認識できる程度だったが、ガメルはそれだけでも幸せだった。

だがある日、メズールの気配が無くなったと思ったら、目の前に魅空と、カザリの気配がする女がいた。

ガメル復活の瞬間である。普通なら喜ぶのだろうか、ガメルはうなだれた。

またメズールと離れてしまった……、それを慰めてくれたのが魅空だった。

メズールの様に優しくされてくれた。

メズールの様に甘えさせてくれた。

この駄菓子だって魅空が買ってくれた物だ。只、天子の姿で甘える
と満面の笑みで鼻血を流しながら接してくる。更に、たまにだが息
遣いが荒い時もあった気がしたがガメルは気にしなかった。

「メズール　　みあ　　」

鼻歌混じりに、大好きな2人の名を呼んだ。軽いスキップをすると、
3色になった長髪が揺れた。この見た目も気に入っている。何故な
ら魅空が喜んでくれるから。ガメルにとっては魅空はメズールに並
ぶ存在になっていた。

棒付きキャンディーを一舐めする。舌から脳へ、心地好い甘味が流
れる。

今のガメルは愉しさが絶頂だった。その時？面白くない者？が自世
界に入っていたガメルを邪魔した。

「おゝいてんこゝ」

ガメルにとって聞き慣れない、魔理沙の声が天子を呼んだ。魔理沙
の後ろにはアリスがいる。

知らない魔理沙に呼び掛けられたガメルは首を傾げた。

「？　　おい、どうしたんだよ。いつもなら『？てんこ？じゃなくて
？てんし？だもん！』とか言ってくるのに。らしくないぜ？」

「ねえ……アレ、本当にあの天人？　髪の色がちがくない？」

「イメチェンだろ。それより天子、いつもの帽子どうした？」

そう言つて自分の帽子を指す。天子の帽子はガメルが憑依する時、落としたままだった。

ガメルはひたすら首を傾げるだけだった。それもそうか、ガメル自身は初対面なのだから。

「どちら…さま？」

「おいおい、どちら様って酷いな。魔理沙だって」

魔理沙はフレンドリーな雰囲気崩さないが、ガメルは不信感を出し続けている。アリスがそれに気付き、魔理沙に小声で言った。

「ねえ、やっぱり人違いじゃあ……」

「んなわけないって！ この私が人を間違える訳ないだろ」

軽い口調に薄い笑みを浮かべてガメルに近づく。まさしく友達感覚だ。ガメルにとっては馴れ馴れしい？面白くない奴？だが。

「おつ、それ駄菓子か？ ちょっとくれよ」

魔理沙が紙袋の中身に気付き、ねだる様に手を出す。当然ガメルは渡す訳なく、口に棒付きキャンディーを咥え紙袋を両腕で包んだ。

「ひゃだ、こひは、おりよのー！」

「いーじゃんちよっとくらい。な、ちよっとだけー！」

「やーだー！」

はたから見れば、友人どうしがじゃれあっているだけに見えるだろう。だが、ガメルは必死だった。

これは魅空が自分へ買ってくれた駄菓子だ。他人に分ける気などさらさら無い。

今、目の前に居る白黒は自分から駄菓子を奪おうとしている。

低く気がないならば容赦はしない。

「やああああああ！」

ふざけて駄菓子を取ろうとした魔理沙を振り払い、地面に拳を突き立てた。

「!？」

「きゃっ!？」

瞬間、魔理沙が何か強い衝撃に吹き飛ばされた。少し離れていたアリスも余波で倒れそうになった。

ガメルの固有能力の一つ、衝撃波の発生。

それにより魔理沙はアリスがいる位置に飛ばされた。魔理沙は空中で躰をひねり、片膝をつく状態で着地する。

「びつくりしたあゝ……、何なんだ今の、新技か？」

「やっぱりあいつ人違いじゃない？ 今の攻撃……確実に殺意があった」

息を荒げるガメルを見て、アリスは顔を強張め構える。習うように、魔理沙も構えた。

ガメルが2人を睨み付ける。自分の愉しい気分をぶち壊したこいつらを許す気は無い。

彼方もやる気は在るようだ、これなら文句は言われない。

魅空に目立った行動はすると言われていたが、これは立派な正当防衛。自分は悪くない。

只、二対一はいささか分が悪い上に、自分は最低でも片腕が塞がる。

そう考えたガメルはセルメダルを一枚取り出した。

場の緊張感が高まり続ける。その時、都合よく？あいつ？が乱入する。

《タカ！ ウナギ！ ゾウ！》

「あ？」

「何、あの」

2人が上空から響いた声に反応し顔を上げ、アリスの言葉を遮る様

に何かが凄まじい速度で落ちてきた。

衝撃音が鳴り響き、砂煙が舞う。砂煙が2人の視界を遮った。突然の事態に、一瞬行動が取れなくなる。

それを狙ってか、砂煙を払いながら2つの鞭の様な物がうねる。対応できず鞭が2人の身に接触すると、接触部から電撃を受けた様な強い痛みを感じ、2人は気を失った。

砂煙が舞う中、視力が強化された乱入者の緑眼が魔理沙を捉えた。

「はっ……」

鼻で軽く笑った。

《タカ！　ウナギ！　バツタ！》

そして、ガメルを小脇に抱えながらその場を離れた。

*

「ガメル？」

「うう……ごめん……」

先程の場所から少し離れた所で、ガメルが金髪の青年に申し訳なさそうに頭を下げていた。金髪の青年は勿論魅空だ。

乱入者はオーズに変身した魅空だった。オーズの亜種コンボである、タカウゾコンボで上空から乱入したのだ。

まず、ゾウレッグの『ズオーストンプ』で地面を強く踏みつけ砂煙を生み、魔理沙達へウナギアームに装着されている鞭状武器・ウナギウィップの電流を相手に流し込む技、『ボルダームウィップ』で気絶させた。

なぜタイミング良く乱入できたかとゆうと。

「はあ…、やっぱりカンドロイドの数増やすか」

『バッタ！』

魅空の手の上でバッタカンドロイドが跳ねる。

ガメルはグリードの中で最も欲望に忠実だ。その性格の為、簡単に事故を起こしてしまいそうにいつもなる。カンドロイドを数体、見張りを付けていないと心配で胃に穴が空きそうになるのだ。

ガメルはひたすら申し訳なさそうに頭を下げている。ここまで必死に頭を下げられていると、まるで罪の無い子を叱っている様で居心地が悪い。

魅空は軽く頭を搔くと、その手を帽子が乗っていない天子であり、ガメルである人物の頭に置いた。

「まったく……暇だったら俺が遊んでやる。退屈だったら俺が愉しませてやる。散歩がしたかったら一緒に歩いてやる。だから、あまり一人でいるな。俺はお前の事を良い意味でも、悪い意味でも心配

なんだ。だから…な」

頭を優しく撫でる。ガメルはその心地よさに身を委ねた。

ガメルが今日、1人で散歩していたのは、魅空の邪魔をしない為だった。話では、魅空は幻想郷に関わる重大な事をしているらしい。そのせいかたまにピリピリしている。ガメルは魅空の事が好きだ。

好きだからこそ、その人が遂げようとしている事を邪魔したくなかった。

その自分がした配慮が、逆にさようしたと悟った時は、泣きだしたくなったが、魅空は許してくれた。その優しさは好きなメズールを連想させた。

やっぱり魅空は大好きだ。

それをガメルは口で言わず行動で表した。魅空に抱きつく。今は少女の姿であるガメルの身長では、一番高いところで魅空の首の辺り迄しかない。

全身に魅空の温もりを感じた。怒られたが、それでもそれをダントツで勝りガメルは幸せだった。

ガメルの頭を撫でながら、魅空は思う。

（毎回毎回ヒヤヒヤさせてくれるぜ……。いつも心配だ。お前の正体がバレ、コアメダルをどこかで無くしたり、奪われたら大変だ。

なんせコアが全て揃わなければ)

こんな『くそつたれでゴミの様な世界（幻想郷）』がぶち壊せなくなるじゃないか。

魅空がガメルに見えない様に、口角を上げた。まるで狂気を纏った殺人鬼の笑みだった。

*

「つうつ。まだなんかビリビリするぜえ」

あの後、意識が覚醒した2人は家に戻っていた。ウナギウィップが接触したであろう場所には火傷のような物が出来ていた。

魔理沙がテーブルに身を委ね、？ふにやけていた？。アリスも似た様な状態だが、テーブルではなく椅子に身を任せている。

「結局なんなんだったのかしら……、あの天人に似てる奴もだけど、乱入してきた何か……」

砂煙を作り、自分達を気絶させた存在。オーズの事である。

「さゝなあ」

「あんた……いい加減元に戻りなさいよ」

呆れた様子で、？ふにやつモード？の魔理沙を見た。電流がそんなに効いたのだろうか？

「ジューズかなんか出してくれたら元に戻るぜえ」

「もう……」

と言いつつも、なんやかんやで飲み物を取りに行くところは流石アリスである。

アリスが奥に消えていったのを確認すると、窓をちらつと横目で見

た。

「なあ、あいつ天子だよな」

『お前さんの読みは、半分正解で半分外れであります……』

窓の中に、白い翼のモンスターが映る。

「と、ゆうと？」

『さあ？ わっちはミラーモンスターでいんすから……。只、あれはお前さんが知っている天子さんであり、天子であると言えませんが……』

「って事は天子は何かに取り憑かれている……」

「それが妥当な考えとすなあ。わっちが思うに、取り憑かれているとゆうより、存在がすりかわった」

「どうゆうこっちゃであります？」

魔理沙が自分の契約モンスターの口真似して聞いたが、あまり似てなかった。

『さつきも言いましたけど、わっちはミラーモンスター。それ以外の怪物はようわかりまへん』

「結局……わからずじまいか」

『どうにしろ、注意しなければあきませんなあ。ここ最近、不振な輩が幻想郷にいらしいから、お前さんもきいつけて』

魔理沙は何かを言おうとしたが、アリスが戻ってきたので口をつぐんだ。

そしてテーブルの下に手を伸ばし、スカートのポケットに手を入れ、白いカードデッキの存在を確かめる様に触れた。

*

博麗神社の近くの林。そこで小一時間うろつろしている小さい鬼がいた。

霊夢に会おうとするが、その勇気が湧かず行ったり来たりを繰り返していた。

あの時、霊夢がインペラーの変身解除したあの場面を見たときから、

霊夢の顔がまともに見れなくなった。

萃香は思い出す。あの時霊夢が放つまがましい何かを。

あの後神社に帰ってきた霊夢からすっかり消えていたが、あの時には確実にあった。霊夢の中にある、？霊夢でない何か？を。

萃香は感じた。霊夢の中に、人為的に造られた何かを。

「……………」

変えられてしまった友を想い、空を仰いだ。

聞きたい。あの姿の事、変わってしまった自覚があるか、それが何なのかを、聞きたかった。

しかし、願うばかりではどうにもならない。立場が同じになれば、まだ肩の荷が軽くなるのだろうか。嗚呼、これが比喻ではなく本当に荷物を持っている状態なら。

そう考えながら、自嘲的に笑った。

「同じにしてあげよつか？ 立場を」

空に向けていた視線を声がした方を向けた。

驚きはあった。だが気配もなく現れるのは古い友人で慣れている為、さほど驚かなかったが。

それよりも何故自分の考えが読めた。そこが問題だ。自分は考えて

いる事をペラペラ口に出す様な馬鹿ではない。あの饅頭達のように。

「あー、確かにそうだね。ゆっくりって考えた事直ぐに口にだすし。あれ騒がしいよねー」

全身黒の騎士が言った。

まただ。何故自分の考えが読める。思わず拳を構えた。付けている鎖等が擦れ、音を発した。

自分に拳を向ける萃香に、リュウガは怯えるモーションをとる。

「いやいやちよつとまってよ！ 何も喧嘩しにきたんじゃないんだから！」

「誰でも、自分が考えている事が筒抜けなら構えちゃうよ」

「んー、ちよつと心言の境界を崩壊させただけなのにいー」

境界、その言葉に萃香が少し反応した。

「境界……？ なんだい、紫の手先かい？」

「手先って酷いなあ。ゆかりんとはト・モ・ダ・チ。あーでもゆかりんと自分の能力が似てると知った時はびっくりしたな。あ、私の能力は『境界を崩壊させる程度』ていつて」

「そんな事どうでもいいよ。あんたは何なんだ？」

リュウガが両手を上げ、やれやれと首を左右に振った。そしてここからか、黒い音叉の様な物を取り出した。音叉には鬼面が描かれている。

「まだ私の正体、ゆかりんや藍ちゃん、ゆゆっち以外に教える気ないから一方的に話進めちゃうね。ここに、霊夢ちゃんと同じステージに立つ為のアイテム……の複製品レプリカがあります」

「レプリカ？」

「だって本物だと渡しても意味無いし。あれは年月を積み重ねて、音撃戦士になる為に修行した人にしか使えないだよね。だから複製品レプリカ。まあ安心して、貴女にはこっちの方が都合いいから」

「どうゆう事だい。それに音撃戦士って何さ？」

「質問は受け付けていませう。これは昔昔、ある悪い事をして死んだ音撃戦士、『歌舞鬼』の音角を元に作っています。そしてこの音角には歌舞鬼の駄の一部、歌舞鬼の氣を放つ部分をパーツとして使っているのです」

自分で効果音として、『パンパカパン』と言った。それを萃香は冷めた眼で見ていたが。

「いやー大変だったよ。ガイライナーで過去に行って死体あさりのな事をゲフンゲフン。……まあ兎に角これがある条件で使えば、霊夢ちゃんが変身する仮面ライダーと近い……てゆうか仮面ライダーになれる訳ですよ！」

「条件……？」

「そう条件。それは？覚悟？。あの人を護りたい、アレだけはやらせないとかクツサイ覚悟でもいいし、助かりたい逃げたいとかダツサイ覚悟でもいいのだよ」

「なんか癪にさわる言い方だね……。でも簡単だね」

「そうだろうか？」

リュウガが、今までの軽い雰囲気捨てた。それは重々しいとゆうより、どこか寂しげだった。

「ヒトとかつてさ……いざつてなると、覚悟も何も考えずに逃げ出す物なんだよ」

「……………」

「取り敢えずじゃあコレ！」

また雰囲気戻すと、ずかずかと萃香に近づき音角を強引に渡した。

「ちょ、ちよつと！？」

戸惑いながら、リュウガと手に握らせられた音角を交互に見た。

「それを使う決心つけるなら今から言う日までに決めてね。あと決心ついたら、今から言う場所に」

その後、リュウガは日常時間場所を言い終えると、すたこらと姿を消した。

音角を手にも、ポカーンとした表情をした萃香を残して。

『EPISODE・19 / 天子の容姿+ガメルの純粋さ』どストライクな男子が

だんだんダークヒーロー感を醸し出し始めた魅空。ぶっちゃけると、なんだかんだで魅空はガメル達を『コアメダル』としか見ていません。

さてさて、読者の皆様方。しばしばお手数ですが下のライダー2人のどちらかを選んで頂けると嬉しいですよ。

1・仮面ライダーバース

2・仮面ライダーアクセル

これは、魅空関係のオリジナルキャラを出したくなっただけどっちか迷って決められなくなってしまいました。バースはメダル繋がり、アクセルは……色？

今回は少し更新が遅くなる可能性があります。前回予告した内容が多分はかからないからです。それに息抜きで、『歌舞鬼』や『じゅうゆんという』を投稿とかするかもなので、余計遅くなる可能性があります……。

本当にすいません。

頑張りますので、次回も宜しく御願います！

『EPISODE・20／幼さ心』（前書き）

ども、段々この作品の美鈴が本来の美鈴からかけ離れていくのが手に取る様に分かってしまう仮面3です。

美鈴はこんなキャラじゃない！ とゆう人、マジでごめんなさい。

今回の豆知識。自分も将来お世話になるのかなあ【入れ歯】です。

『昔は、木で作っていた。正式名所は木床義歯（もくしょうぎし）』

できればお世話になりたくないです。

では本編。

ゆっくりしていったね！！！！

『EPISODE・20 / 幼さ心』

魔法の森で、ガメルと魔理沙達が接触した日と同日。妖怪の山のある場所？彼？を思う小さい兎がいた。兎と言っても人間の様な手足胴体があり身長も人間の児童くらいだ。ブレザーやスカートの衣服、薄紫に銀色を混ぜた様な長髪の上に、兎耳が生えていた。

ゆつくりうどんげ。？彼？、月見狼夜が陰で長をしている群に所属するゆつくりの内の一匹である。

＊

真つ昼間の今この時、いい歳をした青年がプラプラと歩いていた。表情は憂鬱その物だ。憂鬱の元、それは昨日の失態。狼夜が落ち込んでいるのは天子を止められなかった事。その結果、ガイが幻想郷から消えた。

ガイの事やダークカブト、オーガの事を紫に説明した時は、『過ぎた事だから気にしないでいい』と紫が言ってくれた。しかしやはり簡単に、はいそうですかと言って割り切れるわけではない。自分が遅れてしまったせいで1人の天人は力を失った。

力の消失は、死に直結するのだ。

自分がここまで物事を引き摺るタイプだったと思い知らされた。？あの事？をスッパリと切り離れたのは奇跡だったのだろうか。

「う……………」

あの事、狼夜の中から切り捨てた忌々しい記憶。彼にはあの事を、姉を狼夜は覚えていない。詳しく言えばモヤモヤとした何かとして中に残っていた。それを深く探ろうとすると、気分が悪くなり、吐きそうになる。

今はまさしくその状態だ。一瞬、あの事とはなんだろう、そして自分は何故あのカードを使いたくないのだろう。それを考えたら吐き気をもよおしてきたのだ。

「うえ……………」

口元を手で押さえた。重たい足も止まっていた。もう夏が終わる寸前だとゆうのに、日の光が容赦なく頭皮を照りつけた。

体調の悪さを、陽光がより酷い物に変える。

この体調の悪さは、心が生み出した危険信号だ。これ以上踏み入るな。これ以上はお前の精神を壊す。そう訴えているのだ。狼夜の心傷（トラウマ）はそれほど深かった。

ヤバイ、本格的に吐きそうだ。すると人の気配を感じた。振り返るよりも先に、相手から声を掛けてきた。

「アレ？ 狼夜君？」

「……………めーちゃん」

気配の正体、それは紅魔館の門番であり仮面ライダー龍騎でもある

紅　美鈴だった。

美鈴は両腕に合わせて2つの大きな紙袋を持っていた。食材が見えている為、おつかいか何かの帰りだろうか？

その後、狼夜が体調不良なのを知った美鈴は慌てて場所を移動した。太陽の光が防げる木陰を見つけ、都合良く腰がおろせそうな大きな石があったので、2人共腰を下ろした。

吐きそうだと訴えた狼夜に、美鈴は自分の水筒を差し出した。狼夜はそれを一気に飲み干す。気分が少し楽になった、水と一緒に吐き気も飲み込めたのだろうか。

実は何げに美鈴と間接キスをした狼夜だが、気にするな余裕はまだない。

「……………めーちゃん、今日どうしたのさ？　めーちゃんの仕事ってさ……………」

「うん。本当は門番だよ。でも今日は沢山買うものがあるからって、咲夜さんに頼まれたの。私、力だけは強いから」

そう言つて、足元にある紙袋を指差して自嘲的に笑った。

「そりて？　狼夜君はどしたの、気分が悪いのに出歩いて」

「気分が悪くなったのはさっきだよ……………」

そこで美鈴は気付いた。狼夜は気分が悪い以前に、元気が無い事に。少しでも元気付けようと、笑顔を絶やさなかったが、どうやら美鈴

が思っていたより深刻な様だ。

「どうしたの……？」

美鈴が今度は心配そうな瞳で狼夜を真っ直ぐ見つめた。狼夜も見つめかえそうとしたが、直ぐに顔を反らした。直視できないのは恥ずかしい等の事ではない。後ろめたさがあつた。紫に報告しに行った時も、紫や藍の顔を見れなかった。

今ほしいのは蜜の甘さ、苦味を持つ言葉で気付きたくなかった。様は怒られたくないのだ。

顔は言葉以上に意味を伝えられる。顔をみたら確実に傷ついてしまう。いくら言葉が優しくても、その表情で傷ついてしまう。今はそんなメンタルなのだ、この青年は。

反らしていた顔に、美鈴の手が触れた。いきなりの刺激に狼夜の躰がビクツと揺れる。何事かと、美鈴に聞こうとしたが言葉よりも先に美鈴が動いた。手に力が加えられ、無理矢理顔を向けさせられた。見つめ合う2人。美鈴の真っ直ぐな瞳から逃れようと、狼夜は目を反らす。

「ダメ、ちゃんと見て」

只、優しく。

「何も言わずに聞く。聞くだけ、何も相づちは入れないから。それだったら普通に話すよりまだ楽でしょ」

只、彼を心配して。

「何が貴方をそうしたの？」

只、その人の事を想って。逃げ場が無くなった狼夜は観念し、ぽつりぽつりと昨日の事を話始めた。

*

ゆっくりした速度で、兎耳の彼女は自分が所属する群れを歩く。

群れには様々なゆっくりが居た。ゆっくり最大の特徴であり、固体識別機能があるお飾りがないれいむとまりさの番。本来猫耳と二股の尻尾が特徴であるが、尻尾が無いちえん。片目がないみよん。口元が挟られ、飴細工で出来た歯が剥き出しのぱちゅりー。盲目のありす。

そして、片腕が無い自分、うどんげ。

この群は基本、他のゆっくりから差別されるゆっくりで構成されている。ゆっくりとは、少しだけ何か欠けていると『ゆっくりできないゆっくり』と言って、そのゆっくりを排除しようとする。

この群はそんな孤独なゆっくりを集めた物だった。

皆、酷い差別で苦しんだが、今はとてもゆっくりした表情をしている。それほど今が幸せなのだ。

だがうどんげの表情は浮かない。それは彼を想っての表情。そして

自分を責めている表情。

昨日、自分が彼、狼夜を我儘で引き止めてしまった。狼夜が帰って来た時の表情はゆつくりでできなかった。

理由を聞いたが狼夜は答えなかった。

私のせいだ……。

自分が我儘を言ったから、狼夜の仕事が失敗してしまったのかも知れない。

うどんげは頭が良いゆつくり。だからこそ悲しくなった。

自分のせいで『恋苦しいあの人』をゆつくりできなくしてしまった。片腕がない変なゆつくりである自分を見てくれた人。ゆつくりが人間に恋をした。そんな所だ。

浮かない顔をしていると、それに気付いた歯がむき出しのぱちゅりーがうどんげに話し掛けてきた。

「むきゅ？ どうしたのうどんげ。ゆつくりできてないわよ」

ぱちゅりー……。

うどんげ種は言葉が喋れない。なので、うどんげが言いたい事を理解出来るゆつくりは中々居ない。通常種であるれいむ、まりさ、ちえん、ありす、ぱちゅりー、みよんは基本理解出来ないのだ。

しかし、この群のゆつくりは皆頭が良い為、うどんげ等の言いたい

事が理解できる。これは駄の一部が欠けているので、補う為知能が高くなったのかは分らない。

「むきゅう……。たしかにろうやはゆつくりできてないわね。でもね、うどんげ。じぶんをせめちゃだめよ？　うどんげもげんきがないと、ろうやはもつとゆつくりできないわ」

……………うん。

「むきゅん。ところでひとついいかしら？」

何？　ぱちゅりー

「うどんげはろうやのこと、まだれんあいかんじょーでみてるの？」

瞬間、うどんげの顔が真っ赤になる。うどんげ自身は隠しているつもりでも、皆にはバレバレである。そりゃあ、いつも顔を赤くしながら狼夜を見つめているのだ。気付かないのは狼夜位だ。

え、いやちがつ！　その……。

「うどんげ……こいをするのはじゅうよ。でも、やめておきなさい……」

顔を赤くしていたうどんげは、ぱちゅりーの言葉を聞いて耳を情けなく倒した。これが始めてではない。何度も群の皆から言われている事だった。

そこに、二匹の会話を聞いてか盲目のありすが会話に入ってきた。

「ぱちゅりーのゆうとおりよ。たしかにろうやはとてもゆつくりとしたにんげんさんよ。いなかもののありすや、みんなを受け入れてくれたわ」

ぱちゅりーとありすは過去を思い出す。『気持ち悪い』、そう言われてぱちゅりーは人間から踏み潰されそうになった。『おめめがみえないいなかものは、ありすのおちびちゃんじゃないわ!』、そう言われてありすは親に捨てられた。

迫害によつて殺されそうだった二匹は、狼夜に助けられた。

「……でも、ろうやはにんげんさん、うどんげはゆつくり。いいけつまつは、たぶんないわ」

こうやって見ていると、ありす達がゆつくりに見えなくなってきた。知能が高すぎるのではないか？　それも、狼夜と？　表の長？　のおかげなのだが。

三匹の所に、一匹のれいむが跳ねてきた。見たところ身体的障害は無い。このれいむはお飾りの無い番の子供であり、狼夜が美鈴に行った悪戯に出てきたれいむだ。

「ぱちゅりー！　そろそろおべんきょうのじかんだよ！　きょーはかけざんさんをおしえてくれるんだよね？」

この群で生まれ、この群で育ったおかげか、ぱちゅりー達とごく自然に接していた。

ちなみにこのれいむも知能が高いようだ。通常なら、れいむ達通常種は3以上は数えられない。

「むきゅん、そうね。じゃあうどんげ、ぱちえはいくわ」

「ありすもいつしよにおべんきようしよ！」

「わかったわ。うどんげ、よくかんがえてね……」

さつていく三匹。れいむは盲目のありすを気遣いながら、隣に並び跳ねていた。

『よくかんがえてね』

ありすの言葉がうどんげの中でこだました。

何回も、何回も考えたよ……。

恋する乙女、いや恋するゆっくり、か。

三匹が見えなくなるのを確認すると、うなだれた。異種族に持つてしまったとゆう禁忌に、うどんげは頭を痛めた。

「どうしたんだうどんげ？ あたまをおさえて」

*

「なるほど、ね」

全てを言い終えた時、美鈴は口から言葉を出した。約束通り合いの

手は入れなかった。手も、もう狼夜の顔から離していた。

美鈴は知った。ライダーバトルで、二人の敗者が出ていた事。狼夜達がこの闘いを止めようとしている事。後者は前回話そうとしていたらしいが、途中ですっかり忘れていたと聞いた時は少し苦笑した。

「君はお仕事を失敗しちゃった訳だ」

狼夜は頷き、皮肉じみたニヒルな笑みを浮かべた。自分も良くあるが、狼夜は取り返しがつかない。

話を聞いて分かった事がひとつ、ある。

それを理解した美鈴の眼には、背の高い狼夜が小さく見えた。小さい子供の様に。

「君は、慰めて欲しいんだよね？」

『子供は罪を理解せずに、理解させられる。』

例え意識で自分が悪い事をしたと理解していなくとも、周りの視線が、空気が、威圧が無理矢理理解させる。精神が安定してないのに関わらず、人の心情を敏感に察知してしまう子供に稀にある事だ。

分かりやすく言えば、自意識過剰。

狼夜は幼い頃、姉の為に幼さを捨てた。だが、姉は居ない。故に、今幼さが戻って来た状態だ。

だから頭、意識の中にある幼児的思考が強く出ているのだ。

怒られたくない。君は悪くないよ、と甘い声であやしてほしい。

そんな、全てを優しく受け入れてくれる母性愛を求める。今の彼が激しく拒絶するものは只一つ、全てを激しく拒絶する父性愛のみ。

美鈴が理解できたのは理由は、会話中の狼夜の表情だ。

眼球が何かから必死に逃げる様に、キョロキョロと常に動いていた。表情は救いを求める情けない物であった。美鈴自身、伊達に妖怪として長年無駄き生きている訳ではない。

この状態の子供には何を言っても傷つけてしまう。こうゆうタイプの子供は、テンションが下がると言葉を全てネガティブに受け取ってしまうのだ。

ならば、どうする？

暖かい温もりを与えてやればいい。温もりは気分を落ち着かせ、リラックスを与えられる。下手な言葉よりも、効果がある。

故に美鈴が行った行動は、？包容？だった。

有無を言わず、狼夜の背中に腕を回し抱き寄せる。

「ちよっ!？」

突然の行動に狼夜は驚きの声をだした。美鈴は気にせず、抱き締めている状態で、右手で狼夜の頭を撫でた。親が小さい子にするような、『いーこいーこ』だ。

「よしよし……」

それから、美鈴は喋らずに愛撫を続けた。泣いていた子供をあやすように、落ち込む愛おしい人を慰める様に。

只、温もりを教える様に。

くっついていいる躰、自分の胸を通して大きい幼子の鼓動が早くなっていく。この鼓動の高まりを、美鈴は詮索しない。表情を見れば直ぐに分かるだろうが、今はそんな事に気を回している暇ではない。

彼女はどう彼を想って、抱き締めたのだろう。

彼は彼女をどう想って、大人しく身を任せているのだろう。

この二人の、今の体勢を見た人物がやましい気分で見える者は少ないだろう。

それほど、美鈴の包容は優しかった。

数分後、彼女は包容を解いた。

「えつと……え？　今のつて……？」

狼夜は混乱していた。これで混乱しない者は少ないと思うが。

「ふふ……さあ……？　でも、落ち着いたでしょ？」

重荷は少しでも軽くなったか？　と。確かに、狼夜の中でぎすぎすとしていた自分を責め立てる感情は静かになっていた。しかしそれは別の感情が、押し戻したおかげの様な気がする。

「いやそうだけど……これじゃなんの解決にも」

「それで良いんじゃない？」

難しい問題、解けない謎、解決難な物は寧ろ後回しにしろ、と。

「確かに、天人とかの事は難しいよ。取り返しがつかない。でもね？　その取り返しがつかない事にあたふたしても意味ないなーって」
「？」

石から美鈴が立ち上がり、疑問符をだした狼夜の前に立つ。紅の髪が陽光の光を反射して美しい。

「世界は、都合がいいように出来てるいの。最良の結末、最低の結末……今で言うハッピーエンドとバッドエンド。どんな物語にも世界は2つも結末を用意してくれている。

私達はその中間地点であたふたする駒。中間地点なのにあれこれ考えても殆ど意味ないよ。物語が終わりに近づけば、自ずと何か見えて来る……」

だからくよくよせずにさ！　？今？を見よう！　過去や未来じ

やなくて、自分の眼でとらえられる現在（今）を！

彼女がはちきれんばかりの笑顔で言った。何も考えていなさそうな天真爛漫な表情、しかしその言葉は相反していた。

その後、少し雑談すると、狼夜は水の事や先程の事に礼を言い帰って行った。美鈴のお使いの物を持ち紅魔館を目指した。

美鈴は自分の行動を思い出したのか、頬を少し紅色にしていた。

*

うどんげに話掛けたのは、この群ではうどんげと合わせて二匹だけの胸付きゆっくりだ。しかし普通の群からしてみれば多いのだが。

その胸付きゆっくりは青いワンピースの様な服を着ており、髪は水色と白色だ。頭にはお飾りである何故落ちないのかと思うような変な形の帽子を乗っけている。

高い知能で知られるゆっくりけーね。

ただ本来長髪である髪は肩までしかなかった。彼女もまた、ゆっくりできないゆっくりだった。これは人間よる虐待の証。ゆっくりは軀の一部が欠ける事、欠けている事を忌み嫌う。

今のけーねの髪は、狼夜が切りそろえてくれた物だ。

「あたまがどうかしたのか？」

長……。

けーねがこの群の、？表の長？だ。この群のゆつくり全てが、長は狼夜がいいと言ったが、やはり人間がゆつくりの群の長はおかしいと辞退した。

けーねが長となったのは狼夜が選んだから。けーねにはその知識と力があるからと。

長…その…

「ん？」

うどんげがぱちゅりーとありすに言われた事をけーねにも言おうとした時、尻尾が無いちえんが慌てた様子で突っ込んできた。

「おさ！　たいへんなんだよー！　ほかのむれのゆつくりがどすといっしょにきたんだよー！」

ドス、別名ドスマリさ。名の通りまりさ種が突然変異して生まれる巨大ゆつくり。体長が大きくて4〜5メートルあり、帽子の中には特殊なキノコを隠し持っている。それを食べると口内に高熱エネルギーが蓄積され、それを吐き出す『どすすぱーく』とゆう技を持っている。躰が大きいせいか知能も高く、群の守護者とも言われている。

「どすはおさをだせていってやるよー」

けーねはそれで大方理解できた。

この幻想郷のゆつくり達にはある噂が流れていた。？この山のどこかに、史上のゆつくりぶれいす？があると。つきないあまあま、快適な寝床、捕食種の恐怖に怯える事が無い毎日、そして、？絶対服従の人間奴隷？がいると。

この噂のゆつくりぶれいすは、狼夜達の群である。そしてこの噂は9割がデマである。

つきないあまあま？ 嘘だ。この群の食料は自給自足。狼夜や他のゆつくりと協力している結果だ。

快適な寝床？ あながち間違っていない。この群のゆつくりは一つに固まって寝ている。狼夜にくつつく、もしくは狼夜付近で眠る。それが一番ゆつくりできるからだ。

捕食種に怯える事が無い？これは正解。この群の付近には一定感覚で鏡が配置されている。群に捕食種が近づけば、狼夜の契約モンスターに八つ裂きにされる。

絶対服従の人間奴隷？ 恐らく狼夜の事だろう。これは大間違い。

「どうするのおさ？ わからないよー」

「でむくしかないだろう。ちえん、みんなをあつめてくれ」

これは狼夜との約束。他の群と対話するときは群全員で掛かれ、その上で相手の反応を見てどうするか決めろ、と。

暫くして群の全てのゆっくりが集結した。やってきた群と対峙した。ドスを含め、結構な数のゆっくりがいる。相手も群総出らしい。気に入くないのは、相手の群のゆっくり全てが、こちらの群れを見て馬鹿にした様に笑っている。

「このむれのおさをやっているものだ。きょうはいかようか？」

正面にいる巨大なまりさ、ドスマリさに言った。けーねの身長もあるが、やはりデカい。

「ゆっ！　ここがうわさのゆっくりふれいすだね！　ここはどすたちこそおにあいだよ！　ゆっくりせずにでていつてね！」

やはりか……。けーねがため息をついた。恐らくこのドスはゲスだ。ドゲスマリさなのだ。ドスとしての知識を得ずにドス化した無能だ。けーねは目付きを強くしてドゲスを睨み付ける。

「ゆ？　なんなのそのなまいきなめは？　もんくあるの？　ふざけないでね！！ここはどすたちにこそふさわしいんだよ！！　ゆっくりしていないゆっくりにはもったいないんだよ！！　だからゆっくりせずあけ　」

「ことわる！！！！！！」

ドゲスの言葉を遮り、けーねが怒号を飛ばした。ドゲスや、後ろに控えていたゆっくり達は一瞬びくりとした。けーねの表情は鬼気迫るもので、余裕だったドゲスすら内心怯えた。

だがそこは餡子脳、直ぐに騒ぎ足した。

「たちはをりかいしろこのぐずううううう！！　ここはれいむたちのゆつくりふれいすだっていつてるでしょう　おおおお！！」

「あいつらはあたまがかわいそうなんだぜ！　だからかんだいなどすのことばかりかいてできないんだぜ！　みるんだぜ、あのおかざりがなれいむとまりさを！！　おおあわれあわれ！！　ゆつくりふれいすはゆつくりしているゆつくりのためにあるんだぜ！！」

指定されたお飾り無しのれいむとまりさがビクツと躰を震わせ、涙を流した。自分達の為にはない、自分達のせいで群が馬鹿にされていると理解して涙を流した。自分達のせいで群に迷惑を掛けていると。子供であるれいむが二匹を慰め、ゲスマりさを睨み付けた。

罵倒が続く。口が気持ち悪いばちゅりーだと、ゲスパちゅりーが言った。尻尾が無い駄目なちえんと、ゲスちえんが言った。片目がない間抜けなみよんだと、ゲスみよんが言った。

手当たり次第に暴言を吐き続けるゲスども。そのゲス達の子供だらう赤ゆつくりが、けーねに体当たりを喰らわせていた。

ダメージ皆無。けーねは冷めた眼で足元のグズ饅頭を見下ろしていた。

「ゆつくちちてにゃいくじゅはちねんだじえ！」

「ちねー　ちねー」

赤まりさと赤れいむだ。通常種の赤ゆが、胴付きであるけーねには勝てる訳ないのだが、理解出来るほど餡子脳は良くないらしい。

ぺちんぺちんと柔らかい攻撃を続ける赤ゆを尻目に、けーねは片足を上げた。

「ゆ
」

そしてそのまま、赤まりさがけ脚を降ろす。べちゃっとゆう音が聞こえ、靴を伝い足裏に独特な感触が広がる。

「ゆ……？ まりちゃ…？」

事態が飲み込めていない赤れいむの為に、けーねは靴裏を見せた。そこには、皮が所々破け、餡子が漏れだし絶命したまりさだった大福が張りついていていた。

「ゆ…ゆぎゃああああああああ！！ れいみゆのいもうちよが
あああああ！！」

どうやら姉妹らしい。靴裏の赤まりさの死骸を見て泣き叫び、けーねに暴言を吐き付ける赤れいむ。

姉妹は仲良く一緒にいるのが一番いい。

けーねがせめてもの優しさで赤れいむを、赤まりさが張りついていてる脚で踏んだ。なるべく時間を掛けずに、思い切り強く。

赤れいむは『ゆ』とゆう短い悲鳴を上げ踏み潰された。力が強かった為か、隙間から餡子が飛んだ。

「おめでとう。これでしまいずつといつしよだ」

けーねの行動に、ゲス達は黙った。けーねは特に気にせず、靴裏のゴミを取りため地面に擦り付けていた。

啞然としていたゆっくり達が、我を取り戻し声を荒げた。

「で、でいぶのおぢびちゃんがあゝ あゝ あゝ あゝ ！！！」

「までぞにのおぢびちゃんがあゝあゝあゝあゝ！！ なにずるんだぜこのげずううつう！！ このゆっくりごろじいいいい！！！」

「やかましい！！！！！」

再度、けーねの一喝が飛んだ。よく見ると、けーねの髪がうねっている。色も水色から緑色に変わろうとしていた。

他のゲスは構わず雑音を出していたが、ドゲスはけーねに危機を感じた。

「ゆゆっ！！ なんだかゆっくりできないかんじがするよ！ みんな、うしろにさがってね！ どすすぱーくをつかうよ！」

そう言つてドゲスは帽子を揺らし、中からキノコを取り出す。

そのキノコを器用に転がし、口へ運ぼうとした。キノコが眼の前を通り過ぎると、なんかもう勝った！ みたいな顔をした。

だが世の中は、特にゆっくりには優しく出来ていない。

「……………ゆ？」

いくら待っても、口の中にキノコが入ってこない。ドゲスはあたふたし、キヨロキヨロとキノコを探した。

そして見つけた。人間にもしやもしかた食べられているキノコを。勿論この人間は狼夜である。

「むーしゃむーしゃ……うへえ……微妙……焼いた方が良かったかな……？」

ゆっくりの物真似をしながらも、キノコを完食。

「どすのキノコさんがあああああああ！！？」

「うるっせえ」

耳をつんざく声で絶叫したドゲスに、取り敢えずドロップキック。

結構の助走を付けたので、巨大なドゲスも『ゆげぶぼ！？』と言って転がっていた。そしてそのまま転がっていき、ドゲスは姿を消した。

「で？ ドスはもう居ないけど、お前らどうすんの」

ゆっくり達はまたもや啞然としていた。ゆっくりにとってはゆっくりできない速度で現れ、ゆっくりできない速度でドスからキノコを奪い、ゆっくりできない速度でドスを蹴り飛ばした人間の登場に驚いているのだ。

狼夜に呼び掛けに正気になると、何故か憎たらしい勝ち誇った顔に

なった。

「ゆゆうん、やっときたね。れいむをまたせるなんてほんとうならせいつさいっただけど、れいむはかんだいだからゆるしてあげるよ！」

「……………はい？」

「はい？　じゃないでしょおおおお！！　くそにんげんはかわいいれいむのどれいでしょおおお！！？」

「まあまつのぜ。たしかにこのどれいはれいぎがなっていないのぜ。でも、あんなばかでむのーなどすよりはましだぜ」

ゲスマりさがゲスれいむを諫めた。そこで狼夜は納得した。

「……………あー…はいはいそゆことね」

こいつらは狼夜の事を奴隷と認識したらしい。流石は餡子脳、自分の都合良い妄想で埋め尽くされている。

「どれい！　さいしょのめいれいだよ！　かわいいれいむたちのためにそいつらをせいつさいっしてね！」

そういつて、自分の揉み上げをわさわさと動かし、けーね達を指した。

「え、やだよ？」

「ゆ？」

「だからやだって。ゆつくりせずに理解してね！」

狼夜の良い笑顔にゆつくり沈黙。

そしてシャウト。

「どばちでそんなごゆうのおおおお！？　でいぶはかわいいだよ！　だからゆうことがなくちゃいけないんだよおおおお！！」

どうゆう理屈よく分からないがそうゆう事らしい。この理屈でゆうことを聞く人間が居たら見てみたい物だ。

「かわいいからゆうこと聞かなくちゃいけないなら、尚更だな。お前可愛くねーもん」

「な…なにいつでるのおおおお！？　でいぶばがわいい」

「残念だけど、俺が可愛いと思えるのは群の奴らだけなんだわ。じや、そゆことで。お前等どうせアレだろ？　群の皆に暴言吐いたろ。だからさ…死刑ね」

その後狼夜はゆつくりできない表情になり、まず出始めに近くのスれいむ。

ここからはひじょーにゆつくりできないよ！　だからにがてなひとのためにかかないよ！　それでもせいっさいするところがきになつたら、すーやすーやするまえにもうそうしてね！　もしくはけーねのえっちいぽーずでもいいよ！　それがわかつたらあまあまさん

もってきてね！　たくさんでいいよ！

ヒャッハアアアア！　ゲスれいむは虐待だああああ！！

どぼぢでぎゃくだいおにいさんがいるのおおおお！？

く少年下衆饅頭饅頭駆除中く。

「ヒャッッハアアアア！……とお、今ので最後か」

最後のぱちゅりーで、『汚ねえ花火だ』をした狼夜が虐待鬼意山モ
ードを解いた。

「大丈夫だったかー？　皆　　」

「ろつやああああ？」

「ぶるはああ！？　ナイスタツクル！？」

けーねが狼夜に抱きつく、とゆうより突進しと言った方が良いような
ものを繰り出した。その勢いに、尻餅をついた。

「ろつや　ろつやあ」

甘えた声で、狼夜の胸板に自身の顔に擦り付けた。けーねもなんや
かんやで狼夜に懐いていた。オリジナルが見たら啞然とする程狼夜
に懐いていた。

自分の中で悩むうどんげとは違い、けーねはいささか大胆だった。

「イタタ……。お前の攻撃は慣れないなあ。ま、頑張ったみたいだから咎めないけど」

そう言つて、けーねの頭を撫でる。その愛撫に、身を任せるけーね。他の群のゆつくりが寄つてきた。ゆつくりしていつてね！ 等で、この群の真の長を迎えた。

うどんげもおずおずと狼夜に接近して、表情を伺う。ぱつと見では元気を取り戻した様に見える。そのうどんげに気付いた狼夜が、笑顔で一言。

「うどんげ、ゆつくりしていつてね！」

うどんげも本能と理性の両方で、笑顔で返した。

ゆつくりしていつてね！

良かった。出掛けている間に何があつたかは知らないが、吹っ切れた様だ。

元気を取り戻した狼夜に、うどんげも飛び込んだ。

因みにその後、狼夜の膝に座るのをかけて、うどんげとけーねがキヤットファイトをした。しかし、結局は狼夜に宥められ二匹で仲良く座つたのだが。

*

「ゆびー……ゆびー……」

山の中を、ずりずりと移動する巨大大福。 躰は傷だらけで餡子が漏れており、お飾りの帽子も破けていた。このドスは狼夜に蹴飛ばされたドゲスだ。転がっている時に、木の枝等に躰を引っ搔けてしまい傷ついたのだ。

「ゆびー……ゆるさないよ……あのくそにんげんも、あのゆっくりできないゆっくりたちも……！！ ぜったいころしてやるうう……ぜったいうばってやるうう！！ あまあまもあ、ゆっくりぶれいすもおお……！！」

醜い雄叫びが森の中に吸い込まれていった。この怒りは全滅した群の為ではない、自分の崇高なプライドを傷つけた狼夜に持った身勝手な怒り。

「いいね。その欲望」

「ゆ……！？」

声がした方を見ると少女が居た。ライオンのシルエットが描かれた唾付きの帽子を被り、質素なＴシャツの上にライトイエローのフード付きパーカーを着ている。パーカーのファスナーはしていないので、Ｔシャツの右胸辺りにある虎のシルエットプリントが映える。黒いショートパンツにはシルバーチェーンが付いている。

この少女は、星であり、カザリだ。格好はすっかりカザリ好みにコ

ーディネートされてしまった。

「そのはち切れんばかりの欲望を叶える為の、力をあげよう」

「な、なにいつてるのにんげんさん」

「やだなあ。僕は人間なんかじゃない」

星の躰がセルメダルに包まれ、カザリの本来の姿が顕になる。

「僕はグリードだ」

「よよよ、ようかいさん」

言い掛けているドゲスを無視し、大福の額めがけセルメダルを投げつけた。ドゲスの額にメダル投入口が出現し、渴いた音でセルメダルがドゲスに入った。

「大福のヤミーって、どんなになるかな」

その後起こるであろう事象を楽しみに、カザリはドゲスを眺めていた。

『EPISODE・20／幼さ心』（後書き）

ゆっくりした結果がコレだよ!!

わけわからない事ばっか書いてごめんなさい。

今回の話は最後のアレがやりたかっただけです。はい。

今回はディエンドを出そうと思っています。

次回も宜しく御願います！

『EPISODE・21/シアンカラーの召銃士』（前書き）

ども、最近コメディ要素が薄いかな〜と思う仮面3です。たいして上手くないのにシリアスばっかな気がする。

今回の豆知識は仮面ライダーがよく使う【アルファベット】です。

『世界中の主要なアルファベットは、3600年前、中東で使われていた北セム語の表記を起源とする。ギリシャ文字の最初の二つ、アルファとベータから、この呼称となった』

因みにアルファベットの『E』は大昔、逆向きの『ヨ』と書かれていたそうです。

では本編〜

ゆっくりしていったね!!!!!!

『EPISODE・21/シアンカラーの召銃士』

迷いの竹林　竹が生い茂る幻想郷の竹林で、人間の里から見て妖怪の山の正反対に位置する。深い霧が立ち込め、竹の早い成長により日々変化して目印がなく、緩やかな傾斜によって方向感覚も狂うため、妖精ですら迷うと言われている。その竹林に1人の青年が歩いていた。

帽子を被り、手にはトランクを持っている。

「この先か……あまり面倒にならなければいいけど……」

青年が心配するのはスケジュール。如何に怪しまれずに『種』を植え付けるか、それが問題である。

誰にも気付かれてはいけないのだ。

？不完全な存在の誕生？を。

*

永遠亭　永遠亭は、幻想郷の迷いの竹林の中に人目を避けるかのようにひっそりと建てられた屋敷。

永遠亭には八意永琳とゆう月の賢者が存在する。永琳の知識量は凄まじく、能力から成る薬物生成や医学の心得もある。なので、永遠亭の存在は多々知られており、病院の様な扱いすら受けている。

薬品の匂いがする部屋で、彼女は目覚める。両目を開けたつもりだったが、視界に入る映像は左目だけだった。顔の右側に何か布が巻かれている感覚がある。何だろう、と触って確かめようとしてみたが、両腕が動かない。

「うっ………!？」

おもいきり力を加えると、激痛が腕を貫いた。痛みが治まり、辺りを確認する。部屋は簡単な物だった。清潔感ある色の壁紙に、幾つか棚がある。棚には薬品が陳列してある。匂いの元はアレのようだ。

そして最後に映るつたのは、安堵の表情をする神奈子と、口元を押さえ眼から涙を流す早苗だった。

「アレ……？ 神奈子…早苗」

「ずわござまああああ、あああああ!!!!!!」

「うおっつ!!?」

診療台に横にされていた諏訪子を、早苗が涙やら涎やらが混じった汁を撒き散らしながら抱き付く。今の諏訪子の状態は両腕にギプス、右側の顔に包帯を巻いている。なので、そんな状態で抱きつかれたら。

「いつつ……」

痛みが走るのは当然だ。

「早苗、よしなさい」

「うつづ あゝゝ諏訪子さまああゝ」

神奈子が早苗を引き剥がす。その際に、神奈子の胸についている鏡に、諏訪子が映る。己の状態を見て、一瞬眼を見開いた。

「うわ……酷いね、私」

「……………ああ」

再度抱きつこうとする早苗を羽交い締めにながら、神奈子は布で包まれた物を差し出した。

見覚えがないそれに、諏訪子は首を傾げた。神奈子が無表情で、布を開き中身を見せる。中身は粉々のカードデッキの破片。顔を強張らせる諏訪子。そして左目からホロリと涙が流れた。

「お前が発見した者が回収したそうだ。永遠亭にも、その者が運んでくれた」

人を呼んで来てくれ、と早苗に指示する。泣きじゃくりながらも、指示に従い早苗は部屋を出た。

「分かってるかと思うが、お前はもう神じゃない」

涙を流しながら、こくつと頷く。

「うん、うん……」

今はそんな事、どうでもいいと思えた。涙を拭おうとしているのか、腕がピクッピクッと動いているが上がる気配はない。しょうがなく左肩で拭った。

それでも涙は溢れ続ける。

不気味な見た目、それに見合わない謙虚な性格。初めて会った時は謝ってばかりだった。最初は見慣れない妖怪だとゆうことで距離をおいて接していたが、徐々に仲は縮まった。

一緒に酒を飲んだ。

後にカードデッキの事を神奈子、早苗に話した。神奈子はバイオグリーザを興味深そうに眺めた。早苗は誤って退治しようとした。神奈子は諏訪子よりもバイオグリーザと仲良くなり、酒を無理矢理飲ませてたりした。そして自分も巻き込まれたっけ。

一緒に闘った。

手探りだった仮面ライダーとしての戦闘。ミラーモンスターは弾幕でも倒せたが、ミラーワールドに逃げられたら変身しないと止めをさせない。カード効果等を聞いて、初めての戦闘は無駄にカードを消費したっけ。

一緒に叶えたい願いを魅ていた。

願いは信仰心の向上。自分の力で得なければいけない物だが、神にとって信仰は力だ。信仰が高い神は、力も位も高くなる。情けないと思ったがバイオグリーザはある言葉で受けとめてくれた。

『自分は 諏訪
ですから』

ただ、

何故だろう。言葉が思い出せない。変わりに浮き出てくるのは、黄金の突撃剣がバイオグリーザを穿ち、引き裂いた場面。

記憶の映像を振り払おうと首を振る。下唇を強く噛む。

哀しい物だ。

「ねえ…私って…どれくらい眠ってたの…」

「1ヶ月前後」

「……そっか」

哀しい。悲しい。虚しい。自分の薄情さに、苛立ちを感じた。

「1ヶ月……1ヶ月だよ？ たった1ヶ月なのに……何で…何で忘れはじめてきちゃってるんだろう…」

生物は必要が無いと判断すれば容赦なく切り捨てる。諏訪子の中で、もういないバイオグリーザは必要が無いと？判断？した。

下唇を強く噛んでいたせいか、血が流れた。腕にあるギプスに血が滴り、赤い染みを作った。そして上塗りされるかの様に、涙が零れ落ち血を滲ませた。

すると、頭にぽんと何か被せられた。いつも被っていた帽子だ。

「？神？が人前でめそめそ泣くんじゃないよ。せめて隠して……おもいつきり泣きな」

そう言つて、帽子を深く被せられる。

「……………うん……………」

それから数分間の間、部屋にくぐもった嗚咽が響いた。

*

それから諏訪子が落ち着いた頃に、早苗が戻つて来た。

「遅くなりました」

「すみません、師匠に何故か引き止められてしまつて……」

早苗の後からもう一人部屋に入ってきた。

身長は早苗と似たり寄つたりで、白衣を着ている。髪型は短いポニーテールと言つた所か。髪は藍色のリボンで結ばれている。顔立ちも整っている。

「諏訪子、あいつがお前を発見してくれた」

「楯神詩織（たてがみしおり）です。最近、永琳様に弟子入りの者です」

軽い自己紹介を済まし、浅く会釈した。諏訪子は、作り笑いでそれを返した。

「助けてくれてありがとうね。詩織ちゃん」

？詩織ちゃん？。その単語を発した瞬間、場の空気が言葉通り凍り付いた。

神奈子は『やつちまったな』みたいな顔をして、早苗はしきりに詩織の表情を確認している。

訳が分からない。だが、直ぐに理解させられた。

何故なら、詩織が顔を赤くしながら泣きはじめたからだ。

「ええっ！？　なんで!？」

「諏訪子、詩織の性別は何だと思う？」

「性別って……女の子じゃ……」

寧ろ、顔立ちや髪型からして女にしか見えない。

「僕は？男？ですよー!!」

涙をハラハラと流しながら切々に語りだした。

紅い瞳の兎を除いて永琳やその他に日夜、コスプレをさせられ遊ばれている事。

髪をこれ以上切ったらモルモット（実験動物）にするぞと脅されている事。

男の娘（笑）と腹黒ろ兔に馬鹿にされている事。

その他多い為割愛。

等とあり、今では女の子扱いされるだけで泣いてしまう程メンタル面が弱くなってしまったらしい。

神奈子や早苗も何時か間違え、泣かせてしまった事が幾つかあるらしい。

「ですので、次からはぜつたいに！間違えないでください」

「あうっ……ごめんね」

謝罪の言葉を送る。そして、顔がよくても良い事ばかりではないのだなあ、と確認させられた。

女の子に見える美少年。それにより苦勞している者は少なくないだろう。

詩織は未だ苦い顔をしている。彼の顔を見ると、ふと疑問が湧いてきた。

『彼はどうやって自分を発見したのだろっ』

自分が居たのはミラーワールドの筈。その自分をどうやって発見し、どうやって永遠亭に運んだのか。疑問が湧きだし、一つの塊になっ

ていく。

「ねえ
」

「あら、思ったより良さそうじゃない」

諏訪子の言葉をタイミング良く遮ったのは、ナース帽の様な帽子を被り、長い銀髪的女性　八意永琳だ。

「あ、師匠。どうしたんです？」

これでは詩織が、永琳の変わりに来た意味がないではないか。内心で呟いた。永琳が右手で詩織に、こいこい、と手を振る。詩織が首を傾げながらも言われた通りにする。耳元で何かを囁いた。詩織の目が一瞬ピクツと反応する。

「
お願いできる？」

「……はい」

詩織は即座に踵を返し、部屋を出た。

「何かあったのか？　永琳よ」

神奈子が聞いた。

「ちょっとね。少し、厄介事があって……」

永琳が優しい笑顔で、三人を見た。

＊

「ハア…ハア…グッ！」

迷い竹林で息を切らし、身を潜める者が居た。身を低くし、茂みに己を溶け込ませている。いつもは立っている『兎耳』も垂れている。長髪やブレザー、スカートに土が付くのも構わないで、地面にベッタリとくっついていた。

彼女の顔を、水色の光弾を霞めた。

「っあ！！！！？」

弾かれた様に立ち上がり、攻撃主を見据える。右頬からツウッと鮮血が流れた。地面には自分の髪の一部だった物が落ちている。髪にもし当たった様だ。

「いい加減諦めてくれないかなあ？ 僕にはやらなくちゃいけない事がある」

彼女 鈴仙・優曇華院・イナバは、大型銃とトランクを持つ青年を睨み付ける。青年は鈴仙に言い聞かせる様に喋り続ける。

「月の頭脳が在る薬屋、永遠亭。八意永琳が作った秘蔵の薬の数々、まさにお宝さ。そして今は、僕はなんてラッキーなんだろう！ 神が三体も居る！ ある地方の神話では、神の血液を飲んだ者は、異神になったとゆう。薬、そして神血。この2種のお宝が僕を待って

いるんだ。もう邪魔をするのは止めてくれたまえ」

青年　海東大樹が見ているのは鈴仙ではない。その先に在る永遠亭だった。

師匠である永琳に『嫌な予感がする』と言われて巡回していたが、思った以上の？アタリ？だ。蚓で鮪が釣れた様な、重すぎるアタリだった。

鈴仙が右手で指鉄砲を作り、左手を添える。すると指先から白い弾丸の様な弾幕を放つ。総数およそ48発。

大樹がムツとした表情をとった。

「それ（指鉄砲）を僕に向けるか。いい度胸だね」

大樹も大型銃　ディエンドライバーから光弾を放つ。数はほんの数十発だが、それだけで鈴仙の弾幕を全て撃ち落した。ディエンドライバーは50口径。弾丸自体の威力が違う。

「くっ……！」

「分からないかな？　君じゃ、僕に、勝てない」

言葉を区切り、聞き取りやすくした声が鈴仙に投げ掛けられる。

弾幕を打ち消されたのはこれが初めてではない。おのきはしないが、やはり絶望感が少し湧く。

「貴方は危険だ……貴方を通す訳には……いくわけにいかない！」

再度、弾丸を撃ち出す。結果は同じで簡単に消滅させられてしまう。

「えらく勇敢じゃないか。自分しか顧みない、臆病な性格の兎が。その性格で、故郷（月）から逃げだした玉兎ごときが」

「!!!!!!?」

ごく一部しか知らない筈の自分の過去。それを何故この見ず知らずの男が知っているのか。鈴仙はその驚きの感情を、顔に表した。

大樹がディエンドライバーをクルクル回す。

「そんな君に構っている時間はもったいないよ」

一時的にトランクを降ろし、懷から何かのカードを取り出した。カードに描かれているのは、士郎側につくライダー、ディエンドだ。

ディエンドライバーの銃身側面中央部に設けられたカード挿入口にライダーカードを装填し、銃身をポンプアクションの要領で前にスライドさせる。

《KAMEN RIDE...》

そしてディエンドライバーを天に向け、トリガーを引いた。

「変身！」

《DIEND!》

ディエンドライバーから10枚のライドプレートが放たれた。大樹

の周りにも赤、青、緑のディエンドの複数のシルエットが現れ、重なる。最後にライドプレートがマスクに装着されると、体色として黒とシアンカラーに染まる。

「な……何……？」

まだ殆どの幻想郷の住人は、士郎が生み出した仮面ライダーしかない。鈴仙も仮面ライダーディエンドに驚きの声を上げた。

そんな鈴仙はスルーし、ベルトに装備されているライダーカードホルダーに手を掛けた。クラインの壺を通りホルダーに収納されたライダーカードを取り出す。枚数は二枚。それをディエンドライバーに装填し、トリガーを低く。

《KAMEN RIDE KICK HOPPER！/PUNCH
HOPPER！》

ディエンドライバーから攻撃時とは違うエフェクトが放たれた。エフェクトが形をとる。一体は赤い複眼を持ち左足にアンカージャッキーを装備している緑のバッタライダー、キックホッパー。もう一体は灰色の複眼を持ち右腕にアンカージャッキーを装備している茶色系統のバッタライダー、パンチホッパーが召喚された。

鈴仙がまた驚く。

パンチホッパーな鈴仙を指差した。

「ねえ、兄貴。あいつの眼、紅い月みたいだあ」

「ああ、そうだな」

「俺達、太陽は無理だったけど……月なら」

「俺達が、月になる。だろ、相棒。まずはあの月だ」

つまりは鈴仙の両眼を抉ろう、と。太陽を求めた罪人は、その日熱に焦がれた。それを癒したのは月明であり、罪人は月に魅せられた。

二人が月を求め脚を進める。

ゆらり、ゆらりと。

それは、得体の知れない幽者の様に見えた。

鈴仙は背筋がゾクリとしたのを感じたのと同時に、指鉄砲から弾丸を撃つ。

ホッパー達は徐々に加速しつつも、弾丸を落していく。パンチホッパーは拳で一つ一つ消滅させる。キックホッパーは空中回し蹴りで一気に数を減らしていった。鈴仙は怯まずに弾幕を放ち続けた。

鈴仙の努力は虚しく、距離は確実に詰められる。

「アレを……やるしか……」

自分の切り札であるアノ能力。奴らに効くかすら解らず、使おうと踏み込めなかった。戦場では、采配のミスは死に直結する。

残り後、5メートル弱。

ホッパーが鈴仙めがけ駆け出した。ライダーの走力を持つてすれば、

一気に距離など関係なくなる。

最早考えている暇など無し。鈴仙の眼がより赤く光った。

赤く、紅く、朱く、より深紅であり、真紅へと変ってゆく。

「!？」

「……………」

鈴仙の？狂気？の瞳に魅せられたホッパーに直ぐ変化が起こる。

パンチホッパーは狂ったかのように両腕をその場で振り回し、キックホッパーは不思議そうに視線を泳がせていた。

まるで急に盲目になったかの様に。

『狂気を操る程度の能力』 物事の波を操るものであり、物質の波、精神の波、電磁波、音波など様々な波を操作し、相手を狂わせるものとされる。その干渉能力の凡庸性高く、波を操作し視覚や聴覚を遮断等もできる。

今のホッパーの状態がそれに当て嵌まる。

「ッ!？ あゝ ああ！」

「……………相棒？」

直ぐ隣に居るのに、認識ができないらしい。

それを確認すると、鈴仙は踵を返す。能力をフル活用すれば、恐らく勝機はあるだろう。だが、慢心で続けるのは闘いではない。ガキの喧嘩だ。

まずすべき事は永遠亭への撤退。永琳への報告。そして対策を立てる。

兎は持久力は無いが瞬発力の高さは自然界随一だ。永遠亭との距離を考えれば、休息はいらないだろう。

鈴仙が脚に力を込めた。

《K A M E N R I D E A R C !》

また、ディエンドライバーから電子音が鳴った。反射本能により、音を辿ろうと首を回す。首が少し動いた時に、体が地面に押しつけられた。

背中に大岩をぶつけられた様な痛み。

「~~~~~!!!!!!」

声にならない悲鳴。肋骨が軋む音。そして、また加えられる圧力。

鈴仙の体を中心に、地面がクレーターの様に凹んだ。微かに視界に入るのは、空を穿つ様に伸びたうねる二本角を携えた、仰ぎ見るような巨人。

「それじゃ、楽しんでくれたまえ」

軽い言葉を飛ばし、キックホッパーとパンチホッパー、そして新たに召喚されたアークを残し、ディエンドはトランクを手にその場を離脱した。

アークが拳をどかす。地面には拳によって押しつぶされた兎が。まるでハエタタキに潰された小蠅の様だ。

「ああ？ あっ…兄貴」

「相棒…お前…」

どうやら鈴仙の術が解けたらしい。視覚等を取り戻したホッパーも、鈴仙に接近する。

地面に叩きつけられ、肺や心臓等の臓器を強く圧迫され意識が途絶えそうな鈴仙を、三人のライダーが見下ろした。

やることは一つ、召喚主の妨害者の排除である。

「あ、あ……ああ……」

声が上手くでない。肺に受けた強い圧迫により、呼吸がままならない。口からでるのは、赤ん坊が出すなん語の様な声と、コヒューコヒューと空かした音。

口内に血と土の味がし、不快感が込み上げる。口は殴られた時に切ったのだろうか。臓器が損傷し、大量の血を吐き出すよりはましだが。

軀を動かそうとすると、骨が軋み、脊髄に痛みが伝えらる。実質、

一撃による一発KO。初めてまともに喰らう攻撃でこうだ、情けない。

体格差、不意打ち、体重差。

様々な？言い訳？が鈴仙の頭に浮かぶ。だが、今無駄に頭が冴えている彼女には、あつかましい言い訳と認識できた。

意識が朦朧としているのに、思考は冴えている。

何故だろう？

これじゃ……まるで……死ぬ寸前の様な…。

ライダー達が、俎板の上の鯛を見るような眼で兎を見下ろす。

キックホッパーがゆっくりと鈴仙の頭に左足を置いた。後は只、腐った野菜を踏み潰すかの様な音を出しながら、頭蓋を砕くだけ。

パンッ！

叩いた手を叩く音が、竹林に響き渡った。本来なら気にもしないが、三人の反応は異常だった。

キックホッパーとパンチホッパーは焦った様子で跳躍し、巨身のアークですら回避行動をした。その手を叩く音から、より遠くに逃げる為に。

「何だ……？」

？震える右腕？を左手で押さえながら、音の発生源を探す。パンチホッパーとアークにも同じ症状が出ていた。まるで本能の奥に刷り込まされている？恐怖？を引っ張り出されたかの様だ。

「貴方方……その人に何をしたんですか？」

現れたのは女の面の様な顔をした優男。両手を胸の前で合わせている事から、音源は彼の様だ。

「もし……その人を傷つけたのが貴方方なら」

詩織が懐から一つのスロットが付いたバツクル ロストドライバーと、メタリックゴールドのUSBメモリの様な物を取り出す。USBメモリ ガイアメモリには簡易的な獅子のイラストで『R』と描かれている。ロストドライバーの臀部辺りに押しつけると、ベルトが現れ腰に装着された。

「僕は貴方方を、粉々の塵芥にしてこの世から抹消しても恨み続ける」

詩織がガイアメモリのスイッチを押し、起動させる。

《RAI ONESS!》

ガイアメモリ ライオネスメモリから、内包している記憶を告げるガイアウィスパーが発せられる。

「変身」

ライオネスメモリをロストドライバーのスロットに挿入する。待機

音がほんの数秒鳴り、ロストドライバーを展開する。

《RAI ONESS!》

もう一度ガイアウィスパーが発せられ、スロットの前にイラストの『R』が現れる。大地を引き裂くような変身音が鳴ると、『R』が粉々になり白い光を発しながら獅子を包む。変身完了を表すように、複眼が光ると獅子の咆哮が響いた。

そこに現れたのは先程の優男ではなく、屈強な獅子を模した闘士だった。

ライトイエローのたてがみ、ワインレッドの複眼。マスクのクラッシュヤーは二本の長めの牙が生えている。両手足のアーマーはメタリックゴールドで、指先には鋭い爪が生えている。胸部には黒とメタリックゴールドのアーマーが装備されている。

名を仮面ライダーリオン。

「僕が持てる？本能？の全てを持って、貴方方を潰す」

獣王の記憶と、？本能？とゆう武器を携えてリオンは大地を歩く。

『EPIISODE・21/シアンカラーの召銃士』（後書き）

オリキャラ大まかな設定

楯神詩織：もともとは外の世界のライダー。元の世界の人間から必要とされなくなり、紫の手によって幻想入りする。自分を受け入れてくれた永遠亭の者達には感謝しているが、鈴仙に対して別の感情を持つ。

ライオネスメモリ：獣王の記憶。雄ライオンの英単語を弄った造語。詳しい説明は次回。

『恐怖を感じさせる程度の能力』：ライオネスメモリの影響で生まれた能力。音や視覚を用いて、相手の中に眠る恐怖心を引き出す。眠る恐怖心を出す為、恐怖を与えられる事に耐性を持つ者にも有効。永遠亭の話は今回を合わせて三回の予定。これが終了すれば、セルメダルを入れられたドゲスマりさの話をやりたい。

次回も宜しく御願います！

『EPISODE・22/バーンツ』（前書き）

ども、ディケイド作品がやりたくてやりたくてしょうがない仮面3です。

でも、作品の持ち量が問題でできない。少しでも見てくれている人がいると作品を止める訳にはいかない。ああ、悩ましい……！

今回は【黄金比】について。

『黄金比』とは、人間が見て美しいと感じるモノには一定の比率があるらしく、それは自然界のあらゆる部分に見られる。その比率は、黄金比 $\parallel (1 + \sqrt{5}) \div 2 : 1 \parallel 1.618 : 1.000$ 。「ピラミッド」「国旗」「新書版の本」「ミラノ大聖堂」「パルテノン神殿」「ミロのビーナス」「レオナルド・ダ・ビンチが描いた人体図」「オウムガイの対数螺旋」などが黄金比のよい例として知られている。』

数字の所、まったくわかんねえ。解った人、あんたは天才だ。

では本編

ゆっくりしていいね……！！！！

『EPISODE・22/バーンッ』

兎は立つ。

先程の攻撃により節々に走る痛み、体内に残る臓器のダメージを顧みずに立ち上がった。

先程まで紅く輝いていた瞳は暗い影が差し、その眼は獅子を捕捉する。

鈴仙の様子は明らかに異常だった。しかし獅子は己が想い人を傷つけた不屈きな輩にしか意識は無い。故に異常は察知できないでいた。鈴仙は震える手で懷を探った。そして、見つけだした。

自分に埋め込まれた、また新たななる？狂気？の一部を。

《SKULL!》

その囁き（ウィスパー）が鈴仙には聞こえていたが、聞えていなかった。

*

ライオネスメモリ。

獣王の記憶。様々な獣の頂点に君臨する者。敵とあだなす存在はその圧倒的？本能？に押し潰される。故にライオネスメモリは？本能

？を操る。

生物の記憶の原初に刻れた様々な本能を引き出し、それを使用者に反映させる。本能は使用者（リオン）の眼に現れる。

赤（ワインレッド）は、闘争本能？を示す。

「ッ
シ！」

愚かにもパンチホッパーが仕掛けた。アンカージャッキーが装備された方の拳をリオンへと打ち出した。

リオンがあつさりと手の平で、パンチホッパーの拳を受け止めた。更に、空いている方でアンカージャッキーを押し折った。

「なっ！？　ぐ……ぎが……！」

手の平に力を込める。パンチホッパーの拳からメキメキと強い圧迫を受ける音がした。

拳が固定されて逃げられないパンチホッパーを、殴る、殴る、殴る、
 殴る、殴る、殴る、殴る、殴る、殴る、殴る、殴る、
 殴る、殴る、殴る、殴る、殴る、殴る、殴る、殴る、
 殴る、殴る、殴る。マスクを、ボディを、肩を、この三ヶ所
 を重点的に、ひたすら殴り付けた。

「げあ！　ぐべ！　かばあ！　ぱべあ！」

マスクが凹み、肩の間接がいかれたのかぶらんとしている。

して蹴を放つ。リオンが攻撃を拳でバウンドさせガードする。バウンドに使った拳をそのまま振り抜いた。キックホッパーはしゃがむ様にして躲す。

？闘争本能？は圧倒的な攻めと力で敵を叩き潰すのが主体。いわば純粋なバトルスタイルを使う状態である。

キックホッパーは怒りに身を任せているが、彼もまた本能でそれを悟っていた。だから真正面には立とうとはしなかった。

リオンが大きく振りかぶり、ラッシュブローの様に拳撃を繰り出す。キックホッパーは一撃を脚でガードし、その腕を足場にして態勢を直し、リオンの顔面を蹴った。

蹴った時の反動を利用して、距離を取った。

リオンは蹴られた時の状態、首を仰け反らしたまま沈黙した。

「はあああ ああああ！ フハハハ……バアッハッハー……！」

「……………」

怒りを発散させる様に叫んだキックホッパーとは違い、リオンは無言でゆっくりと頭の位置を戻した。

「ハアア……」

「貴方はさっきの方よりも強い様だ……、この？本能？じゃあ時間が掛かる……」

そう告げると、徐々にたてがみが光だし、変わりにワインレッドの複眼が色を失ってゆく。

たてがみが一瞬だけ強く光ると、複眼の色が変わっていた。ワインレッド（赤）から、沈むようなブラック（黒）へ。

黒は闇夜に潜む者、闇に紛れる者を示す。大抵の獣が闇や他の物に紛れる時は狩獵をする時である。

？捕食本能？。

今やリオンは争う獣から、喰らう獣に変わった。

ブラックになった複眼が点滅すると、リオンの姿が竹林の背景に溶けた。

「！？ どおこだあああ あああ！！」

姿を消したリオンに戸惑い、彼がいた場所に移動し無茶苦茶に暴れた。怒りに地面を踏みつけ、近くの竹を押し折った。

その探し人は直ぐ近くにいた。己を景色に溶け込ませる『ゼロカラ』を使い、常にキックホッパーの背にいた。そして手を少し伸ばせば届く距離になると、？口？を開いた。

クラッシャーをかばあっと開き、キックホッパーの首に食らい付こうとする。

「『オムニウォルスバイト』」

短く技命を言い捨て、キックホッパーの肩に食らい付いた。

「うぎいあー!!」

肩のアーマーがハギバキと碎ける音を出した。二本の犬歯が深々と突き刺さっている。

リオンの頭上に暗く、大きい影がさした。アークだ。今まで黙っていたアークが重い腰を上げてリオンへと攻撃しようとしていた。先程、鈴仙をのした一発KOのパンチ。それが頭上から落ちてきた。

リオンが大きく頭を動かした。キックホッパーの肩がアーマーごと喰い壊された。肩を破壊すると、その場からバックステップで回避した。

アークの一撃はリオンとほぼ同一の場所にいたキックホッパーに直撃した。キックホッパーが粉々の光になり飛散した。

「残りは貴方1人……」

またリオンのたてがみが光り、複眼の色が変わった。今度はダークレッド（赤黒）に変わる。ダークレッドは闘争本能（赤）と捕食本能（黒）が混じった色。混じったと言っても、黒の中に赤が泳いでいる様な感じだ。

？惨殺本能？。

基本的に惨殺衝動と言われているものだ。惨たらしく殺したい、ぐちゃぐちゃに歪ませたいとゆうサドスティックな本能。

アークが拳を戻し、再度標的に振り下ろした。リオンはそれをも容易く受け止める。今の状態は闘争本能でもある。腕力の強さは健在だ。

「『ヒュペル・テロ』」

ラテン語で『圧倒的な恐怖』の意味を持つ言葉を言った瞬間、アークの腕を引きちぎった。

「!!!!!!!!!!」

肩からごっそりとちぎった。アークは傷口の肩があった場所を押さえて悶絶している。リオンはお構い無しに、だが見せ付ける様にアークの腕を更に二つに裂いた。

それを投げ捨て、苦しむアークに接近する。これ以上接近されたら危険だと、恐怖心で理解した巨人は足払いの様な攻撃をした。

それもまた自分の苦しみを増やす行動となった。

「アハッ」

*

バキッグキ…グリン！

頭を一回点させ、胴と離ればなれにした。アークの大きな頭を放り

投げる。

大地に転がる四肢が無い胴体。三つにバラされた右足。三段階に曲げられた左足、二つに裂かれた右腕、ぐちゃぐちゃのミンチにされた左腕。

本来ならここまでする間にアークは消滅している。だが、惨殺本能を発動しているリオンが使った能力のせいで消滅できなかった。痛みへの恐怖は延長された。

？ヒュペル・テロ？は死ねなくする能力（チカラ）。

身体能力の強化など、闘争本能で十分だ。隠密能力の強化など、捕食本能で十分だ。その2つが交じりあったチカラが惨殺本能。そしてその惨殺本能発動時に使える能力が、延命。

標的に獣の生命を貸す能力。

勿論貸すだけなので、必要が無くなれば還してもらっ。発動条件は相手に触れて受け渡す事。

延命と言えど、不死になる訳ではない。心臓や頭が潰されれば死ぬ。中々死ねなくなるだけだ。

惨殺本能発動時は、詩織の人格が大きく変わる。まさに狂気人と言った様な性格になる。

ヒュペル・テロは楽しむ為だけに存在する能力だ。そう、眼を抉つても、鼻を削いでも、口を剥がしても、歯を全て折っても、皮を剥いでも、20の爪を剥いでも、血管を引き出しても、骨を粉々にし

ても、生きたまま手を突っ込んで、ちよつと心臓に穴を開けても、頭蓋を砕いて脳ミソをストリップさせても死なない。少しでも心臓が動けば、少しでも考える力があれば、シヨック死すらできない、気絶する事も許されない、生き地獄に堕ちる。

「サイッコーだ！！　ヒヤハハハハハハ！！！！　イヒヒヒヒヒヒヒ！！！！」

詩織が叫んだ。地面に仰向けに寝転んで、笑い続けた。狂った様に笑い転げた。このチカラは快樂の麻薬。楯神詩織の幸せな瞬間。性行為よりも気持ちがいい。変身した彼は狂うのだ。

マスクを両手で押さえ、笑い過ぎてキレていた息を整えると、ゆらりと立ち上がる。マスクから両手を離す。複眼はワインレッドの色に戻っていた。

「ああ……最悪の気分だ……、こんなの誰かに見られたら生きていけないよ……。」

本能に身を任せ過ぎるといつもこうなる、感情が高ぶると無意識にアレを使ってしまう。

惨殺本能は、本来の詩織が最も忌み嫌うチカラだ。

昔初めて使った時からこうなってしまう。麻薬とゆう例えはあなたが間違つて無いだろう。詩織の意識に深く結びついてしまっていた。たまにコントロールできず、もう一人の彼が表に顔をだすのだ。

恥ずかしさのあまりに、頭痛がしてきた。唯一の救いは、近くに倒れている鈴仙の意識が朦朧としている事だろう。

「……………え？」

その鈴仙を助けよと、倒れていた場所を見た。しかしそこには、何もいなかった。クレーターの様に凹んだ地面には血反吐があるだけ。

リオンの脚は自然と動き、クレーターの傍に近づいた。

「なんで……………動ける様には……………」

見えなかったのに、そう呟くと、リオンの後頭部に衝撃が穿た。

衝撃のままに、前転の様に倒れこみそうになる。右腕を突き出し地面に付け、支えにして一回転。着地した不意打ちした相手を睨み付けた。

そこにいたのは、自分と同じロストドライバーを装着した髑髏頭。黒い複眼は、眼を失いぽっかりと空いた髑髏その物。黒と銀が主の軀に、マスクの額には『S』字の傷模様がある。首の白いボロボロのマフラーが風になびいた。

「ッ！ ライダーッ！？」

髑髏のライダー、スカルがリオンに飛び掛かった。

*

リオンこと詩織が謎のライダー、スカルと対峙していた頃。

【永遠亭】

詩織が永遠亭を出て数十分。永琳が30秒おきに時計を眼だけで捕えて、時間を確認していた。

「そんなに心配なら見に行けばいいじゃないか。そもそも、何を心配してるんだ？ 只のお使いなんだろう」

神奈子が問うた。永琳は詩織を出したのはお使いに行かせたと説明していた。もつとも、それを信じたのは一体何人だろうか。

「なあ永琳よ。お前さん、奴をなんの？ お使い？ に出したんだ？」

分かっている様子だが、敢えて遠回しに聞いた。永琳は少し思い出す様な仕草をした後、語りだした。

「ただの買い出し。牛肉、人参、玉ねぎ、じゃがいも、ヨーグルトやその他もろもろの買い出し」

「なるほど……今夜はカレーですね！」

「ええ」

守矢神社の胃袋を受け持つ若奥様風の少女と、永遠亭の姫様と兎達の胃袋を管理するオカンは、それぞれの晩飯事情話に花を咲かせていた。

早苗が楽しそうに話すのを見て、神奈子は口をつぐんだ。うまくはぐらかせてしまった。

早苗と話している間にも、永琳は時計をチラチラと見ていた。

「八意永琳。君が心配しているのはその少年かな？ それとも非力な兔？」

その場の全員が声がした方を見る。そこには扉に凭れ掛かり、トラノクと召喚銃を持った仮面ライダーが軽く手を振った。

「やつ。僕は」

軽い挨拶をして、一歩近付こうとしただけで、部屋の中でアクションが起こった。

神奈子と早苗が、身動きがあまりできない諏訪子を守る様に立つ。

永琳に関しては、どこからか弓と矢を取出し、弓を引いた。

その矢じりはディエンドのマスクの中心に。ただ、簡単に矢を放てなかったが。

永琳の眼の間に、ディエンドライバーの銃口が突き付けられていた。しかし、指はトリガーから離れていた。

「流石……反応が早い。天、陸、海、地下。どんな体格差があらうと、生物の中で最も強いカテゴリは女（雌）だとう。その精神力は、男では勝てない。女を敵に回すなど言われているけど、幻想郷では尚更だね」

矢を至近距離で構えられているとゆうのに、ディエンドは軽口を叩いた。

「そうそう、君が作った薬は既に幾つか拝借したから。ここには別の用事で来た。」

永琳がチラッとディエンドのトランクを見た。隠せる場所はあるが、恐らくそこだ。少し睨みつけ、永琳は口を開いた。

「この永遠亭の来る迄に、兎か少年、さっき貴方が言った者達に会った筈よ。彼らはどうしたの？」

「さあね」

永琳の表情は変わらない。その代わりに、早苗が動きだそうと、指をピクリと動かす。

「おつと動かないでくれたまえ。僕には不老不死を殺す方法も、たかが矢一本を防ぐ方法もある。そうだな、質問に答えよう。少年は知らないけど、兎は……ネガティブだかポジティブだかよく分からない兄弟と、馬鹿デカイ奴にぐちゃぐちゃにされてるんじゃないかな？」

「憶測よ。彼女は弱くない」

「兎は臆病な生き物さ。臆病者ができるのは逃げのびる事じゃない。無駄に命を長引かせ、恐怖に身を震わせ無様に生きていく事」

「さっきから好き勝手と……」

ディエンドの馬鹿にした様な物言いに怒り、行動を現した早苗。

「早苗え……」

神奈子が止めようと呼び掛けるが、既に遅し。ディエンドを一発殴ってやるうとゆう勢いで接近する。

早苗の行動にため息を吐き、離していた指をトリガーに掛ける。それに呼応する様に、永琳が矢を放った。

矢はあの至近距離だとゆうのに外れ、壁に刺さった。放つ瞬間に永琳の腕をトランクで殴り付け、軌道をずらしたのだ。

早苗が裏拳で殴りかかってきた。ディエンドは屈んで躲し、腹部に蹴を入れた。

「ふぐつ」

早苗の躰は簡単に飛んだ。ライダーのキック力、パンチ力は軽く何トンの領域だ。特殊な力を持っている早苗でも無事ではすまない。飛ばされた早苗が神奈子が受けとめた。

永琳が屈んでいる状態を見逃さず低い位置の蹴りを放った。ディエンドはまたもや軽やかに躲す。低い跳躍で跳び、ディエンドライバ―から光弾を放った。

光弾は永琳の頬をかすめて、その後ろに大きめの穴を開けた。

（躲した……いや、？外した?!?）

ディエンドが立ち上がり、神奈子目がけトランクを投げつけた。実際は神奈子を狙ったが、早苗を受けとめたていた為このままでは早苗に当たってしまう。

軽く舌打ちをし、早苗をわきにどかしてトランクを弾いた。トランクがくるくると回りながら天井すれすれまで飛んだ。

「！」

トランクに意識が向かい反応が遅れた。その大きい銃が狙っているのは、自分。

「神の血……貰うよ」

ディエンドの指に力が加わる。早苗にはそれがとてもスローに見える気がした。

「神奈子様……！」

躰が自然と動く。音が聞こえない。これが極限状態とゆう物なのだろうか。

神奈子の前に両手を広げて立つ。移動中に見た神奈子は口を動かしていた。恐らく、出るな、とも言っているのだろう。

ご安心ください。私には奇跡を呼び込み、起こす力があります。怪我はしても大怪我はしない筈です。攻撃時誰しも一瞬の隙が生まれる物。その隙を、永琳さんが付いてくれる。そうすればあの訳が分からない賊を退治できる。そうすれば、また笑顔で話せる。そもそも数分前から変な感じがした。胸の奥で何かが騒つく様な……。多分それはこの事を無意識に予知していたからかもしれない。だから、退治すれば大丈夫。胸のつかえが無くなる。

……時間が進むのが遅い気がする。トランクがまだ宙を舞っていた。もう少しであの銃の銃口が隠れてしまう。

あれ？　なんかこうゆづのテレビで見た様な……。色んな考えが浮かんで……。時間が遅く感じて……。こうやって身代わりになって……。これって確か……。今で言う……。

死亡フラグ……だっけ？

そして、ディエンドライバーから放たれた光弾が、トランクの中心を撃ち抜く。貫通した光弾が早苗の胸を抉った。

光弾の威力が高かった為、早苗共々神奈子が吹っ飛ばされ床に倒れこんだ。

「いった……」

倒れた時に頭をぶつけたのか、頭をさすりながら起き上がる神奈子。

「さな……え……」

諏訪子が震えた声をだした。彼女の顔からは血の気が引き真っ青になっていた。視線をたどり、神奈子も早苗を見た。

「……………！」

目が死んでいた。口から汚らしく血が垂れ流しになっていた。早苗

の白い服が真っ赤に染まる。

そして胸が、乙女のそれではなかった。胸部の服が破けており、本来なら豊満な胸が露になり時だろうが、とてもグロテスクな物が露になっていた。

ドリルに抉られた様になっている乙女の胸。筋肉がスタボ口になり、ちぎられた血管が見える。肋骨が砕け、2、3本が筋肉に突き刺さっていた。その部分が不規則に動いていた。穴の空いた心臓。常に溢れる血液は、心臓が鼓動する度に噴水の様に流れた。

その血液が神奈子の顔に浴びせられた。

「あ……う……あ？」

早苗自信にも何が起ったのかよく分かっていないらしい。神奈子か、諏訪子か、どちらかに自分の状態を聞こうとして口を開けた。

出てきたのはあの優しい声ではなく、ゴポツとゆう血液が漏れだした音だった。その音で、神は、感情のダムが決壊した。

さなえ えええええええええええええええええええええええ
えええええええええええええええええええええええ
えええええええええええええええええええええええ
えええええええええええええええええええええええ

え!!!!!!!!!!!!!!。

2人の神の絶叫が響いた。

奇跡とは都合が良い時に起きる訳ではない。

奇跡とは苦しい状況から逃れる為に起きる訳ではないのだ。

「バーンッ」

ディエンドが、愉しそうに呟いた。

『EPISODE・22/バーンッ』（後書き）

うーん……今回はスランプ気味で上手くいかなかった。読者の皆さん、ごめんなさい。

リオンは『衝動』も本能として使えます。

バイオレット（紫）
破壊本能。

ホワイト（白）
逃走本能。

等です。惨殺本能の様に本能と本能を混ぜた物もしよう可能。

スカルの正体が殆ど解ったと思う今回。次回はカリスとかが出ます。

次回も宜しく御願います！

『EPISODE・23 / 怠情? 大いに結構!』 (前書き)

ども、スランプから脱出できません、仮面3です。

何かいい方法は無いでしょうか?

では豆知識。炬燵最高だよ炬燵。ミカンについて。

『ミカンはアメリカではテレビオレンジと言われている』
ミカン良いよね!

では本編

ゆっくりしていいね!!!!!!

『EPISODE・23 / 怠惰？ 大いに結構！』

胸がすーすーする…でも…胸が熱い。

神奈子様達が何か言っている…いつもより耳が良く聞こえる…
だけど何を言っているのか分からない。

頭の中がごちゃごちゃしている……だけどすっきりしている。

目の前にいる……緑色の怪物は何？

分からない……知らない……でも分かる…知っている。

アレは私……新しく私になった私……私じゃなかったけど私になっ
た。

私に割り込んできた……だけど……嫌な気分じゃない……。

ねえ……貴方（私）の名前……何？

早苗？

それとも……。

*

黒腕が放たれた突きが、腕をクロスしてガードをしたリオンを後方へ飛ばす。構えを解いて、スカルを見る。

(……あれは『彼女』と狼夜さんが言っていた神崎の……恐らくそうだ。くそっ！ 早く鈴仙さんを見つけないくちやいけないのに)

時間の経過に焦りを感じる。リオンが最後に見た鈴仙の状態は決して良い物ではない。吐血している事から臓器へのダメージがある可能性はある。血液の量から可能性は低いと思うが、その血液で器官を塞いでいたら？ 他の臓器や肺に折れた骨が突き刺さり、内部出血をしていたら？ 不安要素は減らず増える一方だ。

この無駄な時間を早く終わらせたい。早く彼女を探したい。リオンの中で最大戦闘力を誇るのは？ 惨殺本能？ である。戦闘スベックではない。実際、？ 惨殺本能？ を越える本能はある。だがその戦闘力には性格が反映されていた。

狂った詩織。

それが？ 惨殺本能？ が最強を誇る理由だ。

？ 惨殺本能？ を使おうか迷っていると、スカルが踵落としをしてきた。

「つつつ！ つああゝ！！」

脳天に直撃すり寸前で、スカルの足を掴み勢いを殺した。全力で力を入めた為、蹴りは簡単に止まった。

強い力、人1人を簡単に支えられる程。

リオンの怪力を支えにして、跳んで顔面を蹴り付けた。軽い声を上げて頭を仰け反らした。デジャヴを感じながらも行動を起こした。スカルの足を掴みながら軀を回転させる。勿論、スカルの軀も回転させられる。空中をスカルを振り回した後、思い切り放り投げた。

そのまま空中散歩を楽しんでくれればよかったが、スカルも相当な戦闘のプロ。空中を舞っている時に、生えている竹の先端を掴み、竹独特のしなりを利用して衝撃を吸収させ地面に静かに着地した。

「早く…早く……」

他の本能を使いこの場から退散しようと考えたが、その考えは直ぐに捨てた。狼夜と『彼女』の話では、スカルを含めたライダー達は詩織達外のライダーの抹消と妨害を目的としているそうだ。恐らく退散してもしつこく追いかけるか面倒なアクションを起こしてくる。

詩織は葛藤した。彼女を探したい。彼女の、あの顔、あの美しい長髪、あの雰囲気、それを見て安心したい。その為には、あの本能が近道だと理解はしているがそれでも使いたくない。

スカルが右手で拳を作り、接近してくる。リオンは思考を展開しながらも迎え撃つ。両者からシュツと空気を裂く音を出しながら拳を突き出した。スカル、リオンのマスクから軋む音がした。スカルの拳がリオンの右頬に、リオンの拳がスカルの蟀谷（こめかみ）に直撃していた。

「ぐあ……」

軽い呻き声を上げリオンのたてがみ、『テールグリーヴァ』が光り、複眼がブラックに変わる。？捕食本能？時の能力であるゼロカラー

を発動させた。

姿を背景に溶け込ませると、リオンは直ぐに後ろへ跳んだ。これなら直ぐに気付かれないので、考える時間が得られた。

そう、油断した。

スカルは数回、消えたリオンを探すアクションをした後、マスクを片手で押さえた。自分の黒い複眼を隠す様に。ゆっくりとしたモーションでマスクから手を離れた。黒い複眼が赤く、紅く染まっていた。狂気の月が如く、紅い瞳で空間を照らした。

「うつ！？ う……うあ……！」

スカルの紅い複眼に魅入られたリオンの視界が、グニヤリと歪んだ。地面には荒れ狂う海のように波がうねり、リオンの足場が底無し沼の様に沈んだ。そしてその場から一歩も動いていないのに、視界がぐるぐると回り吐き気を促した。三半規管がやられたのだろうか、立っていらなくなり地面にクタリと伏した。

ついには？ 惨殺本能？、ゼロカラーが保てなくなり、複眼がワインレッドに戻りスカルにリオンが見えるようになった。

なんとか立とうと、腕を支えにしたが腕にすら力が入らない。立とうともがき続けるリオンの直ぐ前に、スカルが立ち見下ろした。

圧倒的な狩る側の獣王が、狩られ喰われ捨てられた骸の髑髏に見下されていた。

その髑髏は死神の戦利品か、魂を喰われた者の末路か。

スカルがメモリに手を掛けた。同じシステムを使っている詩織にはその行動の意味を簡単に理解できた。『メモリブレイク』と言われる、必殺技の兆候。ライオネスメモリを破壊し、次には彼自体も破壊されてしまう。

最早迷う余地は無し、時として獣は醜く生にしがみつくのだ。

リオンの複眼が、ブラックに変わり、黒の中で赤がのたうち回った。本能が求めるかのように腕を動かし、スカルの脚を掴んだ。脚を掴んでいる腕を強く引いた。バランスを失ったスカルがずっこけ背中を打つ。

リオンが立ち上がった。スカルは脚を持たれたままなので、逆さずににされている。

立っているのが不自然だ。頭はピクピクと痙攣し、脚はガクガクと震えていた。それでも立っていた。彼の中で、人生の中で恐らく一番の快楽を得る為に。

「…………アハッ アハアハアハアハアハアハアハアハアハアハアハヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒハハハハハア クキキキキキキキ…………」

気味の悪い笑い声を上げる。コレが合図だった。彼が狂う合図は奇声。

スカルを振りかぶり、地面に強く叩きつけた。

「ひとつ鼻がーくーだけでー」

「ハアアアーーーーハアアアツツ!!!!」

ビー！　ビー！

歓喜の雄叫びが響くなか、ロストドライバーから警告音が鳴った。すると、ライオネスメモリがロストドライバーから強制的に分離された。ライオネスメモリが煙を上げながら地面を転がり、リオンが強制変身解除され詩織にえと戻った。詩織は息を切らしながら、四つんばいに地面に倒れこんだ。

尋常じゃない汗。強過ぎる動悸、他人にも聞こえるんじゃないかと思っくらい心臓が打ち鳴らしている。

「はぁ……はぁ……うゝええ……」

地面に詩織の嘔吐物が広がる。胃液の飛沫が、ライオネスメモリに少しかかった。胃液はメモリに触れた瞬間にジュツと音を立て蒸発した。

鼻からぽたぽたと血液が流れた。黄色の胃液に赤黒い血液が混じる。

「げはげふっ！……ぜえ……ぜえ……はぁ……1日に…二度も使ったら……ショックで…死ぬな……」

脳が沸騰する様な感覚になりながら呟いた。極度の興奮状態を持続する？惨殺本能？は心臓にも悪い。自重しなければ、叫びながらぽつくり、なんて事もある。

数分後、動悸がおさまるとライオネスメモリを拾って白衣のポケットに戻す。ライオネスメモリはまだ少し温かった。ふらふらにな

りながら、姿を消した鈴仙を探した。鼻血がとまらなく、地面に赤い道しるべを作った。

うろろろ探していると、先程の場所から少し離れた場所で倒れている鈴仙を見つけた。途中で意識が戻り避難したのだろうか。まともに頭が働かない詩織はその程度にしか考えなかった。

永遠亭に運ぶ為に、鈴仙を背中に乗せた時に気付いたが、？左手首が砕けていた？。見た目よりも重傷なのかもしれない。背負った鈴仙に影響を与えない程度に詩織は走った。

こんな非常事態でも、鈴仙から与えられる2つの柔らかい感触を、背中に全神経を集中させて感じ様としていた詩織は、こんな女みたいな面をしていても自分は男なんだと再確認していた。止まりかけていた鼻血が再度吹きこぼれた。

*

「アッハハハ。心臓までぼっかりだね。ターヘルアナトミアがあれば見比べて、どこまで精密か分かるよ？」

ディエンドの皮肉は、二人の神には届いていない。普通ならここで怒り狂い襲いかかってくる物だが、神達は放心状態で早苗を見つめている。少しがっかりした様にため息を吐いた。

「なんだ、お宝は苦勞して手に入りたいのに……。ちょっと拍子抜けだよ」

人間の情等持ち合わせていないと言わんばかりのセリフを吐いた。ツカツカと二人に接近する。途中に、ディエンドが撃ち抜いたトラंकが転がっていたが、気にせず踏み潰した。？用済み？のゴミなど、彼の眼中には入らない。

「さて……」

手の平に銃身をポンツと置き、品定めする様に、交互に彼女達を見た。

瞬間、顔面に痛みが走り躰が宙を泳いだ。豪快な音で壁を突き破り、土の香りがする地面に叩きつけられた。何事も無かったかの様に直ぐに立ち上がる。

「いったゝ……。しかし、速い……。実年齢を考えたら無理し過ぎだ」

「ふん……」

破壊された永遠亭の壁から永琳が現れる。自身の最高速度で動き、ディエンドのマスクをソバットで蹴り付けた。賢者とゆうより拳者と呼んだ方がいい程の戦闘スペックを有している彼女は、闘気と殺意を織り交ぜた視線でディエンドを見た。

「怖い怖い」

正直な感想。マスクの下で冷や汗が流れた。やはり幻想郷の女性は敵に回したくないと思ったが、時既に遅し。狂気の兎に、恐気の薬師。この名前、悪くない。ディエンドはほくそ笑んだ。

「ライダーの力……。神の御躰すら傷つける。まるで愚かな人、ミ-

チエの様な恐れ知らずの力と知能ね」

永琳が腹部に何かを押しつける。バックルからベルト部とカードホルダーが出現した。

「貴方は私を怖いと言った。だけど、私は貴方が怖い。怖いから、私は鎧を着る」

カードホルダーから、ハートのAのカード、『CHANGE』とハートと螳螂のイラストが描かれたカードを取り出した。

「はつきり言つて、私はこの力が嫌い。野蛮、暴力、争いの塊だから。神は天使や悪魔にも成るとゆう言葉がある様に、ライダーの力も救い、破壊にもなる。そんなギャンブルみたいな力を好き好んで使う輩の気持ち解らない。解りたくもない。だけど、使わなくてはいけない時があるのは痛い程解る」

「ながつたらしい演説してて、いいのかな？ あの娘死んじゃうよ」

「あの娘は奇跡を呼び込むチカラを持っているわ。神々に愛される、奇跡そのもの」

「奇跡は、都合のいいチートアイテムじゃない。そもそも奇跡なんて物がホントにあつたら、一秒に二人以上死んでいる世の中は無くなって。奇跡なんてないのさ。あるのは必然だけだよ」

「確かに、ね。だつたら彼女は、必然をねじ曲げる存在なのかもしれないわね。……彼女は恐らく死なないわ。それが……世界が選んだ必然」

言葉を切り、カリスラウザーにチェンジマンティスを読み込ませる。

《Change》

電子音が鳴ると、永琳の軀を黒い半透明の液体が包む。液体が弾けると、黒い複眼の獣王にも引けをとらない、漆黒の狩人が現れた。赤い複眼と胸の銀のプレートはハートを模しており、漆黒の軀には赤や金のラインが走っている。手には弓部が刃になっている醒弓カリスアローを握っている。

「仮面ライダーカリス。仮面ライダーと言われているが、実は只の怪物。年寄りが、本当に頑張るね」

「だったら年寄りを敬って、さっさと帰ってくださるかしら？」

「だが断る。だけど、コイツを置いていつてあげるよ」

ライダーカードホルダーからカードを取り出し、ディエンドライバーに装填してトリガーを引いた。

《KAMEN RIDE BLADE!》

ライダーの影が重なると、ヘラクレスオオカブトを模した仮面ライダーがカリス目がけ駆けていた。プレートはスペードを模している。名はブレイド。カリスと世界のライダーであり、現在幻想郷にも在るチカラだ。

ブレイドがホルダーから醒拳ブレイライザーを引き抜き、カリスへと斬り掛かった。それを半歩引いて躲し、背中へ手刀を叩き込んだ。

「君の遊び相手さ。僕には用事があるんでね」

「あら？ この程度じゃお遊戯の相手にもならないわよ」

「ご心配なく。そいつも伊達に主役をはってない」

会話中のカリスに、ブレイライザーが襲い掛かる。カリスアローで受けとめる。火花が散る中で、刃を滑らせブレイドを切り裂く。

怯んだりするが、ブレイドは倒れる事無くカリスへ攻撃を続けた。

「優秀優秀　さて、そろそろかな……」

またカードを手にした。今度の絵柄はヴァンパイアをもした紅に染まった牙。

《K A M E N R I D E K I V A !》

ボディには血管の様な模様が入り、肩や右足のヘルズゲートにはカテナ（鎖）が巻かれているライダー、キバが現れカリスに殴りかかる。

ブレイドとキバは攻撃の雨を降らしながら、カリスを永遠亭から離していく。その隙に、ディエンドは永遠亭の中に再び侵入した。

永遠亭の中は代わり映えしなかった。床に横たわり、血を噴き出している小娘。それを呆然と覗き込み、血を吹き掛けられている蛇。重症の躰に鞭を打って、自分の子孫をなんとも言えない表情で見ている帰る。

脆い。

永琳に持った感想が『怖い』なら、この三人への感想は『脆い』。

つまらないな……。

ディエンドが吐き捨てる。今変身していなければ、誰かに反吐を吐きかけていたかもしれない。一番近くにいた神奈子を手を伸ばした。

こいつを殺せば、？あいつ？は覚醒するかな？

海東大樹は今、実験の為に神を殺そうとしていた。手を伸ばしている時に、宙で静止した。止めたくて止めているのではない。止められていた。

「……………やった」

死にかけていた早苗の変化に、喜びの声を上げた。未だ死んだ眼だったが、右手を上げていた。上げているだけで届いてはいないが、ディエンドの手はピクリともしない。

まるで神が、透明な第三の手で神をあだなす罪人に触れ、犯行を止めたかの様な。

今度は左手を、拳で突く様に突き出した。

「うつ……」

胸を殴られた衝撃に見舞われ、ディエンドは飛ばされ壁へ激突した。早苗がゆらりと立ち上がる。その工程で躰に力を入れる度に、胸の

穴から血を噴き出していた。

「早苗！ さな……………早苗……………」

一番身近だった筈の二人が早苗を見て首を傾げた。傷口から露出している心臓が爆動していた。人間ならば既に一生分の心臓が動く回数を使い果たたのでは無いかと思える程だ。血液も絶えずに吹きこぼれて、ひからびてしまわないかと心配になる。

早苗の姿に、何かの影が重なった。振れていたり、一部だけだったりと、何の影がよく解らない。角だったり、怪物の様な手足だったり。赤い眼だったり、刺々しい爪が生えている手だったり。それが何か、神である二人にすら解らない。何かの影が頻繁現れると、早苗の黒くなっていた眼球がぐるんと回り、気味の悪い白目でデイスンドを見た。

「……………今の君を見て、人々はどんな感想を持つだろうか。美しい緑の巫女、そんな感想を持っていた奴はどんな眼で今の君を評価するだろうか。大多数が『気持ち悪い怪物』だろうね。心臓丸出しの白目怪物、そう罵るかもしれない。だけど、僕は」

今の君を美しいと、素直に思えるよ……………。

青年が述べた敬いの言葉。そして彼女の中で、新たな彼女が覚醒した。

「うゝ おおおおおおおおおおおおお ああああゝ
ああああああゝ ああああゝ ああああああゝ ああああゝ
あああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああ

「お相手しよう。敬意を払って、ね」

優雅に御辞儀をした。それにギルスも応えた。クラッシャーを開け、轟き叫ぶ。

「ウアアアアアアアアアアアアアアアア」

[illegible]

ギルスの雄叫びよりも大きい爆音がすると、様々な色の弾幕が永遠亭の一角の屋根を吹き飛ばした。デイエンド達が何事かと辺りを確認した。するとそこにキラキラと光を反射する美しい黒髪を携えた少女が、デイエンド達のいる部屋に舞い降りた。

「あ、あんた！」

月の姫、蓬萊山輝夜が青筋を出しながら部屋の中にいる全員を睨み付けた。手には指の跡で穴が空いたP　Pを握っていた。

「さつきからウアアアアアアアアアアアアとか喧しんだ
よお！！ ゲームの音聞こえねえじゃねーか！！ 苛々し過ぎてP
Pに穴空けちまったよ！ N A R U Oの五行封印みてえだよこ
れえ！！」

飯にも月のお姫様。そして永遠亭のお姫様。口調が汚過ぎる。

「こら輝夜！ 女の子がそんな言葉を使っ
てはいけません！」

部屋の外でキバとブレイドをあしらっているカリスが呟った。てゆ

うか長年生きており、不老不死である輝夜は女の子と言える歳なのだろうか。

「だってよおお？ 久しぶりにF ?のクライシスコア見つけてプレイしてみたら、ちょうどラスボス戦で簡単に倒して、エンディングを見てたんだよ！ ザッ スがあ、銃で撃たれて、死にかけの時にク ウドに剣を上げるシーンだったんだよ！ 超泣いたよ！ てゐも一緒に見てたんだよ！」

「じゃあてゐは今どこに？」

「……………あ」

今カリスとの間に出た腹黒ろ兎は、破壊された屋根の破片に潰されていた。が、直ぐに輝夜には忘れられた。

「そんな事よりも！」

そんな事で。

「ちょうど渡して名言を言うときに！ 私の感動もクライマックスになりかけていた時に！ 変な叫び声でかき消されちゃったんだよおお！！」

輝夜の魂の叫びに、カリスは呆れる様にため息をつきながらキバを斬り付けた。

「ウアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

新たな敵に興奮したのか、ギルスが叫んだ。その声に、輝夜がピク

リと反応した。

「そうかそうか。チミか、さっきから騒いでいるのはチミか……」

そして、黒い笑みを浮かべた。顔は愛らしい笑顔だが、何か見てはいけない物を見てしまったとゆう感覚に襲われたディエンド、神奈子、諏訪子であった。

「お前、本気で、マジで、ガチで……」

懐から、鮫の様なシンボルが刻まれた水色のカードデッキを取り出した。それを、壊れたP Pの液晶画面を写しVバツクルを装着した。

「ケツ穴に手えぶつさして奥歯ガタガタ言わせてやんよ!!」

高らかに下品な事を宣言して、バツクルにカードデッキをセットした。シンボルが輝き、輝夜がアビスバイザーを装着した水色の鮫ライダー、アビスにへと変身した。

「輝夜!」

カリスが叱咤した。

「あゝあゝ。きこえなあい。そしてアンタには、コ・レ」

両手で耳にあたる部分を押さえた後、カードデッキからある特殊なカードを引き抜いた。絵柄は金色で荒々しい鮫の牙をイラスト化した物で、轟々しい波がのた打ち回っていた。そのカードを翳すと、アビスバイザーが渦潮を思わせる水が取り巻いた。水が晴れると、

アビスバイザーには刺々しい牙が幾つも生え、臨戦状態の鮫の眼球の様な飾りが付いていた。アビスバイザーツバイにへと変化したそれに、カードをベントインした。

《SURVIVE》

電子音が鳴ると、アビスを渦潮の波が包んだ。波が弾けると、そこにはサバイブ体へと強化変身したアビスが立っていた。水色だったボディには白色が混ざっており、海のように様々な変化を見せる口ブを身に付け、マスクの頭部は王冠の様に変化していた。

最早、お姫様とゆうより王様とゆう感じに成っていた。

「はっはぁー！ ひざまづくがいい愚民共！！」

「ちょ輝夜！」

「出でよ！ 私の下僕達！」

カリスの言葉を見捨て、アビスバイザーツバイにカードを装填した。

《ADVENT》

アドベントが起こす事象と言えば、擬似的な鏡を作り出しモンスター達を召喚する事だが、Sアビスのアドベントはその比ではなかった。

永遠亭の、アビス達の居る部屋目掛け、大津波が生み出された。大津波はその場全員の悲鳴ごとく、永遠亭の一部を呑み込んだ。

*

「げは……まさか、幻想郷で波にのまれるとは……」

神奈子が口に入った海水を吐き出した。神奈子達が居た部屋は全壊していた。神奈子、諏訪子、ギルス、ディエンドも押し流されていた。外に居たカリス達も巻き込まれ、ブレイド、キバはダメージで消滅していた。

びしょびしょになった躰で立ち上がり皆の安否を確認しようとした神奈子は、眼を見開いた。

「こ……これは……!!」

鯨の大群が居た。シュモクザメ型のアビスハンマーとサメ型のアビスラッシャーが数十体。更に空中には巨大なサメ型モンスターアビスドンが泳いでいた。しかも遠距離戦のシュモクザメ型に、近距離戦のノコギリザメ型に分かれて八体も居た。カリスを除き、流された全員がその光景を啞然と見ていた。当のSアビス本人は、四つんばいになっているアビスハンマーに、椅子の様にして座っていた。

これがアビスのサバイブ、『怠惰』の力の一つだ。闘うのは面倒、敵を追い掛けるのが面倒、だったら全部他人に押しつけてしまおう。そんな考えを実現させる力。この大量の契約モンスター達も、その力の一片だ。

「ふふふ、さあ行きなさい！ 私の下僕達！ あの不屈きな輩を捕

まえなさい」

たかが一人に、些かモンスターを出しすぎたとゆう考えが浮かばなかったのだろうか。鮫達が命令どおりに行動を開始した。

「……興が冷めた。巻き込まれるのはごめんだよ」

《ATTACK RIDE INVISIBLE!》

透明になる効果を持つディエンドインビブルを発動する。ディエンドがその場から姿を消した。

アビスハンマー達がギルスに襲い掛かる。ギルスもそれなりに抵抗したが、やはり多勢に無勢。高戦闘力を有するギルスも数か数の為に、虚しく捕まってしまった。

「ヴァアアアアアア!!! アアアアアアアアア!!!」

「うるっさいわねえ。いい加減、静かにならないかしら?」

「力の暴走の様ね。多分、この状態で喚かしていたらおさまるわ」

カリスが捕まり、騒ぎ続けているギルスを観察したあと、Sアビスに拳骨を喰らわせた。軽いお仕置きだった。短く説教を終え、少し思考にトリップする。

これが……彼女が生きる為に起きた奇跡? ……ただこれ
は……ライダー……!? ……ありえない、いくら奇跡と言えどライ
ダーの力が発現するなんて……もしかして……人為的に……???

月の頭脳ですら解らない事象に、頭を悩ませた。そして、大分破壊された永遠亭をどうするか悩んだのだった。

数日後。大量の鮫と兎が大急ぎで永遠亭を直すとゆう不思議な光景が見られたとゆう話が上がった。

＊

「勝手な事をしてくれたな」

神崎士郎が少し怒気を混ぜた口調で言った。その怒りが向けられている大樹は悪怯れた様子は無い。

昼間の事から時間は立ち、今は夜。木々が生い茂る林の中で、大樹はSアビスの様に説教を受けていた。

「ごめんごめん！ でもお宝の為さ。それならいいだろ？ それにお詫びとして、新しい戦力をプレゼントするからさ」

そう言つて、どこからかライダーシステムであるであろうベルトを取り出した。バックルにはガチャガチャのカプセルに酷似しているシールドが付いている。

「それは？」

「仮面ライダーバース。メダルシステムを使うライダーのベルトさ。リュウガ側で不穏な動きをしている奴がいるだろ？ そいつと同じさ」

不穏な動きとはオーズ事、魅空である。

「そして、もう一つ」

今度は大樹の服の中から、何か生物の様な物が飛び出してきた。

「あれえー？ おじさんはだれでしゅかー？」

それはコウモリだった。月光色の軀に、右目は白い。左目は黒かと思ったが、ぼつかりと空洞になっていた。

「ねーねーおにーさん、このおじさんがぼくのごしゅちゃんさまなのー？」

「違うよ」

「おい、なんだこの頭足らずの蝙蝠きは」

「その子はキバットバット・ルネサンス。創造と再生を司る者。そして破壊を司る鎧、？シヴァ？の管理者。その欠落した左目は、適合者に反応して現れるとゆう」

シヴァとは、ヴェーダ神話に登場する暴風雨神ルドラを前身とし、『リグ・ヴェーダ』では、「シヴァ」はルドラの別名として現われている。暴風雨は、破壊的な風水害ももたらすが、同時に土地に水をもたらして植物を育てるという二面性がある。このような災いと恩恵を共にもたらす性格は、後のシヴァにも受け継がれている。シヴァは教学上は？破壊神？であるが、民間信仰ではそれにとどまらない様々な性格を持ち、それに従って様々な異名を持つ。マハーカ

ーラ（大いなる暗黒）とも呼ばれ、世界を破壊するときに恐ろしい黒い姿で現れるという。

そんな二面性のある神の名を持つ鎧を、こんな頭足らずが管理しているのか。士郎は少し呆れた。信じきれないのだ。この蝙蝠がそんな物を持っているとは。

「ルネサンス……直訳は『再生』。安直な名前だ」

キバツトは土郎の周りを飛んでいたが、興味を失ったのか辺りを彷徨った。そして枯れ木を見つけて、しげしげと見つめた。

「きさんかれちやつてる……かわいちょう……きばつとがげんきわけてあげる！　ぎゃぶ！」

枯れ木の枝に噛み付くと、キバツトの右目が光った。すると、枯れ木だった物が緑生い茂る生き生きとした木に変わった。

だが直ぐにまた枯れてしまった。枯れるどころか、腐って朽ちてしまった。

[illegible]

どうやら、創造の方は分らないが、キバットの再生とゆう力は、生命を与えなおす物らしい。

だが効きすぎる薬が毒になるように、与え過ぎた愛が恋人を殺す様に。

キバットの力はそうゆう物らしい。

「再生の使徒、？シヴァ？。世界を壊し、直す力を持つ存在。だが、いかんせん強過ぎた。再生の力と創造の力と破壊の力のバランスが悪い」

大樹の説明に、士郎は素直に驚いた。それにキバットの実演に驚いたのだ。

「ならば適合者は？」

「大丈夫。解ってるよ。シヴァの適合者は今この世界に。バースの適合者は？未来？に」

オーズの、？元恋人？さ。

士郎には言葉の意味がよく解らなかった。

『EPISODE・23 / 怠情？ 大いに結構！』（後書き）

バースの適合者たる魅空の元恋人とは、急遽考えたオリジナルキャラクターです。魅空と同様、原作キャラクターの子供です。

そしてシヴァとは、自分が中2のテストの時、暇だったので描いたオリジナルライダーです。はい、厨二病の塊です。こいつの変身者はどうしよう……。原作キャラクターの予定ですが、オリジナルキャラクターも捨てがたい。

近いうちに、オリジナルキャラクター達の設定を更新すると思います。結構細かく書くつもりなので、興味のある方はどうぞ。

あと偽王ドロボウさん、いつもお世話になっています。

次回も宜しく御願います！

『EPISODE・24／不完全と大福とヤミー』（前書き）

ども、地震が1日に一回は来てます、仮面3です。

不謹慎ですが、もう地震が来ても騒がない程に慣れてしまいました。早く被害の傷痕がなくなってほしいです。

では豆知識。今回はアロエヨーグルトは結構好き、【アロエ】です。『初期の妊娠中の女性が食べると、流産の原因になる』

.....え？ マジで？

では、

ゆっくりしていったね！.....！

『EPISODE・24 / 不完全と大福とヤミー』

先のディエンド永遠亭襲撃事件。被害は1人の負傷者だけだった。被害者は鈴仙だけであり、永遠亭破壊は輝夜ことアビスのせいである、早苗にいたっては後に変身が解けると意識不明になったが傷は全快していた。ディエンドは確かに永琳の薬を拝借したと言った、しかし薬は1つたりとも減ってなく、逆に保管室の物が増えていた。それは『ギルスの資料』だ。ギルスとは一体なんの力なのか、ギルスの能力とは等々を事細かに書き記した資料。

「ギルスの特徴……ハイスpek的な近接戦闘力……超再生……額にある第三の眼」

椅子に腰掛け、資料をディスクにほおった。数枚の資料はバラバラに広がる。資料のうち、ギルスの姿を書き記した物を永琳は見た。まるで災厄を運ぶ異形の姿。だが、どこことなく安堵感が湧く姿。

「ギルスの弱点……精神的……肉体的に不安定……自暴自棄や老化現象……か」

『光りの力』で生み出された、神にも近い存在。だが、神にきれなかった存在。

故に不完全。

本来『光りの力』から生まれるライダーはアギトといい、胸部にはワイズマンモノリスとゆう部位が存在しているらしい。ギルスはそのワイズマンモノリスが欠落している為に、老化現象等が見られた。

しかし、早苗にその現象は見られない。部屋にあるベッドに横たわる早苗を見た。今はいつもの服の代わりにゆったりとした服を着せている。永遠亭から支給した患者服だ。因みに着ていた服は保護者に持ってかえってもらった。もう大穴が空いて、着れたもんじやないだろう。

規則的に上下する早苗の胸、容体は安定している。変身が解かれた当初は心臓が不規則で、呼吸も止まりがちだったから目を離せない状態だった。安定してくれて本当に助かった。鈴仙の手首の骨折や、骨のヒビは早苗に比べ軽い物だった。だから、鈴仙には激薬を飲ませて無理矢理治した。

副作用？ 3日高熱で寝込むだけだから大丈夫だ。詩織を番にしているから大丈夫。？惨殺本能？で頭がぼーっとしてたが、一発ビンタを食らわせて正氣に戻したから大丈夫の筈。

我が弟子達には悪いが、今は面倒を見ている程余裕はない。それよりも早苗だ。

諏訪子は緊急退院させた。鈴仙に飲ませた物より弱い、自己治癒力を高める薬を渡した。少々身勝手な気もしたが、あの二人も承諾してくれた。二人も心配なのだ。

あれから一度も目覚めない早苗が。

その為に、治りつつある自分は退去。早苗を集中して診てくれと頼まれた。

薬師、神、神だった者から心配されるなか、不完全な者は未だ目覚めない。

そう言えば、まだあった。永琳の頭を悩ませる物が。それは弟子の制服に入っていた物。薄い水色の？ガイアメモリ？これはどうしたのか、鈴仙が目覚めた時に聞く必要がある。永琳がガイアメモリのスイッチを押した。

《CRYSTAL!》

「クリスタル……結晶の記憶、か」

*

「話をしよう。最初の頃、『タ・ト・バ・タトバ・タ・ト・バ！』が『タ・ト・バ・カトバ・カ・ト・バ！』って聞こえてた俺が居る」

「……………だから……なに？」

「え、聞こえないあれ。カトバって聞こえない？」

いつものうざったい魅空の戯言を、面倒臭そうに聞き流すカザリ。このウザさ、なんとかならないだろうか。？あいつ？とくつついている時はまだ大人っぽい雰囲気を出していたとゆうのに。だが、カザリは文句を言える立場では無い。魅空が？あいつ？を捨てたのはカザリ達グリードのせいだから。

「なんだよ〜ぶすつとしちゃってえ〜。可愛い顔が台無しだぜ？」

「この顔僕の顔じゃないし」

「お洒落までしてるのに」

「お洒落じゃないし。この格好の方が落ち着くだけだし」

「ああっ！ この感じこの感じ　この冷たい対応の後に温かい言葉が来そうなのこの雰囲気。俺は今！ ツンデレを感じているっ！」

やはり、ウザい。何故ガメルはこんな男に懐いたのだろう。理解に苦しむ、故にガメルはある意味尊敬できる。

カザリの尊敬の的は今この場にいない。いたら厄介になるからだ。カンドロイド達の監視の元、別の場所で遊ばせている。何故なら、今日は。

「おっ！ 見えてきたぞ紅魔館」

紅魔館の門番にヤミーを教える為に、こうやって二人っきりで来るのだ。

*

今日は真面目に仕事に励む美鈴。そう毎日寝ている訳ではないのだ。寝ていたら給料と血が減ってしまう。ただでさえ赤い髪が、より鮮血で紅に染まってしまう。

最近では自分は本当に頑張っていると思う美鈴。龍騎としてペット（ドラグレッダー）の餌集めまでしているのだから。それでい

て門番の時に昼寝せずやっているのだ。これはもう誰かに「褒美貰ってもいいんじゃない？」と思ったり。だが美鈴がそんな生活を知っている者は少ない。そして最近では、知っている少年にご褒美の様な物を上げた様な。

そんな事を考えていると眠くなってきた。眠くなって来たと言えば、最近変な夢を見る様になった。

「あの夢って……なんだろう……」

微睡みの中であの夢を思い出す。

紅魔館の一角で、泣いている美鈴。手には花を持ち、そして目の前に立っている二つの墓。

その夢を見ると、寝起きはいつも泣いていた。墓には名前が刻まれているが、遠くてよく見えない。近づこうとする度、何かに腕を掴まれ止められる。腕を掴んだ人物を見ようとすると、そこで目が覚めるのだ。あの墓は一体誰の物なのか。紅魔館の住む者じゃなければいいが、夢の中と言え縁起が悪い。

もう限界だ。瞼が重い。結局、美鈴はそのままシエスタしてしまった。

*

「はい到着……って、おいおい……」

「門番つて、寝てていい仕事だっけ？」

呆れた様な声が、シエスタ状態の美鈴に投げ掛けられた。当の本人はシエスタに夢中なので聞こえていない。

しかし目的の人物が眠っていたら話にならないと、カザリが起こそうとすると、肩に手を置いて魅空が止めた。

「なにさ」

迷惑そうに手をはねのける。普段ならうざったい反応を返してくるだろうが、今の魅空は違った。ちよっと危ない眼で美鈴を見ている。

「今なら悪戯しても…」

「子供がする様な悪戯なら許可しよう。だがR - 18に入る悪戯は許可できないな」

ちえっ、と小石を蹴る様な仕草をする。何故か卑猥な事に厳しくなったカザリ。嗚呼、早くメズール姉さんを復活させたい、日々願う魅空であつた。

「しつかしいゝこいつあっち（未来）と全然変わって無いな。相変わらずエロい魅してるわ」

「妖怪だからでしょ。人間の君よりも成長に時間がかかる」

「だけど昔から寝てんのな。胸とか触っても起きないんじゃない？」

「触ったら……その手でもう何も触れれなくするよ？」

流石にそれは困ると顔を引き締めた。こういつた肅正を力ザリは躊躇い無くする。最近ガメルに悪戯しようとした時は左腕を三段階に曲げられた。魅空曰く、すっげー痛かったが気合いで治した、だそ
うだ。

「取り敢えず、こいつ起こすよ」

「あいよ。だけど近づき過ぎんな。痛い目見るから」

寝ている奴に何ができるのか、魅空の言葉の真意を理解できなかったが気にする様な事では無いだろう。壁に寄りかかり眠る美鈴に、警戒心の一片も見せずに接近する。美鈴の様子からして、恐らく声をかけたくらいじゃあ目を覚まさない。肩を掴んで揺らすぐらいしないといけないだろう。

美鈴の肩に手を伸ばす。

伸ばした手が強く弾かれた。

「っ!?!」

驚いた瞬間には力ザリの視界が一回転。世界が回ったなんて馬鹿げた表現を使わざる得ない状況に陥った。そして背中が地面にぶつかる痛みと、腕を捕まれ足に辛めとられた感覚が来た。魅空が短く「あーあ」と言っていた。

美鈴に触れようとした力ザリは、見事な四の字固めを喰らっていた。

「ちょ……!」

抜け出そうと藻掻くががっちりとホールドされていて動けない。技を実行している本人はすやすやと寝息を立てていた。

「く……なにこれ…かた…！」

グリードとは言え今は星の姿だ。美鈴とは腕力が違い過ぎる。そんな苦しむ力ザリを見て、ニヤニヤと笑みを浮かべる魅空。

「固いつて言つても、腕を置いてるトコは柔らかいだろ？」

四の字固めの腕は胸元に置かれている状態である。故に、力ザリが腕を動かそうとする度美鈴の豊満な胸が大変な事になっている。

「いやー、ある意味羨ましいわー。今からでも俺が」

直後、魅空の顔面にあのホールドからどうやって抜け出して来たのか力ザリの膝蹴りが直撃した。

「ちょおま……どうやって…」

顔面、とくに鼻を押さえて悶絶する魅空。

「禁則事項……とでも言っておこうか」

「うーん……さっきから五月蠅い……」

力ザリと魅空の夫婦漫才とも言える物で、魅惑の睡夢から引き戻された美鈴。気だるそうに重たい瞼を開け、面倒そうに立ち上がった。

「あいつ……！ 本当に寝てたのか……起きてるのかと思った」

「寝ててもしつかりと仕事するよ、あいつは」

眠気眼で騒音の主を探し、2人を見つけた。

「よっ！ こっちではじめまして。魅空だ」

「……………カザリ」

「へ……………あ、はい……紅……美鈴……」

2人につられて自己紹介で返した。そしてカザリの顔を見た時、とある妖怪の顔が頭を過る。

「あれ？ 貴女……………韋駄天の……………」

「人違いです」

美鈴が星だと気付かけると、カザリは帽子を深く被り顔をそらした。新聞で騒がれている韋駄天の弟子の失踪、気付かれると厄介なのでカザリは行動をかなり制限されていた。

「それで……何の用？」

少し警戒気味だ。逆に警戒してない方が問題だが。

「そう身構えんなよ。ただちょっと見せたい物があるだけさ」

「見せたい物？」

「ああそうだ……お前、大福は好きか？」

*

美鈴は最初承諾はしなかった。今回はまともに仕事をするつもり
少し寝てしまったが だった。そして居ない事をナイフ仕込み
のメイド長にばれたら、確実に自分の体から4割強の血液が無くな
ってしまう。妖怪は死ににくい。だからこそ体罰になる。

渋っていた美鈴だが、魅空のとある道具と強い押しに泣く泣く了解
した。ちなみに道具とは、バツタを模した通信機の事である。バツ
タカンドロイドにみはらせると提案し、綺麗な土下座で美鈴を連れ
出す事に成功したのだった。今は、目的地に向かって三人で歩いて
いた。

「ところで……大福って？」

魅空は言った。大福は好きか、と。

「ゆっくりって知ってるだろ？ 基本的に、人間等の頭部をディフ
オルメしたような、動き、喋る菓子だ。畑を荒らし、家に侵入して
ここは自分の巣だと主張し、荒らす害獣。百害有って一利無し。唯
一あるとすれば、中身が良質な餡子、肉まん、いなり寿司なんかだ
って事さ。とある説では、あいつらが絶滅しても生態系に以上を見
せないそうだぜ。台所の黒い悪魔、都市伝説では頭はってるゴキブ
リですらちゃんとこの世にするべき事が在るのにな。全てから嫌わ
れる腐れ饅頭共……ま、そんな奴等を好んで救ってる狼野郎がいる

が」

美鈴もゆつくりのウザさを知っている。紅魔館周辺に多く存在を発見されているゆつくり、れみりや。認めたくないが、我が誇れる主を模したゆつくりである。高確率で胴が生えており、頭さえ残していれば寿命を迎えるまで再生する。

だが最大の特徴は、その習性、いや本能に擦り込まれたとある情報である。

『自分は誇り高い吸血鬼。皆から恐れられる悪魔の館のお嬢様。自分は偉い偉いお嬢様、だからどんなに我儘を言っても許されるのだ』
れみりやの喋り方で言ってみよう。

『れみいはこーまかんのおぜうさまなんだお！ えらいえらいおじょうさまだどお。だからはやくぶつでいーんをもってくるどうしやくやー！ しやくやー！ れみりや うー』

……………ウザい。

れみりやの習性、それは自分が紅魔館のお嬢様だと思っている事。まだ自分の巢を『こーまかん』と呼ぶのは可愛い物だ。可愛くは決まてないが。だが、紅魔館を自分の物だと勘違いして侵入してくるのだ。

勿論本当の主、レミリアはれみりやが紅魔館の敷地に入る事は許さない。自分の超低級劣化コピー　下膨れ、ババ臭い服、ウザい顔、肥満で潰れている目、ところかまわず屁をこく　を好む訳が無い。例えるなら、狼夜の所のけーねとうどんげがクラスで低確率でいる

性格も顔も良い女生徒。れみりや全てが、クラスに必ず1人は居る自分が可愛いと勘違いしている女生徒である。

このれみりやの出現に、美鈴の仕事量は一気に増えた。門から侵入してこようとされるれみりやを粉碎し、上空から侵入 短い時間なら飛べる してくるれみりやを叩き落したり。先程力ザリに披露した寝ながらの押さえ込みも、れみりやのせいで体得せざるおえなかった。

「そのゆつくりの中に群を護る守護者的存在、ドスと呼ばれる巨大なゆつくりの存在は解るな？」

勿論だ。とゆうか、最近門番をしている時に普通のゆつくりの群に喧嘩を売られドス事吹き飛ばした。紅魔館はたまに普通のゆつくりまでもが『おうち宣言』をしてくる。困ったものだ。美鈴の苦々しい表情から察した魅空は勝手に続けた。

「そいつがちよつと面白い事になっててよ。なに、損はしない。逆に重要な知識が増える。お、ここらへんかな？」

魅空の言葉に全員が脚を止めた。そこは崖だった。なんの変哲もない崖。崖の先に魅空が腰掛け、二人に『座れよ』と促す。美鈴に関してはもつと端まで来て、崖のした見ると言った。美鈴は言われた通りにした。

「あ、あの人……」

崖の下には人里の美人教師と、その生徒らしき子供達が居た。

*

半獣の教師、上白沢慧音。頭が内面的にも物理的にも堅い事を除けば、パーフェクトウーマン。容姿端麗頭脳明晰、気もきく。その為里には隠れファンクラブがあるとかないとか。

今日は寺子屋は休みである。寺子屋が休みとはいえ、教師には仕事が多く存在する。それをこの休日に片付けるつもりだったが、生徒から遊びに行こうと誘われてしまった。生徒の純粋な誘いは無下にできない。それに自分を慕ってくれている生徒達の誘いは嬉しかった。だから来てしまった。遊びに。仕事をしないダメな教師？反面教師上等！ 子供とのスキンシップも大事な事じゃない！ by 慧音。

「ねえねえ先生」

1人の女生徒が話し掛けてきた。

「ん、どうしたんだ？」

「最近お兄さん見かけないけど、どうしたの？」

お兄さん、その言葉に慧音の顔に暗い影が差す。魅空はあまり名前を名乗らない。名乗るとしても下の名前だけ。『霧雨 魅空』とは絶対に名乗らない。だから子供達にはお兄さんと呼ばせていた。

慧音には理解できないが、魅空は子供達に人気がある。特に女子に。性格があれだが面白い言動が目立つから子供達もつつきやすい。そして魅空小さい女の子にも、『女』として接する。すましたい年

頃の女の子には少し嬉しいのだ。故に、魅空は『面白いお兄さん』として子供達に大人気だ。

「あいつの事は忘れなさい」

「え？」

「あんなろくでもない男の事は忘れなさい。悪影響にしかならない。そもそも何なのだあいつは……！ 人の下着を盗んだり、カンドロイド使って風呂を覗いたり、朝起きたら上半身裸で添寝していたり、当たり前のように私の家に侵入したり……それから……それから！」

「先生怖い、怖いよ！」

慧音が魅空に仕掛けられた『悪戯』を次々と呪いの言葉として吐き出していった。顔は変わらないが、差している影が徐々に濃くなっていき生徒が恐怖を感じはじめた。ちなみにカンドロイドと聞き慣れない単語は、質問できる雰囲気ではなかった。

「しかし……確かに最近姿を見せないな……」

「あれ？ お兄さんって先生の家に住んでるんじゃないの？」

「それは断じてない。あいつは定まった場所に居ないんだ。とある場所を除いて、幻想郷を転々としているのさ」

「とある場所？」

生徒が首を傾げた。

「ああ、その場所は」

慧音が言い掛けた時、他の生徒の悲鳴が聞こえた。弾かれた様に行動を開始する。まず会話をしていた生徒にこの場を動かない様に指示し、悲鳴が聞こえた方に全力で駆け出した。

すぐさま到着し、その場の状況を確認した。

そこに居たのは数人の生徒に、巨大なまりさだった。

「なんだ……ドスまりさ……か……？」

ドスまりさは慧音が見たことが無い様な状態だ。目が虚ろで焦点が定まっておらず、巨大な体躯には所々に包帯の様な物が現われている。

生徒数人はそのドスまりさを見て腰を抜かしていた。見たところ外傷は無い、不気味な見た目で驚いただけだろうか？

「お前達大丈夫か！？」

「せ……先生え……」

生徒達に早く立ち上がる様に促す。いつこのまりさがのしかかりやドスパークを使ってくるか分からない。まずは生徒達を逃がさなければ。

「早く逃げなさい！」

ドスまりさは人間を襲う者と襲わない者で分かれる。襲わない者が

本来のドスであり、人間と滅多に関わらない。襲う者はドスであるがドスにあらず。それはドゲスである。ドスは群のゆつくりを護る為に人間に近づかないが、ドゲスは群の為と言って群のゆつくりを危険に曝す。

このドスは分からなかった。何しろこんなドス、前例が無い。

子供達を何とか立たせ、避難させた。

「まりさの……だよ……」

ふと、謎のドスマリさが何かを言った。

「ゆつくりは……ぜんぶ……まりさ……の……だよ……」

子供達をさっきの生徒の元に行かせた。慧音は里の護人として、このドスマリさを観察しなければならなかった。里に危険を及ぼすなら排除を、無いなら森に逃がさなければならぬ。

「質問だ。お前は、まりさは何をしに来たんだ」

「まりさは……ここにいけて……いわれたただけだ……よ」

「誰に言われた」

「知らない……よ……にんげんさん……みたいだったけど……ようかいさんに……なったよ……」

「人間が妖怪に？ 変化か何かの術か……？」

「まりさは……ゆつくりしたい……ただだよ。おなかいっぱい食べて、ゆつくりできるぶれいすでゆつくりしたかっただけだったのに。
あのぶれいすはまりさのものになるはずだったのき。あのくそゆっ
くりたちがじやました。あのくそにんげんがじやました。むれのやつらもつかえなかった。ゆつくりぶれいすも、あまあまも、ぜんぶ
ぜんぶぜんぶぜんぶぜんぶぜんぶぜんぶぜんぶぜんぶぜんぶ
ぜんぶぜんぶぜんぶぜんぶぜんぶぜんぶぜんぶぜんぶぜんぶ
ぜんぶぜんぶぜんぶぜんぶぜんぶぜんぶぜんぶぜんぶぜんぶ
ぜんぶぜんぶぜんぶぜんぶぜんぶぜんぶぜんぶぜんぶぜんぶ
なのにいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい
いいいいいいいい！！！！！！」

「」

そしてまた驚かされる事になった。

「!？」

茶色の毛皮が所々に生えている躰、毛皮には黒い斑点模様がある。

指先に爪が生えている『ハイエナヤミー』が低く唸っていた。そしてハイエナヤミーの胸板や左足腿には昆虫の様な生体装甲がある。ハイエナヤミーは猫系と昆虫系が混ざっていた。

*

ドゲスまりさがハイエナヤミーに変わり、その姿を見た瞬間、魅空の表情が大きく変わった。焦った様子で右手を握る。開くと数枚のコアメダルが現われていた。コアメダルを全て確認した後、カザリの方に顔を向けた。その表情には珍しく怒りが現われている。

「おいコラカザリ。てめえ…いつの間にカマキリ・コアパクリやがった」

カザリは何も言わずに帽子を深く被り、外方を向いた。

『EPISODE・24 / 不完全と大福とヤミー』（後書き）

クリスタルメモリは後に、リオンとスカルにとっては重要な役割を担うメモリの予定です。

さて、この作品は作者の中では1章、2章、最終章、と曖昧な境界で考えています。今回で2章に入りました。2章のラストはリュウガの正体が解る頃だと思っています。

次回も宜しく御願います！

あと、キャラ設定を活動報告に掲載する事にしました。ただいま狼夜まで公開しています。

『EPISODE・25/知慧と変態と忠告』（前書き）

ども、昭和ライダーの変身のキレはハンパねえ、仮面3です。

今回の豆知識は【アルキメデス】

『アルキメデスは入浴中、浮力の原理を発見し、叫びながら裸で町を走りまわった。ただ、古代ギリシャでは、裸で運動するのが普通で、男の裸は珍しくなかった』

嫌ですねえ。裸の男が町を走り回ったって嫌ですねえ！。

では本編、

ゆっくりしていったね！！！！

『EPISODE・25 / 知慧と変態と忠告』

「お前は……今回大人しいとは思ってたが、こんなコソドロじみた事するとは……」

魅空は呆れた様子でため息をついた。面倒そうに腰を上げ、カザリに接近する。正面に立つと、また面倒そうに頭を掻いた。そして、右腕をカザリの腹部に突き刺した。カザリが短く呻く。

「なっ!?!」

声を上げたのは美鈴だ。目の前で腕を刺すとゆう凶行、反応しない方がおかしい。魅空は美鈴を無視しながら手で腹の中を下がる。腕を動かす度に、挿入口からは銀色のメダルが落ちた。また少し腕を深くさすと、動きが止まった。目的の物を発見したらしい。何かを掴むようなモーションをした後、強く腕を引き抜いた。セルメダルが大量にこぼれ落ちる。

「みーつけた。俺のコア……」

引き抜いた右手を開くと、数枚のセルメダルに混じって色の付いたコアメダルが入っている。絵柄は螳螂、色は若葉色。

「いや魅空のじゃないでしょ」

腹部を押さえてツツコミを入れる。

「コアを盗んだのは謝るけど、セルは返してよ」

腹部を押さえながら屈み、散らばったセルメダルを回収するカザリ。ただでさえコアメダルの力を失っている状態で、軀を構成しているセルメダルが減るのは芳しく無い。地面のセルメダルを回収すると魅空に手を伸ばした。だが魅空は、無言でセルメダルごとカマキリ・コアをしまった。

「ちよつと……」

「ダーメ。これは罰金として俺が貰う。そして、今度こんな事したらまた俺の中に戻ってもらう。なーに、俺だってヤミーを作れるんだ。適当なヤミーにお前のコアを入れれば、時間が掛かるが、その分爆発的に力が復活する。理解したか？ お前は、ウヴァと同じ様になるんだ。屈辱だよなあ、それぞれの生物の頂点たる王、グリードのお前がヤミーごときに成るんだもんなあ」

カザリの顔が徐々に青くなっていく。なにも魅空の脅しに怯えている訳ではない。今の魅空の口調に数時間後の自分を予想して怯えているのだ。魅空の口調が、後半から語尾を延ばしている。これはある事をしようと判断した時に現れる。

「お前、後でお仕置きだからなあ」

魅空の場合、お仕置きと書いて『拷問』と読む。コアメダルの力の大半を失っているカザリには魅空に逆らう力はまだ無い。お仕置きとなれば、いつものじゃれ合いとは違う。腕力、知力、魔審器、OO全てを使つて軀にも精神にも恐怖を刻む。昔カザリは拷問を受けた事があり、3日寝込んだ。人間よりも格段に強いグリードの力ザリすら、3日である。

拷問宣言を受けたカザリは、頭をガツクリと落としうなだれた。その姿に少しキュンと来た魅空はガメルにしてる様に、頭を撫で様とした。

ポキッ。

頭に触れようとした瞬間、カザリに右手の小指を握られ、折られた。

二人の間に沈黙の空気が流れる。

その後、カザリはしゃがんで地面に『の字』を書き、魅空は小指の骨を治しながら元の位置に戻った。隣に居る美鈴は口をあんと開けて、驚きを表現している。

「恐らくあのヤミーは虫の繁殖力を持っている……それだけならいいが……ハイエナは多数で行動し、弱った獲物を襲い、奪うのがセオリー……こいつぁ、多分……準備しておいた方がいいな……」

ブツブツと呟いた後、右手に三枚のコアメダルを出現させた。

因みに隣の美鈴から『えー……何この人……痛い人？』みたいな目線から送られている事に、魅空は気付かないふりをしていた。

*

グルルルル……。

ハイエナヤミーは唸り、獣の軀に似合わない人間の顔に付いた口か

ら唾液を零す。頭にあるハイエナの顔の眼はギラギラと光っている。指先の爪を擦り合わせ、かんだかい音で慧音を威嚇する。

「あれは現代のハイエナ……か？　だとしたらブチハイエナか、厄介だな……。大半のハイエナの主食は腐肉……だがブチハイエナは己で狩りをして新鮮な肉を得るとゆう……」

つまりこの場で倒さなければ子供達に危険が行く可能性がある。

正直この怪物は見た事が無い。ミラーモンスターがゆっくりと融合したのだろうか、だとしたら酔狂では済まないな。

この考えが持てる彼女は仮面ライダーであつた。懐から手鏡と、素顔を特定の人物にしか見せない信用しきれない黒龍騎士に渡されたカードデッキを取り出す。彼女は永琳と似た思想を持ち、仮面を被っていた。何も仮面ライダー自身に嫌悪感を持っている訳ではない、どちらかと言うとヒーローは好きな方である。子供等の弱きを守り、悪役をやつつける。素晴らしいと思うが、そのヒーローが仮面で顔を隠すのはどうだろう。まるで自分が悪い事をしているみたいではないか。

…… 実際、仮面ライダーの中にも悪事を働く者は居るのだが。

手鏡にカードデッキを映す。慧音に龍騎達とは少し形が違うVバツクルが装着される。カードデッキをセットすると、また龍騎達とは違うエフェクトが発生し変身が完了する。黒いコオロギを思わせる体に、模様や縁取りは青色である。今は亡き仮面ライダーガイと接触した数少ないライダーの1人、BNEWオルタナティブである。

「子供達が心配だ。早めに終わらせるぞ」

短く型を取り、ハイエナヤミーに殴りかかる。強く踏み込み正拳突きに近い技を、奴さんの下腹部に放つ。ハイエナヤミーは軀をくの字に曲げるが直ぐに体勢を立て直し、BNEWオルタナティブの顔面目がけ爪を突き刺そうとする。突いた時とは逆の手で爪を弾き、軀を回転させハイエナヤミーに遠心力が加わった肘打ちを顔面に当てた。

ゲグウ!!

人間の顔が少しひしゃげ、数歩下がった。

「人間の顔だから少々やりにくいな……思い切り殴れん」

反撃しようとして来たハイエナヤミーを掌打で弾き返しながら、カードデッキからカードを引き抜く。そしてバイザーにスラッシュカード情報を読み込ませる。

《SWORD VENT》

男性ではなく女性の電子音が鳴り、手元に黒い刀身と黒いスパイクが付いたスラッシュダガーが召喚される。獲物を逆手状態で、両手持ちにする。

「さあ……来い」

グウルルル…!

両手を勢い良くぶつけ、腰を低くしながら突進してくる。馬鹿正直に体当たり戦法を繰り返すハイエナヤミーの軀に、斜め下から斬り

上げる。斬り上げの勢いを生かし、その場で3回の華麗なターン。ハイエナヤミーの躰に3つの裂傷ができた。傷の痛みで怯む。

「ほら、オマケ付きだ！」

もう一回りをし、逆手両手持ちのスラッシュダガーで突いた。突き刺さらない力加減の為、後方へ突き飛ばされた。ハイエナヤミーが傷口を押さえながら、地面をのたうちまわった。

「……………む？」

深い傷口ができてから、ハイエナヤミーの躰から何かが大量に零れ落ちた。遠目でみたら銀色のメダル。その内の一枚が足元に転がって来た為、相手から目を離さずに拾った。

「これは……………魅空が持っていた…？」

表にはイラスト化されたライオンが、裏には「X」の様なマークが描かれている。そのメダルには見覚えがあつた。これは自分の家に無断侵入する男が持っていた物と同種類の筈だ。

メダルに短時間目を奪われている間にハイエナヤミーはリカバリし、爪を振り下ろしてきた。そんな簡単な不意打ちには動じず、爪撃をスラッシュダガーの腹で受け止める。そして、全身に何かが駆け抜けた。

「あああああああああああつ！！！！？」

BNEWオルタナティブは絶叫を上げると、全身がガクガクと震え両膝を付いた。痙攣する躰は脳が指示する通りには動かない。

ハイエナヤミーが相手を小馬鹿にした様に喉を鳴らし、スラッシュダガーを弾きBNEWオルタナティブの胸部を蹴り付けた。

軀の自由が効かないBNEWオルタナティブはされるがまま地面を転がる。スラッシュダガーは逃さない様に握っていたが、BNEWオルタナティブはくったりとうつ伏せに倒れた。

「あ……あう……」

未だ？痺れ？が残るが、必死に頭を上げてハイエナヤミーを見た。当人は余裕そうに爪を擦り合わせていた。爪と爪が擦れる度、？電撃？による火花が散った。

カマキリ・コアを体内に取り込んでいたカザリが作った、ハイエナヤミーは昆虫系グリード、ウヴァの能力の一つである電撃を使う事ができた。

スラッシュダガーで間接的に、大量の電撃を軀中に流された。恐らく電撃で脊髄が一時的にやられた為に、動きが制限されたのだろう。

クルルルウ。

穏やか且つ、生意気な声を出して接近を開始する。その足取りの速度は、勝利を確信した速さだ。遅すぎず、速すぎずに距離を詰めていく。

距離差としてはほんの数センチ、腕を振り上げる。指先の爪がバチバチと音をだす。電撃が強くなった時、BNEWオルタナティブはスラッシュダガーを突き出した。切っ先が軽く触れると、黒剣か

ら蒼い炎が撃ちだされた。零距离の攻撃に、蒼い炎を纏って吹き飛ばされた。

スラッシュダガーを杖の様にして立ち上がる。まだフラフラとしているが、流石は半獣と言ったところか。回復が早い。

「ぐあ……目がチカチカする……」

目元、詳しくは複眼を押さえる仕草をする。ハイエナヤミーは炎を消そうと足掻いている。

「もうあれは喰らいたく無いな……」

愚痴を零しながら、カードを引き抜く。絵柄はオルタナティブのシンボル。契約モンスターサイコログと連携して、放つ最大奥義。震える手でスラッシュバイザーの読み込み口にカードを近付ける。

すると、BNEWオルタナティブは足払いされた。

「ぐっ!?!」

胸を強く打ち付け、地面に伏せる。胸を強打したせいで息が少ししくくなった。ゴホゴホとむせている間に、何者かに腕を蹴られ、スラッシュダガーがどこかに飛ばされた。自分の獲物がどこに行っただのか確認する間も与えられず、頭と両腕を掴まれ無理矢理立たされた。足払いをし、立たせた犯人は二体のハイエナヤミー。

「……!?! まだ居たのか!」

二体がBNEWオルタナティブを拘束している内に、炎を消したハ

イエナヤミーが目の前まで接近してきた。変わらない筈の人面、その面は憎々しげに歪んでいる様に見えた。イエナヤミーが爪を振りかざし、電撃をちらつかせながら突き立てた。肉を焦がし、意識を断つ電流が体内に流された。今度は悲鳴を上げなかったが、額から汗がどつと流れた。

爪を離すと、BNEWオルタナティブは頭を力なく倒した。二体の拘束から逃れようとしてもがっちりとホールドされていた、それに今は力が入らないので脱出は不可能。イエナヤミーが平手打ちでマスクを殴る。今度は拳を握り、大きく振りがぶり殴り付けた。最後に膝で下腹部を蹴り飛ばした。今までやられた鬱憤を晴らす様に、軀に力が入らないBNEWオルタナティブはされるがまま。二体が腕を離れたかと思うと、イエナヤミーが鳩尾を強く蹴った。吹っ飛ばす側だったBNEWオルタナティブが吹っ飛ばされた。

「がはっ……」

三体のイエナヤミーは並んでBNEWオルタナティブを見下す。精神的な意味でも、立ち位置的な意味でも。三体一が卑怯とは思わない。何故ならこれが自分達の？普通？なのだから。

イエナヤミーの元になった欲望は？奪う？。奪うとは、他人の所有するものを無理に取り上げることである。ドスまりさは奪うことに渴望している状態でセルメダルを投入された。さて、奴からは何を奪おうか。肉か、力か、希望か、はたまた幸せか。奪える物は全て奪い尽くす。まずは、忌々しい力を奪おう。仮面を剥ぎ、脚の腱を切り裂き、目玉をくりぬき、口を剥ぎ、皮全てを剥ぎ肉を喰らう。そうだ、そうしよう。

『タコ！ タコ！』

『クジャク』』

三体の考えがまとまった時に、気の抜けた電子音が聞こえてきた。そして、目の前に三体の青いタコらしき機械、一体のオレンジのクジャクラしき機械が現れた。タコがハイエナヤミー達に墨を吐き視界を塞ぎ、クジャクが回転式の羽で三体を斬り付けた。ハイエナヤミー達もこの事態に驚いたが、BNEWオルタナティブも同じだった。

「あれは……………！」

魅空が持つカンドロイド達。

「あれれ〜？　けーね先生面白い事に成ってるっすね〜」

気配も無くBNEWオルタナティブの隣に立ったのは魅空が変身したオーズ。手には青と黒で装飾され、刀身には窓が付いており手元にレバーらしき物が付いた片刃片手持ちの剣、メダジャリバーを握っている。BNEWオルタナティブを少々乱暴に立たせた。

「お前……………」

「取り敢えず見てな、話は後で」

仕事を終えたカンドロイド達は姿を消す。墨を腕で拭っているハイエナヤミー達を見る。

（こいつが居るから正統法でやんなくちゃな……………かつたるりい）

内心で愚痴を吐き、メダジャリバーの投入口に、先程力ザリから奪ったセルメダルを三枚入れる。レバーを倒すと、刀身の窓にセルメダルが見えた。ベルトに装着されているオースキャナーを、刀身に滑らせた。

《トリプル・スキヤニングチャージ!!》

電子音が鳴ると、一瞬刀身に3つの『O』が浮かんだ。墨を拭い去り、視界が元に戻ったハイエナヤミーは自分達に送られている殺気に気付く。気付いた時には、メダジャリバーは横一閃に構えられていた。

「くたばれゴミ共オ!!!」

汚い怒号の言葉を放ちながら、届いていない刃を振り抜いた。メダジャリバーは宙に斬道を描き、その道には三体も居た。山や木々、ハイエナヤミー達の躰が斬られたが如くズレる。だが不思議な事に山や木々のズレは治った。しかしハイエナヤミー達の躰のズレは進み、爆発した。BNEWオルタナティブが作った傷の時よりも、大量のセルメダルが地面に落ちた。

『タカー』

『クジャク』

セルメダルの全てが地面に落ちた時、数十体のクジャクカンドロイドとタカカンドロイドが現れセルメダルを回収する。

（望まれて生まれたが、拒絶されて死ぬ……か。まるで俺みたいだな……俺死んでないけど）

魅空の命令でカザリはハイエナヤミーを生んだ、だが予想外の出来事にオーズは拒絶して殺した。

望まれて産まれて、拒絶されて世界から去る。

まるで自分の半生。自嘲的に軽く笑う。カンドロイド達がセルメダルの回収を終えた。

「おい」

メダジャリバーを手で弄んでいたオーズを、BNEWオルタナティブが呼んだ。オーズは素直に振り返った。

振り返った直後にオーズの股間部に衝撃が与えられた。

「おおぅ！？」

BNEWオルタナティブに膝で蹴り上げられた股間を無様に押さえるオーズ。苦しむオーズのタカヘッドを掴み、頭突きを喰らわせる。

「お前いままでどこをふらついていたんだ！ 子供達が心配していたんだぞ！」

「ぐああ……えっ？ なに、慧音も心配してくれてたの！？」

「いや、それはない。ない」

二回連続で否定されて、オーズは『うそーん！』と軀を仰け反らせた。しかも股間を押さえている状態で。ヒーローにあるまじき姿で

ある。

「えっ！？　じゃあ妹紅は、妹紅はどうなの？　もこたんは心配してくれたんじゃない？」

「ない。そもそも、妹紅はお前の存在を軽く忘れていた」

「ウゾダンドコドオン！！？」

股間から手を離し、今度は地面を殴りつけた。もう踏んだり蹴ったりである。もう世界の終わりだ、みたいな雰囲気で頭を抱えている。

「だが、子供達は本当に心配している。顔を見せてやってくれ」

優しい声で、オーズに手を差し伸べる。先程までのツンケンとした雰囲気では無く、本当に優しい気持ちで手を差し出した。

オーズはその手を弾いた。

「…………え？」

困惑するBNEWオルタナティブを尻目に、オーズはあっさりと立ち上がる。

「んー、それは無理」

「な…………」

「もっだぁーかーらぁ、ム・リ」

BNEWオルタナティブの額を人差し指で、ちょんつと小尽く。

「今やってる事あるからあ、さ。おいそれと人前に顔を見せる訳にはいかないーの。ゆっくり理解してね！ あつ、そ・れ・と。もうお前等とも会っ機会無いかもだから、じゃーね」

早い動作でオーズドライバーにセットされているタカ・コアを、ライオン・コアと入れ替え、オースキャナーと情報を読み取る。

《ライオン！ トラ！ バッター！》

電子音になり、エフェクトが起こるとタカヘッドが黄色の鬣とライトブルーの複眼のライオンヘッドに変わる。そのライオンヘッドの鬣の部分で乱反射を起こし、強力な光を放つライオネルフラッシュを発動した。不意打ちに近い技に、眼を守りきれず視界が効なくなる。

「バイバイ……」

オーズが呟くと、気配が消えた。

少し立ち視界が戻る。やはり目の前にオーズの姿は無くなっていた。地面には飛翔したであろう、跡が残っている。

「……………魅空、あいつ」

その声は、想い人には届かない。

*

「で？ どうだった」

カザリや美鈴が居る場所に帰った魅空こと、オーズ・ラトラバコンボ。美鈴の正面に立ち、ヤミーを見た感想を聞いた。美鈴も腰を上げて、オーズを見据えた。

「あなたも…仮面ライダー？」

「そつ！ オーズ、仮面ライダーオーズ。本来お前達龍騎とは違うライダーさ。そしてさっきのはヤミー。この世界に現れた、ミラーモンスターと並ぶ怪物さ。覚えておきな」

「……………で？ なんで私に」

「ヤミーを教えたか…だろ？ 話が早くて助かるわー。いやーちょっとお願いがあつてさ」

今回、美鈴と接触しヤミーの存在を教えた本来の理由。良くも悪くも、魅空の第一優先目的はただ一つ。

コアメダルの復活と収拾。

それが魅空の行動の主。それが魅空の行動の主。色を失ったコアメダルを八枚取り出す。

「いやね、もう見境無くさないといけなくてなあ」

絵柄はシャチ、ウナギ、タコの三種。その八枚を美鈴目かけ。

放ろうとすると、オーズは背中側から蹴られた。右肩を蹴られ、左方向へ飛ばされ木々と衝突した。木が何本か押し折られる。

砕けた木片が舞う中、オーズは痛みを訴えずに美鈴ともう一人に背を向けた。

「ヤッベ……逃げるぞ！ カザリ！」

カザリの返事を待たず、直ぐに行動を開始する。カザリをお姫様抱っこで抱え、全速力で逃げた。その途中で、カザリに顔面やら肩を殴られたが何のリアクションも無しに、ただ逃げる為に走った。コンボがまともに使えない今、？あいつ？に勝てる見込みは無い。

逃げるオーズを呆然と見つめる美鈴。

「まったく……なんかこそこしてると思ったら」

そしてオーズに変わって正面に立つ騎士を見る。

「気をつけてね。彼はいろいろと危険だから」

自分と似た騎士、リュウガ。

「え、なんで……」

いきなり現れたのか。いまいち状況が掴めないが、自分は危なかつ

た、それをナイスタイミングでリュウガが助けた。このタイミングはおかしい。

「だって私は美鈴のストーカーだもの」

犯罪発言を聞いた瞬間、精神的にも行動でも引いた。流石にこの見た目の相手にストーキングされたら嬉しくない。美鈴のリアクションに声で苦笑した。

「さーて事實は後にして……」

「事実!?!」

本当にストーキングしているらしい。

「最近さ、変な夢見てない? 2つのお墓、それを泣いて見ている自分……」

「てことは……」

「そう、見てるよ、私も。あの墓に眠っているのは誰なんだろうね。知らない人かもしれない、もしかしたら私も知らない、貴女かもしれない。幻想郷ならそれも十分可能だしね、自分のお墓に手を合わせるってのも。それに、2人とも墓に入ってるって可能性がある。ただ分かるのは……その夢を見せている犯人」

「え、犯人がいるの?」

「そりゃ、あんな思わせ振りの夢を何回も見ろわけじゃないじゃん。だけど、見せている理由は分からない……、因みに犯人は……いや、

止めとく」

「え、何で!？」

ここまで来て、止められるのは後味が悪い。

「謎解きは自分で楽しまなくちゃ……それよりも、気をつけてライダーバトルが始まって数ヶ月。減ったライダーは2人だけ。多分、神崎は何かを仕掛けて闘いを加速させる……」

「闘いが加速!? それって」

より多く情報を得ようとしたが、リュウガはマスクの口元に指を当てる。

「知識は武器、無知は罪。だけど、多過ぎる知識は毒になる。情報を得て舞い上がったガイの様に、波に飲まれ碎かれる。だから今与えられる情報はこれだけ。我慢してね。バイバイ!」

中途半端な知識を美鈴に押し付けたリュウガは、その場を去ろうとした。

「ちょっと待つてよ! 貴方は何? なんで情報を、カードデッキのライダーは敵同士なんでしょ!？」

「んー……そりゃあ、ねえ。今正体とかバラしちゃうとややこしいし……とゆうわけでゴメン!」

言葉を詰まらせた、リュウガはオースの様に逃げ出した。必死に逃げるそのさまは、ウブな男子が女子に告白した時の様だ。後味が悪

い空間に残された美鈴、やる事無い為帰る事にしたが、帰り道はひたすらリュウガの言った事を考えていた。闘いの加速、それにもなつて神崎が仕掛けて来る事とは。

今回得たのはヤミーとゆう怪物の記憶と、謎が謎を呼ぶ様な情報であつた。

因みにその後、紅魔館に帰ったらサボっていた事をメイド長にどやされ、ナイフを投げられたそうさ。

オマケ：カザリへのお仕置き。

無事にリュウガから逃げ延びたオーズ一行。その日の夜にカザリが待っていたの仁王立ちの魅空だった。魅空の前には正座で座っているカザリ。

「さて、お前へのお仕置きだが、3つ考えてみた。好きなものを選ぶ。まず一つ目はコアメダルの没収、お前の中に手をつ込んだ時分かつたが、チーターのメダルが復活していたな。それを差し出せ」

カザリはいやいやと首を横に振った。やっと一枚コアメダルが復活したのに、直ぐに没収されるのは嫌だ。……まあ、後で回収されるのは変わらないが。

「なんだ嫌か。じゃあ、二つ目。コスプレして人里を練り歩いてもらつ」

「もっと嫌だよ!」

「なんだ我儘だな。今回は比較的に良心的なのに。じゃあ最後、素
っ裸で俺特製の三角木馬に」

「二番でお願いします」

その日、カザリは背に腹はかえられない精神を学びました。更に土
下座も覚えたそうです。

そして数日後、人里に行方不明の韋駄天の代理人に似た少女が、可
愛らしい猫耳や尻尾、シンプルにメイド服を着て、顔を熱した石の
様に赤くして歩いていたそう。

そして更に後日、カザリの躰から一枚コアメダルが減ったそう。
(笑)。

【オーズはラトラーターコンボが使える様になった！】

『EPISODE・25 / 知慧と変態と忠告』（後書き）

自分の作品ではオーズの電子音をカタカナ、バースの電子音は英語で分けます。

取り敢えずこれからの予定。次話はライオトルーパー（紫）VSスコカサス。その次は昆虫系コアメダル事件。その次はオーデインVSナイト、の予定です。

昆虫系コアメダル事件は大量のライダーを出すつもりです。

次回も宜しく御願います！

『EPISODE・26 / 黄金VS紫』

秋の終盤、冬の寒さが時折戸を叩く時期。小動物達は冬ごもりの為に食料を集め、巣を強化する。そんな、少し忙しさを感じる時期は妖怪や人間にも影響を与えていた。人間は勿論、妖怪の中にも寒さに弱い者も居る。逆に冬に力が強くなり、姿を現す者も居る。

秋風が名残惜しい空。

肌寒い冷気の風を見せる雲。

そんな『風流』を思わせる空を、ギリシャ文字の『』を模したマスクのライダーが、銅色のフルメタルリングの破片を撒き散らしながら空を飛んで居た。

*

八雲家の庭。青い薔薇の花瓶が地面に幾つも落ちており、金色の仮面ライダーがアップパーカットを放った直後のポーズで立っていた。青色の複眼があるマスクには三本の角らしき物が付いており、右肩の装甲より突き出たショルダーブレード。右手首のライダーブレスには、金色の三本角昆虫型メカ、カブティックゼクターが装着されている。

「これで、935敗……」

藍が縁側に腰掛け、茶を啜りながらうんざりしたように呟いた。

すると、空からマスクやアーマーが損傷したライオトルーパーが落ちてきた。

「ぱぶっ！」

間抜けな声を出して地面に大激突。その見た目を言葉で表すとしたら、『ぼろ雑巾』がぴったりである。仰向けに倒れ空を仰ぎ、息を荒くしている。ライオトルーパーの変身ベルトであるスマートバツクルから、ブスブスと嫌な煙が出始めた。この現象から考えられる事はただ一つ。それを予期した藍は、人差し指と中指を合わせた状態で、空中に何かを描いた。カブティツクゼクターの周囲の空間が歪み、札らしき物が出現し、三本角昆虫型メカを包んだ。カブティツクゼクターは一瞬だけビクンツと跳ねると、力無くライダーブレスから外れる。黄金のライダー・コーカサスの装甲が剥がれ落ちる様に変身解除された。コーカサスだった者は、木で作った簡単な人型人形に変わった。

湯呑を縁側に置き、庭に足を進める。まずカブティツクゼクターを回収、人形からライダーブレスも回収、人形を邪魔にならない所に寄せた。

丁度この作業を終えた時、ボンッ！とゆう小さい爆発音が聞こえた。音がした方を見ると、ズタボロになり、目を回している藍の主が倒れていた。下腹部にはスマートバツクルが巻かれているが、黒焦げになり穴が空いている。もう使い物にはならないだろう。

藍はため息を吐き、治療の為紫を座敷に運んだ。

*

「よしっ！ 再チャレンジよ！」

傷だらけ、包帯だらけ、軀にはガーゼ等を付けまくっている紫が握りこぶしを作り、意気揚々と大声を上げた。この傷は全て、カブテイクゼクターが現れてから、こつこつと増えていった物である。治す前に挑戦するものだから、傷が増える一方なのだ。そんな事も気にせず、紫は元気にコーカサスへと挑むのだ。

「……紫様、もうスマートバツクルの在庫が一つしか有りませんよ」
「…………マジで？」

「マジで」

「え~~~~~~~~…なんでえ〜？ 936個くらい持ってきたでしょ！？ 藍が」

「今日で紫様はコーカサスに、935回負けました」

ライオトルーパーとコーカサス。戦闘力が違い過ぎるこのライダーの闘いは無謀である。実際紫の戦闘力ですら、変身するライダーのスペック差でコーカサスにボロ負けである。コーカサスに殴られベルトが破損したり、技の威力に装甲が耐え切れずベルトがショートしたり等々。

「どうしようっ…ベルトが残り一個…」

「考え無しに突撃ばかりするからです。作戦を練って行きましょう」

「作戦って言ってもねえ……、大き過ぎる強者は全てを叩き潰す。かなり練らないと」

作戦。そう呼べる物は一応やってはいるのだ。ハイパーゼクターと呼ばれる、ライダーシステムを強化するアイテムは封印。流石にハイパーゼクターがある状態のライダーには勝てない。

しかし、ハイパーゼクターが無くともクロックアップは使える。数秒で何百発と殴られ、KO。

紫の能力の産物である？スキマ？。スキマを乱用した奇襲攻撃をしたが、コーカサスの防御力が強過ぎて倒せなく、逆に捕まえられてKO。

他にも色々やったが、全て失敗してきた。

「うーん……」

「誰かに手伝ってもらうのはどうでしょう？月見様は持ち前の素早さでクロックアップに対抗できるかもしれませんし、時森様は防御力が高く、楯神様の凡庸性はライダーの中でも上位に入ります」

藍は外から来たライダーを様付けで呼ぶ。彼らは主人や？彼女？の、ある意味我儘で幻想郷に来たのだ。そこいらの客人より丁重に接しなければ。

「うーん……そうしたいけど……狼夜や将斗、詩織には現在進行形で迷惑を掛けているし……魅空は怪しい行動してるけど……そう言えば

藍、貴女は知ってたかしら？ 彼らが幻想郷に来た理由」

紫やリユウガが連れてきたと言ったが、実際はチケットを渡しただけ。来るか来ないか、最終判断は彼らに任せた。

「いえ、存じませぬ」

「作戦が思いつかないから、頭の切り替えとして少し昔話をしましょう。仮面ライダーとなる者には、何かしら闇があるのよ……」

紫がぼつぽつと語り出す。

月見狼夜。

人に嫌われ、人外の生物に好かれる青年。狼夜が唯一愛したのは姉、自分の近くに居てくれた人。だが彼女も望みを叶えるライダーバトルに参戦した事により、底面下で中身が変わっていた。ライダーバトルの実質的最终決戦で姉と闘った。狼夜が優勢だったが、姉がぶちまけた本当の感情に戦意損失。彼の人に嫌われる才能は姉をも侵食していった。死にかけた狼夜は、哀しみや怒り、どれにも含まれない感情に支配され、姉を殺した。

その後の彼の性格は逆転した。無口だったのが、冗舌に変わり明るくなった。

「それでも彼は嫌われていた。周りの人間達は外面を気にして、仲良く接する演技をしてた様だけど。人里の人間からも嫌われている様ね、彼は。あの上白沢慧音からすら嫌われている。……人間は、必ず人よりも長けている物がある。自分には何も無いと悲観的な奴

もいるけど、？何も無い？者なんてそういない。無い事も立派な才能。彼は無条件に人間に嫌われ、無条件に人外に好かれる、神に創られた道化ね」

時森将斗。

親の顔をうる覚えの少年。親は小さい頃、彼が殺した。強い癩癩、それが彼の生まれ持った才能。小さい子供に襲われると思わなかった両親は、果物ナイフで刺殺。その後将斗は精神病院に入れられ、監獄と言ってもいい部屋に放り込まれた。代わり映えしない生活、変わるとすれば食事を持ってくる人間。タイミングが悪い人間は癩癩を起こした将斗に、食器等で殺された。会話相手が居ない監獄で、将斗の会話能力は著しく後退した。今の片言喋りはそのせいである。ばーっと生きているか死んでいるか解らない毎日。その時、変化が起きた。

「監獄に現れたら光の球体が将斗に憑依し、メルカバと出会った。そして？電王？に興味を持った将斗の為に、メルカバはデンライナーにあつた予備のライダーパスを盗み出した。勿論、電王はメルカバを倒そうとした。だけど特異点だった将斗が初めて変身して、メルカバを守った。その時彼は初めて、メルカバを護らなくちゃいけない存在と自覚したそうよ。電王には惨敗したそうだけだね。しかし運が良かった。鎧王とメルカバの性格を知ったデンライナーのオーナーは、罪を水に流し、キングライナーの駅長に連絡して、正式な時の運行を守る役目を与えたそうよ。害は無く、子供の夢を果たす為の行動に、電王もメルカバを許した。甘いわよね、あの世界の人間は。後日、ガイライナーを得た将斗をスカウトする事になったけど」

楯神詩織。

本来、双子だった。双子の兄の名は『理音』。詩織と理音は一卵性胎児として母親の胎内に宿った。だが産まれたのは詩織だけ、理音は流産、死体が出てきた。双子の兄が居ないのは寂しかったが、詩織はすすくと成長した。親から御守りとして貰った『Rのイラストが描かれたUSBメモリ』を肌身離さず持ちながら。USBメモリを持っていて、とても安心できるのだ。人並みの反抗期、人並みの恋愛を経て。ある日、交通事故にあいかけた子供を助けようとした時、詩織の人生は変わった。たまたま起動したガイアメモリが体内に入り、詩織はライオネスドールパントに変わり子供を救った。混乱するなか、なんとか元に戻り帰宅。両親に開口一番にUSBメモリの事を聞いた。小さい頃から持っていたUSBメモリを、ガイアメモリだなんて思っていなかった。そんな危険な物だと知っていたら捨てていた、と。両親に感情を全てぶちまけると、こう言った。『実験は成功だ』。両親はガイアメモリ研究者だったのだ。元々双子を身籠った時に、実験は始まっていた。子供のどちらかの脳を使って、メモリを作ろう。地球の記憶から抽出した獣の記憶、人間の中に刻まれた本能。赤ん坊の脳は本能の塊、好都合だ。そして残った詩織はガイアメモリの、実験テストに。両親は特別性のロストドライバーを笑顔で、詩織に渡した。『これからも良い結果を期待しているよ』。詩織は、家を飛び出した。

「その後彼は、ホームレス同然の生活をしながらドーパントを葬り続けた。両親が関わっていないくとも、憎いガイアメモリを破壊する為に。詩織はスカルやダブル、アクセルに続く仮面ライダーとして生きたの。兄の名を、『リオン』をもう一つの名として。でもリオンの本能は危険、暴走しやすいのよ。ドライバーに安全装置が付けられてるけど、何回もの？惨殺本能？のしょうで、安全装置がバカになった。彼は三日三晩暴れ続けたそうよ。街を破壊し、人を傷つけた。そして、仮面ライダーから『街を泣かせる存在』として排除

した。ただの怪物に成り下がった詩織を、見てくれる者は消えた。両親から実験動物としか見てもらえず、暴走により全てから拒絶。もう、自分でも何をしていいのか解らない、メモリになった兄は何も言ってくれない……」

霧雨魅空。

霧雨魔理沙を憎む。何故か幻想郷に存在したコアメダルの封印を解く。

「……魅空はコレしか知らない。元々他人に弱みを見せないタイプだから」

そう呟くと、紫は襖から覗く秋空を見た。あの男は、過去の幻想郷で何をしたいのか。恐らくろくな事では無いだろう。それでも今は協力者が欲しいのだ。

「人に嫌われる者、人を殺した者、人に拒絶された者……」

「書き物としてありがちな人生でも、実際にお目にかかるのはレアな事よ」

「レアだなんて、止して下さい。茶化していい様な内容ではありません。彼らに失礼です」

「それはどうかしら？ 自分達の人生を、おもしろおかしく語ったのは魅空を除いた三人よ」

藍の顔が驚きの表情に染まる。そもそも自分の人生を、おどけて語れる者はそうそう居ない。高確率で酒場に出現する中年が、嘘で塗

り固めた武勇伝を語ったりしているが、その部類では無いだろう。

「狼夜は姉の存在を忘れていた……そうゆう欠落した部分もあるけど、彼らは幻想郷に来て生まれ変わったのよ。精神的にね」

言い方を変えれば、昔の人生に見切りを付けたとゆう事。周りの人間から見れば悲しい選択、本人達には最善の選択。狼夜は自分を好いてくれる者に囲まれ、将斗は幻想郷に来て得た能力で自分の癪癢を封印し、詩織は自分を見てくれる人物達がいる場所に居着いた。

「そうそう、ブレイバツクルを渡した天狗。犬崎若葉も、それなりの半生を過ごしたらしいわ」

「それなり……ですか」

この流れでそれなり、とゆう訳では無いだろう。だが、紫は説明をせず立ち上がった。

「藍、最後のスマートバツクルを持って来てくれる？」

「何か作戦を思いついたのですか!？」

残り一個のベルト（チャンス）。何か凄い作戦でも浮かばなければ、チャンスをどぶに捨ててる様なものだ。

「いいえ、全然」

紫の言葉に、ずっこける様なモーションをする。現在の状況であるコーカサスに作戦無しで闘いを挑むのは馬鹿がする事。我が主人はそんな馬鹿者では無い筈、では何故か。藍は聞いた。

「ちょっと昔話をしてたら、自分がまごまごしてたら駄目だと思っただけよ。若い世代が頑張ってるのよ？ 古株の私が止まってる訳にはいかないわ」

藍の顔が今日一番の驚きに染まる。

「紫様が自分をババアって認めた!？」

直後、藍の頭上にスキマが現れ、コンクリートブロックが頭に直撃した。

*

再び八雲家の庭。そこにはコンバットナイフ形態のアクセレイガン・ブレードモードを装備している、紫が変身したライオトルーパー。そして傀儡人形が変身したコーカサスが、余裕そうに青い薔薇を眺めていた。藍はまた縁側に座っていたが、頭には大きいたんこぶができている。更に顔には血が流れた様な跡もあった。ライオトルーパーはアクセレイガンの切っ先を、薔薇を眺めるナルシストに向ける。

「これが貴方と最後の闘い。私が勝てば、私の拳に成ってもらふ。私が負ければ、元の世界に返して上げる。」

軽く頷いた。カプティクゼクターが支配するコーカサスは言葉を喋らない。だがその仕草、纏う雰囲気からは余裕を感じる。

「了解した、って事でいいのね？」

コーカサスは頷く代わりに、青い薔薇を捨てた。落ちていくなかでも、薔薇は優雅とゆう美しさを魅せる。薔薇がふわりと地面に落ちると、コーカサスが花を踏み付けた。ぐりぐりと足を動かして、花弁を汚しながらスタボロのゴミに変えた。足をどかしライオトルーパーを指差し、足下のゴミを親指を下にして指差した。これがお前だと言わんばかりに。

そんな強きな態度に、紫はマスクの下でにつこりと微笑み、突撃した。

一息に距離を詰め、アクセレイガン縦一閃に振り下ろす。鈍色に輝く刃を、コーカサスはアクセレイガンの腹を指で掴み、止めた。ライオトルーパーは力任せに振りぬいたり、指を弾こうとはしない。幾度も拳を交えた相手だ、簡単には逃がしてくれないだろう。それを解っているのに脱出を試みても、体力が無駄に浪費するだけだ。微動だにしないアクセレイガンは無視し、コーカサスの顎の辺りに拳を叩きこんだ。目一杯の力でぶん殴ったが、コーカサスはダメージ皆無の様だ。ライオトルーパーはリアクションを取らず、下腹部胸部、顔面にへと三段階蹴りを放った。だが、全ての攻撃をノーガードで受けたコーカサスはものともしない。今までのお礼にと言わんばかりに、ライオトルーパーに裏拳を喰らわす。短い悲鳴を上げて、真横に吹き飛んだ。アクセレイガンを離してやったからよく飛ぶ。ライオトルーパーは水切りの石の様に地面を跳ねた。衝撃が和らぐと、地面に手を付け体勢を立て直す。

「くっ……相変わらず痛ったいわね」

殴られた部分を拭うモーションをした後、アクセレイガンを構え直

した。構え直した瞬間、頭を掴まれ顔を殴られた。

「がふっ!?!」

ライオトルーパーの移動速度の比ではないスピードで、コーカサスは距離を詰めたのだ。頭を掴まれているので、吹っ飛ぶ事も、回避する事もできない。頭を拘束されたライオトルーパーに、往復ビンタの様なパンチを繰り返す。鈍い音が庭に響いた。

藍の顔に冷や汗が流れる。今回も駄目なのだろうか、そんな嫌な予感がした。

往復パンチの手を休めないコーカサスにアクセレイガンの切っ先を突き出した。その虚しい反撃は、獲物を弾かれる事により阻止され、鳩尾に膝を入れられるコーカサスのカウンターで終わった。ライオトルーパーの頭を離し、己の踵を回し蹴りで当てる。

「がっ……」

ゴミの様に転がる、幻想郷の妖怪賢者。うつ伏せで倒れたライオトルーパーが、アクセレイガンを杖の様にして立ち上がるうとした時、自分のすぐ近くに落ちている物に気付いた。

「薔薇……」

土に汚れた青い花弁。所々裂けており、最早ゴミとしか言えない。手を伸ばし、土ごと花弁を掴んだ。見つめる青い花弁が、何かと重なるのを感じる。薄汚れ、千切れ、それでも尚、その青さとゆう個性は薄れない。ゴミの様な見た目だが、本当の姿は美しい。

まるで？彼女？の様に。

汚なく、這いずり、薄汚れ、醜く生命に縋るが、芯の美しさは他を圧倒する。この花卉が？彼女？に見える自分は頭がおかしくなったのだろうか。

？彼女？は美しい。幻想郷を愛する心は誰よりも強い。迷いの世界、悩みの多い現実世界と言われるこの世、此岸。此岸にある地獄を体験したであろう彼女は、天国とも言える幻想郷に流れついた。

『ゆかりんは二人目の友達だよ！』

そう言つて、ズタボロだった顔で笑いかけ、ズタボロだった臍で抱き付いてきた。今ではすっかり治ったが、鮮明に覚えている。ボサボサだった長髪、傷だらけの顔臍腕足。痩せこけた臍。それでも、生き生きとした眼だった。

毎日人が死に、毎日人が人を殺し、毎日人が奪い、毎日人が騙し、殺人の狂気を纏う者しか居ない世界に生まれ、生きた？彼女？。

そうだ、？彼女？が？リュウガ？として世界を護ろうとしているんだ。ならば、私も力を得て立ち向かわなければ。

アクセレイガンブレードモードから、光弾銃形態のガンモードに切り替える。自分の目の前にスキマを開き、中に数十発を撃ち込んだ。スキマを閉じ、アクセレイガンを構えコーカサスに突撃する。

接近した瞬間、胸部のアーマーを殴られる。

「がふっ……」

殴られた部分のアーマーがべっこりと凹んでいる。ライオトルーパーは殴るのに使った方を掴み、コーカサスの顔面に向かってアクセレイガンを連射した。幾つもの光弾が至近距離で撃たれるが、コーカサスは微動だにしない。

コーカサスは腕を振りほども、カブティックゼクターに手を掛ける。その間にもライオトルーパーはアクセレイガンから光弾を撃っていた。カブティックゼクターを180度回転し、元に戻す。

《R i d e r B e a t》

電子音が鳴り、ゼクター内で生成・貯蔵された電流の様なタキオン粒子を開放・チャージアップした。腕力強化した右腕で、ライオトルーパーのマスクを殴り付けた。ズガン！　まるで銃弾で撃たれた様な音がした。マスクが破壊され、紫自身の顔右半分が露出する。ここで、ライオトルーパーが膝を付いた。

止めをさそうと、また拳を振り上げた。瞬間、紫が眼を見開く。するとコーカサスの背後で数十のスキマが開いた。そのスキマ全てから、先程放った光弾が撃ちだされる。コーカサスにとっては大して威力の無い光弾だが、数と不意打ちによって少しだけ怯んだ。ごく矮小なチャンスを見逃さず、アクセレイガンをブレードモードにした。

「だあああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

気合いの発声を放ち、アクセレイガンのカブティックゼクターに振り下ろした。火花が散り、少しひしゃげる。ライオトルーパーが手

を伸ばしてカブティックゼクターを掴み、ライダーブレスから無理矢理外した。

コーカサスのアーマーが剥がれ落ちる様にして、変身が解除され傀儡人形とライダーブレスが地面に転がった。ライオトルーパーの手中でカブティックゼクターが離せと言わんばかりに暴れた。

「暴れても無駄。変身が解除されたという事は、貴方の負け」

カブティックゼクターに現実を突き付けると、借りてきた猫の様に大人しく成った。ギリギリの勝利を得たライオトルーパーに、藍が近づいて来た。

「お疲れ様です、紫様。作戦を立てていないと思っていましたが、ちゃんと考えていたのですね」

「いーえ全然。思いつきだから、殆ど思いつきだから」

そう言つてスマートバツクルを外して、藍に渡した。スマートバツクルからは煙が出ている。これも、もう使い物にならないだろう。破損具合を見るとよくもったなと、藍は思った。

紫は傀儡人形と一緒に落ちていたライダーブレスを拾い上げ、右手首に装着した。そしてすっかり大人しくなったカブティックゼクターをセット、少し捻る。

《Hensin》

《Change Beetle》

電子音が鳴り、紫はコーカサスに変身する。その時、コーカサスの周辺に紫色の薔薇の花弁が舞った。

因みに藍は、『うっわ、また掃除大変だよこれ』と思っていた。

*

同日。

とある日から姿を見せなくなったりグル・ナイトバグの住みか。住みかは何かが暴れた様な形跡があり、所々が破損している。更に嘔吐物による水溜まりからは、異臭が放たれている。住みかの主は寢床で、気を失っていた。

指の爪が数枚剥がれ、血がこびり付いている。白目を向き、口からはだらしく涎が零れている。

「うわ……きつたな」

カザリが汚物を見る様な眼をしながら言った。

「いや、これはこれで……スプラッターなプレイに見えなくとも……」

言った瞬間、魅空はカザリの裏拳を鼻に受けた。

「みあゝ……うっ、くさい……」

ガメルが魅空に寄り添いながら、鼻を摘んだ。

『マスター……いえ、何でもないです』

マシンベンダーモードのライドベンダーが呆れた様に言葉を投げ掛けた。

「で、どうするの？ これ、もう少しで？ 爆発？ するよ」

長期間体内に維持されたコアメダル。熟成が完了しかけている。

「ふむ…その爆発のエネルギーを利用して、コアメダルの力を復活させるのが目的だからな。そうだ、ついでにコイツを加えよう。」

魅空が右手に、八枚のコアメダルを出現させる。絵柄はタカ、クジヤク、コンドル。魅空と行動を共にしていた？ アンク？ のコアメダルだ。

「こいつをどうやって復活させるか悩んでいたが、ちょうどいいや」

カザリが鳥系のコアメダルを見て思い出すのは、アンクと魅空の元恋人だった。アンクは魅空の元恋人に憑依して行動していたのだ。

鳥系のコアメダルをリグルに投入する。リグルが大きく痙攣し、どつと大量の汗が流れた。

「さてはて。アンクが余計な事しなきゃいいがな。ライドベンダー、俺等帰るけどお前待機な。爆発する瞬間、お前に入れてるセルメダルの九割をこいつに向けて出せ」

『イエス・サー』

「大丈夫かい？ セルメダルそんなに使って」

現在ライドベンダーに収納されているセルメダルは、82547枚。未来で魅空が回収された分、ハイエナヤミーから回収した分、たまにカザリから定期的に奪う分である。

「大丈夫、だあーいじょーぶ。下手したら増えて戻ってくるから」

爆発は、恐らく明日だ。

『EPISODE・26 / 黄金VS紫』（後書き）

軽くオリキャラの過去に触れた今回、如何だったでしょうか？

近い内に、犬崎若葉の半生を描いた短編を投稿するつもりです。若葉はね、なんか力入っちゃって長くなっちゃったんだよ。しかも、産まれた理由が昼ドラみたいだから、コメディーのこの作品に載せられなかったんだよ。しかも、私に文才が無かったから微妙だよ。興味が湧いた方は是非どうぞ！

次回も宜しく御願います！

『EPISODE・27/騎士と野生と盗難・前編』（前書き）

ども、フロストさんとのコラボで浮かれている、仮面3です。

お久しぶりです。この作品のオリジナルキャラ、犬崎若葉の短編を投稿していたら遅くなりました。そして、今回は変な所があるかもしれない。ごめんなさい。

では久しぶりの豆知識。【アルコール】について。

『アルコールという人物が、ワシントン州シアトル市で、泥酔のかどで逮捕された』

これはこれで凄いな……

では本編。

ゆっくりしていいね……！！

『EPIISODE・27/騎士と野生と盗難・前編』

魅空がリグルに鳥系コアメダルを追加し、ライドベンダーに放置ブレイを言い渡した翌日。リグルの住みかを目指して、二人の妖精が行進していた。1人は水色の髪の子ルノ、幻想郷の仮面ライダーシザース。もう1人はサイドポニーの大妖精、幻想郷で子ルノがシザースだとする少女だ。

子ルノがシザースと変身し、ガイと戦闘を行ったあの日、大妖精は教えられた。今、子ルノが立っている立ち位置を。ライダーバトルを。あの訳が解らない姿に成る為のアイテム、カードデッキを破壊されれば妖精としての力を失い、ただの人間の様な生物に成り下がる。何故そんな事をするのか、大妖精は問いた。

ライダーバトルの勝者は望みを叶える事ができるらしい。子ルノには叶えたい望みがあった。

それは、『本当に最強になる事』。妖精は、子ルノを例外として大半が弱い。死ぬ事の無い彼女等は、自分の弱さ噛みしめながら生きていかなければならない。妖怪の暇潰しで倒され、ちょっとした悪戯で力の強い人間に倒される。妖精は、理不尽な生き方を強制されている。子ルノは本当に最強となつて、そんな妖精達を助けたかった。自分にチャンスのダイスを投げられたのだ、チップを賭けない訳がない。

これが子ルノが魅ている夢想。

勿論、大妖精は反対した。確かに理不尽な毎日に嫌気が差す時はある。だが、もし子ルノが負けてしまったら。そうなってしまうては、

今ある幸せも無くなってしまふ。そう言つて、大妖精は必死に訴えた。そんな馬鹿げた事を止めろと。そして、チルノは少し寂しそうに言つた。

『もう……戻れないんだよ』

それを聞いたら、もう何も言えなくなつた。あの寂しそうな表情はなんだつたのか、解らない自分がもどかしい。あれからその話題に触れていない。チルノは昔の様におちゃらけて、自分を笑わせてくれる。それが逆に、もう話題に触れるなとゆう警告に思えた。

「あゝかあいあゝがああいゝ赤い仮面のぶいすりやあゝゝだやあぶりゆうたいふーんう命のべるゆとおゝゝゝ」

チルノがわざと音程を外した歌を、大声で歌いながら先頭を歩く。大妖精はその素敵な歌声にクスクスと笑つた。あの日から、チルノは大妖精に気を遣つている。そんなの目に見えて分かり切っている。自分を心配させない様に、明るく振る舞っているのは、見ていて痛々しい。チルノ自身も最悪のシナリオを想定をしているのだろう。それを大妖精にけどられない様、チルノは一生懸命なのだ。

なら、自分に何ができる？ いや、何もできない。自分はせいぜい、他の妖精より少しだけチカラが強いだけだ。妖怪やチカラの強い人間からしてみれば、蟻の様な存在。

悲しきかな己が運命。

暗い気持ちを体现するように、大妖精はうつむきながら歩いてた。手に持っている御見舞いの品、バスケットの中の果物が拡大して見えた。そう、御見舞いの品だ。

今日はリグルの住みかに御見舞いをする為に、今歩いているのだ。ある日からリグルはぱったりと現れなくなった。理由は体調不良。心配してリグルの家に向かっても、人に会える体調では無いと門前払いを受けた。でもあれから季節も変わってしまった。季節が変わる間体調が悪いだなんて、流石におかしい。そう思った二人は、やつぱり御見舞いに行く事にしたのだ。例えまた門前払いを喰らっても、無理にでも様子を見よう。そして医者に見せよう、と。八意永琳クラスなら、どんな病気でも治せるだろうと、チルノは考えた。

「よし、ついた！」

そうこうしている内に、リグルの住みかに到着した。

「リグルちゃん、大丈夫かな……」

大妖精は心配そうな声を上げる、もっとも大妖精が心配なのはチルノだが。

「うーん、ずっと出てこないからだいじょばないと思うよ大ちゃん」

「そうだけど……」

外でこたごたしても仕方がない、チルノが言った。大妖精は果物が入ったバスケットを抱えなおす。小柄な彼女が持つと、中々に大きい。チルノが意気揚々と住みかに入ろうとした。

その時、住みかから何かが出てきた。

「きゃあ!？」

大妖精が悲鳴を上げ、咄嗟にチルノが庇う様に前に出た。そして住みかから出てきた者を確認すると、少しだけ緊張を解いた。

出てきたのはリグルだった。緑色の髪は薄汚れ、手の十の爪は殆ど剥がれ、口には涎の後がある。眼には狂気の光がちらついており、正気の沙汰ではない。

「ひ、ひっさしぶり〜リグル！ ちょっとスプラッターだけど元気そう……ではないよねえ……」

チルノが出来るだけ気さくに、友に話しかけようとしたが、後半は明らかにトーンダウンしている。顔も少し引きつっている。

リグルは応えない、口をパクパクと動かすだけ。何かを伝えようとしているのだろうが、口から言葉がでない。

「……………！」

「え……なに？」

「り、リグルちゃん……」

リグルはひたすら口を動かす。何かを伝えようとしているのは解るが、その肝心の内容が解らない。

そして、時は来た。

「に……………て……………にげ……………逃げて……………」

やっと内容を、警告を告げる事のできたリグルの顔に、一瞬変化が起きた。一瞬、本当に一瞬だけ顔が二回変化した。元々のリグルの顔が、クワガタムシの顎やその他の虫のパーツで構成された頭、赤を基本とした色とりどりの鳥の頭、この二種に。

爆発の時だ。

リグルの住みかから大量のセルメダルが現れ、彼女を包む。まるで彼女の中の何かが、セルメダルを呼んだ様に。リグルを包んだセルメダルは巨大な球体の形状をとり、宙に浮いた。いきなりな展開に大妖精は目をぱちくりとしている。チルノも似た様な状態だが、大妖精を押す様な形で後退する。この状況、まず戦力外の者を遠ざけなければ、チルノはそう判断した。

「おーおー、いー感じじゃないの」

ふと、人間の気配がした。声をした方向を見ると、金髪の青年が面白い物を見ている様に立っている。右手には三枚のメダルを弄んでいた。

チルノが警戒心を青年に向けた時、リグルを包んでいるセルメダルから大量の光が放たれた。

「……………！」

腕で光から目を庇う。後ろにいた大妖精も瞼をきつく瞑る。

光がおさまると、空には巨大な化け物が飛んでいた。ヒョウモンカマキリをベースにした怪物。頭には逞しいクワガタの顎、脚の筋肉はバッタのそれだ。虫のパーツを寄せ集めた姿に、鳥類が無理矢理

割り込んでいる。カマキリの鎌には猛禽類の爪が生えており、大きな翼がはためている。他にも胸等からは様々な鳥類の頭が迫り出していた。本当に生物をごちゃ混ぜした様な怪物だ。鳥系コアメダルと昆虫系コアメダルが混ざった怪物、巨大グリード暴走態がけたたましい鳴き声を発した。数ある鳥の頭も鳴き声を出しているので本当に五月蠅い。

チルノが顔を歪ませ、大妖精がバスケットを落とし耳を塞いでいる。五月蠅いを通り越した嫌悪感が耳をつんざく。

「おい」

青年、魅空が2人に、詳しくはチルノに話し掛けた。

「お前、仮面ライダーだろ？」

「……………あんた、なんで知ってるの？」

チルノは変わり果てたリグルから視線を離さずに、刺々しく返事をした。知った経緯は解らないが、認知しているなら隠す必要は無い。

「ハハッハア　俺は物知りだからな、知らない事は世界の6割程度だ」

「半分以上知らないじゃん」

「この無駄に広い世界、これぐらいで十分だぜ。それはそうと、お前、チルノ。あいつ助けたいか？　苦しがつてるぞ、あの蟲」

「助ける方法があるなら助ける。だって友達だもん。助ける方法を

知っているなら教えて」

友達……仲間……友情……ハッ、偽善乙。

人間関係やその他の脆さを知っている魅空は、内心で毒づいた。友情。あれは脆い、溶けかけて罅が入った氷の様に壊れやすい。そんな眼に見えて長続きしない物を追い求める奴は馬鹿だ。世の中馬鹿ばかり、いつか必ず壊れる物を壊れないと幻想を見る。

一瞬、思考にトリップしていた魅空は頭を振り、現実に戻る。

「助ける方法……取り敢えず攻撃しまくればたまらず吐き出す筈だ。とにかく殴れ。空を飛んでいるからしんどいだろうがなあ」

「解った、ありがとう」

チルノは短く礼を言って、大妖精に向こうに行くよう指示する。敵の大きさに驚いていた大妖精は、少しまごついて隠れる場所に避難した。懷からカードデッキを取出し、能力で擬似的な氷の鏡を出現させ、Vバックルを装着した。

魅空もオーズドライバーのバックル部を装着する。それをチルノは不思議そうに見ていた。魅空はチルノの視線に気付く。

「ああ、これ？ 俺も仮面ライダーだから」

「うっん、そうじゃない。なんかあんなって、こつゆうの嫌いな感じっばいから」

なんで手伝ってくれるの？、と。

「男に限らず生物は色んな仮面を被ってるの。第一印象だけで、性格決め付けない」

本当は、反吐がでる。なんだったら目の前で痰を吐いてもいい。友情こっこの手助けに興味は無い、目的は熟成されたコアメダルだけだ。

「……………ねえ、名前教えてよ」

「ああ？　んでだよ、めんどくせえ」

魅空は名前を名乗る事を好まない。相手に信頼等を持たせる場合は致し方ないが、こいつとは短い付き合いだ。その必要は無い。

「じゃあ適当に呼ぶね。うーん……………パツキン？　パツキンで！」

「パツキンってお前……………さっさとやるぜ」

「よおーし！　待っててねリグル。変身！」

チルノは腕をぐるんぐるんと回し、カードデッキをVバックルにセツトし、シザースに変身した。

魅空は左右端にタカ・コアとバツタ・コアをセット、最後に真ん中にトラ・コアを装填した。水平だったオースドライバーを斜めにずらす。そして、オースキャナーでコアメダルの情報を読み取らせた。

《タカ！　トラ！　バツタ！　タ・ト・バ・タトバ・タ・ト・バ！》

独特な歌が流れると、魅空の頭、胴、脚に様々な色のメダルが円状

に出現して回転した。そして三種類の動物が描かれた絵が、魅空の胸部にとどまりオーラングサークルに変化、魅空自身もオーズへと変身を遂げた。

「うーん……やっぱカトバに聞こえる様な…」

「なにその歌超クールじゃん！ パツキンナウいよ！」

「…………お前、頭大丈夫か？」

オーズがシザースのセンスを心配した時、また巨大グリード暴走態の鳴き声が轟いた。

そして、鳥の頭から火炎弾が。クワガタの顎から電撃が放たれた。

*

同時刻。

幻想郷ではかなり珍しい物が道を走っていた。バイクだ、人間が2人乗ったバイクが走っている。バイクはガイライナーのコントロール等を司る、マシンガイバード。運転手は将斗であり、後ろには詩織が乗っていた。詩織の手にはバッタカンドロイドが乗っており、巨大グリード暴走態の姿が映し出されている。

「これがヤミー……………」

「それ…………もう……………いらない。……………ここ……………からでも見え……………る」

将斗に言われた通り、巨大グリード暴走態は肉眼でも捕らえられた。大きさもあるが、距離も大分接近した。

リウウガの指示で、ここに緊急出動させられた2人。魅空はおかしな行動が目立つ為、バツカンドロイド等で見張らせていた。すると、魅空が韋駄天の弟子と天人らしき人物と共にリグル・ナイトバグにコアメダルを挿入する映像が送信されて来たではないか。更に、今回のコアメダルの暴走。

「まったく、なんで僕達が……」

詩織は苦虫を噛み潰した様な表情で呟いた。

「まったく……だ……」

この2人はリウウガの様な愛国心は無い。そもそも、大き過ぎる？集団？には興味は無い。ただ大切な物（者）、すぐ近くの物（者）さえ護ればそれでいい。

詩織は知っている。大き過ぎる？集団？は裏切る。端から腐って、腐敗臭がする手で殴ってくる。中心に居ると思っていた人物すら、本性を見せて人を墜とす。

将斗は知っている。蟻の様に群れなくても生きているける。ちょっとでいい、後はただの生ゴミだ。

だが、こんな思想を持つ2人が苛々している理由はもう一つあった。

「あーああ！ 鈴仙さんの看病してたかったのにい！」

「いい……ゆめ……みてたのに……」

詩織は言わずもがな。大方予想できるだろう。

将斗は幻想郷に来てから何かと忙しく、ゆっくりできないでいた。その為、あまり感情を表にださない将斗が持つ数少ない楽しみ、昼寝。最近じゃあ暇があれば昼寝をしている。だから将斗はいつも寝癖だらけなのだ。ホームステイ先の心が読める妖怪にすら呆れられている。

しかも、昼寝を邪魔された将斗は質が悪い。むくれて部屋から出なくなるのはまだまし、酷い時は破壊活動に勤しむ時がある。

『そう愚痴を零すな。この地、全てに私達は世話になっている。せめて、恩返しをしなければ』

将斗の中からメルカバが、2人に軽い説教をする。

「はいはい解ってますよ、やりますよー。はあ……」

やりきれない感じを存分に出しながら、ロストドライバーを装着し、ライオネスメモリを取り出した。

《RAI ONESS!》

「じゃあ先に行くね。将斗、先生も急いで」

将斗が返事の変わりに頷くのを確認すると、バイクから飛び降りた。地面に着地する瞬間、ロストドライバーにライオネスメモリを装填

する。

《RAI ONESS!》

リオンはそのまま、林の中に消えていった。

『私達も行かなければな。どうやら相手は飛行できる様だ。……よし、私が行こう。将斗、軀を貸してくれ』

「わかつ……た。……樂が……できるなら……それでいい」

将斗のセリフに、メルカバがため息を吐いた。それと同時に、メルカバは憑依した。将斗の寝癖だらけの髪型が、現代風の七三分けになり群青色のメッシュが入る。

ハンドルから片手を離し、手元に自分のチャクラから出現させたガイオウベルトを巻いて、群青色のスイッチを押した。

「変身」

ガイオウベルトにライダーパスをセタツチする。

《PANZER FORM》

電子音が鳴るとプラットフォームに成り、メルカバのフリーエネルギーから生成されたオーラアーマーが出現し、装着された。孔雀が変形した赤い複眼がある電仮面、群青色のアーマーには色彩豊かな模様が描かれている。両肩アーマーには、大きく鋭い三枚の羽が装備されている。背中にはナイトフォームの様な大剣の刀身部分はない。

パンツァー鎧王がガイバードの速度を上げながら、ごちゃ混ぜモンスターを見据える。

「死してなお、神の御心が届く場所へ……」

ロシア語で戦車を意味する名前を持つ鎧王が、思いやりを籠めた言葉を贈った。

『EPISODE・27/騎士と野生と盗難・前編』（後書き）

前にライオネスメモリは雄ライオンの単語を弄ったと表記しましたが、あれは間違いです。雌ライオンでした、雌ライオンを雄ライオンにしたんです。てゆうか、ライオネスってプロレスラーが居るとは知らなかった……。

若葉の短編、興味を持った方はぜひどうぞ。ま、若葉はまだ本編に一回しか出してませんけどね……

次回も宜しく御願います！

『EPISODE・28 / 騎士と野生と盗難・後編』（前書き）

ども、プトティラの強さに驚きメダガブリューのKYさに笑った、
仮面3です。

あのシリアスで、あの音声はKY過ぎるよ……。あと今回？も？最
後グダグタです。ごめんなさい。

では豆知識。やっと仮面ライダーだよ！

『初の女ライダーはファムって言われているが、裏設定ではアギト
が初の女ライダーである』

これを知っている人は果たして何人かな！？

では本編へ。

ゆっくりしていったね！！！！

『EPISODE・28 / 騎士と野生と盗難・後編』

秋が終わりそうな今日この頃。肌寒い日が続いたが今日は天気が良く、たまに吹く風が寒い事を除けば丁度いい気温だ。そんな天気なら、紅魔館の門番は睡夢に、幻現つを彷徨っているだろうと思うだろう。だが、今日の彼女は一味違った。

「うっ……ちょっと寒い……」

たった今吹いた風に身を震わせた美鈴は、なんとこの天気で起きていた。これは奇跡と言っても過言ではないだろう。

まあ、起きている理由は前日が休日で、たっぷり寝ていただけなのだが。

それでも、今日の様な天気でこの光景はかなりレアだ。

「あゝ退屈……でもそれは平和って事か……」

平和は退屈。退屈は平和。そんな素晴らしい日常を味気ないと言うのは失礼に部類される筈だ。平和とは、常に一本の細い糸に吊された剣の下に曝されている様な物だ。だが、そんな平和を生きる人間達はその危うさに気付かない。今だって、ごちゃ混ぜ怪物が目覚める一歩手前なのだから。

今はあの瞬間の数分前。

平和とは退屈であり、平和とは危うい物であり、平和とは偽善者の塵共が忌み嫌う暴力から成り立っている。今の馬鹿みたいな学校の

教師達や学びを教える者は、暴力は何も生み出さないと言う。

嘘だ。

そんな偽善、吐き気がする。

平和とは、野蛮な暴力で生まれるのだ。

「暇だな〜……なんでこうゆう日に何も起きないんだ〜……」

彼女が求めた様に、生物は刺激を欲し続けている。それが正しい。
無欲は罪。強欲こそが正義。

そして生物が最も求める欲望こそ、暴力だ。

暴力は誕生を司る崇高な行動。アイディアの暴力は逸脱した物体を生み出し、行動的な暴力は時として伝説を生み、性的暴力は繁殖の役割を成す。

そして、ほら、また暴力が何かを生み出そうとしている。

平和ボケした面をしていた美鈴の表情が、だんだんと驚愕に染まる。

「うん？ え……な……え……… あれ、何…！？」

その目が捕えたのは、魅空の暴力から生まれた存在。生まれ落ちた巨大グリード暴走態のけたたましい鳴き声が、小さくだが聞こえてくる。軀から生えている様々な鳥頭がいろんな方向を見ている。その内の一つと目が合ってドキリとしたが、鳥頭は美鈴に興味が湧かなかったのかまた別の方向を見た。

「妖怪じゃない…よね。ミラーモンスター？　だったら…」

美鈴はニヤリと薄く笑みを浮かべて、カードデッキを取り出した。どこからか、紅い龍の咆哮が轟く。これからの闘いに興奮しているかの如く。

*

《GURAD VENT》

シザースの左腕、バイザーにシエルディフェンスが召喚される。シザースは防御力が高いライダーだ。その防御力を強化、更に防御範囲をシエルディフェンスで広げる。

巨大グリード暴走態から放たれた火の玉、いや火炎弾と言った方が正しいだろう。火炎弾をシエルディフェンスで受け止めた。盾から熱が少し伝わったが、ダメージは皆無。チラリとオーズの様子を見る。少し心配したつもりだが、それは無駄だったらしい。オーズはひらりひらりて右や左に余裕で躲していた。

視線を巨大グリード暴走態に戻すと、大量の火炎弾、電撃がシザースに迫って来ていた。直撃の瞬間、左腕に右手を添えて足腰の筋肉に力を入れた。火炎弾、電撃が容赦無く降り注ぐ。

「うぐぐぐ……！」

全身の骨の髄に衝撃が駆け抜けた。躰も足下に二本の溝を作りなが

ら後退させられる。躰の後退が止まると、シエルディフェンスから焦げた様な臭いが鼻についた。自慢の盾は傷一つ付いていないが、表面が軽く焦げている。

「うわ……！？」

この力を手に入れてから、初体験だった。シザースの盾に傷が付くことなど、想像もしていない。それほど防御力に自信があった。

「上から来るぞお、気を付けろ！」

どこかで聞いた事のあるセリフが、魅空の声で聞こえてきた。はつとシエルディフェンスから巨大グリード暴走態に視線を戻す。

今まで上空から火炎弾や電撃で攻撃してきていた巨大グリード暴走態が、猛禽類の鷹や鷲の様に急降下して爪が生えた鎌を横薙で振るう。

人間が刃物で生み出す空気を裂く音とはケタ違いな、空間を砕く様な音を出しながら地を薙払う。地面が砕け、抉れた。オーズは持ち前の飛蝗の脚力で躲し、シザースはバックステップで回避。その際に、巨大グリード暴走態の攻撃で弾かれた土の塊や石が散弾の様に撃ちだされた。シザースは咄嗟にシエルディフェンスを構える。幾つもの銃弾が被弾したかの様な衝撃と音がした。

「うわああああー！」

衝撃が吸収しきれず、吹っ飛ばされた。宙を舞った躰は、木々の一部に衝突する事によって止まる事ができた。打撲の痛みに呻きながらも、直ぐに体制を立て直す。

「おいおい、初っぱなの元気はどしたあ？」

着地したオーズが、小馬鹿にする様に言った。

「しょうがないじゃん！ でっかいし、飛んでるし！！ それに……」

あれはリグルだから。だから攻撃の一手が打てない、と。シザースはそう述べようとしたが、そんな甘ったるい友情、オーズは認めない。

「待った待った、皆までいうな。今の状況で言い訳を聞いている暇はないっつーの。お前、なんか遠距離の技無いの？ これじゃラチあかねー」

「言い訳！？ ……くっ……無いよ」

反論しようかと思ったが、今の状況を考えて止めた。

「能力は？ お前の能力でカチコチンにできないの？」

「パツキンもカチコチンに成ってもいいなら」

「じゃ、やめとこーか」

変身中は能力が強化されるが、上手くコントロールできない。それで自分が凍り付けになったら洒落にならない。

シザースは遠距離武器を持っていない。オーズも現在の所持メダル

では無理だ。

（うーん……ジャリ剣……は無理か。飛距離は大丈夫だが、なにぶんデカ過ぎる。やっぱアंकのコアメダルは入れないべきだったかなあ……）

今更後悔しても無駄だ。

ぶつくさと小声で愚痴りながら、火炎弾を跳んで躲す。面倒極まらない。種はまいた時は未来を予想して愉しいが、世話は面倒な物だ。オーズはタカヘッドの中でため息を吐いた。

シザースが前に出て、血気盛んに攻撃しようとはくせくしている。その間に、オーズは木の影に身を潜めた。そのオーズの手元に、様々な所に待機させているバツタカンドロイドの一体が乗っかって来た。何事かと映像を覗き込むと、盛大に舌打ちした。

「ジーザス！……なんてな。だが面倒なのは変わりねえ」

悪態を吐き出すと同時に、木々の間からメタリックゴールドの獅子が飛び出した。

《RAI ONESS！ MAXIMUM DRIVE！！》

右腰にあるマキシマムスロットに、ライオネスメモリを装填する。マキシマムドライブを発動すると、リオンの右拳にワインレッドのオーラが宿る。テールグリーヴァからもワインレッドの光りが放たれている。拳を振りかぶり、上空に居た巨大グリード暴走態を殴り付けた。

爆音と共に巨大グリード暴走態の軀が大きく揺れる。闘争本能時のマキシマムドライブ『インパクトナックル』。純粋な攻撃力は馬鹿の様に高い。だが、昆虫の皮膚は堅い。時としては人間の力で潰れない程に。ダメージは軀を突き抜けた様だが、巨大グリード暴走態に外傷は無い。地面に着地したりオンはオーズ程では無いが、小さく舌打ちした。

「堅いつ……!？」

技の破壊力に自信があつた為、些かショックだ。だが感傷に浸っている場合ではない。直ぐにオーズ、魅空の存在を探す。今回の事件の当事者をリュウガの元にしょっぱかなければ。すると、巨大グリード暴走態がダメージで動きが麻痺したおかげで余裕ができたシザースが話し掛けてきた。

「えーと……味方…で良いんだよね」

「はい、仮面ライダーシザース、いえチルノさん。僕はリオン」

自分の正体が知られているのには少々面食らったが、この状況だ。味方が増えた事を素直に喜んだ。少し質問をしようかと思つたが、リオンに止められた。

「今は止めておきましょう。直ぐにあいつは復活するでしょうから」
リオンが指差した方を見ると、巨大グリード暴走態は既に次の攻撃を出そうと体勢を立て直し初めていた。

巨大グリード暴走態の鳥頭達が火炎弾を準備していると、群青色の光弾が次々に直撃した。鳥頭が火炎弾の変わりに悲鳴を上げた。

攻撃主は背中の中の噴出口からフリーエネルギーを翼の様にして飛ぶパ
ンツァー鎧王（以下P鎧王）だ。手にはガイガツシャー・キャ
ノンモードを握り、照準を巨大グリード暴走態に合わせている。キ
ャノンモードは連射に特化していないが、威力はある。鳥頭を黙ら
せるのには十分だ。事実、巨大グリード暴走態の手数が少なくなっ
てきている。

「おお！」

遠距離攻撃ができる味方の登場に、シザースが歓喜の声を上げた。

「怯ませているだけ。倒す決定打にはなりません」

こんな事で喜ぶな、と。堅い皮膚を持つ巨大グリード暴走態に明確
なダメージは与えられない。軀の一部でもかけたりすれば、そこを
一気に攻めれるのに。しかし、そこまで行くのが難儀なのだ。

「とにかくドンドン攻撃しましょう。そうしなければどうにもなら
ない」

リオンの提案に、シザースは頷いて答えカードを一枚抜き取る。バ
イザーにベントイン……しようとした時、オーズが居ない事に気付
いた。目線だけを泳がせるが、それらしい影は見当たらない。少々
不審に思ったが、彼にも何か考えがあるのだろうと、バイザーにカ
ードを挿入した。

《STRIKE VENT》

右手に装備されたシザースピンチを振りかざし、木々を踏み台に巨

大グリード暴走態に殴りかかった。リオンも続く様に構えると、テールグリーヴァを発光させた。光りがおさまると、複眼の色以外にも変化があった。手足や背中のアーマーに幾つかの噴出口が設置され、複眼の色はメタリックゴールド（黄金）に。

生命の危機に曝された獣は時として急激な進化を見せる。生きようとする獣の有り余る生命力を糧として飛翔能力を得る？生存本能？

P鎧王の様に噴出口から金色のエネルギーを出し、巨大グリード暴走態に突撃した。だが、突撃は中断せざる得なかった。巨大グリード暴走態の鎌に弾かれたシザースが跳んできたからだ。シザースをキャッチして、空中で緊急停止する。

「さ、サンキュー」

「まったく……貴方に飛翔能力が無いんですから、あまり無茶しないでください」

「だって……」

「危ないぞ！ 躲せえ！！」

シザースを戒めていたリオンに、P鎧王の怒号にも似た声にはっと視線を戻す。リオン達に向かって鎌が迫ってきていた。シザースが情けなく『あわわわ』と悲鳴を上げてじたばたする。リオン自身も軀をビクリと震わせたが、直ぐに行動に移った。じたばたする氷精蟹を抱えたままエネルギーの出力を上げ、上空に大きく旋回した。鎌を躲したが追撃として火炎弾が飛んでくる。軀をひねったりして躲したり、P鎧王が撃ち落したり、躲せない物はシザースが弾いてくれた。

「はあ、危なかった！」

「あああたい、寿命が縮んじやったよぉ……」

「妖精に寿命は無い。だから安心して敵を見る！」

P 鎧王の叱咤に、リオンとシザースは気を引き締めた。直ぐ様次の攻撃に対応する為に。火炎弾や電撃も強力だが、一番ヤバイのはあの鎌だ。猛禽類の爪が生えた死神鎌。まともに直撃すれば確実にライダーシステムごと即死だ。

そうこう考えていると再び攻撃の豪雨が降る。まるで弾幕の様である。P 鎧王はするすると躲し、ガイガツシャーで消滅しているがリオン達はそうはいかない。なんせ仮面ライダーを抱えて飛んでいるのだ。いつもより機動力が低下している。躲しきれない火炎弾は、シザースが自慢の鉄で消してくれるが、やはり辛い。

躲しきれない火炎弾の一つが、リオンの右足を擦る。

「づあっ！ー！」

ジンジンとする熱傷に声を上げるが、それより重大な問題が出来てしまった。？生存本能？状態のリオンの飛翔能力を支えるエネルギー噴出口、『ライフブースター』の一つが壊れてしまった。通常なら一つぐらい壊れても支障が無いが、今は他人を支えている訳で……。

「うわっ！？ わわわわわわっ！ー！」

「落ちてる？　落ちてるよぉ〜!？」

高度が落ちるのが常識である。もともとテンパリ掛けていたシザースはパニック状態になり、あの詩織ですら焦りを表に出している。

「楯神!!　チルノ!!」

声を荒げるが、自分も回避行動に手一杯。救けに行ける状態ではない。他のライフブースターの出力を上げて補い、高度を保っているがリオンは速く動けない。電撃をなんとか躲し、火炎弾はシザースがパニックになりながらもしっちゃんかめっちゃんにシザースピンチを振りまして消滅させていた。

しかし、今の状態で躲せない攻撃が来てしまった。大振りの猛禽爪鎌だ。空気の壁を砕くこの攻撃は範囲も広く、現状では躲すのは不可能に近い。猛禽爪鎌がともに動けない二人に迫る。二人は悲鳴を上げる事などせず、マスクの下で強く眼を瞑った。

「っ!!!!!!　躲してくれ二人共オ!!!」

悲痛な声がりオンの耳に入るが、どうしようもできない。猛禽爪鎌が空気の壁を破壊しながら、二人に迫る。詩織の頭にとある映像が浮かんだが、認めようと思わなかった為に映像の中身が解らない。認めてしまったら死が顔を出すかもしれないから。チルノの頭にとある映像が浮かんだが、認めようと思わなかった為に映像の中身が解らない。認めてしまったら自分が成し遂げようとしている事が、叶わなくなってしまういそうだから。

二人は同時に現実逃避する。

その現実逃避も無駄になったが。直撃する前に、猛禽爪鎌が炎に包まれた。巨大グリード暴走態は痛みと言うより、驚愕を表す様な悲鳴を上げて、炎を消す為に鎌を上下に振った。そして助かったリオン達も啞然としている。

「はは、ちよつとタイミング良すぎたかな？」

龍頭を携えた紅い騎士が呟く。ドラグクローからはファイヤーを放った証拠の様に煙が漏れている。

「龍騎……、紅か？」

「あれが……リュウガの……」

P鎧王とリオンは一步引いた視線で龍騎、紅 美鈴を見た。アレが？彼女？の……見えざる壁に仕切られた双子。在り方が違う姉妹。双子や姉妹は勿論比喻表現だが、あながち間違っていない。たが今それを明かすことはできない。そしてシザースもまた別の視点で龍騎を見ていた。同じライダーシステムの仮面ライダー。闘わなければならぬ敵。今この状況でなければ襲い掛かっている所だ。

マスクの下でどういった視線を送られているか考えていない、能天気な龍騎は首を左右に振る。

「シャッ！ さっさと終わらせなきゃね。じゃなきゃまた昨夜さんに怒られるし」

そう言つて、ドラグクロー・ファイヤーを巨大グリード暴走態に放つ。しかし、ファイヤーは巨大グリード暴走態に直撃するも、ダメージは皆無と言つた様子で雄叫びを上げた。

「あり!？」

「こいつは炎を吐く。そんな奴に炎が効く訳無いだろう」

「え、マジ？ マジすか!？ じゃあ何？ 私役立たず？ 役立たずじゃん!」

巨大グリッド暴走態をミラーモンスターと間違えて出陣し、他のライダー達も闘っていたのでタイミングを計ってカッコ良く登場したと言うのに、自分があまり役に立たないと知りショックを受ける。そもそも勘違いで来たこと事態カッコ悪い。

「ちつ、また役立たずが増えやがったぜ」

木陰に身を潜めるオーズが苛立つ。自分を探しに来た鎧王達が現れたから、隠れて様子を伺っていたと言うのに。鎧王達も少しの肥やしにも成らない。役立たずばかりだ。コンボを使ってダメージを与えたくとも、奴らに見つかったは厄介。するとしたら終わる寸前だ。今は手を出せない。何か都合がいい事が起きて、さっさと終わらないかな。

そう考えたら起きた。都合が良い事が。

《KAMEN RIDE》

「!?!？」

オーズの直ぐ近くで電子音が鳴る。だが、音の主の姿は見えない。

《AMAZON! / GIRUSU!》

更に電子音が鳴ると、二人の野生的なライダーが召喚された。

「ケケエエエー……!!!」

腕を交差させる様に振るのは、オオトカゲを模して爬虫類の機能を備えた生体改造人間、仮面ライダーアマゾン。

「ヴオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

両腕を広げ空を仰ぎ、雄叫びを上げるのはカミキリムシを模し、現在幻想郷に在るチカラ、仮面ライダーギルス。

オーズの驚愕は続くが、電子音もまだまだ続く。

《ATTACK RIDE GAGANO UDEWA! / CROSS ATTACK!》

光弾がどこから撃ちだされると、アマゾンの右腕を包む。

仮面ライダーアマゾンの左上腕部に装着している特殊金属製の腕輪、左を意味する言葉を名として持つ『ギギの腕輪』。そしてギギの腕輪の対となる物を、右を意味する『ガガの腕輪』と言う。この2つの腕輪を組み合わせると、古代インカの秘宝「超エネルギーが生まれ、装着者に力を与える。今のアマゾンの右腕にはガガの腕輪が装着されている。

「ケエエエエー……!!!」

自分の中で生まれた超エネルギーを発散させるが如く叫んだ。する

と両腕にあるひれ、アームカッターが二倍以上に伸びた。

ギルスの踵からも爪、ギルスヒールクロウが出現され構えを取る。更に右手首へ向かって左手を伸ばすし、触手状の鞭ギルスファイラーを引っ張り出した。ギルスファイラー出現を確認すると、アマゾンが低く跳ぶ。そのアマゾンの足首にギルスファイラーを巻き付ける。するとギルスはハンマー投げの要領でアマゾンごと軀を回転する。回転速度はドンドン上がり、アマゾンが円状の模様に見える。速度が最高にまで達すると、アマゾンを放り投げた。但しギルスファイラーは離さず。放り投げられたアマゾンに引っ張られる様にギルスも空を飛んだ。標的は四人のライダーと対峙する巨大グリード暴走態。

「スウウウパアアアア大切断!!」

「ギルスヒールクロウ!!」

巨大グリード暴走態の横っ腹に、巨大化したアームカッターとギルスの踵爪が深々と突き刺さる。

「!?!」

龍騎達全員が似た様なリアクションをした。突然乱入した二人は重力に従って落ちる。各々の爪を突き刺した状態で。その為に、巨大グリード暴走態の横っ腹には三つの爪傷ができた。巨大な傷を作る役目を終えた二人のライダーは着地すると同時に消滅した。

初めて負った過大なダメージに、巨大グリード暴走態が悲痛な鳴き声を上げる。痛みを伝えるが如く軀をくねらせると、傷口からセルメダルが零れ落ちる。

「よく解らんが勝機！ 各々の技を叩き込めえ！！」

「解りました。チルノさん、降りてもらってもよろしいですか？」

「うん！ もう直ぐだよりグル！」

「あれミラーモンスターじゃなかったの！？」

一人だけズレたりアクションをした者もいたが、それぞれ必殺技の準備をする。シザースを龍騎の隣に降ろしたりオンはP鎧王と並び、ライオネスメモリに手を掛けた。P鎧王もパスを取り出し、セタツチする。

《FULL CHARGE》

《RAI ONESS！ MAXIMUM DRIVE！！》

P鎧王のガイガッシャーに群青色のフリーエネルギーが充電されると、背中側にもフリーエネルギーで構成された孔雀の尾羽が出現する。尾羽には色彩豊かな模様があり、見方を変えればイラスト化された眼の様に見える。

リオンのマキシマムドライブが発動すると、テールグリーヴァが今までに無い程に発光した。メタリックゴルドの光は強くなり、リオンのテールグリーヴァから離れる。光りは前から見たライオンの頭部を模したシルエットとして、前方に待機した。軀を仰け反らせるとクラッシャーを開く。

「っ 撃ええええ！！」

「ハウルバースト!!」

引き金を弾くと、一回り以上大きい光弾をガイガッシャーから連射する。孔雀の尾羽の眼からもだ。無数の光弾を撃ちだす『エンドレスショット』。仰け反りを直すと同時に技名を言い放つと、開いたクラッシャーからエネルギー波を撃つ。そしてライオンのイラストの口部に入ると、エネルギーが肥大、凝縮されてより大きいレーザーとして発射される。

『エンドレスショット』の無数の光弾と『ハウルバースト』の極太レーザーが巨大グリッド暴走態の傷口に直撃する。そのせいで傷が広がり、零れるセルメダルが増える。

龍騎とシザースもバイザーにカードをベントインする。

《FINAL VENT》

《FINAL VENT》

痛みを訴える巨大グリッド暴走態の叫び声より勇ましい、紅龍の雄叫びを感じると龍騎は跳んだ。

シザースの背後に鏡の様な物が出現し、契約モンスターのボルキヤンサーが現れた。鏡の様な物は現れたと同時に粉々に砕けた。

「いくよ、ボーちゃん」

『おおともさ、チルツチ』

空中の龍騎が躰をひねり、蹴りの姿勢に入る。ボルキャンサーが両腕でシザースをジャンプさせた。

「でりゃああああああああ！！！！」

「えいやああ！！！！」

ほぼ同時に、ドラグレッダーの炎を纏った龍騎のドラゴンライダーキックと、高速で空中前転しながら体当たりする『シザースアタック』が巨大グリード暴走態の傷口から体内に侵入し、貫いた。

巨大グリード暴走態に穴を開通させた二人は地面に着地する、シザースの手にはリグルが抱かれていた。体内に侵入した時に救出したのだ。今はコアメダルを巨大グリード暴走態に置いてきたからなのか、安らかな表情で眠っている。それに安心して、少し強く抱き締めた。

「まだ……終わってない！！」

友の救出に喜んでいたシザースの肩に手を置き、龍騎が気を抜くなと忠告した。

巨大グリード暴走態は深手を負い、大量のセルメダルを失って少し縮んでいたがまだ健在だ。龍騎がシザースの前に立ち構え、空中のP鎧王達も構えた。

「おおっとお、おいしいシーンだ。俺が頂くぜ？」

《ライオン！　トラ！　チーター！　ラッタラッタラトラッタタ〜！》

獅子の咆哮が鳴り、独特な歌が流れる。

『タコ！』

『タコ！ タコ！』

更に、深手を負っている巨大グリード暴走態に向かって、大量のタコカンドロイド達が道を作った。

《スキヤニングチャージ！》

また獅子の咆哮が鳴ると、今まで隠れていたオーズがラトラーターコンボ状態で飛び出した。タコカンドロイドの道には、それぞれのコアメダル色のリングが出現している。トラクローが展開しているオーズは、チーターレッグから蒸気を噴出して高速で走った。リングを潜る度にオーズの軀に灼熱のエネルギーが溜まっていき、巨大グリード暴走態をトラクローでX字に切り付ける。六人のライダーから最大戦力奥義を受けて満身創痍だった巨大グリード暴走態は、時世の句の様に一鳴きし爆散する。

「ガメルウ！！ カアザリイ！！」

コンボの反動とスキヤニングチャージで軀が麻痺し、地面に向かって落ちてオーズが叫んだ。すると、茂みから行方不明の毘沙門天代理と、不良天子に酷似した少女達が飛び出す。少女だった姿がセルメダルに包まれると、猫系グリードと重量系グリードに姿を変えた。しかしその他にも茂みから飛び出した者が居た。それはシアンカラーの召銃士。グリードと召銃士は空中で何かをキャッチする。

グリード達は地面に伏しているオーズの元に、召銃士　ディエンドは真逆の場所へ。

「おい、返せ！」

自分の手の中の物と、ガメルのも確認した後力ザリが叫んだ。

「断る。これは、この物語に影響する重要なアイテムだからね」

《ATTACK RIDE INVISIBLE!》

三枚のメダルを力ザリに見せた後、ディエンドインビジブルを発動して姿を消す。力ザリは苛々のあまり、地面を蹴り付ける。

「オーズ、まさか怪人とするんでは…な」

フリーエネルギーの噴出を止め地に足を付けたP鎧王と、？闘争本能？状態に戻ったりオンが遠くからオーズを見下す。

「……なにせよ。彼をリュウガの元へ」

本来彼らの任務は巨大グリード暴走態の排除ではなく、魅空の捕獲だ。今、任務を実行する時。二人がオーズに接近する。嫌な気配を感じたガメルが、気絶しているオーズを護る様に抱えた。

「みあに……近づくなあああ!!」

怒りを顕にして地面を殴り付ける。すると大地が強く揺れた。ガメルは地震を発生させる力も持つ。

「ぬっ!？」

「うわっと……」

地震の影響で躰が揺れて動きが制限される。その二人に向かって、カザリが黄色轟風を放った。バランスがうまくとれていなかった二人は地面に倒れこむ。

「逃げるぞ。ガメル!」

「いくよ……みあ」

ガメルがまた地面を殴ると、大穴が空きグリッドとオーズは姿を消す。

「待てっ!？」

リオンが後を追おうとして大穴を覗くが、既に影すら残っていない。

「くそ……!」

「仕方ない。任務は失敗だ。引き上げるぞ」

「くっ……はい。　そう言えば……将斗、大人しいですね」

「ああ、うん……それがだな……」

『ZZZ……ZZZ……』

耳を澄ませば、P 鎧王の躰から寝息が聞こえてくる。

「あ……あの闘いの中で寝てるなんて……」

「ははは……大した奴だよ。それでは龍騎、シザースよ。我々はこれで。釘を刺す様で悪いが……闘うなよ」

言いたい事を残してP鎧王達は帰っていった。元々この任務、将斗と詩織は乗り気ではなかった。メルカバはその意見を尊重して、長居は無用と早々に帰ることにしたのだ。

その場に残るのは、龍騎、シザース、リグルの三人。事が済んだのを察した大妖精がシザースの元に戻って来たので四人になった。大妖精はシザースの元に居たが、リグルに気付いて駆け寄る。その間も龍騎とシザースは見つめ合った。

「……私は帰るよ。友達なんですよ、その娘達」

シザースは頷いて返事を返す。友達の前では、この闘いの結末は酷い。美鈴の優しさだ。

「じゃね。できれば再会したくないけど」

皮肉の様だが、これもまた美鈴の優しさだ。それにシザースが気付いたのかは確認せず、龍騎は立ち去る。

「チルノちゃん……」

無言のシザース。それがまた大妖精の心配を駆り立てる。心中の想い人の心の在り方はいたい……。

*

「コアメダルが…ねえ」

「ごめん……みあ」

「しょうがないさガメル。あれは想定外だ」

あれから時間が過ぎて夜。ここは今の魅空達の隠れ家である人工ガメルが掘ったの洞穴。まだ軀に麻痺が残る魅空は石に腰掛け、ガメルはその隣にちょこんと座っている。カザリは少し刺々しい石の壁に寄り掛かっている。

「ま、カザリの言うとおり仕方ないか。お前等には迷惑掛けたな。しかも助けてくれたりして……なんだろう。愛を感じる！」

「だからそのポジティブ止めなつて。鼻骨を折るよ」

「おうおうツンデレ美少女、嫌いじゃないわ！」

「はいはいウザいウザい。僕はもう寝るよ。おやすみ」

いつもの様に軽く魅空を軽くあしらって、自分の寝床に向かう。

「はは……ガメルもありがとな」

そう言ってガメルの頭を撫でた。ガメルは目を細め、擦り寄ってくる。

「いやー可愛いなあガメルはもう！　犬耳とか尻尾付けてみたい！」

数分ガメルを愛でた後、寝る様に指示を出した。少し渋ったが、素直に従ってカザリと同じ場所にある寢床に向かう。その姿を見送った魅空は、少しフラフラとした危なっかしい歩き方で洞窟が出た。

外は夜の澄んだ空気に支配され、周りに生える木々がより映える。魅空は微笑で空を仰いだ。

そして、顔に怒りと言う仮面（表情）を張りつけて手頃な木を殴る。

(クソの役立たず共がア!!!!!!!!!!!!!!)

心中で叫ぶ。力一杯殴り付けた木は少し砕け、魅空の拳から血が噴き出す。

「仕方ねえだア！！？ ふざけんじゃねーぞクサレ共がつ！！！！！！
メダルを産み出すだけの奴等が……クソツクソツクソツクソツク
ソツクソツクソツクソツクソオオ！！！！！！！！！！」

最初は我慢していたが、自然と口から言葉が漏れた。謎のライダーにコアメダルが盗まれた。その事実を思い出してまた木を殴る。幾度も、幾度も。

「ハアゝー……ハアゝー……！！」

息を荒くしながら、自分の拳を見る。砕けている木には魅空の血液がべったりと付着。怒りにより痛みを忘れて殴った拳は、肉が弾け拳の山の骨が露出している。

「うゝああ……クソ共が……ちっ、宿り主の躰ごとスタスタにしていえ所だが」

言葉を言い切る前に、魅空はもう一度木を殴った。今度は骨が砕ける音がした。だが彼はコアメダルを取り込んだ半グリード。こんな傷、直ぐに再生できる。

「今は駄目だ。メダルの復活が先決。だが、急がなければなあ。魔審器による影響で？俺は長くない？。そろそろ……潮時か」

人間としての潮時。自分に言い聞かせる様に呟き、？ポケット？から九枚のコアメダルを取り出す。黒ずみ、力を失われたコアメダル。魅空が唯一取り込んでいない九枚。絵柄はプテラ、トリケラ、ティラノ。

今、オーズが持つコアメダル。タカ×1・クジャク×3・コンドル×2・クワガタ×3・カマキリ×3・バッタ×3・ライオン×1・トラ×1・チーター×1・ゾウ×1・ウナギ×1。

失われたコアメダル。

タカ×2・コンドル×1。

例外。

プテラ×3・トリケラ×3・ティラノ×3。

リュウガの元にある例外。カトブレパス×1・ウィッチ×1・ジン×1。

コンボ。

タトバ・ガタキリバ・ラトラーター・タジャドル。

「さて、俺の残りの短い人生……どう過ごすかな……」

*

同時刻。とある草原。

《K A M E N R I D E D E N ・ O ！》

ディエンドが桃を模した電仮面を持つ、時の運行を護る仮面ライダー電王・ソードフォームを召喚する。電王に向かって今日の収穫を投入した。タカ・コア二枚と、コンドル・コア一枚。電王はビクリと痙攣する。

「さて……気分はどうか？ 鳥系グリード、アंक」

「…………お前、誰だ」

電王、いやアंकが威嚇する様にディエンドを指差した。

「僕は……そうだね。君の復讐に手を貸す天使……かな？」

「ハッ。お前、馬鹿か？」

アंकが自分の頭をコンコンと叩き、自分を復活させた相手の頭を心配する素振りを見せる。

「ふっ、単刀直入に聞こう。君はオーズ、霧雨 魅空に復讐したい。そうだろ？」

「……………」

「背中からの不意打ちでコアメダルを全て盗られ、嫌々取り込まれた。僕のお願いを少し聞いてくれたら、復讐の手助けをしてあげよう」

「お前…何者だア！？」

何故その事を知っているのか、と。

「言ったる。天使だって。どうする、悪い様にはしないけど」

「……………お前、あの時代に行けるか？」

あの時代、魅空やアंक達が居た未来。

「行けないことは無い」

アंकは少し考える様な仕草をした。

「あの時代から、ある女を連れてこい。そうすれば、嫌だが言つて聞いてやる。俺だって借りは返したいしなあ」

「なんなりと。鳥の頂点よ」

ディエンドの安っぽい言葉をスルーして、あの女を思い出した。あの捻くれた魅空と一緒に入れた女。アंकが取り憑いて行動していた器。何より、魅空と違い強力な魔法が扱える魔法使い。

名はフヨウ。

フヨウ・マーガトロイド。

『EPISODE・28 / 騎士と野生と盗難・後編』（後書き）

この作品に出るコンボはプトティラまで。ブラカワニやタマシー、カンガルーとかパンダのコンボは出ません。

あと今回チラツと出たけどオリジナルコンボが出ます。特徴は吸い込んだり、叫んだり。

《ズオオオオオオ！ タートオバアアアアア！》

そしてそろそろエピソード30。この作品の予定として、エピソード60前後でラストエピソードに突入します。つまり最終回はエピソード70前後かな？

次回はナイトVSオーデインの予定です。

次回も宜しく御願います！

『EPISODE・29 / 英雄欲の蝙蝠騎士』（前書き）

ども、貴方の好きな二字熟語は何ですか？ 私は『金銭』、仮面3
です。

今回はカオスなオマケ有り。最初に言っておく、どうしてこうなっ
た！？

今回の豆知識は『オーズ』 仮面ライダーオーズの主人公、火野映
司の名前、「えいじ」は「文字ずつずらす」と「おつず」になる『

これは狙ってだそうです。
では

ゆっくりしていったね！……！！

『EPISODE・29 / 英雄欲の蝙蝠騎士』

貴方は私には何でも有るって言った。

貴方は自分には何も無いって言った。

貴方は私に魔法が使えるって言った。

貴方は自分に魔法が使えないって言った。

貴方は私にお前は人に好かれると言った。

貴方は自分に俺は人に好かれないって言った。

貴方は私を善玉と言った。

貴方は自分を悪玉と言った。

おかしい、おかしいよ。貴方は人に好かれないって言ったけど、私は貴方を愛してるよ。それに貴方は私に無いモノを持ってる。

私はただ世の中に流されているだけ。貴方は確固たる？固？を持ってる。

そんな貴方を、愛し続けるよ……。

*

オーデイン。

十三人の仮面ライダーで最強と謳われる存在。常にサバイブ状態と瞬間移動が特長である。現在の変身者は浮浪者。役目としてはカードデッキシステムを使うライダーの監視、ライダーバトルを見守る事を主としている。見守る存在と言っても、彼も仮面ライダーだ。ライダーバトルをする権利がある。闘いを求められたらそれに答えるのが、もう一つの役目。

そして今日、オーデインにライダーバトルを挑む者が居た。

幻想郷に広がる森の一部……のミラーワールド内。そこに睨み合うのは二人の仮面ライダー。1人はオーデイン、もう1人は蝙蝠を模した騎士の兜と紺色のスーツを身に纏う仮面ライダーナイト。ナイトの変身者は永江衣玖だ。オーデインの居場所をつかんだのは彼女の契約モンスター、ダークウィングの手柄だ。前に説明した通り、戦闘以外にダークウィングは隠密情報収集を役目としている。

オーデインは士郎と直結で繋がっている仮面ライダー。オーデインを倒せばライダーバトルを止める足掛かりになるかもしれない。そう判断し、ダークウィングに現れる場所を探せ、パターンから次に出現場所を検索、そして今に至る。自分の優秀な契約モンスターに感謝感謝だ。

左腰に下げている、柄が蝙蝠を模している翼召剣ダークバイザーに手を掛け、オーデインを見据える。

「さて……今日私が貴方に会いに来た理由は解りますね？」

『私は……この闘いを見守る者……だが……闘うのもまた私の使命』
組んでいた腕を解き、大きく広げた。御託はいい、闘うのならばさっさと始めよう。言葉を使わないで、ナイトに己の意思を伝えた。その行動は、己から湧き出る自信をも表している。

「……話が早くて良いですね」

言葉が詰まったのは、相手の反応のせいだ。あの余裕、まるで欲に駆られた敵をも包み込む様だ。だとしたら、欲に駆られているのは自分か？ ふざけるな。自分は大儀の為に闘うのだ。醜く欲に駆られていない、そう衣玖は思っていた。

これも立派な欲望だと言うのに。自分で気付けていないのは相変わらず虚しい限りだ。バイザーを抜き去り、切っ先を2〜3メートル離れたオーディンに向ける。刃がギリリと光り相手を威嚇した。対してオーディンは両腕をだらりと下げ、楽な格好で対峙する。

二人の間に訪れたのは静寂。基本ミラーモンスターしかないミラーワールドの、独特な静けさだ。しんとした静けさに、ぴんと張り詰めた緊張感。その緊張感の糸を断ち切ったのは、オーディンの黄金に光る羽だった。

オーディンの姿が消え、その場に羽が舞う。ライダーの中でも、オーディンだけが有する瞬間移動だ。瞬間移動での奇襲がオーディンの得意戦法。ナイトの背後に羽が舞い狂い、オーディンが手刀を作り攻撃……はできなかった。

ナイトが躰を動かさず、バイザーを後方に突き出したからだ。オーディンの攻撃は防御に変わった為に不発。バイザーを弾くとすぐさ

ま後ろに下がった。

オーデインが瞬間移動する事はナイトも知っていた。だからこそこの行動だ。瞬間移動が使える者の不意打ちは、背中側に回っての一撃がセオリー。それが解つていれば冷静に対処できる。だがこちらが不利であるのも事実。瞬間移動が使える相手に無闇にカードを使つては無駄だ。ここはバイザーで攻め、相手のパターンを掴むべきだ。敵が生物である限り完全なランダム行動は不可能。地味にコツコツと。

「おおよ。地味な闘いは性に合わないのですが」

確かに衣玖の技は電撃やドリルなど、派手な物が多い。

バイザーの細身な刃に指をなぞらせると、高く掲げオーデインに飛び掛かった。

*

ミラーワールド内で起こる二人の騎士の闘い。激しい動よりも、一撃一撃が静かな静の闘いだ。ナイトが斬り掛かるとオーデインが躲す。逆もまたしかり。単調な動きの繰り返しで、観客が居たら欠伸をしてしまいそうな闘いだった。

そんな闘いを、鋭い目付きで睨む様に見える少女が居た。森にある切りかぶに右足を乗せ、鳥類の様な瞳で何も無い筈の場所を見ている。その場所はミラーワールド内でナイト達が闘っている場所だ。

少女の鳥類の様な瞳以外の特徴としては、二十歳前後の見た目と三色の長髪だ。髪の色は赤、紅、緋色である。長髪を首の後ろで緋色のリボンで束ねており、あの男と似た髪型だ。

『本当に来るかな？ 魅空』

少女の躰の中から、やんわりとした声が聞こえた。

「来る。奴の話だと、あいつはリュウガというライダーに目を付けられてるそうだからなあ。ご機嫌とりにくるだろうよ」

少女自体の口から出た声は、刺々しさを感じる男性の声だった。

『ご機嫌とり？』

「オーデインとかいうライダーは、神崎の忠実な手駒だ。そいつを倒せば株も上がり、奴の立場は良くはならないが、これ以上悪くならない。そうだろう？」

『へえ〜。魅空も変わったね。人に媚びたりする様な子じゃなかったのに。でも、闘って欲しくないな〜。怪我は駄目だよ。痛いし、痛いし、痛いし。あっ！ オセロ！ オセロならどうか？ 平和的だし、楽しいし！』

「ハッ。お前やっぱ馬鹿か？ いや、馬鹿だ。俺に躰を貸すような奴が平和主義気取んなよ、フヨウ」

馬鹿。そう言った時、少女は自分の頭を数回こずく。彼女自身の名前は、？フヨウ・マーガトロイド？。魅空の居た未来の幻想郷から来た魔法使い。親は霧雨 魔理沙に並ぶ大魔法使い、アリス・マー

ガトロイド。フヨウ自身も親の名に恥じない実力を持つ。

？何もかもが、魅空と真逆の少女？

『そんな何回も馬鹿って言わないでよ。私、古文以外のテストはいつも90点代だったんだよ？』

「そう言う意味の馬鹿じゃねーよ。この馬鹿。馬鹿、馬鹿、馬鹿、バーカ」

『ぐすん……アंकってば酷い』

そして、今彼女の躰を使っているのはアंक。鳥系グリード。アंकは？昔の様に？フヨウの躰にコアメダルを入れ、本人からの許可を得て憑依している。

もう一度言う。

昔の様に、想い人の背中を負う為にアंकを憑依させている。

『でも…馬鹿にされても、魅空にまた逢えるのは嬉しいよ。ありがとうねアंक、呼んでくれて』

「うるせーよ馬鹿。しかし、お前も物好きだよなあ。あんな奴、どこが良いんだよ」

『えー？ カッコいいよお、魅空。男の子なのに髪が綺麗だし、女の子に優しいし、努力家でえ〜』

今までのおっとりした感じの声が、デレデレとした風になる。

「あゝ、あゝ」

アंकが耳を塞ぎ、フヨウの面倒な惚気を見殺ししようとしたが、声は軀の中から聞こえている。耳を塞いでいても意味が無い。結局、数分間の間、眼にはナイト達の闘いを見て、耳もとい軀ではフヨウの惚気を聞くはめになった。アंकは意味も無いのに人差し指を耳の穴に入れ、深くため息をついた。

『それに……それに……魅空は？固？をしつかり持つてる……』

その言葉も、アंकは意味が無い物と判断して聞き流した。

*

《TRICK VENT》

バイザーの羽を開き、柄の中にカードをベントイン。自分の分身を生み出すシャドৌリュージョンを発動した。

自身を含め五人に分身したナイト。二人をその場に待機させ、三人でオーデインに斬り掛かった。三振りの細身の剣が発する剣風は空気を裂きながらオーデインに振り下ろされる。直撃の瞬間に、オーデインが瞬間移動で躲した。

回避して現れた場所はナイト達が居た場所より数メートル離れた所。また瞬間移動をして攻撃しようと羽を散らす。すると背中に突かれた様な衝撃がした。オーデインの背中を穿たのは二振りの剣。待機していたナイトの分身だ。オーデインは瞬間移動し、ナイト達が居

ないであろう場所に移動する。

これで三度目だ。

既にナイトはオーデインの出現パターンを読み、攻撃をできる様になっっていた。

「パターンとは恐ろしいですね。それが読めてしまえば、どんな強者として簡単に触れられる」

五人の声が重なって聞こえる。その声は軽く小馬鹿にしている様で、勝利を掴んだ者のそれだ。ナイト達が囲む様にして立ち、五方向から横振りに斬り付ける。が、オーデインは瞬間移動で躲した為に、五振りのバイザーがぶつかり火花を出した。

瞬間移動での回避。最早それは恐れる能力ではない。バイザーとバイザーがぶつかった衝撃で痺れる手を軽く振り、ナイトの1人がカードを手にする。

《SWORD VENT》

ナイトの上空に巨大な蝙蝠　ダークウイングが通過しナイトに槍状の剣、ウイングランサーを授けた。ウイングランサーを持つのは本体だけなので、分身との見分けがつくようになってしまったが大した問題ではない。

分身達が先陣となり、流れる様に攻撃する。4人の攻撃を簡単な動きで躲すオーデイン。最後に両手でしっかりと握ったウイングランサーを構え、本体のナイトが軽い助走を加えて黒槍を突き出した。

オーデインの顔面を貫こうとした刹那、金属音と共にウイングランサーが弾かれた。

オーデインの身を守ったのは鳳凰召錫ゴルトバイザー。持ち主の意思を受けて転送されてくる、錫杖型の召喚機である。攻撃を弾いたゴルドバイザーに手にし、ナイトのマスクを殴り付けた。

「がつ!!」

真正面の攻撃が直撃したナイトが吹っ飛び、分身達が本体を受けとめる。

ナイトが離れると先端の鳥状の飾りの下の部分をスライドさせてその中にアドベントカードをベントインする。

《STEAL VENT》

スチールベント。その電子音が鳴るとナイトの手におさまっていたウイングランサーが、オーデインの手にあった。

「っ!?!」

ナイトは自分の手とオーデインの手にあるウイングランサーを交互に見る。スチールベントの効果は相手の武器を奪う。今やウイングランサーの所有権はオーデインにあった。バイザーを手放し、瞬間移動をする。

再び現れると、ウイングランサーで分身の内一体を貫いた。分身がガラス砕ける様にして消滅する。残った分身は攻撃しようとしたが、オーデインは瞬間移動で回避。そしてまた1人、ウイングランサー

で斬り付けられ消滅した。残っていた三人も、直ぐに同じ様にして倒される。

分身が全て消えたナイトの正面に、ウイングランサーを地面に突き立てたオーデインが立つ。

少しの静寂。その静寂は最初よりも早く終わった。

睨み合っていたら、ナイトがおさめていたバイザーを抜き取り、斬り掛かるがオーデインがウイングランサーで弾いた。下から振り上げる様にして弾かれた為に、ナイトの躰が無防備になる。その無防備な下腹部にオーデインが蹴り付けた。短い呻き声を上げ、後方に下がった。1、2メートル離れた二人は、相手から視線を離さず横走りで移動する。移動する事に近づいていき、走りながらそれぞれの獲物をぶつけ合った。数十回擦れ合う金属音が響くと、二人はつばぜり合いで組み合う。

ギチギチ。力が拮抗する中で聞こえるのは、己の躰が出す生命音と、獲物の音。ふと、今まで手に来ていた相手の力が無くなる事を感じるナイト。オーデインが瞬間移動で背中に回り込んだのだ。

直ぐ様ナイトのマスクの右側が軋み、地面に叩きつけられた。オーデインの蹴りで地面に伏したナイトは痛みに悶える事無く、倒れた状態で敵の足下を斬り付ける。瞬間移動で躲そうとしたらしいが、間に合わず脚に直撃した。

瞬間移動で再び距離を取ったオーデインに、息を少し荒くして立ち上がるナイト。ナイトの優勢だった空気は、もう無い。

「五分五分……ですかね？ まあ想定範囲内です」

『よくもまあ……ついてこれたモノだ…鎧を得ただけの女…』
「ごときが」

「世の中、女性の方が強いそうですよ？」

売り言葉に買い言葉。力の拮抗は、簡単な出来事で崩れる。その為の皮肉。これは相手を認めた証とも言える。こういった形の一对一は神聖なモノ。邪魔するのは無粋だ。二人の間に張る闘争の糸を揺らしてはいけない。

だが、邪魔するのが奴の真髄。

《トリプル・スキヤニングチャージ！》

バイザーからは出ないであろう電子音が鳴ると、二人の仮面ライダーは反射的に跳躍しその場から離れた。すると広範囲の木々に剣の軌跡の様な物が入り、ズレた。距離を必要としない広範囲斬撃の『オーズバッシュ』。標的に当たっていない為に木々のズレが直る。

オーディンは沈黙し、ナイトは何事かとキョロキョロとする。

「お前らって、努力とか信じるタイプ？」

現れたのは、メダジャリバーを肩に掛けたオーズ・タトバコンボ。

「努力。目標を叶える為の道しるべ？ ハハハッ……馬鹿らし。努力は実モノ？ アホじゃね。努力は叶わねえ奴は叶わねえし、叶う奴ってのは本当は努力なんて必要じゃねーんだ。いわゆる才能。才能が無ければ努力なんて無駄、才能がある奴は努力で叶ったと思っ

て幻想に酔いしれる。知ってるか？ 人間って奴は、本当は皆運動神経は同じなんだぜ。では何故差が生まれるか。それは覚えられないか、覚えられないか」

一度言葉を切り、メダジャリバーを杖の様にして地面に突き立てる。

「つまり覚えられなかった奴は跳び箱は跳べない。覚えられるか奴は逆上がりができる。物覚えが悪い奴がいくら努力しても勉強、運動は上達しない。修行して強くなる奴は、素質がある物覚えが良い奴って事だ。他にも、練習をさぼって下手になる奴は才能が無かっただけの付け焼き刃。様は才能が無ければ何したって意味が無い。無駄って事さ」

喋りながら、メダジャリバーを引き摺りナイトの隣に立つ。何故自分の隣に……訝しげにオーズを見た。

「……………何故その話を？」

「お前、オーディンに勝とうと努力したみたいだけど、それ無駄だから。だから忠告してやったんだよ、感謝しな」

「なっ!？」

思わず声を上げた。今まで自分の努力と、ダークウイングの働きを否定されたのだ。何も言わない訳にはいかない。

「んだよ、解んねーかあ？ あゝあ？ お前はオーディンを倒せない。だから、俺がやるつってんだ」

「オーディンは私が倒します。後からしゃしゃり出ておいて、その

物言いは……！」

「黙れ。俺にだって事情があんだ。それに……俺は誰よりも劣っている自信がある」

それが戦闘にどう影響するのか、とナイトが問う。

「ハッ、人より劣っているのは、底辺に居るって事だ。そんな俺は人の弱点を探って生きてきたんだぜ。そんでよ」

メダジャリバーを地面から離し、離れているオーデインに向けた。

「俺は他人を？三つの意味で殺す事？に関しては、天才だと自負してんだぜ？」

自信満々に言った言葉だが、ナイトはただ呆れるだけだった。

本編が真面目だった為、オマケ。

『リュウガ先生の人生相談』

相談者1：月見狼夜。

狼夜

「えーと……ナニコレ？ 何してんのリュウガ」

リュウガ

「いやね？ 最近魅空ばっか出て私の出番ないじゃん。だからヒ

マデヒマで……そこで、暇潰しに君達の恋愛相談、トラウマ、過去の過ち、黒歴史とかの穿り回そうかとね」

狼夜

「さっすがリュウガ。暇人度全開だね！！」

リュウガ

「A H A H A H A。ナンテコツタイ。軽い罵倒だよ。そんで？　なんか無いわけ、悩み。無ければ君の黒歴史喋っちゃうよ」

狼夜

「なんで黒歴史しってたよってツツコンだら負けかいな？」

リュウガ

「ツツコンでもいいよ。どうせなら肉体的にも精神的にもビシバシ来い！　やられればやられる程私は悦ぶぞ！　びくんびくん」

狼夜

「こんなリーダーで大丈夫か？」

リュウガ

「大丈夫だ。問題無い」

狼夜

「うーん……悩みねえ。あつ、そーいえばさ。最近うどんげがモジモジしてあんま近づいてこないんだよね。けーねはどんどん擦り寄ってくるのに」

リュウガ

「ほういいねえいいねえ　面白いねえ」

『テヘツ』

うどんげ（号泣）

「……………！！……………！！！」

狼夜

「ふざけんなあああああ！！！」

狼夜が本気で怒りはじめた為中止。

相談者2：時森将斗

リュウガ

「さーてヨロイ君。お悩みはあるかな？」

将斗

「

……………無い」

リュウガ

「何今の超沈黙」

将斗

「狼夜……………が……………なんにも……………話さない方が……………いいって……………」

……………言ってた」

リュウガ

「あいやー、オオカミ君かぁー。ジイイイザアアアアスー！！と私は叫んでみたり。まあいいや。じゃあ、なんか気になる事ない？ お姉さんが解る限りは15文字以内で教えて上げよう」

将斗

「……………」

リュウガ

「私はこの沈黙を何かを考えてると信じて待とうじゃないか」

将斗

「……………」

リュウガ

「いいよいいよお。私は待つよお」

将斗

「……………」

リュウガ

「これは放置プレイ。これは放置プレイ。自己暗示すれば耐えられるとかじゃなくて、これはガチで放置プレイ」

将斗

「……………」

リュウガ

「……………ぐすん」

将斗

「……………あっ」

リュウガ

「キタコレエエー！！ でっ！？ なになに？」

将斗

「……う……ん…… 赤ん坊……って……どこからくるの？」

リュウガ

「……………えっ？」

将斗

「…………… 赤ん坊……って……どこから……くる？」

リュウガ

「ヨロイ君人の理知らなかったの！？ 現代から来たのになに、この純情っ子。ここ最近で一番の驚きなんだけど」

将斗

「……で……………どこから……くる……………？」

リュウガ

「ふっふっふっ。知りたいかね知りたいかね？ ならば教えてしんぜよう。私の躰で」

メルカバ

「不純異性交遊反対！！」

リュウガ

「うわっ！ 保護者来ちゃったよ！！」

メルカバ

「リュウガ貴様ああ！ うちの子に何教えようとしているのだ！」

リュウガ

「なーに言ってるの。男の子女の子、共通の話よコレ。必ず通る道よコレコレ。だから私は躰を使って聖職者の立ち位置をねコレコレコレ」

メルカバ

「だからってお前のは無いだろう！ 躰を張るってどんな淫乱教師！？ それに将斗！ 知りたかったら私に聞け」

将斗

「う……ん……じゃ……教……えて」

メルカバ

「うむ。ならば赤ん坊を作る過程から教えよう。まずは男性の外部生殖器　つまり陰茎だな。陰茎が海綿体の充血により大きく硬くなること　勃起状態にする。ちなみに海綿体とは陰茎および陰核の主体をなす組織だ。固い結合組織の膜で取り巻かれ、静脈性の血管腔が網目状に連絡しており、内部に血液が満ちると勃起するのだ。そしてその男性器を女性の膣　膣とは女性生殖器の一部である。陰門から子宮頸部までの間だ。交接の際に陰茎を入れ、分娩時には産道となる部分だ。膣に男性器を挿入の後、女性器内部に精子を」

ー

リュウガ

「ちよつとまてえい。真面目に話してるから解りにくい上に、なんか生々しんですけど。やめたげてよお！　読者がちんぷんかんぷんでしょお！　やめたげてよお！」

その後、メルカバが真面目に五時間以上に話してしまいリュウガが

ダウンしたため、中止。

相談者3：楯神詩織

詩織

「好きな人の事を想ったら夜も眠れません！ どうしたよかですか！？」

リュウガ

「押し倒せ（相手を）　！！。はい、終了！！」

詩織

「…………いや適当過ぎでしょ。なんで僕の時はそのような適当なんですか？」

リュウガ

「ワタシ、ジュンスイナレンアイニキョウミナイヨ」

詩織

「ええ……。じゃあせめて、理想の恋愛とか教えてくださいよ」

リュウガ

「そりゃあ…ねえ？　夜に食べたり食べられたり」

詩織

「直球ど真ん中過ぎですから。もうちょっと自重してください」

リュウガ

「私の　をにゃんにゃんしたり、相手の×××をにゃんにゃんしたり」

詩織

「……貴女こんなキャラでしたっけ？」

リュウガ

「これが私だから。でもさ、こんな性格になったのも理由があるのさ。皆みたいになんかの過去が……」

メルカバ

「楯神よ。こんな奴から話を聞いても駄目になるぞ。代わりと言ってはなんだが、私が話を聞こうじゃないか」

詩織

「はい。解りました先生」

相談者をメルカバに盗られた為中止。因みにリュウガはorz
みたいになっていた。

相談者4：魅空

魅空

「死ね」

リュウガ

「君が死ね」

魅空

「お前だけが死ね。俺は生きてハーレムを作る」

リュウガ

「君だけが濃硫酸のプールに浸かって死ね。私は美鈴とか男の子とにゃんにゃんしながら生きる」

魅空

「お前だけがアルプス山脈のてっぺんから落ちて死ね。俺はカザリに恥ずかしい格好させながら生きる」

リュウガ

「君だけが風都タワーから落ちて死ね。私はヨロイ君に正しい性行為を教えたりして生きる」

魅空

「お前だけが明日のパンツを失って死ね。俺は慧音の裸を視姦しながら生きる」

リュウガ

「君だけが×××をボックスドライバーに改造されて死ね。私はライオン君に間違った恋愛方法を教えたりして生きる」

魅空

「お前だけが東京スカイツリーで紐無しバンジーして死ね。俺はガメルにコスプレさせたりして生きる」

リュウガ

「君だけがFFRされて全身複雑骨折して死ね。私はオオカミ君をオカズにしたりして生きる」

魅空

「……………」

リュウガ

「……………」

リュウガ&魅空

「いい加減にしろおおおおお！！！！」

魅空

「お前マジでふざけんなよ！？ 死ぬ死ぬいいすぎだろおお！！」

リュウガ

「君こそ出しゃばり過ぎ！ 最近本編に毎回出てんじゃん！ コラボにも出てんじゃん！ 私名前だけだよ、しかも本名じゃないし！」

魅空

「ふざけんな！ アホ、マヌケ、トンマ！ さっき討論のせいでキヤラ被って俺目立ってねーじゃねーかあ！」

リュウガ

「はい私リュウガ、本名××××でえす！ 好きな事は美鈴のストーリーキング、オカズになる男の子（今は狼夜がお気に入り）探しです！」

魅空

「あつ！ クソ先越された！ 魅空どえーす。好きな女体は慧音の全裸etc！」

リュウガ&魅空

「真似すんなあああああ！！」

その後、リュウガと魅空は討論を続けた為中止。

カオスなオマケ終了。

『EPISODE・29 / 英雄欲の蝙蝠騎士』（後書き）

いまさらだけど、ミラーワールドは仮面ライダーなら入れるというご都合主義です。

フヨウの髪は本来、アリスと同色です。イメージは魅空が完全な悪玉、フヨウが完全な善玉です。フヨウはアंकが憑依しなければ、基本的におっとり系の天然キャラとなっております。好きなゲームは昔魅空が教えてくれたオセロ。

次回も宜しく御願います！

『番外EPIISODE・ノコラボは楽しむ物・交流を深める物・相手に迷惑をか

ども、只今絶賛スランプ中の仮面3です。

今回は終始グダグダの番外編。ちょっとしたゲストとの雑談です。
ネタバレ、メタ発言があるのでご注意ください。

そしてフロストさん、ありがとうございました！

ゆっくりしていいね！！！！！

あつ、豆知識忘れた……。

『番外EPIISODE・ノコラボは楽しむ物・交流を深める物・相手に迷惑をか

八雲家。

その居間、ちゃぶ台で互いの正面を見るようにして座る二人。ご存知幻想郷の麗しきスキマ様、男共よひれ伏しなさい、あと最近コーカスになった八雲紫。幻想郷一のもふもふ尻尾で他のケモ耳を圧倒する、八雲藍。

藍

「なんですかね？ 今の説明」

紫

「まあ間違っていないけどね。あと作者は藍の尻尾を一本ひっこ抜いてもふもふしたいそうよ」

もっふもっふ

藍

「なぜか……いえ、確実に恐怖を感じました」

紫

「最近、変態（魅空とか別作品のジョージ）を書きすぎて、作者自身も変態になりかけてるから」

そう言って、藍が淹れたお茶を啜る。

藍

「ところで……紫様？」

紫

「なに？」

藍

「今回……前回に続いてナイトVSオーディンVSオーズの続きの筈だったのでは？」

紫

「作者がスランプでまったく書けなかったのよ。だから本編のオマケを、今回番外編としてやるの」

次回までには脱出します。ごめんなさい。

藍

「スランプだけあって、いつもよりナレーションもだれてますね」

紫

「そう？ いつもこんな感じでしょ。それよりも今回の本題」

リュウガ

「現在、フロストさんが執筆中であり好評連載中の『仮面ライダー逆鬼と夜天と魔法少女と』とコラボしてよー！ 将斗、メルカバ、詩織、魅空、カザリが出張中ー！」

藍

「うわっ、びっくりした……。いきなりでてこないでくださいよ」

リュウガは八雲家の屋根裏に住んでいます。言うなれば基本NEET生活を送っている。やる事といえば仮面ライダーの指揮と、藍の目

を盗んで食材を盗むだけである。

リュウガ

「うわーん！ 酷い説明された〜！」

藍

「間違ってますね」

紫

「間違っていないわね」

リュウガ

「どぼちて！？」

藍

「というか、なんで変身してるんですか？」

リュウガ

「いやだって、まだ本編で正体明かしてないのに、番外編でだすわけにはいかないっしょ？ 藍ちゃんお茶ちょーだい」

藍

「どうやって飲むつもりですか」

紫

「それよりも今回の本題。コラボを宣伝する為にゲストを呼んだわ」

リュウガ

「いまっさらだけどねー」

紫

「で、そのゲストだけど……こないわね」

リュウガ

「そろそろ来るって話だけど…」

ゲストがまだ来ない事を不審に思っているリュウガと紫。藍はゲストすら教えてもらっておらず、不思議に思っていたがまずリュウガに出す茶を淹れようと腰を上げた。

あの顔（マスク）でどうやって茶を飲むのだろうと考えながら台所に向かう。移動中、頭の狐耳に入ってくる会話からゲストを想像したが、気になる単語が？真つ黒の悪魔？？メイド・巫女好きのバカ？？ヤンデレのキバ？の三つ。おそらくゲストは三人、だがどんな人物か想像し難い。

台所に続く戸に近づくと、ふと違和感に気付いた。

台所に……誰がいる。

今、この家に居るのは自分、主人、黒龍騎士ニートの三人。他の者などいない筈だ。

リュウガ

「ニートって言った？ 今ニートって言ったよね？ え？ じゃあ聞くけどさ、こんな活発に出歩くニートいる？ 私結構出歩いてるよ、ストーキングに勤しんでるんだよ？」

黒龍騎士自宅警備員を無視して、戸にそっと近づき聞き耳を立てる。

リュウガ

「なに、黒龍騎士自宅警備員って？ なにそのジョブ。地味にカツコよさそう」

台所からは食物を調理する音と、数人の話声が聞こえてくる。１人は少年、１人は大人の男、１人は少女だろうか。なぜ料理を？ 強盗や空巢ならこんなことはしない。なら……一体？

数分考えた藍は、一決して戸を開けた。

藍

「何者だ！！」

戸を開け、視界に広がる台所の光景。そこには。

荒木錬矢

「サカキ」。器持ってこーい」

八神サカキ

「ほー、ここ食器が無駄にあるな」

ソラ・ザ・ファルコン

「……………」

台所には、全身真っ黒という表現がピッタリの男がスーブラしき物を作り、Ｔシャツにズボンその上からド派手な朱色の着物を着流している少年が八雲家の食器棚を物色、藍色の腰まで届くポニーテールに青い瞳の少女は黙々と中華鍋を振っていた。

あー、あれは粟米湯と炒飯を作っているのかぁ……なるほどなるほど……。

額に手をやり、納得した様子でウンウンと頷く藍。そしてクワツと眼を開きシャウトした。

藍

「いやなにやってんのオオオ!!!!!!?」

藍の叫びが台所に響く。それにより少女以外が、藍の方を見た。

鍊矢

「何って…粟米湯と炒飯作ってますが、ナニカ?」

藍

「いやそれは見たら分かるが! 貴様等は何者だっ!!」

サカキ

「THE・GUESTです」

藍

「貴方達がゲスト!? 新手の泥棒かと思ったよ!! ていうかなんで粟米湯と炒飯作ってるのですか!?!」

鍊矢

「いやな? お呼ばれたんだから何か振る舞おうかと思ってな。ここの食材で」

藍

「何であああああ!! 普通こういう場合、貴方達が食材を持っ

てくるべきでしょう！？ それうちのコーン、うちの卵、うちの米、うちのネギ、うちのハム、それ八雲家の粟米湯と炒飯なんなんん！！！」

いきなり展開される逆鬼ワールドに、藍はツツコミ疲れて肩で息をしている。そこに、リュウガと紫がやってきた。

紫

「さっそくやってくれてるわね」

リュウガ

「銀魂的なノリがうりだからね」

鍊矢

「おお、ゆかりんにリュウちゃん。おいーす」

紫&リュウガ

「おいーす」

サカキ

「銀魂的ノリつつても、ここは9割くらいパクってるがな」

藍

「銀魂的ノリとかよりも！　なんで台所に侵入してるんですか？　普通に玄関から……」

ソラ

「炒飯できました！」

藍の常識的なセリフは、ソラの元気がいい声に遮られた。

藍

「ずっと喋らないと思ってたら炒飯作ってたよ、この娘。一言も喋らずに炒飯作るってどんな集中力？」

サカキ

「ソラは真面目だから」

藍

「真面目って言えるのかコレ！？」

紫

「もしかもしかもしか」

リュウガ

「もしかもしかもしか」

藍

「さっそく食つとるがな！！ ていうかリュウガ様、貴方どうやって食べてるんですか！？」

リュウガ

「HENTAIに不可能は無い」

紫

「ちょっとコレ海老炒飯じゃない！ 普通炒飯に入れると言ったら蟹でしょう！？」

ソラ

「何を言っているのですか。炒飯に入れる海鮮類は海老に決まって

います。比較的手に入れやすいですし、何より美味しいです」

紫

「海鮮類Ⅱ豪華。海鮮類が入って華やかさと豪華さをプラスするというのに、海老だなんて……蟹の方が美味しいし、豪華さがあるわ」

ソラ

「別に豪華さを気にする必要なんて無いではありませんか。蟹より手に入れやすい海老だからこそ親近感が湧きますし、色々と工夫できます」

紫

「工夫？ ちゃんちゃんらおかしいわね。工夫せず、そのままの姿で勝負するべきでしょうがああああ！！！！」

藍

「さっきから何してんの貴方達はああああ！！！！ 喧嘩？ 喧嘩してるのコレ？ 炒飯の海老とか蟹で喧嘩しているヒトってはじめだよ！！ リュウガ様もなにか言ってくださいよ！」

リュウガ

「えー、私って味覚感じないし……」

藍

「この人また本編で語られていない設定を、さらっとばらしたよ。この人ネタバレ嫌いな人の敵だよ」

その後、藍がツツコミどころ満載のゲストとのやりとりを終え、リュウガと紫は愚痴を零しながら炒飯等を完食した。

*

再び居間。今度は鍊矢、サカキ、ソラを加えた六人でちゃぶ台を囲んでいる。

鍊矢

「えー、改めて。『逆鬼』からのゲスト、皆からは悪魔って言われるけど本当の姿はグレードダイ、荒木鍊矢だ」

本当の姿はマジの悪魔。

サカキ

「『逆鬼』では主人公をやっている。あと神社に来る奴の七割は巫女さん目当てと信じている、逆鬼こと八神サカキDA」

巫女とメイドが大好物。

ソラ

「蒼剣のキバに変身します。よく皆さんには私の実家がやの付く職業の所と勘違いされますが、あれは皆の結束とやんちゃな子供心が強いだけ。ソラ・ザ・ファルコンです」

ほばやーさん家系に見えるのは私だけ？

紫

「最近コーカサスにジョブチェンジしたけど、出番がなかなか回っ

てこない八雲紫よ。魅空、首の骨が折れればいいのに」

人間、首の骨だけ折れても案外しない。脊髄を酷く傷つけなければ、死ぬ事はあまりない。

リュウガ

「最近、同居人の藍ちゃんから黒龍騎士自宅警備員と虐められてます。だけどそれでも感じちゃう。リュウガこと××××です。ビクンビクン。あと魅空、全身複雑骨折すればいいのに」

自宅警備員 ニート。自宅警備員は職っぱいから、ニートとは別物
byリュウガ。

藍

「いや、なんで貴方達も自己紹介してるんですか。特にリュウガ様、貴方の説明はHENTAIニートだけで十分でしょう?」

リュウガ

「おお、毒舌毒舌。ビクンビクン。てか、なんで藍ちゃんまでリュウガって呼ぶの? 本名で呼んでよ、このいけず!」

藍

「流石本名をばらすのはダメでしょう」

鍊矢

「さて、そろそろ無駄話を止めて、コラボの宣伝にいくぞ」

リュウガ

「本当にいまっさらだけどねー。じゃあまず『逆鬼』の宣伝から!」

【仮面ライダー逆鬼と夜天と魔法少女と：作者・フロスト様】

戦国時代の鬼、サカキがリリなのの世界である未来へ。以上。

藍&サカキ

「いやテキトオオオオオ！！！！」

紫

「あとは見て楽しめってことね」

サカキ

「いい感じにまとめんなっ！ これこっちの作者が説明めんどくなっただけだろうが！！」

ぶっっちゃけ、イエス。

サカキ

「それみたことかつ！！」

藍

「コラボしていただいているのに、流石にこれは……」

リユウガ

「メルカバを軽いマヨネーズ恐怖症にしたり、魅空が完全なギャグキャラにされたり、将斗が青春したり、詩織がリオンミサイルにされたり、カザリがウエイトレスしたり、そんな作品です」

藍&サカキ

「間違ってない！ だけど間違ってる！！」

ソラ

「さつきから面白い様にハマりますね。おお、妬ましい」

鍊矢

「コラボの話としては」

藍&サカキ

「完全無視スか!？」

紫

「いやー、藍がツツコミに目覚めているわね。流石サカキクオリティー」

鍊矢

「コラボの大方のあらすじは、コメメダル不足の魅空がカザリを連れてサカキワールドへ 将斗、メルカバ、詩織、リュウちゃんの手引きでサカキワールドへ派遣。後は興味を持った奴は是非見てくれ」

サカキ

「龍騎キャラが不幸になったりしてる。多分、いまんとこまともに扱われているのは将斗くらい？」

ソラ

「あと将斗様に新しい相棒？ が憑きました」

リュウガ

「よし。あらかたコラボ宣伝したし、あとはウダウダ雑談しよっ」

藍

「（；）！？」

紫

「まあ、『逆鬼』のキャラを覚えてもらうにはちょうどいいでしょう？　ていうか私、ここに居る必要はない？」

鍊矢

「ゆかりんはここにいるだけでいいんだ。ここにいるだけで花になる」

そう言っで、鍊矢は己の手を紫の頬に添える。

紫

「まあ……」

二人の間に、ほのかにほわほわとした空気が流れる。

サカキ

「ナニコレ？　なにこの空気？　気持ち悪いんですけどおおー！！」

ソラ

「それにしてもこれも一応コラボになりますよね？」

リュウガ

「イエス。作者こと仮面3の文章能力は泣けるから、本格的なコラボはムリムリ。『歌舞鬼』の方でもプチコラボしてくくらいだからね」

藍

「それだったらフロストさんは凄いですよね。結構コラボしてますし。流石です」

錬矢&サカキ&ソラ

「もつと褒めてもいいのよ？」

リュウガ

「あつ、そーいえばさ。最近まで竜王の白翼さんって作者さんの作品の感想数がさ、100件越えたんだって。凄いいねー」

紫

「あら？ この作品も100件越えてなかったかしら」

リュウガ

「うん。さらつと100件越えてたよ。でも大して人気の無い作品だから、なにもしなかったけど。因みにちょうど100件目に書き込んでくれたのが、フロストさんなのだよ！」

ソラ

「えっ、そうなんですか？」

サカキ

「マジか」

リュウガ

「マジ・マジ・マジ・マジーロ。様はそういうこった」

サカキ

「マジ・マジ・マジ・マジカ！」

ソラ

「マージ・ジルマ・マジ・ジンガ！」

錬矢

「ゴール・ゴル・ゴル・ゴルデューロ！」

紫

「メーザ・ザザレ！」

藍

「ゴール・ルーマ・ゴル・ゴンガ！」

リュウガ

「いや、マジレンジャーネタに皆でのもってこなくていいから」

私はスモークキーが好き！

リュウガ

「作者までのってこなくていいから。しかし、ここまでこれたのは読者の皆さんのおかげだよ。感想を書いてくれた皆さん、お気に入り登録してくれた皆さん、見てくれた皆さん。本当にありがとう」

藍

「アレ、なんか終わりっぽい雰囲気？」

紫

「まだ終わらないから安心しなさい」

リュウガ

「この作品も、あとちょっと と言っても結構先 で終盤戦。それを踏まえて最終章。私が正体を明かした辺りから最終回までの予告をやってみよう！」

サカキ&錬矢&ソラ

「興味無いわー」

リュウガ&紫&藍

「どぼちて!？」

仮面ライダー龍騎 闘いの火種は幻想の都へ The final

chapter……

激化を続けた闘い。闘い合うライダー達。残りのライダーが六人となり、その場で決着がつきそうな程、熱く闘う。あの龍騎ですら、怒りに取り憑かれ拳を振るった。その闘いを一旦止めたのは、リュウガだった。そして明かされ、語られる彼女の正体。

「やっと…やっとちゃんと逢えたね。美鈴。もう一人の私」

「え……？ ちょ、貴女は……！」

神崎士郎が仕掛けた闘いの加速。その中で、破壊神の名を持つライダー・シヴァが現れる。シヴァは邪魔なライダーを消す為の、ライダー狩りを開始する

「なんで……こんな……」

「別に。どうでもいいじゃないか。君、死ぬんだから。それとも僕

に憑かれたこの娘みたいに、空っぽになつて生きたい？」

シヴァによるライダー狩りでライダー達は徐々にリウガ側のライダーは減つていく。その中で、自ら紫の力に取り込まれた彼は、リウガを裏切る。そして彼は、とある女教師にその本性を見せる。

「んー？ ナニカナーその眼は？ えーナニナニナニナニナニナニナニナニナニナニナニナニニイ！ なーにいその眼えええ！ 憎い？ 俺が憎いの？ ねえええ憎いのかなああああああ！……！？ けーね先生よおおお！！！！！！ アハハハハハハハ、ヒヒヒヒヒヒ！！ 餓鬼共に道德教える先生様が、そんな眼で人みちゃったらダメでしょーが！ 無様無様無様無様ア！！！！」

「……………別に……………お前が……………憎いわけじゃ……………ない……………さ」

「……………あゝあ？」

ライダー狩りの横行、オーズの離反。それでも闘いは続いた。だが、仲間が減る中でも、希望は薄れない。

「僕は……………僕が信じるお宝を求め続けるだけさ」

《KAMEN RIDE DIEND!》

「いくよ…鈴仙」

「…うん」

《CRYSTAL!》

《SKULL! / RAIONES!》

「闘う理由ですか……自分の下の者に、痛いビンタで目を醒めさせられたかしらね」

《Hensin》

「信じるとか信じないとかじゃないんですよ！ 私は、信じたいんだ！ 私は私（ギルス）を！ 私は周りを！ 世界を信じたいんだー！」

希望により光明が差したかと思っただ、破壊神は止まらない。そして、闘いはより佳境へ。

「ここらが……限界かしらね」

「私は……私は！」

「貴方に逢えた事が、貴方を知れた事が、貴方を護れた事が……貴方を……好きになれた事が……幸せでしたっス……はは……」

「……若葉？ 若葉、ねえ若葉……あああああ！ ああああ
ああああああああああああああ あああ ああああ
ああああああああああ あああ あああああ……！！！！
！」

「護れないとか、できないとか……もう嫌なんだ！ たた狂って暴れるんじゃないくて、意識をもってヒトを護りたいんだ！」

「最後に…見せてよ。魅空の笑った顔」

「……分かった。分かったよ、やってやるよ。一度だ、一度だけ、人間に戻ってやるよ!!」

《カトブレパス！ ウィッチ！ ジン！》

それぞれの想いが錯綜する。そして闘いの終演は、もっともありがちで、もっと悲しい。

「じゃあな。元気で生きろよ」

「楽しかったし、嬉しかった」

全てが終わり、ハッピーエンドとバッドエンドは、同時に幻想郷に降り注ぐ。

サカキ

「いや、断片的過ぎてちんぷんかんぷんなんだけど」

リュウガ

「いや断片の方が妄想膨らむでしょー。そのためにセリフに名前付けてないんだから」

鍊矢

「さっすがリュウちゃん！ いろいろと端折ったのを、もっともらしい理由を付けてうやむやにしてるね！」

リュウガ

「アイタタタタター。そげなこと言わんといてーな。でも実際にいろいろあんのさね。ライオン君（詩織）とウサビッチ（鈴仙）が二人で一人の仮面ライダーになったり、私と美鈴がクロスフーリージョンしたり、魅空（ファツキュー）とフヨウちゃんがあるだこーだしたり」

魅空

「俺に関してテキトーすぎじゃね？」

多分、この中で一番嫌われているであろう奴の声がした。その瞬間、全員が声のした方を見る。そこには『自称空気の読めるKY』、なんかぱっと思いついた奴なのに、思った以上に物語に食い込む奴、魅空が『龍牙』と書かれた湯飲みの中身を嚙っていた。それぞれ言いたい事があるのだらう。皆を口を開こうとしたが、一人だけ早く言葉を放った。

リュウガ

「なに私のお茶飲んでんだあああああ！」

全員

「えっ！？　まずそこ！？」

リュウガ

「その湯飲みに魅空菌が住み着くじゃねーかあー！！」

魅空

「魅空菌ってなんだよ！　お前は小学生かー！！」

紫

「予告のセリフは変わる可能性があります」

サカキ

「今言うことか？」

魅空とリュウガが殴り合いを始めた為休憩。

魅空

「はい。というワケで、皆様のプリンス、魅空でございます」

リュウガ

「死」

紫

「ね」

藍

「ば」

鍊矢

「い」

サカキ

「い」

ソラ

「の」

リュウガ

「に」

上から読んでみよう！

魅空

「人数足りなくて一周してんじゃねーか！！ ナニコレニユータイ
プの虐め！？」

鍊矢

「で、質問があるんだが」

魅空

「無視かよ！！」

鍊矢

「なんで『魔女』じゃなくて『ウィッチ』？」

魅空

「《カトブレパス！ マジヨ！ ジン！》じゃ、ごろわりーだろ」

ソラ

「なんで生きてるんですか？」

魅空

「ちょ！ ストレート過ぎじゃないソラちゅあん！？ 生きたいか
ら生きてるに決まってるでしょーに。ちゅーかソラちゃん、君こん
なキャラだっけ。『逆鬼』見るかぎり君礼儀正しいキャラだよね？」

ソラ

「たまにこうなります」

魅空

「はた迷惑う!!」

そう言つて、魅空はちやぶ台をドンと殴る。

サカキ

「お前、ジャリ剣どこにしまってんの？　いつもどこから取り出すけどよ」

魅空

「どこつて、躰から」

サカキ&ソラ&鍊矢

「……………は？」

魅空

「なに？　信じられない感じ？　ほれ」

そう告げると、間髪入れずに己の躰に手をつ突つ込むと、メダジャリバー取り出して見せる。

サカキ

「うわ、キメエ。つかどうなつてんだ？」

魅空

「あれ、今キモいつつた？　キモいつていたあ!？　……………俺の躰はこれ、魔審器N0.6『無限倉庫の臓器』によつて物の出し入れ可能になっている。魔審器は持ち主に寄生する、コアメダルは躰に取り込めるから問題無し。だけどさあ、ジャリ剣は異物その物だからしまうの大変でさあ。こうやってしまった後、背中とか叩かれた

ら
」

瞬間、鍊矢が目にも止まらぬ早さで魅空の背中にまわり、ドンッと押した。

グサッ！！

魅空

「によおおおおお！！？　大腸に刺さったあああああ！！！！」

鍊矢

「ほー、こうなるのか」

ソラ

「面白いですね」

メダジャリバーが体内で突き刺さり、痛みに悶え苦しむ魅空を見てソラは黒い笑みを浮かべる。

サカキ

「ゲラゲラゲラゲラゲラ」

藍

「何気に皆さん酷いですね…」

リュウガ

「日頃の行いだね。いつそのこと、この場で魅空の黒歴史でもばらす？　昔、フヨウちゃんに膝枕してもらってたとか」

魅空

「それはらめえええええ！！　つーかなんだこの扱い？　コラボでも結構酷い扱いなのに、番外編でもこれかよ！！　コラボでメダル盗られたしよおお！！」

リュウガ

「こっちでも盗られるけどね　（ボソッ）」

魅空

「はあ！？　あーもーいーよ！！　だったら俺もやってやんぜ！
藍のちよつと恥ずかしい話を話してやんよ！！」

藍

「何故私に被害が！？」

魅空

「うっせーなあ！！　最近狼夜に耳とか尻尾触られて恍惚の表情を浮かべてたくせに！！」

藍

「それらめえええええ！！」

狼夜は人間や人間よりの生物にはとことん嫌われるが、獣や獣に近い生物にはとことん好かれるのだ！！

*

リュウガ

「さて、そろそろお終いだから、糞空なんかやれや」

魅空

「糞空ってなんだよ!!」

サカキ

「やーれ やーれ」

ソラ

「やーれ やーれ」

鍊夜

「殺ーれ 殺ーれ」

紫

「殺ーれ 殺ーれ」

藍

「死ーね 死ーね」

魅空

「後半からおかしい、ってか最後ダイレクトオオオ!!」

リュウガ

「いいからさっさとやれよ」

魅空

「うう…不遇な扱い……」

目尻に涙をためながら、ちゃぶ台に普通よりも大きい茶釜らしき物

を置く。

サカキ

「なんだこれ？」

魅空

「魔審器N o . 9 4 『嘘狸の聞歩苦茶釜（うそたぬきのぶんぶくちやがま）』 雌狸ができれば願いを叶え、雄狸ができれば願いを叶えさせられるって代物だ。俺は雄しか出てこなかったがな。因みにこれを使うことは、あまりオススメできないぜ」

ソラ

「え？ 何故ですか？」

魅空

「魔審器の九十番台含むその下は、失敗作の集まりなんだよ……。俺も全部集めた時知った。これも、雌が出たらどうなるか分かったもんじゃねえ。だからこれ、お前等にやる」

サカキ

「いや、いらねーから!!」

魅空

「使用方法是茶釜に大量の水を入れて、湯を沸かす事。そうすれば、熱さのあまり狸が飛び出す。雄狸は狸の耳と尻尾が生えたチャラ男風の奴で、雌は耳と尻尾の生えた茶髪ショートのだジツ娘らしい。雌の方は会ったことがないが、雄に聞き出した」

ソラ

「この人、押しつける気まんまんですね」

魅空

「魔審器は人間が持つてたら色々と危険だが、一個くらい、鍊矢が持つてたら大丈夫だろ」

サカキ

「おいおい。人の話を聞けーい」

魅空

「しゃーねーだろおお！！　かさばるんだよ、魔審器108個あるからあ！　人間の煩惱の数と一緒なんだよ！　もー駄の中メダルとか魔審器とかでゴロゴロしてんだよあ！！　一個なくてもそんな困んねーしい！！」

リュウガ

「もーやけくそだね。つか、私はなんかやれっていったのに」

鍊矢

「だが、面白そうだ。貰っていこう」

ソラ&サカキ

「ウェイ！？　（owo）」

魅空

「交渉成立！　もってけドロボードッコイショー！！」

変な掛け声と共に、魅空が茶釜を投げつけた。サカキに。

サカキ

「へぶう！！」

ソラ

「サカキ様ア!？」

鍊矢

「よし、そろそろ帰るぞーお前等」

サカキ

「ごふう……」

茶釜の下敷きになったサカキは、まともに答えられない。ソラは下敷きになっているサカキを助けようと奮闘している。

紫

「今回はありがとう」

藍

「これから頑張ってください」

リュウガ

「アカオニ君、レンちゃん、えーと、あとあれだ……ポニーテールちゃん」

ソラ

「私の呼び方雑じゃありませんか!？」

リュウガ

「それにフロストさん。コラボありがとうございました。これから
も宜しく御願います!」

サカキ

「なにしてくれとんじゃゴラァー！」

魅空

「ペけぽんっ！！」

サカキに茶釜を投げ返され、顔面にヒットした魅空。今回は終始、残念な扱いの魅空だった。

『番外EPIISODE・/コラボは楽しむ物・交流を深める物・相手に迷惑を

如何でしたでしょうか？

次回からはちゃんとやります。今回はオーズVSナイトVSオーデイン。そのまた次は初心者ライダー達。次の次はタイガVSゾルダの予定。ただ、次の更新は遅くなってしまいますが……。

次回も宜しく御願います！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0731p/>

仮面ライダー龍騎 闘いの火種は幻想の都へ

2011年9月20日19時23分発行